令和元年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業

基礎自治体や中間支援組織等による
住民主体の活動を促進するための手法に関する
調査研究事業

報　告　書

令和２年３月

一般社団法人 全国食支援活動協力会

目　次

第１章　調査研究事業の概要……3

１　事業の目的……3

２　事業の内容……3

第２章　手引書の使い方説明会の開催およびヒアリング調査……8

１　手引書の使い方説明会の開催……8

１）目的……8

２）実施エリア……8

３）プログラムの構成……9

２　手引きの使い方説明会における記述式アンケート及びグループインタビュー結果…… 10

１）東京都荒川区のアンケート結果…… 11

２）香川県高松市のアンケート結果…… 15

３）石川県金沢市のアンケート結果…… 19

４）愛知県長久手市のアンケート結果…… 24

５）福岡県大川市のアンケート結果…… 28

６）グループインタビュー結果（５地域まとめ）…… 32

３　ヒアリング調査…… 38

１）調査の目的…… 38

２）調査結果…… 41

（１）香川県高松市 …… 42

（２）香川県琴平町 …… 45

（３）石川県金沢市 …… 50

（４）石川県宝達志水町 …… 55

（５）愛知県長久手市 …… 59

（６）愛知県日進市 …… 64

（７）愛知県知多市 …… 68

（８）福岡県大川市 …… 71

（９）東京都荒川区 …… 75

４「活動支援プランニングシート」の試用について 試用後のアンケート結果…… 80

第３章　コロナウイルス感染拡大予防による「住民のやる気を支える支援を学ぶワークショップ」中止と事後対応について…… 86

１　研修会中止の経緯…… 86

２　事後対応…… 86

第４章　生活支援コーディネーターが住民のやる気を支える支援の手引き…… 87

１　作成の目的…… 87

２　内容…… 87

第５章　まとめ……173

【資料集】

１．手引書の使い方説明会案内・資料（東京都荒川区）…… 資料- 1

２．手引書の使い方説明会案内・資料（香川県高松市）…… 資料-18

３．手引書の使い方説明会チラシ・資料（愛知県長久手市）…… 資料-35

４．手引書の使い方説明会資料（福岡県大川市）…… 資料-52

５．研修会チラシ (愛知会場) …… 資料-67

６．研修会テキスト (愛知会場) …… 資料-69

７．研修会チラシ (東京会場) …… 資料-87

８．研修会テキスト（東京会場）…… 資料-89

第１章　調査研究事業の概要

１　事業の目的

本事業は、新たな生活支援サービスの創出を基礎自治体や中間支援組織が支援する際のチェックリストとして開発した『住民のやる気を支える支援の手引き』（平成30年度老人保健健康等増進事業を活用して作成）を発展させることを目的とする。基礎自治体や生活支援コーディネーター、社協等が活用できるよう、手引書の使い方を確立し、「住民のやる気を支援する視点（評価項目）」についてヒアリング調査を通して検討・改善を行う。

具体的には、各地域で住民参加による生活支援サービスを推進している行政や中間支援組織の協力を得て、地域資源を〈見つける〉・仲間を〈つなげる〉・様々なサービスを生み出す可能性のある居場所を〈つくる〉機能に着目し、「住民のやる気を支援する視点（評価項目）」を用いた支援事例の収集（５地域程度）を行う。また、サービス創出を支援する過程を分解・可視化し、生活支援コーディネーターが住民活動のアセスメント→支援計画の立案→評価を行うための支援ツールとしてまとめた改良版の手引書『生活支援コーディネーターが住民のやる気を支える支援の手引き』を作成する。さらに、改良された手引書を活用するためのワークショップ研修[1]開催を通じて、その効果的な普及を図る。

２　事業の内容

１）研究委員会・ワーキング部会の開催

研究事業全体の方針・計画の確定、調査の企画・方針の策定、ヒアリング調査および成果物の内容の検討に関して４回の会議を行い、進捗状況を報告・共有した。

また、研究委員会のもとにワーキング部会を設置し、５回の会議を通して手引書の使い方マニュアルの作成、支援方法の事例収集やワークショッププログラム、ヒアリング項目内容の検討・実施・分析、支援ツール（手引書）の改良のため具体的な内容の検討を行った。

（１）研究委員会

第１回：令和元年7月17日（水）17：00～19：00　飯田橋レインボービル2階2C会議室

議題：事業のねらい・概要・全体スケジュール説明、住民のやる気を支援する視点（評価項目）の使い方、手引書の使い方説明会 他

第２回：令和元年9月12日（水）17：00～19：00　飯田橋レインボービル1階A会議室

議題：事業の進捗状況報告、手引書の使い方説明会（荒川区開催報告・今後の開催地検討）、ヒアリング内容の検討、成果物の構成案、シートの修正案 他

第３回：令和元年12月24日（火）14：00～17：00　東京ウィメンズプラザ第一会議室

---

[1] 愛知・東京の２か所での開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染予防のため、開催を中止した。研修の記録動画を撮影・編集し、参加予定者に配信した。

議題：事業の実施状況報告、手引き案の提示 他

第４回：令和2年3月19日（木）17:00～19:00　飯田橋レインボービル１階C会議室

議題：事業の進捗状況報告、手引き案の確認 他

＜委員長＞

内藤 佳津雄　日本大学文理学部 教授（法人理事）

＜委員（五十音順）＞

秋山 由美子　一般財団法人社会福祉研究所　研究員（外部委員）

石田 惇子　一般社団法人全国食支援活動協力会 代表理事/NPO法人支え合う会みのり 副理事長（法人代表理事）

石橋 智昭　公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団 主席研究員（外部委員）

日下 直和　社会福祉法人香川県社会福祉協議会 次長（外部委員）

鈴木 訪子　社会福祉法人荒川区社会福祉協議会 地域ネットワーク課 地域福祉活動促進専門員（外部委員）

清水 洋行　千葉大学大学院人文科学研究院 教授（法人理事）

祐成 保志　東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 准教授（外部委員）

隅田 耕史　NPO法人フェリスモンテ 事務局長（法人理事）

高橋 良太　社会福祉法人全国社会福祉協議会 地域福祉部長／全国ボランティア・市民活動振興センター所長（外部委員）

中島 智人　産業能率大学経営学部 教授（法人監事）

中野 智夫　長久手市役所福祉部 次長（外部委員）

原田 晃樹　立教大学コミュニティ福祉学部 教授（外部委員）

平野 覚治　一般社団法人全国食支援活動協力会 専務理事（法人理事）

松下 典子　NPO法人ゆいの会 理事（外部委員）

三政 貴秀　小坂町福祉課町民福祉班（外部委員）

（２）ワーキング部会

第１回：令和元年7月22日（月）17：00～19：00　東京ウィメンズプラザ視聴覚室B

議題：手引書の使い方説明会、ヒアリング調査の進め方について検討 他

第２回：令和元年8月22日（木）17：00～18：00　荒川区社会福祉協議会

議題：手引書の使い方説明会進め方について検討 他

第３回：令和元年12月4日（水）18：00～20：00　東京ウィメンズプラザ第1会議室B

議題：成果物の方向性とシートの設計について検討 他

第４回：令和元年12月24日（火）13：00～14：00 東京ウィメンズプラザ第一会議室

議題：成果物の方向性とシートの設計について検討 他

第５回：令和2年2月29日（土）10：30～12：30　東京ウィメンズプラザ視聴覚室B

議題：手引書全体の構成、シート全体の構成（リスト項目）の確認、ワークショップ研修会の内

容・進行の確認 他

＜ワーキング部会長＞
平野 覚治　　一般社団法人全国食支援活動協力会 専務理事（法人理事）
＜ワーキング部会（五十音順）＞
内藤 佳津雄　日本大学文理学部 教授（法人理事）
鈴木 訪子　　社会福祉法人荒川区社会福祉協議会 地域ネットワーク課 地域福祉活動促進専門員（外部委員）
※検討内容に応じ、他3名程度の委員を招致

２）手引書の使い方説明会の開催およびヒアリング調査（第２章）

自治体・社協・生活支援コーディネーターなどを対象に昨年度作成した手引書の使い方の説明会を開催した。説明会終了後に、改良版「手引き」の作成を目的に、参加者を対象に記述式アンケート及びグループインタビューを行った。

また、現地にてヒアリング調査を行い、支援体制・方法や地域資源の事例を収集する他、支援者としての心構えなどを整理把握することで、改良版の手引書に収載する「活動支援プランニングシート」を作成した。作成した「活動支援プランニングシート」は実際に住民活動の支援に関わる自治体職員・生活支援コーディネーター等に記入してもらい、使用感等に関してモニターアンケート調査を行った結果をまとめた。

（１）手引書の使い方説明会の開催

自治体・社協・生活支援コーディネーターなどを対象に、実際に昨年度作成した手引書に収載したシート（以下、シート）を使用してもらい、説明会終了後は記述式アンケート及びグループインタビューにて、シートの使いやすさや改善点について聞き取りを行った。

①実施エリア

東京都荒川区・香川県高松市・石川県金沢市・愛知県長久手市・福岡県大川市（全５か所）

②対象

自治体、生活支援コーディネーター、社協・ボランティアセンター等の生活支援サービス提供団体を支援している組織・機関の職員やコーディネーター　各回 10～40 人程度

③内容

【講義】地域の居場所の可能性、やる気を支える支援が必要な背景、協働的な態度の演習
【グループワーク】シートの使い方解説、支援方策を検討するワークショップを通し、居場所づくりに活用できる地域資源を収集
【記述式アンケート・グループインタビュー】説明会内容の理解度やシートの使い勝手について聞き取り

（２）ヒアリング調査

【第１回ヒアリング調査】: 支援体制の整理・地域資源の収集・シートの改良点の検討

団体をどう評価し支援するかを整理・類型化し、字引として使用できるものに改良することを目的に、説明会に参加した自治体・社協・生活支援コーディネーター等に対し、ヒアリング調査を実施した。

①対象

自治体、生活支援コーディネーター、社協・ボランティアセンター等の生活支援サービス提供団体を支援している組織・機関の職員やコーディネーター

②調査地域

香川県高松市・香川県琴平町・石川県金沢市・石川県宝達志水町・愛知県長久手市・愛知県日進市・愛知県知多市・福岡県大川市・東京都荒川区（計　５都県９地域）

③主な調査項目

・支援体制
・住民団体の立ち上げ支援・立ち上げ後支援のノウハウ
・地域資源の把握の仕方
・シートの使いやすさや改善点について　他

【第２回ヒアリング調査】:「活動支援プランニングシート」の試用・支援の事例収集

手引書の使い方説明会後の記述式アンケート及びグループインタビュー、第１回目のヒアリング調査を受け、主にワーキング部会で具体的内容を検討し、「活動支援プランニングシート」を作成した。第１回ヒアリング調査に協力していただいた自治体・社協・生活支援コーディネーター等の地域から、積極的に住民活動を支援している支援者を選び、「活動支援プランニングシート」に事前に記入をしてもらい、支援者としての姿勢や心構えについて、２回目のヒアリング調査を実施した。

支援事例の収集を中心に、支援時の配慮や心掛けていること、立ち上げ時に支援を始める判断基準等の把握を目的とした。

①　対象

自治体、生活支援コーディネーター、社協、地域包括支援センターの職員他

②調査地域

愛知県日進市・東京都荒川区・石川県金沢市・香川県琴平町（計　４都県４地域）

②　主な調査項目

・支援時の配慮、心掛けていること（相手のモチベーションを保つ工夫、連絡や出向く回数他）
・立ち上げ時に支援を始める判断基準、地域資源の把握について
・「活動支援プランニングシート」をもとに、住民への具体的な言葉掛けの事例を収集

（３）「活動支援プランニングシート」の試用について　試用後のアンケート結果

全５か所にて実施した手引き書の使い方説明会のいずれかに参加した、もしくは当会とつながりがあり

実際に生活支援サービス団体・活動の支援を行った経験がある方を対象に、「活動支援プランニングシート」の使用感等に関して、モニターアンケート調査を行った結果をまとめた。

３）ワークショップ研修会の開催（第３章）

自治体や中間支援組織を対象に、改訂版の手引書の使い方の解説、活用方法等について啓発するワークショップ研修会を愛知・東京の２会場で開催予定であったが、新型コロナウイルス感染予防のため、開催を中止した。研修の記録動画を撮影・編集し、参加予定者に配信した。

４）生活支援コーディネーターが住民のやる気を支える支援の手引き（第４章）

事業の成果物として、カラー冊子を作成し、関係者に配布するとともに、当会公式 HP にてデータを公開した。地域で活動する生活支援コーディネーター等が住民活動の立ち上げに関わったり、支援したりする現場で活用できるよう、アセット重視（＝住民側の発案を育てていく視点で、すでにある様々な地域資源を活かすという考え方）に基づいた「活動支援プランニングシート」を提案している。作成した冊子は、第４章に収載した。

５）まとめ（第５章）

事業の総括として、生活支援体制整備におけるサービス開発で求められる「やる気を支える支援」の必要性や生活支援コーディネーターの課題について考察を行った。また、「アセット重視」への考え方転換について触れ、住民側の発案を育てていく視点で、すでにある様々な地域資源を活かすという考え方＝「アセット重視」の考え方に基づいた支援の手法を示した。さらに、住民の目線ではどのような取り組みがアセット重視で取り組みやすいかという例として、近年各地で取り組みが活発化している参加型の居場所を挙げた。参加型の居場所は、①気の合う仲間と、自宅でも始められる　②担い手と受け手が、同じ立場でともにいられる場である　③若い担い手の参加が期待できる　④食があることで、人と人とが結びつきやすい　⑤人が集まることで、誰かの困りごとがわかること、が特徴としてある。参加型の居場所では、人と人との関係の中に蓄えられた、今ある“強みや良さ”（アセット）がゆるやかに結びつくことで、住民主体による生活支援を生み出す基盤となる可能性を述べた。

最後に、研究委員会およびワーキング部会での検討を踏まえて作成した『生活支援コーディネーターが住民のやる気を支える支援の手引き』の活用方法に伴う今後の展開として、都道府県レベルでの生活支援コーディネーター研修などの機会を活用し、アセスメント→支援計画の立案→評価を順序立てて計画的に行う「活動支援プランニングシート」のような、生活支援コーディネーターの後方支援となり得るツールの普及を提案した。

第２章　手引書の使い方説明会の開催およびヒアリング調査

１　手引書の使い方説明会の開催

シートを使って住民の活動がもつ“強み”を把握する演習（香川県高松市）

１）目的

自治体・社協・生活支援コーディネーターなどを対象に「手引き」の使い方の説明会を開催する。演習を通して住民のやる気を支える協働的な態度について学ぶ他、モデル事例をもとに評価シートを実際に使用しながら、地域資源をもとに支援方策を共有・検討するワークショップを行った。最後に、シート改良のためのデータ収集を目的に、記述式アンケート及びグループインタビューにて地域資源の把握の仕方やシートの使いやすさ等について尋ねた。

２）実施エリア

東京都荒川区・香川県高松市・石川県金沢市・愛知県長久手市・福岡県大川市（全 5 か所）

【日時・会場】

東京都荒川区

日時：令和元年 8 月 22 日（木）13：30～16：30

場所：荒川区社会福祉協議会 3 階ボランティア活動室（参加者人数 16 名）

共催：荒川区高齢者福祉課

香川県高松市

日時：令和元年 9 月 19 日（木）13：00～16：30

場所：香川県社会福祉総合センター 7 階大会議室(参加者人数 16 名)
共催：社会福祉法人香川県社会福祉協議会

石川県金沢市
日時：令和元年 9 月 26 日（木）10：00～15：00
場所：石川青少年総合研修センター(参加者人数 40 名)
共催：社会福祉法人石川県社会福祉協議会

愛知県長久手市
日時：令和元年 10 月 2 日（水）13:30～17：00
場所：長久手市福祉の家　2 階集会室(参加者人数 39 名)
協力：長久手市福祉部長寿課

福岡県大川市
日時：令和元年 10 月 8 日（火）13：00～16：30
場所：大川市役所 3 階大会議室（参加者人数 16 名）
協力：大川市健康課

３）プログラムの構成

（１） 地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景（約 40～60 分）

講師：日本大学文理学部 教授　内藤 佳津雄（荒川・香川・石川担当）
千葉大学大学院人文科学研究院　教授　清水 洋行（大川担当）
一般社団法人全国食支援活動協力会　専務理事　平野 覚治
（荒川・香川・石川・長久手・大川担当）

生活支援サービスを創出・推進するための市町村の役割の他、平成 31 年度老人保健健康増進等事業で本会が実施した市町村・社協・住民参加による生活支援サービス実施団体を対象にしたアンケート調査結果から見えた「居場所づくり」から新たなサービスが生まれていく可能性等について、講義を行った。また、シートの基盤となっているアセット重視の考え方についても解説した。

アンケート調査から見えてきた居場所づくりの可能性について講義（福岡県大川市）

（２） 協働的な態度に関する演習（約 20 分）※香川・石川のみ演習を実施

講師：日本大学文理学部 教授　内藤 佳津雄

住民のやる気を引き出す支援者の技量を学ぶため、前半は講義形式にて、面接における傾聴の姿勢・態度・質問方法を、後半は演習方式にて「支援者（聞き手）」役と「相談者（話し手）」役になり協働的な態度での話の聞き方や質問の仕方を振り返った。

協働的な態度に関する演習（石川県金沢市）

（３） シートの使い方の説明とグループワーク（約 120 分）

進行：一般社団法人全国食支援活動協力会 事務局　斉藤 友歌里

シートの使い方を知ってもらい、実際に使用する場合の使いやすさや改良点を把握するために、ファシリテーターの進行で解説を行った。

住民が相談にやって来る場面はロールプレイ（演劇）方式で行い、シートを用いて住民の活動がもつ強みや良さ、支援の着眼点を把握した。グループワークでは、シートをもとに活動を立ち上げるために活用できる地域資源を整理・検討し、各グループの発表を通して支援方策のノウハウを共有した。

（４）記述式アンケートの記入およびグループインタビュー（約 20 分）※荒川は記述式のみ実施

シート改良のためのデータ収集を目的に、無記名記述式のアンケートを行った。その後、グループごとに分かれ、地域資源の把握の仕方やシートの使いやすさ等について対面式インタビューを行った。

２　手引きの使い方説明会における記述式アンケート及びグループインタビュー結果

説明会実施後に、参加者アンケートを実施した。

東京都荒川区	16 名	有効回答者数	13 名（有効回答率　81.3%）
香川県高松市	16 名	有効回答者数	16 名（有効回答率　100.0%）

石川県金沢市	40 名	有効回答者数	38 名（有効回答率　95.0%）
愛知県長久手市	39 名	有効回答者数	38 名（有効回答率　97.4%）
福岡県福岡市	16 名	有効回答者数	16 名（有効回答率　100.0%）

以下、各説明会（全 5 か所）ごとにみていく。

１）東京都荒川区のアンケート結果

◆参加者の基本情報

所属	N=11 不明・無回答＝2
社会福祉協議会職員	18.2%
生活支援コーディネーター	0.0%
コミュニティソーシャルワーカー	0.0%
県市町村職員	9.1%
その他(「地域包括支援センター」「高齢者みまもりステーション」)	72.7%
合計	100.0%

年齢	N=12 不明・無回答＝1
20～25 歳	8.3%
26～29 歳	8.3%
30～35 歳	25.0%
36～39 歳	0.0%
40～45 歳	0.0%
46～49 歳	33.3%
50～55 歳	8.3%
56～59 歳	8.3%
60 歳～	8.3%
合計	100.0%

現在の部署所属年数	N=8 不明・無回答＝5
1～3 年	62.5%
4～7 年	12.5%
8 年以上	25.0%
合計	100.0%

勤続年数	N=9 不明・無回答＝4
1～3 年	44.4%
4～7 年	33.3%
8 年以上	22.2%
合計	100.0%

※高齢者みまもりステーションとは、荒川区内 8 ヶ所に設置されている。区から委託を受け、相談員が地域の高齢者に関する相談を受付ける相談窓口のことを指す。

その他（「地域包括支援センター」「高齢者みまもりステーション」）からの参加が 7 割超（72.7%）を占め、それ以外は社会福祉協議会職員や荒川区職員がみられた。勤続年数 1～3 年の方が 44.4%、4～7 年の中堅が 33.3%であった。8 年以上のベテランは 22.2%で最も少なかった。

◆［地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景］を聞いて （＊合計値の小数点は四捨五入）

%（度数）

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①市町村の役割について理解できたか	23.1(3)	46.2(6)	23.1(3)	7.7(1)	0.0(0)	100.0(13)
②アセット重視の考え方について理解できたか	46.2(6)	30.8(4)	23.1(3)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(13)
③居場所の役割について理解できたか	53.8(7)	38.5(5)	7.7(1)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(13)
④協働的な態度がどのようなものか理解できたか	46.2(6)	53.8(7)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(13)

「①市町村の役割」について、「そう思う」「ややそう思う」と答えた人が合わせて約７割弱（69.3%）であった。

「②アセット重視の考え方」については、「そう思う」「ややそう思う」と答えた人が合わせて約８割弱（77.0%）の人が理解できていることが分かる。

「③居場所の役割」ついては、「そう思う」「ややそう思う」と答えた人が合わせて約９割(92.3%)と大半の人が理解できている。

「④協働的な態度がどのようなものか」について、アンケート回答者全員が「そう思う」「ややそう思う」と答えており、「どちらともいえない」「ややそう思わない」「思わない」と答えた人はいなかった。

よって、地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景については理解できたと考ええられる。また市町村の役割について、「助成金等、実際に利用できる内容が不明すぎる」、「役所は書類を受け取るところのイメージが強いのか、ボランティアの相談を受けることが少ないが何を求められているのか聞く姿勢が必要だと思いました」という意見があった。

アセット重視の考え方については、「ニーズありき、できる人ありきの支援から頭が切り替わりました」、「個人個人の持っている力を無理(ストレス)なく大切にして増やしていく」という意見があった。

◆［シートの使い方の説明］を聞いて（＊合計値の小数点は四捨五入）

%（度数）

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①シートの使い方は理解できたか	23.1(3)	53.8(7)	23.1(3)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(13)
②シート中に使用されている言葉は分かりやすいか	27.3(3)	36.4(4)	36.4(4)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(11)
③実際にシートを現場で使いたいと思うか	18.2(2)	36.4(4)	45.5(5)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(11)

「①シートの使い方の理解」については、「そう思う」が 23.1%、「ややそう思う」が 53.8%と答え、合わせて 7 割超の人が理解できていることが分かった。

「②シート中に使用されている言葉の分かりやすさ」について、約 3 割超(36.4%)の人が「どちらともいない」と答えており、「そう思う」「ややそう思う」は合わせて 63.7%と約 6 割強であった。

「③実際にシートを現場で使いたいと思うか」という問いについて「どちらともいえない」と答えた人が 45.5%と約 4 割超で最も多く、「そう思う」「ややそう思う」が合わせて 54.6%と約 5 割であった。「専門的な言葉や、横文字はわかりにくいかもしれません。（誰でもわかるツールとして）」「言葉が難しい」という意見があり、使用されている言葉の見直しの必要性があると考えられる。

◆［事前にお渡しした地域資源マップシート］に関して（＊合計値の小数点は四捨五入）

%（度数）

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①地域資源をすぐに思いつくことはできたか（無回答・不明＝4）	11.1(1)	44.4(4)	11.1(1)	22.2(2)	11.1(1)	100.0(9)
②地域資源から支援策は考えやすかったか（無回答・不明＝4）	22.2(2)	44.4(4)	11.1(1)	22.2(2)	0.0(0)	100.0(9)

「①地域資源をすぐに思いつくことはできたか」という問いについては、「ややそう思う」が 44.4%と約４割で最も多く、その他は「そう思う」11.1%、「やや思わない」22.2%であった。また、「②地域資源から支援策の考えやすさ」についても、「そう思う」「ややそう思う」合わせて約６割超(66.6%)であり、「ややそう思わない」が 22.2%であった。

◆［グループワーク］について（＊合計値の小数点は四捨五入）

%（度数）

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①ロールプレイ形式の内容は把握がしやすかったか（無回答・不明＝3）	60.0(6)	20.0(2)	10.0(1)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)
②アセット重視の考え方で思考することができたか（無回答・不明＝3）	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)
③支援の着眼点をみつけることはできたか（無回答・不明＝3）	60.0(6)	40.0(4)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(10)
④支援の特徴や強みを把握できたか（無回答・不明＝3）	50.0(5)	30.0(3)	20.0(2)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(10)
⑤シートは使いやすいと感じたか（無回答・不明＝3）	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)

「①ロールプレイ形式の内容の把握のしやすさ」について、「そう思う」が 60.0%、「ややそう思う」が 20.0%と約８割の人がロールプレイ形式に満足していると言える。「②アセット重視の考え方の思考」の不可については､「そう思う」｢ややそう思う｣合わせて 70%と７割､｢どちらともいない｣が３割(20.0%)、「ややそう思わない」が１割(10.0%)であった。

「②支援の着眼点についてみつけることできたか」という問いについては、「そう思う」は６割、「ややそう思う」が４割であり、全ての人が、着眼点については理解できたと考えられる。

「③支援の特徴と強みを把握できたか」という問いについて、「そう思う」が５割(50.0%)、「ややそう思う」が３割(30.0%)と答え、８割の人が把握できたと考えられる。

「④シートの使いやすさについて」は、「そう思う」「ややそう思う」が合わせて 70.0%と７割、「どちらともいない」が２割、「ややそう思わない」が１割、過半数以上が満足していると言える。「⑤シートは使いやすいと感じたか」については「ややそう思う」「そう思う」合わせて７割、「どちらともいえない」が２割、「ややそう思わない」は１割であった。また、「シート２のチェックを入れる項目は利用しやすいと感じた。シート４の“実際の支援”は何を書けばいいのかピンとこなかった。（アイディア、資源は把握してるが、どこにどう書けばいいかわからない。実際に連携とってないところもあるため）」という意見あった。アイデアが生まれやすいような記述の仕方や例などが必要である。

２）香川県高松市のアンケート結果

◆参加者の基本情報

所属	%（度数）
社会福祉協議会職員	68.8%
生活支援コーディネーター	25.0%
コミュニティソーシャルワーカー	0.0%
県市町村職員	6.3%
その他(「地域包括支援センター」「高齢者みまもりステーション」)	0.0%
合計	100.0%

年齢	%（度数）
20～25 歳	6.3%
26～29 歳	6.3%
30～35 歳	12.5%
36～39 歳	12.5%
40～45 歳	37.5%
46～49 歳	18.8%
50～55 歳	6.3%
56～59 歳	0.0%
60 歳～	0.0%
無回答	0.0%
合計	100.0%

現在の部署所属年数	%（度数）
1～3 年	50.0%
4～7 年	25.0%
8 年以上	25.0%
合計	100.0%

勤続年数	%（度数）
1～3 年	31.3%
4～7 年	6.3%
8 年以上	62.5%
無回答	0.0%
合計	100.0%

※「生活支援コーディネーター」と答えた 4 人は、社会福祉協議会職員との複数回答となっていたため、「生活支援コーディネーター」として処理をした。

参加者は「社会福祉協議会職員」が 68.8%と 7 割弱を占めており、続いて「生活支援コーディネーター」が 25.0%と 2 割強と多く、地域の課題発見や調整を担う人が多い。勤続年数では、中堅の参加が少ないが「8 年以上」が 6 割(62.3%)を超え（最長 30 年）、続いて「1～3 年」が 31.3%と 3 割となっている。特徴として、支援の経験がまだ浅い職員とベテラン職員との差に注目することもできる。

◆［地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景］を聞いて（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①市町村の役割について理解できたか	25.0(4)	50.0(8)	25.0(4)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
②アセット重視の考え方について理解できたか	56.3(9)	43.8(7)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
③居場所の役割について理解できたか	37.5(6)	62.5(10)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
④協働的な態度がどのようなものか理解できたか	43.8(7)	56.3(9)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)

地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」の必要性については、どの項目も「そう思う」、「ややそう思う」が多く、概ね理解が得られている。とくに、「②アセット重視の考え方」では、ほかの項目と比べて「そう思う」が6割弱(56.3%)と高く、今ある資源への注目への理解が得られている。

一方、「①市町村の役割」については、「そう思う」「ややそう思う」合わせて　75.0%と7割強であるが、「どちらともいえない」と答えた人も25.0%と3割弱いる。生活支援コーディネーター以外の参加が多いことも関係しているかもしれないが、自由記述では「支援の幅が広く、どこまでしたら良いかむずかしい。」という意見があった。地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」の必要性は理解しつつも「市町村の役割」が見えにくい側面があるのかもしれない。

◆［シートの使い方の説明］を聞いて（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①シートの使い方は理解できたか	25.0(4)	68.8(11)	6.3(1)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
②シート中に使用されている言葉は分かりやすいか	18.8(3)	56.3(9)	25.0(4)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
③実際にシートを現場で使いたいと思うか	12.5(2)	68.8(11)	18.8(3)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)

「①シートの使い方」については、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると 100.0%に近い理解が得られている。「②シート中に使用されている言葉」については「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると 75.1%と 8 割弱で「①シートの使い方」よりは落ちる。自由記述には「地域住民には分からない」という回答があり、住民とともに使用する場合には使用する言葉の工夫が必要かもしれない。

続いて、「③実際にシートに現場で使いたいか」についてみてみると、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると 81.3%と 8 割を超える人が、現場でも使えると考えていることが見える。しかし、自由記述では「支援の着眼点での読みかえが難しかった。」「どの項目にあてはまるのかすぐに判断ができないと感じた。」「現場で話を聞きながらシートに整理していくのは少し時間が掛かるのでは…と思った。」という意見があった。シートを使ううちに慣れていくこともあるかもしれないが、情報を整理しシートに落とし込むときの難しさが指摘する声があった。

◆［事前にお渡しした地域資源マップシート］に関して（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①地域資源をすぐに思いつくことはできたか（無回答・不明＝3）	12.5(2)	62.5(10)	6.3(1)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
②地域資源から支援策は考えやすかったか（無回答・不明＝3）	18.8(3)	56.3(9)	6.3(1)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)

「①地域資源をすぐに思いつくこと」や「②地域資源から支援策は考えやすかったか」はともに 8 割弱の人が「そう思う」「ややそう思う」と回答しており、参加者にとっては難しいものではない様子がうかがえる。ただ、自由記述には「目新しいアイデアがなかなか出なかった。」という意見もあり、地域資源を把握していることと、その活かし方や新しい支援の創出につながるわけではないことも伺える。

◆［グループワーク］に関して（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①ロールプレイ形式の内容は把握がしやすかったか	43.8(7)	56.3(9)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
②アセット重視の考え方で思考することができたか	18.8(3)	81.3(13)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
③支援の着眼点をみつけることはできたか	31.3(5)	62.5(10)	6.3(1)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
④支援の特徴や強みを把握できたか	18.8(3)	68.8(11)	12.5(2)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
⑤シートは使いやすいと感じたか	6.3(1)	68.8(11)	25.0(4)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)

グループワークの「①ロールプレイ形式」は「そう思う」「ややそう思う」合わせて100.0%と全員が回答しており、今回のような実践に活かす研修会の手法として有効であったことがわかる。同様に、「②アセット重視の考え方」についても「そう思う」「ややそう思う」合わせてこちらも100.0%と全員回答であり、参加者にとっても支援を考える際の有効な視点となったことがうかがえる。

次に達成度が高かったのは「③支援の着眼点をみつけることができたか」で、「そう思う」、「ややそう思う」合わせて93.8%と9割を超えている。しかし、自由記述では「着眼点から支援方法がなかなか出なかった。」という回答もあり、着眼点がもてることが具体的な支援の創出につながるわけではないことも、視野に入れる必要があるのかもしれない。続いて達成度が高かったのは「④支援の特徴や強みを把握できたか」で、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて87.6%と9割近くの人が達成感も感じている。

「⑤シートは使いやすいと感じたか」では75.1%と8割弱の人が「そう思う」、「ややそう思う」と回答しているが、「どちらともいえない」が3割弱(25.0%)とこの項目の中で一番多かった。自由回答に注目をすると「そう思う」、「ややそう思う」と答えてはいるが、以下のような指摘や改善案があった。

・シートの言葉が肯定であったため、理解がむずかしいところもあった。
・実際に現場で使ってみないとわからない。本日使ってみて、整理しやすいと思った。
・メモする所を作ると良いのでは？記述することができると、シートをコピーするだけで、共有会議に使える。（相談者の名前を書く所とか）

さらに「どちらともいえない」に回答した人からは、以下のような自由回答が寄せられている。

・試行的に行ったので、今後実践的に使いながら評価したい。

・支援の着眼点での読みかえが難しかった為。
・どこに〇をつけたらいいかすぐにわからないと感じた。
・アセット重視の考え方に慣れていないので理解するのに時間がかかった。

研修会内では使いやすかったが、実際に使ってみなければ分からないという意見のほかには、シートそのものの使いやすさをブラッシュアップさせていく必要がある意見が見られた。

３）石川県金沢市のアンケート調査

◆参加者の基本情報

所属	%（度数）
社会福祉協議会職員	15.8%
生活支援コーディネーター	39.5%
コミュニティソーシャルワーカー	0.0%
県市町村職員	13.2%
地域包括支援センター	28.9%
その他	2.6%
無回答	0.0%
合計	100.0%

年齢	%（度数）
20～25 歳	0.0%
26～29 歳	5.3%
30～35 歳	7.9%
36～39 歳	15.8%
40～45 歳	18.4%
46～49 歳	10.5%
50～55 歳	21.1%
56～59 歳	7.9%
60 歳～	13.2%
無回答	0.0%
合計	100.0%

現在の部署所属年数	%（度数）
1～3 年	52.6%
4～7 年	18.4%
8 年以上	13.2%
無回答	15.8%
合計	100.0%

勤続年数	無回答・不明=2
1～3 年	22.2%
4～7 年	16.7%
8 年以上	61.1%
合計	100.0%

参加者は「生活支援コーディネーター」が最も多く 39.5%と 4 割弱を占めており、続いて「地域包括センター」の職員が 28.9%と 3 割弱であった。勤務年数は、「8 年以上」が 61.1%と 6 割弱で、ベテラン層の参加が多いことがわかる。

◆［地域の場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景］を聞いて（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①市町村の役割について理解できたか（無回答・不明＝2）	22.2(8)	47.2(17)	27.8(10)	0.0(0)	2.8(1)	100.0(36)
②アセット重視の考え方について理解できたか（無回答・不明＝1）	40.5(15)	56.8(21)	2.7(1)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(37)
③居場所の役割について理解できたか（無回答・不明＝1）	35.1(13)	56.8(21)	8.1(3)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(37)
④協働的な態度がどのようなものか理解できたか（無回答・不明＝1）	35.1(13)	54.1(20)	10.8(4)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(37)

地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景で理解が一番高かったのは「②アセット重視の考え方」で、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると 97.3%と 9 割を超え、理解しやすかったことがうかがえる。続いて理解が高かったのは「③居場所の役割」で「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると 91.9%、「④協働的な態度」は「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると 89.2%と 9 割前後と、概ね理解が得られていた。
特に、今回のシートの中心点でもある「①アセット重視の考え方」には以下のような自由記述もあり、現場に人たちにも好印象を与えたようである。

・ニーズよりアセットのやり方の方が取り組みやすいと思う。
・これは共感できます。熱意のある人を捜す方が物事がスムーズにいきます。
・良い点、できている事をのばすことは重要である。

一方、「①市町村の役割」については、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると 69.4%と 7 割弱の人の理解が得られてはいるが、他の 3 つの項目よりは理解度が落ちる。自由記述では以下のようなものがあった。

・ｃｓｗの役割に思えました。
・居場所の情報のキャッチする力が必要。

地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景においての、それぞれの役割と役割を横断して必要な理解等を整理する必要があるのかもしれない。

◆［シートの使い方の説明］を聞いて（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①シートの使い方は理解できたか	13.2(5)	78.9(30)	7.9(3)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(38)
②シート中に使用されている言葉は分かりやすいか	18.4(7)	55.3(21)	26.3(10)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(38)
③実際にシートを現場で使いたいと思うか（無回答・不明＝2）	5.6(2)	63.9(23)	27.8(10)	2.8(1)	0.0(0)	100.0(36)

「①シートの使い方は理解できたか」については、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると 92.1%と 9 割を超えており、概ね理解が得られていた。続いて、「②シート中に使用されている言葉は分かりやすいか」も「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると 74.7%と 7 割超であり、受け入れやすい言葉であったと言える。

一方、「③実際にシートを現場で使いたいと思うか」になると「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて 69.5%と 7 割弱ではあるが上記 2 つの項目よりは若干落ちる。③で「どちらともいえない」と回答した約 2 割強(26.3%)の人たちの主な自由記述は以下のとおりである。

【シートの良い点】
・最初の立ち上げ段階よりも立ち上げ後の評価の際には使いやすい。
・整理のためにはよいかも。整理するためには、または、他者に伝えるためには使うかもしれません。

【シートの改善点】
・だれが使うことを想定しているシートなのかわかりにくい。現場とは住民も含むのか？指針を示す程度にして、あとは応用させる視点にしないとシートの項目にとらわれてしまいそう。
・項目が多いので、少し手間がかかりそう。もう少し内容を熟知してから、利用できるぐらいになればいいなと思う。
・課題は、課題としての言い回しの方が支援者側は考えやすい。

【現在の状況に合わない】

・町民自体がまだまだ受け身の体制。意識づけが必要。
・実際に「やりたい」と思っている住民による活動がまだみつけられていないから、活動があれば使っても良いかな…。
・（組織上の課題）生活支援コーディネーター業務におけるアセスメント～評価の流れの共通認識の形成が先に必要なため。

【その他】
・まだ、自分が、しっかり理解（シートを）していないから。
・記入の仕方は、とても書きやすかったが、実際つかうかはわからない。

現在のシートとしては、活動者の情報整理や立ち上げ後の評価など、部分的の可能性が見られる。ただ、シートを支援全体で活用してもらうことを目指すには、シートの使用者の視点、支援の簡素化、支援者について検討する必要があるのかもしれない。また、シートを活用できる住民像を作り、その状況にない現場での活用をどのように扱っていくかも検討する必要があると考えられる。

◆【事前にお渡しした地域資源マップシート】に関して（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①地域資源をすぐに思いつくことはできたか（無回答・不明＝5）	3.0(1)	57.6(19)	36.4(12)	3.0(1)	0.0(0)	100.0(33)
②地域資源から支援策は考えやすかったか（無回答・不明＝4）	5.9(2)	58.8(20)	32.4(11)	2.9(1)	0.0(0)	100.0(34)

地域資源では「①地域資源をすぐに思いつくことができたか」にて「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて約6割(60.6%)、「②地域資源から支援策は考えやすかったか」は64.7%と6割強とこれまでの質問項目よりは割合が低い。主な自由記述を見てみると、「チームで共有が大切だと思った」「グループで取り組むことで、他の方の意見が聞けてよかった」とあり、複数人で情報交換や共有をすることの有効性がうかがえた。

一方で「どうしてもありきたりなものしか思い浮かびません。」と、新しい資源がないとならないという負担感もうかがえ、これまで資源と考えていなかったものの再発見のほかに、現在ある資源の再評価につながるようなアプローチが必要なのかもしれない。

◆［グループワーク］を聞いて（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①ロールプレイ形式の内容は把握がしやすかったか（無回答・不明＝2）	27.8(10)	61.1(22)	11.1(4)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(36)
②アセット重視の考え方で思考することができたか（無回答・不明＝3）	22.9(8)	54.3(19)	22.9(8)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(35)
③支援の着眼点をみつけることはできたか（無回答・不明＝2）	16.7(6)	66.7(24)	16.7(6)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(36)
④支援の特徴や強みを把握できたか（無回答・不明＝3）	11.4(4)	68.6(24)	20.0(7)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(35)
⑤シートは使いやすいと感じたか（無回答・不明＝2）	5.6(2)	61.1(22)	27.8(10)	5.6(2)	0.0(0)	100.0(36)

「そう思う」、「ややそう思う」を合わせた割合を見てみると、「①ロールプレイ形式の内容は把握がしやすかったか」が９割（88.9%）と一番多く、続いて「③支援の着眼点をみつけることはできたか」が83.4%と約８割、「④支援の特徴や強みを把握できたか」が80.0%と８割程度達成していた。

一方　「⑤シートは使いやすいと感じたか」の「そう思う」、「ややそう思う」を合わせた割合は66.7%と６割強の人がシートは使いやすいと回答している。「どちらともいえない」、「ややそう思わない」を選択した回答者した人を合わせた⑤に関する主な自由記述は以下のようになっている。

【各シートについて】

・シート２．３は考えが整理できてよいが…。シート１．４はいらない。シートのチェックを入れることが目的でないといいながら１のシートのチェックは全てうまらなければならないとする導入でかんちがいしやすい。シート４は必要性が感じられない。応用力が問われるはず…
・支援の着眼点の青チェックの仕方が難しく感じた。
・具体的な支援内容が思いつかず、何を書き込めばよいかわかりづらいと感じた。シートがあれば支援の取りかかりになると思うが、今のところ相談されていない。立ち上げるためのシートが、かかわり方に使用できるといいかも。

【シートの使用者について】

・福祉に携わっている人同士の中でなら使いやすいかも…
・シートのとっかかりとして職員が共有する時には有効だと思うが、住民の方にも理解してもらう時には難しいかもしれない。

【その他】
・理解力が弱い為、実際に使ってみないとわかりません。
・実際の現場で使ったとき、もう少し良さを実感できるかもしれない…。

各シート毎にブラッシュアップが必要な部分もあるし、誰とどんな場面で使用するかでも使用感が異なる様子がうかがえる。実際の場面で使用してもらうことで、より改良点が見えると考えられる。

４）愛知県長久手市アンケート調査

◆参加者の基本情報

所属	%（度数）
社会福祉協議会職員	7.9%
生活支援コーディネーター	50.0%
コミュニティソーシャルワーカー	2.6%
県市町村職員	26.3%
地域包括支援センター	10.5%
その他	2.6%
無回答	0.0%
合計	100.0%

年齢	%(度数)
20～25 歳	5.3%
26～29 歳	5.3%
30～35 歳	18.4%
36～39 歳	10.5%
40～45 歳	13.2%
46～49 歳	18.4%
50～55 歳	5.3%
56～59 歳	13.2%
60 歳～	10.5%
無回答	0.0%
合計	100.0%

現在の部署所属年数	%（度数）
1～3 年	57.9%
4～7 年	7.9%
8 年以上	7.9%
無回答	26.3%
合計	100.0%

勤続年数	無回答・不明＝5
1～3 年	42.4%
4～7 年	21.2%
8 年以上	36.4%
合計	100.0%

※所属に関して、複数回答しているものが 13 件あったが、今回は、地域課題や住民との関わりが多く、サービスの創出や活動のコーディネートをする業務が多い職種を優位として処理することにした。具体的には、「生活支援コーディネーター」＞「コミュニティソーシャルワーカー」＞「社会福祉協議会職員」＞「地域包括支援センター」の順とした。

参加者は、「生活支援コーディネーター」が約5割と最も多く、続いて「県市町村職員」が2割強(26.3%)と多かった。勤務年数としては「1～3年」が4割強、「8年以上」が約4割と、勤務年数の長短のバランスがとれている参加者であった。

◆［地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景］を聞いて（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①市町村の役割について理解できたか（無回答・不明＝1）	32.4(12)	37.8(14)	18.9(7)	10.8(4)	0.0(0)	100.0(37)
②アセット重視の考え方について理解できたか（無回答・不明＝1）	45.9(17)	51.4(19)	2.7(1)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(37)
③居場所の役割について理解できたか（無回答・不明＝1）	45.9(17)	45.9(17)	8.1(3)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(37)
④協働的な態度がどのようなものか理解できたか（無回答・不明＝1）	35.1(13)	45.9(17)	18.9(7)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(37)

「①市町村の役割」に関しては「そう思う」、「ややそう思う」は70.2%と7割程度の人の理解を得られているが、「ややそう思わない」は10.8%と1割超である。自由記述では以下のようなものがあった。

・「市町村…でなくても良いかと思います。”支援員・者”とかでどうでしょうか。」
・「どのように、地域のために活動したいと思う人を発掘できるのか。」

「②アセット重視」については、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて97.3%と大半の人から高い理解を得ている。自由記述でも「初めて聞いた言葉だが今後も”あるもの”に着目して支援していきたい。」と好印象な反応がある一方、「ある物を強化する、継続するにはどうしたらよいのか。何をしたらよいかがわからない。地域でどう話あったらよいか。」とアセット重視をした上での具体的な手法への関心がうかがえる。
「③居場所の役割」については、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて91.8%と約9割超であり概ね理解を得られている。自由記述には、「居場所からやる気のある人と協力したい人が結びつくプロセスが見えた。」とあり、居場所の理解が進んだ印象である。
「④協働的な態度」についても、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて81.0%と約8割超の理解が得られており、居場所ややる気を支える支援についての理解は概ね得られているが、居場所づくりや支援と市町村の役割の関係については整理する必要があるのかもしれない。

◆【シートの使い方の説明】を聞いて（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①シートの使い方は理解できたか	34.2(13)	52.6(20)	13.2(5)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(38)
②シート中に使用されている言葉は分かりやすいか	34.2(13)	47.4(18)	18.4(7)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(38)
③実際にシートを現場で使いたいと思うか（無回答・不明＝2）	27.8(10)	50.0(18)	22.2(8)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(36)

「①シートの使い方」「②言葉はわかりやすいか」は、どちらも「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて約８割を超え、「③現場で使いたいか」は 77.8％と約８割近く、シートについては好反応を示している。「③現場で使いたいか」の自由記述で、「そう思う」、「ややそう思う」と答えた人の中には「改良したい。財政当局や地域には、データを示したほうが納得してもらえます。」と実際の使用に向けて効果的な使用についても見られる。

一方、「③現場で使いたいか」で「どちらともいえない」と答えた人の自由記述は以下のようになっている。

【実際にシートを使った時の難点】
・うまく説明して使えるかわからないから
・シートを見せて質問すると、難しく感じられると思う。
・時間をかけ信頼関係が得られたら使ってみたい。
・整理するのはよいが

【実際の支援体制での難点】
・まだ市も社協も体制づくりが未発達で職員がつかいこなせないかと思います。
・すでに進めている手順、行程がある。

【その他】
・シート３とシート４が逆なのはなぜか？
・やる気のある人を発見するまでが難しそうである。

◆【事前にお渡しした地域資源マップシート】に関して（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①地域資源をすぐに思いつくことはできたか（無回答・不明＝7）	22.6(7)	71.0(22)	3.2(1)	3.2(1)	0.0(0)	100.0(31)
②地域資源から支援策は考えやすかったか（無回答・不明＝6）	21.9(7)	71.9(23)	3.1(1)	3.1(1)	0.0(0)	100.0(32)

「①地域資源をすぐに思いつくことはできたか」「②地域資源から支援策は考えやすかったか」の両項目とも、「そう思う」「ややそう思う」を合わせて9割超(93.6%と93.8%)となっており、地域資源についての情報も多く、それを活用できるスキルがあることがうかがえる。　自由記述では、①②ともに「グループで話し合うことで多くの意見を聞くことができた』とのコメントもあり、研修会自体の効果もうかがえる。②については「住民のかたにはよくやってもらいます。できること探しは大事ですよね。」というコメントもあり、住民との良好な関係性もうかがえる。

◆【グループワーク】を聞いて（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①ロールプレイ形式の内容は把握がしやすかったか（無回答・不明＝3）	48.6(17)	37.1(13)	14.3(5)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(35)
②アセット重視の考え方で思考することができたか（無回答・不明＝3）	34.3(12)	51.4(18)	14.3(5)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(35)
③支援の着眼点をみつけることはできたか（無回答・不明＝3）	25.7(9)	54.3(19)	20.0(7)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(35)
④支援の特徴や強みを把握できた（無回答・不明＝3）	22.9(8)	65.7(23)	11.4(4)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(35)
⑤シートは使いやすいと感じたか（無回答・不明＝3）	22.9(8)	54.3(19)	22.9(8)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(35)

「①ロールプレイ」、「②アセット重視」については、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて9割弱（85.7%）であり良好な反応であった。「そう思う」、「ややそう思う」の合計に注目すると「③支援の着眼点」は80.0%、「④支援の特徴や強み」は約8割（88.6%）であり、概ね支援の着眼点や特徴等を捉えられたことがわかる。「⑤シートの使いやすさ」については、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて約8割弱(77.2%)とこの中では最も低かった。自由記述は、以下の通りである。

〈「そう思う」、「ややそう思う」と答えた人の自由記述〉

・「復習して今後の業務に生かしていきたい。」

・「資料がバラバラでどこにあるか探すのが大変ですね。グループワークが何をしてい　いか不明な所があった。」

〈「どちらともいえない」と答えた人の自由記述〉

・「もう少し資料を読み込んで理解できるようにします。」

・「これから検討します。」

・「シート２を立ち上げ時と立ち上げ後で２回使うところは、同じ内容であっても、シート名を分けた方がよい。シート２「活動の資金がある」を入れてないのはなぜ？

・「全てプラスの言葉なので、今出来ている事と支援要な部分の使い分けが難しい。」

・「課題を肯定的に文章化するときに悩んでしまいそう。」

今後、使用して見える所もあるが、シートの使い方や内容の整理と、これまでアセット重視ではなく、減点的に支援実施してきた様子もうかがえる。表記方法の補足が必要なのかもしれない。

５）福岡県大川市のアンケート調査結果

◆参加者の基本情報

所属	%（度数）
社会福祉協議会職員	6.3%
生活支援コーディネーター	12.5%
コミュニティソーシャルワーカー	0.0%
県市町村職員	43.8%
地域包括支援センター	37.5%
その他	0.0%
無回答	0.0%
合計	100.0%

年齢	%（度数）
20～25 歳	0.0%
26～29 歳	0.0%
30～35 歳	0.0%
36～39 歳	12.5%
40～45 歳	31.3%
46～49 歳	12.5%
50～55 歳	31.3%
56～59 歳	12.5%
60 歳～	0.0%
無回答	0.0%
合計	100.0%

現在の部署所属年数	%（度数）
1～3 年	62.5%
4～7 年	18.8%
8 年以上	0.0%
無回答	18.8%
合計	100.0%

勤続年数	無回答・不明=2
1～3 年	28.6%
4～7 年	7.1%
8 年以上	64.3%
合計	100.0%

大川市では、「県市町村職員」の参加が 5 割弱(43.8%)と最も多く、続いて「地域包括支援センター」所属の参加者が 4 割弱(37.5%)と多かった。勤続年数としては、「8 年以上」の参加者が 64.3%で 6 割超と多く、続いて「1～3 年」の参加者が 3 割弱であった。

◆【地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景】を聞いて（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①市町村の役割について理解できたか	25.0(4)	68.8(11)	0.0(0)	6.3(1)	0.0(0)	100.0(16)
②アセット重視の考え方について理解できたか	31.3(5)	50.0(8)	12.5(2)	6.3(1)	0.0(0)	100.0(16)
③居場所の役割について理解できたか	43.8(7)	50.0(8)	6.3(1)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
④協働的な態度がどのようなものか理解できたか	31.3(5)	43.8(7)	25.0(4)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)

地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」の必要性については、どの項目も「そう思う」、「ややそう思う」が多く、概ね理解が得られている。項目ごとでみてみると、「②アセット重視」では「④協働的な態度」では「どちらともいえない」「ややそう思わない」を合わせると 2 割弱～強となっている。「県市町村職員」の参加が多いことも関連しているかもしれないが、「①市町村の役割」や「③居場所の役割」に比べ理解が難しいようにうかがえる。とくに「④協働的な態度」の自由記述では「いろんな部署、職種との連携が大事」とあり、理解はできても現状での困難さがうかがえる。

◆【シートの使い方の説明】を聞いて（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①シートの使い方は理解できたか	18.8(3)	50.0(8)	31.3(5)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(16)
②シート中に使用されている言葉は分かりやすいか	31.3(5)	31.3(5)	25.0(4)	12.5(2)	0.0(0)	100.0(16)
③実際にシートを現場で使いたいと思うか（無回答・不明=1）	13.3(2)	66.7(10)	13.3(2)	6.7(1)	0.0(0)	100.0(15)

「①シートの使い方は理解できたか」に関しては、「ややそう思う」の割合が高く、半数は好反応とうけとれる。しかし「②シート中に使用されている言葉は分かりやすいか」について、「どちらともいえいない」「ややそう思わない」が合わせて37.5%と4割弱という結果になっているため、使用する言葉の工夫が必要である。「③現場で使いたいと思うか」については、「そう思う」「ややそう思う」が合わせて8割近くの回答が得られている。自由記述に注目すると、「①使い方の理解」では「ちょっとむずかしい。慣れればいいかも」、とあった。「③現場で使いたいと思うか」の自由記では以下のようなものがある。

・「主観的に判断するのであれば、見える化といいながら、職員の資質でバラバラになると思う。」

・「何十年か経ったときに、事業が継続できるのか心配。人口が激減して大変だ…。」

使い方に慣れていけば実際にシートを現場で使うことになる可能性も見えるが、個人の資質を超えて均質的な支援を行う事の困難さや、事業の継続性自体がそもそも困難時の活動の評価の工夫が必要なのかもしれない。

◆【事前にお渡しした地域資源マップシート】に関して（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①地域資源をすぐに思いつくことはできたか（無回答・不明=3）	23.1(3)	46.2(6)	23.1(3)	7.7(1)	0.0(0)	100.0(13)
②地域資源から支援策は考えやすかったか（無回答・不明=3）	23.1(3)	38.5(5)	30.8(4)	7.7(1)	0.0(0)	100.0(13)

地域資源マップシートについて、「①地域資源をすぐに思いつくことはできたか」「②地域資源から支援策は考えやすかったか」の両項目とも6割を超える人が「そう思う」、「ややそう思う」と答えて

いるが、「どちらともいえない」、「ややそう思う」も3割程度いる。とくに自由記述へのコメントはないが、両項目とも「ややそう思わない」と回答した人は「県市町村職員」であり、地域との関わりによっても差異が出る設問項目とも捉えられる。

◆【グループワーク】に関して（＊合計値の小数点は四捨五入）

%(度数)

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思わない	そう思わない	合計
①ロールプレイ形式の内容は把握がしやすかったか（無回答・不明=1）	53.3(8)	33.3(5)	6.7(1)	6.7(1)	0.0(0)	100.0(15)
②アセット重視の考え方で思考することができたか（無回答・不明=1）	33.3(5)	46.7(7)	20.0(3)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(15)
③支援の着眼点をみつけることはできたか（無回答・不明=2）	35.7(5)	42.9(6)	14.3(2)	7.1(1)	0.0(0)	100.0(14)
④支援の特徴や強みを把握できたか（無回答・不明=3）	15.4(2)	46.2(6)	38.5(5)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(13)
⑤シートは使いやすいと感じたか（無回答・不明=2）	7.1(1)	57.1(8)	28.6(4)	7.1(1)	0.0(0)	100.0(14)

「①ロールプレイ形式の内容は把握がしやすかったか」については、「そう思う」「ややそう思う」を合わせると86.6%と約9割弱の人が肯定的にとられていることがわかる。「②アセット重視の考え方で思考することができたか」についても「そう思う」「ややそう思う」は80.0%で約8割の人が概ね理解が得られたと考えられる。一方で「③支援の着眼点をみつけることはできたか」については、「そう思う」「ややそう思う」は合わせて78.6%と7割強、「④支援の特徴や強みを把握できたか」については61.6%と約6割、「⑤シートは使いやすいと感じたか」は64.2%と6割超となっている。アセット重視の考え方の理解が得られてとしても、それが支援の強みの把握にはつながらないことがうかがえる。「⑤シートは使いやすいと感じたか」には以下の自由記述があった。

・表現が判断しにくかった。
・実際の事業等に使ってみないと分からない。
・立ち上げや立ち上げ後の取組は素晴らしいのですが、これが何十年後に維持するとなるとこれからの若い人たちの物凄い負担になるのでは？高齢者も若い人たちも幸せになれる仕組みをめざしての調整、最適化が大事だと思いました。

シートについては、やはり実際に支援に使ってみないと判断できない点と、支援過程のなかでシートが活用しやすい／しにくい場面があり、とくに大川では事業継続が評価に入ることの困難さがうかがえる。

６）グループインタビュー結果（５地域まとめ）

◆シートに関すること

［解釈］

・シートを使っても、実際は個人の資質や経験が影響すると思った。

・支援者によってチェックをどこにつけるかは違ってよいと言っていたが個人の資質によってしまう。

・シートを使った判断基準が明確になるようにブラシュアップが必要。

・言葉に個人の主観が入りそうで共有しにくい。

・対応した人の解釈によって方向性がブレないか心配。

・複数人で行った方がいい。

・詳細に知っている人が複数人いないと使えない。

・課内で同じ担当ケースを持っていない時はどう共有すればいいか．（第３者の目がない）

・専門職の振り返りに使えるが、チェック項目は合格チェック数やすべてチェックする必要があるように見えるので、住民には持っていかない。

［使い方］

（改善点）

・シートの使い方が難しい。

・項目が多すぎる。

・どの項目にあてはまるのかすぐに判断ができない。

・どこに○をつけたらいいかすぐにわからないと感じた。

・現場で話を聞きながらシートに整理していくのは少し時間が掛かるのでは。

・住民とこのシートを使っても、言葉が難しいし有効ではない。専門職同士には有効。

・シートを住民と使うには、マニュアル的なものがあればいいかもしれないが、住民側も要領を得ていないし難しい。支援者が張り切ると不快感がある住民もいるので、誰がメインで使用するかを示したほうがいい。

・情報をシートのどこにあてはめていいか分からない。何回も研修会があるといい。

・2回目のチェック方法が分からなかった。

・支援者としては、シート２，３，４に縛られると使い勝手が悪いという印象があった。

・シート１はわかりやすかった。シート２は受けとめ方や地域のことや専門的なことをわかっていないといけないのでスキルがいる。

・いつ使うものかがわからなかった。どういう場面も想定されているのかが不明。

・シートをアレンジして地域にもっていくことは出来る。シートを100%で作られると、シート通りに使わないといけなくなるので使いにくい。

・自分がこのシートを使っているところが想像ができない。

・アイディア集があったら助かる。自分で見て聞きながら実際にしないとわからない。

ート４の“実際の支援”は何を書けばいいのかピンとこなかった。

（良い点）

・相談者の想いが先行することが多いため、シートがあることで聞きたいことや聞くべきことの抜けがなくなる。１年後など活動後も、団体と一緒にチェックしてもいいと思った。

・チェックすることで評価点を当事者と共有できている。
・漠然と話し合うと抜けがあるからあとで確認することができる
・今まで話を聞くだけだったがシートに落とし込むことで、客観的に見られ整理ができた。
・箇条書きで書くものがワンチェックで済むので整理がしやすかった。
・事例を示しながら聞けたので、情報の拾い方がわかって良かった。

［認識の一致の手段］
・シートがあることで、同じ認識ができるというのはいい。
・シート４が一番使えるので、ここが充実していると良い。
・見えにくくなければ、記録シートの機能もあるといい。
・文字にしてみるのと、漠然として考えてみるのとで全然違う。
・団体の活動達成度を可視化できるのはいい
・実際の相談は漠然としていることも多い。シートを見ながら相談を受けることはできないので、最低限の質問項目があるといいのかも。
・支援の視点を整理するという使い方としては、使えると思う。

［言葉の意味］
・「ニーズ」「アセスメント」などのカタカナが難しい。
・専門的な言葉や、横文字はわかりにくい。
・着眼点という言葉がわかりづらい、課題という言葉が良い。
・「地域に安心感を生みだす」具体的にはどういうこと？その定義や基準があるといい。
・アセットという言葉は難しいので、「地域の強み」、「やる気」、「地域の得意な分野」、「特性」などに言い換えてはどうか。
・やわらかい言葉がいい。
・言葉を自分達にあわせてと言われると難しい。すっと使いやすいものにしてほしい。
・言葉の言いかえ集があるといい。
・住民に対し地域課題という言葉は難しい。最初の段階なので。具体的な表現がいい。
・どういう意味かな、と思う時があるので具体的にわかりやすい言葉が良い。
・シートは言葉の表現がわかりにくい。現実には漠然と「なにかやりたいと思うけど、なにしよるかな」という相談が多いので、シートに当てはめようというのが難しい。

［シートの形式］
・ケアプランのように、チェック項目をすべてチェックしなればならないような気がしてしまうことがある。アセスメント表と混同する職員はいるかもしれない。
・チェックした項目の１つ１つに深みがあればいいことを確認できると良い。
・チェックの色合い、見た目も似ているから違うと見やすい。
・チェックした項目の根拠欄がほしい。根拠欄があると、同じ担当ケースを持っていなくても共有しやすい。

［都会と地方］

・都会ならいいけれど、地方だと使えない。
・都会では違うかもしれないが、地方だとでしゃばると嫌煙される。活動したい気持ちはあるが、地域の人間関係で難しい面もある。小規模で活動を始めた方がいいかもしれない。

［着眼点］

・どういうところに着眼するのか、課題がどこかなどわかりやすい。
・できていることとできてないことが見えやすい。
・わかりやすかったが相談内容をどの着眼点にどう落とし込んでいくかが難しい
・支援の着眼点はやや難しい。
・支援の着眼点での読みかえが難しかった。

［アセット重視の支援について］

・あるものを活かすのはいい
・地域資源に何があるかを出し合うことは行っているが、「やる気」というアセットから入ったのがよかった。何かやりたい人が地域資源。
・アセット重視は今までしてこなったので、この視点で取り組めたのは収穫。
・活動立ち上げ時に、これまでは規定を満たしていればいいと思っていたので、シートの項目から新しい可能性を見つけ出すことが大事だと思った。
・これまでは「これができない」が始まりだったので、強みを磨く必要性のほうが活動者のやる気につながると思った。
・自主活動を地域のなかで作らないといけないので、視点を得た。
・アセット重視は初めて聞いたが、あるものから考えることが重要だと感じた。
・ニーズとアセットの違いが理解できた。
・アセット重視の考え方に慣れていないので、理解するのに時間がかかった。

［地域資源について］

・地域資源は把握していてもそこにつなげるまでが問題。
・助成金前提の相談が最近は多いので、要綱に沿っているか、実現可能かで考えてしまいあら捜しをしてしまう。住民のやる気を活かせない。
・場所の確保の問題は難しい。自由に使える社会資源があるといい。
・地域資源の把握は公開しない。
・地域資源について、包括は情報が入ってくるが、地域の連絡会には全く出てこない時もあるし。そもそも資源として気づいていないこともある。住民が地域資源を出すことは難しい。
・地域資源を出すことが難しく負担感につながる。

［既存のシート］

・以前いた部署で、効果的に支援している職員の考え方や工程を可視化していたことがあり、シートはそれに似ていた。
・活動の広報支援が、すべてのシートに書かれていたので腑に落ちた。

【地域の活動の支援について】

［評価について］

・自分たち自身では評価していない。
・現状把握はしているけど、あまり評価はしていない
・広報はしているけど、それが評価なのかはわからない
・軌道に乗ってきているから、それでいいと感じている。
・評価法を使いたい。住民はやる気をさせる部分では、研修では分からなかった。

［どんな相談が多いか］

・自分で気がつける人はもうすでにやっている。なぜそれができているのか知りたい。それに気がつけていない人にどうやる気を持っていけるのか、元気づけさせるのか。
・活動していなくて、やりたいなって思っている人やどうしたらわからない人にどのようにして、自分でやろうという気持ちまでどうやって持っていくかわからない。
・実際に居場所づくりをしたいと相談されることは少ない。どちらかというと主体的ではなく、「あったらいいよね、作って欲しいな」というような話しはあっても、私たちが作りたいっていう相談を受けたことはない。
・立ち上げようとする人との接触はあまりない
・ほとんど相談にはこない。独自にやっている人もいる。

［行政機関との関係］

・市役所には支援の情報を共有する仕組みは全くない。慣れてないし、短期間で移動するので今回この手法は分かりやすくてよかった。
・市の委託事業なので、行政の考えに合わせると考えが詰まってくる。
・こういうことで困っているときはこういう支援があるとか、具体的なものがあるといい。
・年間通じて、市役所、社協は、相談にきてくれと発信している。
・協議体を運営しているが、効果的な運営とはいえない。「市として方向性を示せと言われる場合」と「自分達がやりたいことを考えたいといわれる場合」がある。
・行政のほうから、活動してほしいと住民にお願いしていることも難しい。きっかけは行政で、その後発展する活動もあるが、きっかけづくりが難しい。

［担当者］

・ベテラン、新人の情報量が違う
・引継ぎもうまくいかないし、前の人の方がもっと知っていると思って非効率に感じる。
・若手職員に視点を持ってもらうのに有益。とくに対住民には効果的なので使いたい。
・熟練の技で支援していたり、職員内の研修ができてなかったりしたので、このようなツールがあるのはいい。

［支援のあり方］

・現場の人と支援側の「できている」「支援が必要」が合致しない。
・こういうことで困っているときはこういう支援があるとか、具体的なものがあるといい。
・活動したい人が下調べしたときに、社協に相談できると分かって来訪する印象がある。それを知らない人にリーチをのばせてない。
・他部門と連携するときに地域の特徴が解るが、それをやる気と見たてて支援していく段取りは難しい。目的があってのやる気はみえやすいが、「やる気があるんだけど…」にどうアプローチしたらいいかわからない。
・相談者が空回りしないように、情報整理をしている。
・コーディネーター主導で活動しながら人材発掘している。場所を貸してくれる人など、部分的にでも協力してくれる人を捜しながら活動を始めてしまう。

［活動の問題］

・活動するにあたって経費、助成金は単発のものが多いので、継続的に支援していく上で悩むとこはある。
・担い手が高齢化していく中で、若い人の巻き込み方が問題。若い人は仕事をされているので、休日でないと出てこない。実際のニーズとマッチしなかったりする。
・今ある団体のリーダーの後継者探しが難しい。人間関係が難しい。
・ニーズはあるが運転ボランティアがなかなか集まらない。
・立ち上げたいというより、どうしたらいいんだろうというので話を聞くことがある。
・改まって話を聞くというよりも、「ちょっと聞いて…」という話を聞くことがある。
・他の地域である活動を自分の地域でもやりたい、人を集めたいという相談はある。
・核になりたくない人もいる。誰かがやってくれれば、手伝うとなどはある。
・いい人材は、すでにいろんなことをしている。協力者（サブの人）がいるかどうかも大事で、サブの人は、具体的にリーダーについていける人がいい。そのマッチング、調整する。
・住民だけで、活動の立ち上げから最後まで実行することは難しい
・活動をしたい人を探すことが難しい。

［マニュアルなどノウハウの蓄積はなされているのか］

・マニュアルはあるが、それだったらその人に聞いてみなとかはあるが、ちゃんとデータには落としていないのでその人がいなくなれば、個人の頭に入っているので情報もそのままなくなる。
・社協はデータで残していくことが苦手。倉庫に残したらみない。
・ケースで支援も異なるのに、その蓄積がなされていない。

まとめ

全国５か所で開催した“住民主体の活動を育てる支援の手法を学ぶ”説明会では、主に生活支援コーディネーターを対象に住民活動への支援としてアセット重視の手法を提示し講義及びロールプレイ形式のワークショップを通して実施し、概ね参加者から好評を得た。ワークショップでは、昨年度開発したシートを使用し実際に使用してもらい終了後にシートの使用感や現状の支援体制等についてアンケート調査及びグループインタビューを行った。

調査の結果から昨年度開発したシートに関して、良い点に関しては残しつつも現状の支援体制を踏まえて活かすべき改善点・課題は以下である。

現状の支援体制

・支援に関するマニュアルがないところが多く新人職員に対して支援のノウハウを引き継ぐことや住民活動に対する支援専用のツールがないため支援の情報を共有する仕組みがないところが多い。
・ほとんどの地域で各機関ごとに地域資源を把握しているが、連携するためのネットワークが確立されていないため“地域資源をつなぐ”ことまでできていない。
・支援の実績が多い職員と新人職員の情報量が異なることは当たり前といえるが、データ・共有ツール等がないため引継ぎや教育が十分に行われていない。
・市としての住民活動への期待や方向性と住民団体が考える方向性をすり合わせることが困難である。
・支援者側は、通常の業務の多忙さにより住民活動への支援まで手が回らないことがある。

シートに関して

・使用されている言葉の不明瞭さやわかりにくさがある。
・“支援の着眼点”がわかりにくい。
・行政の施策が視点に入る必要があるのではないか。
・アセスメント機能が必要ではないか。
・共有ツールにするには、判断基準が明確になるといい（根拠が必要）。
・誰がどのような場面で使用するのかが明らかになるとよい。
・項目が見にくい。

主に、これらの説明会での意見や、次頁からのヒアリング調査等を受けて改善を図り、「活動支援プランニングシート」を作成した。

３　ヒアリング調査

１）調査の目的

（１）支援体制の整理・地域資源の収集・シートの改良点の検討：第１回ヒアリング調査

団体をどう評価し支援するかを整理・類型化し、字引として使用できるものに改良することを目的に、説明会に参加した自治体・社協・生活支援コーディネーター等の地域を中心に積極的に取り組めそうな自治体を選び、実例にあてはめたアセスメントの試行と評価についてのヒアリング調査を実施した。

各地域で住民参加による生活支援サービスを推進している行政や中間支援組織の協力を得て、地域支援を〈見つける〉・仲間を〈つなげる〉・様々なサービスを生み出す可能性のある居場所を〈つくる〉機能に着目し、「住民のやる気を支援する視点（評価項目）」を用いた支援事例を収集し（５地域程度）、シートのブラッシュアップを図った。

①対象

自治体、生活支援コーディネーター、社協・ボランティアセンター等の生活支援サービス提供団体を支援している組織・機関の職員やコーディネーター

②主な調査項目

・支援体制
・住民団体の立ち上げ支援・立ち上げ後支援のノウハウ
・シートを用いた支援事例等の再評価、実用可能かの検討（金銭的支援技術的支援等）　他

③調査地域

［１］香川県高松市

日時：令和元年９月 20 日（金）9：30～11：00
場所：浜松集会所
対象者：住民団体「おてったい屋島」
　　高松市社会福祉協議会（森谷正伸・石尾真一・高木さやか）
ヒアリングスタッフ：平野覚治・伊藤浩巳・斉藤友歌里・齋藤志恩

［２］香川県琴平市

日時：令和元年９月 20 日（金）13：30～15：00
場所：琴平市社会福祉協議会
対象者：琴平市社会福祉協議会（越智和子・新原隆一）
ヒアリングスタッフ：平野覚治・伊藤浩巳・斉藤友歌里・齋藤志恩

［３］石川県金沢市

日時：令和元年９月27日（金）9：30〜11：00

場所：金沢市松ヶ枝福祉館

対象者：金沢市社会福祉協議会（宮田亮平・北脇宜和・水橋佑介・上田浩貴）

ヒアリングスタッフ：清水洋行・平野覚治・伊藤浩巳・斉藤友歌里・齋藤志恩・宮地成子

［４］石川県宝達志水町

日時：令和元年９月27日（金）13：30〜15：00

場所：宝達志水町民センターアステラス

対象者：宝達志水町社会福祉協議会（今江裕美）

宝達志水町役所　地域包括支援センター（川端脩平）

ヒアリングスタッフ：清水洋行・平野覚治・伊藤浩巳・斉藤友歌里・齋藤志恩・宮地成子

［５］愛知県長久手市

日時：令和元年10月３日（木）9：30〜11：00

場所：長久手市会議室棟２階会議室

対象者：長久手市役所（堤健二・長谷川励・伊藤雅一・武塙ゆう子・中野智夫）

長久手市社会福祉協議会（児玉恵子）

ヒアリングスタッフ：平野覚治・斉藤友歌里・齋藤志恩・宮地成子

［６］愛知県日進市

日時：令和元年10月３日（木）10：40〜12：10

場所：長久手市会議室棟２階会議室

対象者：日進市社会福祉協議会（富岡亜希子）

ヒアリングスタッフ：齋藤志恩・宮地成子

［７］愛知県知多市

日時：令和元年10月３日（木）14：00〜15：30

場所：ゆいの会事務所

対象者：特定非営利活動法人ゆいの会

知多市役所（山本浩己）

ヒアリングスタッフ：平野覚治・斉藤友歌里・齋藤志恩・宮地成子

［８］福岡県大川市

日時：令和元年10月９日（水）9：30〜10：00

場所：大川市役所３階第１委員会室

対象者：住民団体「木室たんぽぽの会」

大川市社会福祉協議会（増田美枝子）
ヒアリングスタッフ：清水洋行・平野覚治・斉藤友歌里・齋藤志恩・宮地成子

［９］福岡県大川市
日時：令和元年 10 月 9 日（水）10：00～10：30
場所：大川市役所 3 階第 1 委員会室
対象者：住民団体「ドリームたぐち」
ヒアリングスタッフ：清水洋行・平野覚治・斉藤友歌里・齋藤志恩・宮地成子

［１０］福岡県大川市
日時：令和元年 10 月 9 日（水）10：00～12：00
場所：大川市役所 3 階第 1 委員会室
対象者：大川市役所（中村雄一・増田美枝子）
大川市社会福祉協議会（古賀一澄・近藤大輔・川野文裕）
ヒアリングスタッフ：清水洋行・平野覚治・斉藤友歌里・齋藤志恩・宮地成子

［１１］東京都荒川区
日時：令和元年 11 月 15 日（金）13：00～14：00
場所：荒川区社会福祉協議会
対象者：荒川区社会福祉協議会（鈴木訪子）
ヒアリングスタッフ：平野覚治・斉藤友歌里・齋藤志恩・宮地成子

（２）「活動支援プランニングシート」の試用・支援の事例収集：第２回ヒアリング調査

手引書の使い方説明会後の記述式アンケート及びグループインタビュー、第１回目のヒアリング調査を受け、主にワーキング部会で具体的内容を検討し、「活動支援プランニングシート」を作成した。第１回のヒアリング調査に協力していただいた自治体・社協・生活支援コーディネーター等の地域から、積極的に住民活動を支援している支援者を選び、「活動支援プランニングシート」に事前に記入をしてもらい、支援者としての姿勢や心構えについて、２回目のヒアリング調査を実施した。

支援事例の収集を中心に各地域の具体的な住民活動への支援や心理的側面から配慮していることの把握の他、支援者としての姿勢・心構え、認識している立ち位置などの把握を目的としている。

①対象
自治体、生活支援コーディネーター、社協・ボランティアセンター等の生活支援サービス提供団体を支援している組織・機関の職員やコーディネーター

②主な調査項目
・アセスメント項目の把握
・支援事例に基づいた心理的側面での配慮等

・立ち上げ支援の基準　他

③調査地域

［１］愛知県日進市

日時：令和元年 12 月 9 日（月）13：30～16：00

場所：日進市社会福祉協議会

対象者：日進市社会福祉協議会（富岡亜希子）

ヒアリングスタッフ：伊藤浩巳・齋藤志恩・宮地成子

［２］東京都荒川区

日時：令和元年 12 月 10 日（火）13：00～15：00

場所：荒川区社会福祉協議会

対象者：荒川区社会福祉協議会（鈴木訪子）

ヒアリングスタッフ：中島智人・伊藤浩巳・齋藤志恩

［３］石川県金沢市

日時：令和元年 12 月 17 日（火）10：00～11：30

場所：金沢市松ヶ枝福祉館

対象者：金沢市社会福祉協議会（水橋佑介・上田浩貴・宮田亮平・村澤成美）

ヒアリングスタッフ：内藤佳津雄・伊藤浩巳・齋藤志恩

［４］香川県琴平町

日時：令和 2 年 1 月 17 日（金）13：30～15:00

場所：琴平町社会福祉協議会

対象者：琴平市社会福祉協議会（越智和子・新原隆一）

ヒアリングスタッフ：平野覚治・伊藤浩巳・齋藤志恩

２）調査結果

次頁より、ヒアリング調査の結果をまとめ、掲載する。

（１）香川県高松市

◆ 自治体の状況

総人口	426,658 人
高齢者人口	118,250 人
高齢化率	27.7% （全国平均 25.6%）
面積	375.41 ㎢
人口密度	1,136.5 人／㎢ （全国平均 340.8 人/km²）

※面積は平成 27 年国勢調査、それ以外は住民基本台帳令和 2 年 3 月 1 日現在数より

◆訪問調査実施概要

・日時：2019 日 9 月 20 日
・場所：浜北集会所
・お話しを伺った方　：
おてったい屋島
　代表　西山氏
　第三層生活支援コーディネーター　熊野氏
　会計担当　菅氏
社会福祉法人 高松市社会福祉協議会
　地域共生社会推進室長　森谷正伸氏
　地域共生社会推進室　まるごと福祉相談員　石尾真一氏
　地域共生社会推進室　第二層生活支援コーディネーター　高木さやか氏

◆調査結果

取組の特徴

・協議体は市内 44 地区のうち 39 地区で活動を行っている。訪問型サービス B は 22 地区、通所型サービス B は 6 地区で取り組まれ、制度以外の見守り、買い物同行などの生活支援活動もすすめられている。

・地区の状況や資源を把握する「わがまちこんなとこシート」を住民と相談しながら作成している。地域の強み、困りごと、公共交通の状況、地域資源、あったらいいと思うもの、など地区の特徴を把握し、それに対応した支援を行っている。

（１）どのように住民参加による生活支援サービス団体の立ち上げ支援をおこなっているのか

１）地域の生活課題と背景

・高松市は、四国の北東部、香川県のほぼ中央部に位置しており、北部は瀬戸内海に面し、人びとの暮らしや経済・文化などさまざまな面で瀬戸内海と深いかかわりをもちながら発展し続けた。そのほか山、川など恵まれた自然があるなか、にぎわいのある都心やのどかな田園など豊かな生活空間を有する都市である。人口が減少に転じる中で、世帯数は増加傾向にある為、一世帯当たりの平均人員は減少しており、社会的孤立もひとつの課題となっている。そのため、助け合いの仕組みづくり、分野を超えた相談体制づくりなどを充実させ地域・暮らし・生きがいを共に創っていく「地域共生社会」の実現に向けた取組を進めている。

２）どのように支援をおこなっているのか（支援体制）

平成 27 年 10 月から生活支援体制整備事業が始まり、現在 44 地区のうち 39 地区で活動を行っている。訪問型サービス B は 22 カ所、通所型サービス B は 6 地区で取り組まれて、制度以外の見守り、買い物同行などの生活支援の取り組みもすすめられている。

高松市社会福祉協議会は第二層生活支援コーディネーターを委託され、協議体の運営や活動立ち上げ支援を行っている。高齢化の問題や人のつながりづくりの必要性を一方的に説明するだけではなく、地区に足を運び、福祉的な思いがある住民の話をよく聞いて信頼関係を構築し、住民の力で取り組みが立ち上がることを支援している。

地区の状況や資源を把握する「わがまちこんなとこシート」を住民と相談しながら作成している。地域の強み、困りごと、公共交通の状況、地域資源、あったらいいと思うもの、など地区の特徴を把握し、それに対応した支援を行っている。

３）支援における問題・課題

これまでも地域活動をしてきた住民にお願いせざるを得ないことも多く、特定の人に集中してしまう負担をどう除くか。主体的な活動や、仲間とのつながりがある活動にくらべ、制度からのスタートや人に要請されて始める活動はやりがいや広がりに課題がある。自分が住む地域をよくしたいと考える住民と地域の課題や強みを共有して、主体的に取り組めるような支援が必要である。

（２）支援の実践例

【おてったい屋島】

１）団体概要

屋島地域の地域福祉団体「屋島女性福祉の会」を母体として立ち上げられた訪問型サービス B の生活支援サービスである。屋島地域在住の 65 歳以上のひとり暮しおよび高齢者世帯で①要支援 1.2 認定者、②チェックリストによる事業対象者が利用できる。買い物代行、ゴミだし、草抜きなどを実施。費用は 1 回/1 時間で 100 円、1 か月最大 5 回まで利用可。

「屋島女性福祉の会」とは屋島地区に住む女性による地域ボランティア団体で、会員は約 500 人。年会費 500 円の会員制。地区社会福祉協議会のボランティア活動や、バザーなどを行う。

２）取組みを始めた経緯

生活支援体制整備に向け、コミュニティ協議会を通じて地域福祉ネットワーク会議（地域団体の代表者が集まる）を立ち上げた。地域福祉ネットワーク会議で課題把握をし、生活支援サービスを実施することを決定した。高松市と社会福祉協議会が研修会を実施し、屋島地域にすでにあった「屋島女性福祉の会」を中心に民生委員などに声をかけ、「おてったい屋島」の取り組みが始まった。

３）団体の立上げ・活動に対する金銭的支援に関する取組み

訪問型サービスＢ補助金。立ち上げ時に 20 万円、運営補助は基礎額として年間 30 万円、加算額として訪問 1 回につき 500 円。

４）団体の立上げ・活動に対する非金銭的支援に関する取組み

補助金の申請書や会計報告書の書類作成支援のほか、月 1 回の交流会に参加するなどして信頼関係をつくり、事務手続きなど困ったことがあればすぐに相談できる体制ができている。

５）効果的な取組みのための工夫や苦労した点

「屋島女性福祉の会」のメンバーは共に地域を支える仲間だという意識がある。「おてったい屋島」の活動が続いているモチベーションは利用者からの感謝や地域を良くしようという気持ちである。住民の強みや得意とすることを見出し、住民が活躍しやすいように動き、地域資源のマッチングをして、負担に思わずに続けてもらえるよう心がけている。実際の運営は団体の主体性を尊重している。

（２）香川県琴平町

◆ 自治体の状況

総人口	9,186 人
高齢化率	38.8% （全国平均 25.6%）
面積	8.47 ㎢
人口密度	1084.5 人／㎢ （全国平均 340.8 人/km²）

※面積・人口密度は平成 27 年国勢調査、それ以外は住民基本台帳平成 31 年 1 月 1 日現在より

◆訪問調査実施概要

・日時：2019 日 9 月 20 日

・場所：琴平町社会福祉協議会

・お話しを伺った方：琴平町社会福祉協議会常務理事・事務局長　越智和子氏
琴平町社会福祉協議会地域生活支援課　課長　新原隆一氏

◆調査結果

取組の特徴

・琴平町社会福祉協議会は、住民主体を基本に「誰もが安心して暮らせるまちづくり」を目標に多様な事業を先駆的に取り組んできた。住民が主体的に地域の課題に参画する体制は、「協議体」や「プラットフォーム事業」によるサービス創出に活かされている。

・金比羅宮などの豊かな観光資源を背景に、観光協会や商店街との連携もさかん。

（１）どのように住民参加による生活支援サービス団体の立ち上げ支援をおこなっているのか

１）地域の生活課題と背景

・琴平町は香川県の中央部に近い扇状地にあり、交通網が整備されており、県庁所在地・高松中心部へ 60 分以内でアクセスできる。古くから金刀比羅宮の門前町として知られ、主産業は観光である。しかし、近年の観光客数、特に日本人観光客数の落ち込みが激しく、2016 年度は 227.4 万人と 2014 年度実績と比較して 22%減少している。気候は温暖で「こんぴらにんにく」をはじめとした野菜の産地でもある。労働力の流出等による人口減少、少子化、全国平均より高水準で高齢化がすすんでいるものの、商店街、医療機関も多く、高齢者にも暮らしやすい環境である。食を通じたつながり作りや住民同士語り合う場所等、多様なボランティア団体が活動している。

２）どのように支援をおこなっているのか（支援体制）

・琴平町社会福祉協議会は、平成 24 年度から住民参画の仕組みとして「プラットフォーム事業」を推進している。安心・見守り・防災、環境美化、子育て・次世代支援 の 3 つのワーキングループがあり、住民が町の課題を出し合い、活動を立ち上がるための支援を継続的に行っていた。

・生活支援体制整備事業の実施にあたり、生活支援コーディネーターは社会福祉協議会に委託されている。一層二層の区別はない。協議体（ささえ愛こんぴら）を主体とし、民生委員・観光協会・商工会による地域ネットワークの一つである「こんぴらアイネット」と協働で買い物支援（令和元年～）など、地域住民主体の活動創出をコーディネートしている。

・住民が主体となるよう、事務局としてのまとめ役、人や情報をつなげる支援を中心に行う。

・活動者が外部から活動の価値を認められるよう、取材を受けたり発表する機会を積極的に作っている。

（２）支援の実践例

【ささえ愛こんぴら　買い物支援（朝市）】

１）団体概要

ささえ愛こんぴら(実施主体)

生活支援コーディネーター業務を行う琴平町社会福祉協議会が生活支援体制整備事業により立ち上げた協議体。包括的に支え合いができる体制をつくるために高齢者関係だけでなくボランティアの若いお母さんもメンバーに入っている。地域課題の話し合いで、高齢者の買い物の課題が話題に上り、マップ作りや買い物移動支援、朝市などの検討を行った。

こんぴらアイネット(運営主体)

琴平町社会福祉協議会が琴平地区のネットワークとして立ち上げた。民生委員などの地区の役員、学校PTA、観光協会や商工会がメンバーとなっている。協議体「ささえ愛こんぴら」から買い物に困っている高齢者の生活課題を聞き、朝市をはじめることになった。

２）取組みを始めた経緯

２０１８年秋に「こんぴらアイネット」で出た買い物支援の課題が協議体「ささえ愛こんぴら」に投げかけられたことがきっかけで、「ささえ愛こんぴら」を実施主体として朝市の開催が決まった。２ヶ月に一度の話し合いをもち内容を詰めていった。場所に金比羅宮参道入り口の公園（一之橋公園）の使用するにあたり琴平町観光商工課への協力を要請、観光協会や商工会を通じて参加店舗の募集、広報や高齢者への声かけなど、協働体制で準備を進めた。

２０１９年１月に第一回を開催し、以降第二第四日曜日の月２回行っている。

３）取り組みの立上げ・活動に対する<u>金銭的支援</u>に関する取組み

社会福祉協議会は直接的な金銭的な支援は行ってはいない。

４）取り組みの立上げ・活動に対する<u>非金銭的支援</u>に関する取組み

・事務局として、会議の進行や実現に向けての話のとりまとめを行うほか、使える物品や場所の情報提供や人と人をつなげる役割を担っている。

・朝市に来るまでの足として、送迎用に社会福祉協議会の車両を貸し出している。

５）効果的な取組みのための工夫や苦労した点

・住民主体の活動として、協働体制でのぞんでいる。話し合いのまとめ役として、「こんなことを言っていましたよね」など話の呼び水になるような声かけをしている。

・活動がマンネリ化しないように半年や一年の記念にいつもと違うことを提案するなど、活動をもり立てる工夫をしている。

・なにをするにしても何回もよく話し合う。話し合いの中で、「いつまでも話していても仕方ない、やろう」という声が出ないとやらされ感が出てしまう。「社会福祉協議会が言ってきたから」ではなく「自分たちでやらなければ」という言葉が出るまで待つ。

・「次の話し合いはいつにしますか？」と聞く。社会福祉協議会で日程を決めて、「来てください」というと「いや、行けません」という人が必ず出てくる。住民の都合に合わせて日程を決めている。

【絵本文庫どり～む・415 のわ（よいこのわ）・ことひらまちじゅう図書館】

１）　団体概要

絵本文庫どり～む・415（よいこ）のわ

町中心部の「公会堂」を拠点としたこどもの読書支援の文庫活動である。毎月第 1 土曜日に読み聞かせの開催のほか英語のお話し会をすることがある。また出張の読み聞かせも実施している。

ことひらまちじゅう図書館

町内のカフェの店内、診療所の玄関横、寺の受付などに図書ボックスを設置し、本を自由に貸し借りができる取り組みである。大人と子どもが一緒に楽しめる居場所を街中に設置し、本を通じて人と人がふれあうことで町の記憶を伝え、郷土愛を育む。2019 年 12 月現在で 18 カ所の図書館が活動している。

２）　取組みを始めた経緯

30～40 代の子育て世代を含めた近隣の主婦たちによって子どもの読書支援ボランティア団体「絵本文庫どり～む・415（よいこ）のわ」の活動が始まる。活動の傍ら自主的な勉強会を行うなか、“サテライトライブラリー”が話題にあがったことから、元図書館司書が中心となり「415（よいこ）のわ」から派生する形で「ことひらまちじゅう図書館」が立ち上がった。資金面では団体自身で助成団体を探すほか、助成金情報や申請書のサポートは社会福祉協議会が行った。また、絵本ボックスを設置する際も社会福祉協議会が町内の「おやじの会」と繋げて絵本ボックスを制作してもらうなど住民同士をつなげる支援を行う。

３） 団体の立上げ・活動に対する金銭的支援に関する取組み

社会福祉協議会は直接的な金銭的な支援は行ってはいないが、民間の助成金の情報提供や申請のサポート、推薦などの後方支援をする。

４） 団体の立上げ・活動に対する非金銭的支援に関する取組み

・社会福祉協議会は連絡先、事務局となっていて電話は社会福祉協議会で取り次いでいる。

・定例会の参加のほか、週に１回お手伝いに赴く等、本の寄贈者の募集を行う。

・ニュースレターの印刷を行っている。原稿は団体が作成して印刷は社会福祉協議会がしている。

・新しい資源がひとつ町にできたという価値は大きいと考えている。この価値を共有するために、「こんなことをやっている」とどんどん人に伝えている。

・発表の場をつくることを心がけている。地域福祉を考える住民大会（社会福祉大会）、地域福祉セミナーの分科会等で、活動や実践報告を住民にしてもらっている。そうすることで他の地域住民から評価してもらえ、発表者自身もそれにより整理ができ、今後のことを考えることができる。観客からとったアンケートで、発表者に対してポジティブなコメントがあれば、必ず発表者に伝えている。

５）効果的な取組みのための工夫や苦労した点

・相談や悩みをキャッチした際は、後回しにせずすぐに対応し、困りごとが発生したときに声を上げやすい環境をつくる。

・活動に関わる人のモチベーションを下げないように相手のことは良く褒め、声をかけることを心がけている。

・話合いの際は、全体の調和を考えてフォローする言葉を意識的に発する。批判的な時間になったら先に進むような話に転換する。

（３）石川県金沢市

◆ 自治体の状況

総人口	451,535 人
高齢者人口	120,276 人
高齢化率	26.6% （全国平均 25.6%）
面積	468.64 ㎢
人口密度	963.5 人／㎢ （全国平均 340.8 人/km²）

※面積は平成 27 年国勢調査、それ以外は住民基本台帳令和 2 年 3 月 1 日現在より

◆訪問調査実施概要

・日時：2019 年 9 月 27 日
・場所：金沢市松ヶ枝福祉館
・お話しを伺った方　：金沢市役所、金沢市社会福祉協議会　水橋佑介氏
上田浩貴氏
宮田亮平氏
北脇宜和氏

・日時：2019 年 10 月 17 日
・場所：金沢市松ヶ枝福祉館
・お話しを伺った方　：金沢市役所、金沢市社会福祉協議会　水橋佑介氏
上田浩貴氏
宮田亮平氏
村澤成美氏

◆調査結果

取組の特徴

・小学校区単位に地区社会福祉協議会を設置し、ふれあいいきいきサロン（地域サロン）を増設している。

・ 住民活動への関わり方として、住民による活動に対しての意識を尊重するため支援者としては必要に応じて選択肢を提示、分からない点は伝え方を工夫して伝えるようにする。

（１）どのように住民参加による生活支援サービス団体の立ち上げ支援をおこなっているのか

１）地域の生活課題と背景

・金沢市は加賀藩前田家の城下町として栄え、染め物や焼き物などの伝統工芸や、能楽や加賀万歳などの伝統芸能が受け継がれ、ユネスコ創造都市認定を受けた観光都市である。その都市において、平成 22 年時点で高齢者のみの夫婦世帯（夫 65 歳以上、妻 60 歳以上）が全世帯の 10%以上を占める。65 歳以上の独り暮らし世帯は 8%を超え、80 歳を境に増加が如実である。車を運転できない高齢者が「買い物弱者」と呼ばれ、高齢者当事者は話し相手・相談相手が欲しい、集まれる場所が欲しいというニーズが浮上している。高齢者が安心して生活できることが求められている。

・金沢市内の地区社会福祉協議会を中心に介護保険が始まる前年度平成 11 年度から高齢者分野に注力し始め、小学校区単位にふれあいいきいきサロン(地域サロン)を開設し、2019 年現在 280 サロンができあがっている。

２）どのように支援をおこなっているのか（支援体制）

・小学校区単位に地区社会福祉協議会を設置しており、地区社会福祉協議会を中心にふれあいいきいきサロン（地域サロン）を平成 11 年度から金沢市からの補助金を利用しながら継続的に増加してきた傾向がある。

・地区社会福祉協議会や民生委員とニーズ把握の方法等について協議を行い、地域住民に対してアンケート調査を実施しニーズを掘り起こし、その結果を回覧板等で住民に共有するようにしている。アンケート結果の共有場面等で、住民に呼びかけを行い“なにかやりたい”と集まった人に地域の状況を共有し集まった方々にどのようなことがしたいか聞く。

・支え合い事業においてコミュニティカフェを立ち上げる前にニーズ調査すると“話し相手がいない”“なにかあったときに相談できる人がいない”“集まれる場所がほしい”といった住民の声が拾えた。地域ごとに集計すると、もともと地域サロンがある公民館の近くの人達よりも公民館から遠い地域に住んでいる人たちの方が“居場所が欲しい”といったニーズがあることが分かりその場にコミュニティカフェを立ち上げる話が上がる。

また、地区社会福祉協議会に窓口を設け、地域サロンの補助金の活用等、住民から居場所作りの相談を受けている。地区社会福祉協議会が考える新たなサロン開設の計画と、相談者の希望する場所がマッチすると地域サロンの補助金の増額対応について、地区社会福祉協議会と市社会福祉協議会の担当者同士で情報共有している。地域サロン補助金の利用が難しい場合は、市の補助金以外の補助金の情報を提供や申請の手伝いをする。

３）支援における問題・課題

・支援における正解がないため、住民に対してのアドバイスや選択肢の提示も不安や迷いを感じることがある。

・フィードバックの機会を設けていない。

・活動に対する考えはあるが、活動拠点の候補や目的がなくわからないことはすべて「丸投げ感」がある人には支援が難しく活動につなげることが困難になる。

・地域サロン運営者が、補助金を含めた運営費の資金繰りに苦慮することで、意欲が低下することがある。そのモチベーションを上げる支援方法の難しさや、運営者の担い手不足がある。

４）支援者としての支援姿勢と配慮

・サロン等で参加者に偏りがみられた場合は、運営しているボランティアに対して「最近、どうですか」「新規の人は入ってきてますか」「常連さんが多いですね」等と声をかけ気づいてもらうようにする。理解が得にくい場合は、顔が知れている民生委員や町会長に協力してもらい代弁してもらうなど連携を行うことができるように常に関係を作るようにしている。

・社会福祉協議会の立場として、地域の本質的な問題を地域住民の活動に直接的に押し付けることはせず活動に入り込みやり取りの中でニーズの提供を行う等、伴走型の支援をする場合もある。

・住民自身がやりたいと考えていることと地域ニーズをすり合わせることで助成金を取得できるため、住民に地域ニーズを知ってもらうことは重要であると考えている。

・“知らない人にお願いすることは気兼ねする”“警戒心が強い”といった地域特性もみられるため、ボランティアの仕組み構築は難しい部分もあるが、コミュニティカフェを通して参加者が知り合い同士になると円滑に進むことがあるため、こういった地域内での繋がりづくりをしたいという地区は増加傾向にある。

（２）支援の実践例

【天親カフェ】

１）団体概要

空き店舗（元酒販店）を活用して、町会員がコミュニティカフェを週１回運営している。スタッフの手作業により会場が装飾され、体操や手芸といったプログラムは用意されることなく集まっておしゃべりする居場所となっている。参加費は協力費として 100 円を寄付、飲み物とお茶菓子が提供される。また、近隣の大学生がボランティア講師となり、子どもを対象に学習支援を行っている。毎回平均して５～６人の子どもが訪れている。月１回は、ワークショップなどのイベントを開催し、幅広い世代の交流拠点として地域のつながりを深めている。

２）取組みを始めた経緯

町内で孤独死が発生したことを背景に、「町内でつながりが必要」と住民から声があがった。金沢市社会福祉協議会の職員が住民と話し合う機会を設け、課題の明確化と住民の思いの整理を行ったところ、「やっぱり交流拠点が必要」という思いがわかった。活動のイメージを固めるため、他の居場所の見学に職員が同行したのち、コミュニティカフェ開催を決定。場所は、元酒販店の店主の奥様が「今は使っていないから」と空き店舗を提供、住民の中から担い手となる中心メンバーも決まってきた。続いて運営資金を確保しようと、活動資金を得るために市の助成金に申請することになった。しかし、町会単位での申請が条件だったため、中心メンバー自らが提案書を作成し「町会活動として位置付けてもらえるよう」町会総会で提案し認められた。その後、助成金の給付が決定、会場の環境整備や広報活動などの準備が整い、2019 年 8 月に天親カフェがオープンした。カフェオープン後、運営スタッフが話し合う中で、「高齢者だけでなく子どもにとっても居場所が必要ではないか」という声が出てきた。同時期に市が地域で行う子どもの学習支援教室に対する助成を開始したこともあり、運営スタッフの間でカフェのスペースを有効活用しつつ子どもにとって、家と学校以外の第三の居場所づくりをしようという話にまとまった。町内で子どもに関する活動に関心のある方の協力を得て、9 月に学習支援の取組み「天親カフェ寺子屋」がオープンした。広報に関しては、住民が自発的に行いチラシを作り、天親会と周辺の町会に回覧板回すことと、大通りの目立つところにポスターやちらしを貼ることを山田さんが周囲に依頼をした。チラシ作りはメンバーの中でＰＣに長けている人にお願いした。そのような周囲を巻き込んだ広報がオープン 3 日で約 50 人の集客に繋がっている。

３）コーディネーターとしての支援姿勢と配慮

・自分たちの活動の理念や思いを、自らの口で語って明確にしておくことは活動する上で強みだと考えている。仮に活動していくなかで問題が起こっても、理念や思いが明確であれば活動がぶれにくいと思うため、関わりの初期段階で住民の「思いや考え」を徹底的に語ってもらうようにしている。

・地域活動は住民主体で活動することが望ましいため、「自主性」を尊重している。地域住民が必要性を感じて、地域のことは自分たちでやろう思い、納得・合意して合意して取り組んでもらえるように配慮している。

・職員による誘導はせず、行き詰った際は、選択肢を何案か提案するなどしている。提案する際は、図や絵で見せるなど、伝え方を工夫している。

・相談に来た際に、活動のイメージが固まっていない部分に関しては、先行事例や類似した活動に関する知識など情報提供を行う。

・「こういう取り組みは面白いですね」「そういうのが出来たら楽しそうですね」「本当にすごいですね」「素敵な感じに仕上がりましたね」など頻繁に褒める言葉をかけ、活動へのモチベーションが下がらないようにする。

４）苦労した点

・民生委員や地区の社会福祉協議会の職員は、住民活動に対して熱量がある人が多く感じるが 1 年交代の自治会の会長や役員など地域福祉活動に対する理解や熱意にかける場合もあり活動に対しての理解を得ることが難しい場面もあった。

・立ち上がり後、活動に関わるメンバーが気疲れしているように見受けられ声をかけると実際に「何回かやめようとおもった」等といった気持ちがあったという。話を聞き、“当番や担当を減らす”等、提案をしている状態である。

・メンバーの中には言い方がやや強引な住民もいるため、話合いの際には全体のバランスを見て声をかける。

（４）石川県宝達志水町

◆ 自治体の状況

総人口	13,201 人
高齢者人口	4,864 人
高齢化率	36.8% （全国平均 25.6%）
面積	111.52 ㎢
人口密度	118.1 人／㎢ （全国平均 340.8 人/km²）

※面積・人口密度は平成 27 年国勢調査、それ以外は住民基本台帳令和元年 11 月 1 日現在数より

◆訪問調査実施概要

・日時：2019 年 9 月 27 日

・場所：宝達志水町民センターアステラス

・お話しを伺った方　：宝達志水町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター　今江裕美氏

宝達志水町地域包括支援センター行政担当職員　　川端脩平氏

◆調査結果

取組の特徴

・集落単位で行う福祉座談会で地域の福祉課題を共有し、生活支援サービスや地域サロンの必要性を丁寧に伝えて、やる気を喚起している。

・協議体での話し合いでは課題は出るが強みが出にくい。ニーズを解決しようとするのではなく住民がやっていることをフォローする体制でのぞんでいる。

（１）どのように住民参加による生活支援サービス団体の立ち上げ支援をおこなっているのか

１）地域の生活課題と背景

・宝達志水町は、平成 17 年 3 月 1 日に志雄町と押水町の 2 町の合併により誕生した町である。豊かな自然や国指定重要文化財の建物を撮影場所としての提供や観光業に力を入れている。平成 29 年 10 月 1 日時点での住民基本台帳人口は 13,465 人で、5 年前と比較して 1,143 人（7.8%）減少している。一方で、高齢者の人口は、平成 24 年から平成 29 年時点で、65 歳以上人口で 444 人（10.1%）、75 歳以上人口で 86 人（3.6%）、85 歳以上人口で 111 人（14.0%）の増加がみられる。2025 年には総人口が 11,856 人にまで減少すると予想されており、2025 年の高齢化率の推計は 39.4%、5 人に 2 人が高齢者となる時代が予測されている。

・宝達志水町社会福祉協議会では、住民が助け合う地域作りのため「見守り会議」の設置や、集落単位の地域座談会の開催を行っている。地域座談会には区長、民生委員だけでなく、子育て中の方や課題を抱えた当事者の方、青年団、ボランティアなど幅広い層の区民が集まり、自分たちの集落に存在するさまざまな福祉課題を話し合っている。

２）どのように支援をおこなっているのか（支援体制）

・福祉座談会などの集落のキーパーソンと顔を合わせて地域の課題を話し合う場では、生活支援サービスや地域サロンの必要性を丁寧に伝えている。取り組みの機運が高まったら生活支援コーディネーターが丁寧に伴走し、立ち上げまでしっかりと関わる。

・町内には地域サロンが 53 ヶ所あり、殆どの地域の徒歩圏に 1 ヵ所はあるという設置状況である。元々集落の集まりとしてあったもの、サロンとして立ち上げたもの、介護予防教室から発展したもの、介護事業所が運営しているものなど経緯は様々である。

・町内のサロン間の情報やアイディアの共有、意見交換のためにサロン連絡会を設置している。新たな取り組みが始まるときには町内のサロンを紹介したり動画を見せたりしている。

・介護予防教室として行う取り組みに対しては、「町地域集いの場づくり初期活動事業補助金」が活用できる。初年度は５万円、２年目は３万円で、水光熱費・燃料費・備品購入費などが対象経費となっている。

・住民活動を見える化する意図で、できることを工夫して行っている好事例を発表する「お宝発表会」を 2018 年から行っている。

３）支援における問題・課題

担い手不足や参加者の減少などにより活動が停滞している地域サロンもある。共通している悩みは、(1)男性の参加者が少ないこと、(2)参加者が固定してしまうこと、(3)プログラムを考えるのが負担の 3 点である。移動手段の確保が困難になり、住民の人たちで車に乗り合せていたがうまくいかず、休止に至ったサロンもある。

介護予防教室から地域サロンへの展開の際の課題もある。地域包括支援センターが立ち上げた介護予防教室では無料で講師が派遣されるが、住民主体の運営では住民の中からリーダー格になる人が出てこなければならない。それまで講師中心で運営されていると住民はどうしてもお客さんになってしまい、主体的なリーダーが出てこない。このまま活動が停滞しないよう、中心メンバーの思いを引き出し雑談しながら、もう少し賑わいが出せるように模索している。

（２）支援の実践例

【サロン坪山】

１）団体概要

区長が鍵を管理している集会所で行う、地域で昼食を食べる場で、地域の女性陣がごはんを作っている。区長もそば打ちをし、男性陣は外で火を起こしバーベキューをしている。流しそうめんも手作りで行っている。役割分担は男性、女性に自然に分かれている。集会所は集落のお金で立ち上げている。

高齢者が多い集落なので、50 代 60 代以上がほとんど。子どもは 4、5 人とその子達の親も来ている。

２）取組みを始めた経緯

ある講習会にて 20 人の傾聴ボランティアがいる内、たまたま隣に座っていた女性 2 人組と宝達志水町社会福祉協議会・今江さんが話をすると、地域の祭り、集まりがないことに問題意識を抱えていたことがわかった。地域内でボランティア関係のつきあいはあるが、具体的に昔は田んぼ仕事を家族全員で参加していたが、今は組合になり女性の出番がなくなった。女性の集まりがなくなり寂しいので、気の合う数人だけで毎年食事に行ったり旅行に行ったりしている。今江さんが女性 2 人組の地域の集まりに対する思いを見つけ、サロン立ち上げの声をかけた。 実は区長からも何か行動に起こすことを言われていたことがわかった。

３）団体の立上げ・活動に対する<u>金銭的支援</u>に関する取組み

介護予防教室活動に関しては 1 年目、初めて立ち上げたところには 5 万円、2 年目は 3 万円の補助金が町役場からあること、共同募金は上限 5 万円、という情報提供をしている。

４）団体の立上げ・活動に対する非金銭的支援に関する取組み

・立ち上げのための意見交換会のセッティング（地区役員へのつなぎ）

・町内の既存のサロンの様子を教える（動画を見せる）

・チラシの作成

・新聞、町広報への取材依頼

・当日準備手伝い

５）効果的な取組みのための工夫や苦労した点

・立ち上げ初期には生活支援コーディネーターの今江さんが深く関わっていたが、徐々に身を引いて行った。住民主体でできることがわかった時点で距離を置くようにしている。支援者が出過ぎないように心掛け、関係性が安定するまで意見は言わないようにした。関係性ができてから、「誰かに手伝ってもらったら」とか「もっといろんな人巻き込んだら」などの提案をした。

（５）愛知県長久手市

◆ 自治体の状況

総人口	58,425 人
高齢者人口	9,727 人
高齢化率	16.3% （全国平均 25.6%）
面積	21.54 ｋ㎢
人口密度	2712.3 人／㎢ （全国平均 340.8 人/km²）

※平成 31 年 1 月 1 日長久手市統計結果より

◆訪問調査実施概要

・日時：2019 日 10 月 3 日
・場所：長久手市会議室棟 2 階会議室 H
・お話しを伺った方　：長久手市役所職員
　　長久手市社会福祉協議会職員

◆調査結果

取組の特徴

・概ね、小学校区の地域で地域活動団体・市民活動団体その他の団体及び個人が連携し対話しながら当該地域の課題皆生に向けて取り組む「まちづくり協議会」や誰もが立ち寄れる「共生ステーション」の設置で新たな住民同士の交流や活動の創出に繋がっている。
・住民活動の創出には町の相談員等が個人と市民活動団体を繋げてる。

（１）どのように住民参加による生活支援サービス団体の立ち上げ支援をおこなっているのか

１）地域の生活課題と背景

・長久手市は、愛知県の北西部に位置し、隣接している名古屋市のベットタウンとして発展しており、自動車産業で有名な豊田市にも近い。市の西部には住宅地や商業施設が充実し、市の東部には自然が残っている。もともとは 7,000 人程度の市であったが、2008 年には 5 万人を突破し全国でも 6 番目に人口増加率が高い。宅地開発が進み若い世帯が増加したことによって市内は全体的に活気づいている。2017 年には、「日本で一番住民の平均年齢が若いまち」（国勢調査）になった。

２）どのように支援をおこなっているのか（支援体制）

まちづくり協議会

住民同士が“地域の課題を解決すること”を目的として、“人の顔が見える範囲”である小学校区単位に誕生した協議体である。背景には、少子高齢化の進行と大災害が発生した際に、行政等ではすべてサポートができないため市民同士がつながり頼り合い支えられる仕組みを作る必要があった。現在は、月に 1 回程度の運営会議を開催しており、地域資源や市民活動をしている団体をつなげるといった役割を担っている。参加者は、地縁団体、PTA、消防団、企業等他、市職員の中から小学校区でのまちづくりに関心が高い職員に地域担当職員として関わってもらっている。役員会議及び運営委員会議がある。

地域共生ステーション

地域共生ステーションは、地域の活動の拠点として、多様な世代の人たちが歩いて行ける身近な場所に地域の人たちと交流できる場所で、「市民活動をしたい」といった相談窓口にもなっている。また、日常生活上での悩みや子育て中の母親からの相談などもあるため CSW や市の関係機関につなぐこともある。現在、6 小学校区のうち 2 小学校区に設置しており令和 2 年度に既に 2 小学校区に整備される予定である。現段階では、臨時職員を受付として配置しているが、今後は地域住民の手で運営管理をしていってほしいという市役所側の考えがあるため、地域共生ステーションが設置されているエリアに住んでいる住民に運営管理を任せていきたいと考えている。

市の総合計画を考えるワークショップの中で、興味のあることが共通の住民同士でグループを作りそこで集まったグループの中で話合った結果、共生ステーションに「流しそうめんをやりたい」と相談に来ることとなった。金銭面や

場所等はなにも決まっていない状態で、まちの相談員に相談したところ、まちの相談員をハブとして竹を提供してくれる人とつないだり、JA からの寄付をもらったりして企画を実現することができた。まちの相談員から「竹はどうするのか」「お金はどうするのか」等話あり共生ステーションで話合いをしていた。話を聞いていた他の市民活動団体の１人が「竹ならなんとかしてあげる」と他の活動をしている人と繋げ竹は用意することができ、そうめんに関してもその場に居合わせた JA に勤務していた住民から「JA の粗品で余ったそうめんを寄付する」とのことで〈流しそうめん〉が開催できることとなった。

３）どのような支援をおこなっているのか（支援体制）

市役所

住民活動の立ち上げに関する相談や日常生活で発生する個人レベルの相談等、幅広く地域共生ステーションの受付に住民がくることは多く、地域共生ステーションが住民活動の拠点となっている。市としては、住民向けに[地域づくり講演会]の開催を続けているほか協働まちづくり活動補助金で活動を支援している。[地域づくり講演会]は、これまで全国各地で地域活動を行っている著名人を招いて地域づくりや住民活動の良さを伝えることを目的に市が開催してきたが、講演会を聞きに来た住民同士のつながりを期待したものの効果があまりみられなかったため、近年は、市内で地域活動をしている住民に声をかけ講演してもらうようにしている。市内の住民に話してもらうことで、“市内でもこんな素晴らしい活動がされている”“（講演を聞いた後に）実際に見に行くことができる、講演会のあとに講師の人に話かけやすい”といったメリットがある上、市として広報をしなくとも本当に地域づくりや住民活動に興味関心がある人が講演会に足を運んでいるという。そのほかにも住民活動に参加している人や活動の代表者等、地域活動に関わっている方々を対象に交流会や定期的なサロン等の説明会も開催している。

３）**支援における問題・課題**

市の管轄で住民活動団体へ補助金を出しているものは上限年数が３年間であり、補助金が終わるのと同時に活動が終わってしまうことが多いため資金援助だけに縛られず場所の提供や活動のノウハウの部分を支援し、今後も継続して活動が行えるような支援をおこなうようにしている。

なお、社会福祉協議会の助成金も３年間で、活動立が上限となっているので会費制の提案をしたり、自立した活動体制を整えていくよう支援する際は繰り返し伝えるようにしている。助成金の使い方に関しては、１ 年目に大きな備品を購入するなど有効な助成金の使い方のアドバイスをしている。

（２）支援の実践例

【サロン「オリオン」の立ち上げ】

１）団体概要

元喫茶店にて健康麻雀や茶話会のサロンを月に 1 回程度開催している。店主がもともと麻雀を好きだったこともありサロンでは麻雀卓や囲碁盤が設置されており、ゲームをしながら住民同士の交流の場となっている。（参加費 100 円）平均して 20 名程度の参加があり、男性が多いが最近では女性の参加者も少しずつ参加している。

２）取組みを始めた経緯

以前まで喫茶店を経営していた 80 代の店主（男性）のもとに見守りとして包括支援センターの職員が訪れていた。職員としては、“現在使用されていない喫茶店のスペースが何か使用することができないか”と考え、CSW の方に話が回る。包括支援センターの職員と CSW が連携し、男性のもとに伺い状況を確認したところ“環境整備をすれば使用の可能性がある”と判断し男性に対して“○○さん（男性の名前）も楽しみながら地域の交流の場として、皆さんが集えるようなことをしませんか”と提案を行う。電話や訪問を月に最低でも２回程度は行う等定期的に男性と連絡をとった。そのなかで“” ○○さん（男性の名前）が好きなことや趣味はなんですか”と問うと“麻雀は長いことやっていた”とのことだったため麻雀ができる居場所にするのはどうかと提案する。男性は当初、場所代は不必要であると考えていたが、地域住民の居場所として利用していくため職員から“参加費 100 円を徴収して 80%を水道代、光熱費として得て残りをお茶・お菓子代として貯蓄するのはどうか”と提案され了承する。３月にお試しとして開催すると 20 人程度が参加し好評だったため次回開催を望む声もあり男性自身も認知症の傾向があったが非常に明るく元気になった。現在は月１回のペースで開催しているが、参加者、男性自身からも週に１回のペースで開催したいという声があり今後の開催ペースを検討中だという。なお、麻雀牌・麻雀卓はすべて住民からの寄付で成り立っている。

活動課題に関しての取り組み

・麻雀初心者の女性も少しずつ増えてきているが、どうしても仲が良い男性同士で毎回固定してしまっているため、職員から“たまにはメンバーの入れ替えをして新しい人を入れるのはどうか”と提案しても難しい状態である。そこで、今後は女性専用で作ってはどうかと話が出ている。

・拠点の貸し出し、拠点の持ち主の意向等の確認をしながら信頼関係の構築をしていく必要があり立ち上げまでに半年以上かかった。

・麻雀牌、麻雀卓に関しては参加者から“電動麻雀卓が壊れたから持ってきてあげる”と声があがる等ほぼ住民からの寄付である。活動当初は拠点に４卓あったもののそのうち２卓は他の喫茶店から借りていた。しかし、その都度借りにいくことのわずらわしさなどもあることを喫茶店の店主に話したところ“裏のおばあちゃんがこたつを捨てたいと言っていた、ちょうど２つある”との情報を得る。こたつの裏が緑色のフェルトのため麻雀卓に適していると考え、

こたつの譲歩について１度話に行き引き取る。引き取ったこたつに裏面は汚れ等があり使用が難しかったが、生活支援サポーターの中に日曜大工が得意な人がいたため修繕をしてもらう。

・現在、課題がある際に主体で動いているのは実質生活支援コーディネーターである状態だが今後の活動が軌道に乗り始めているため活動を手伝いをしているサポーターへの引継ぎをしている。

（３）地域資源に対する考え方

１）地域資源の把握の仕方

現在、「いこいこマップ」という、市内にあるサロンをとりまとめたものがあり、主に実際に立ち上げにかかわったサロンも掲載されている。「共生ステーション」では、職員からは直接働きかけなくても住民同士で自然に活動が生まれることが多い。制度にあてはめるとよりは、共生ステーションや喫茶店に来る中でその人の特技がわかり、それを見逃さずにつないでいくと広がっていく。また、男性のなかにも活動したい人はいるが閉じこもりがちになってしまうことも多く、活動に繋がらない場合がある（[お宝さん]と呼ぶ）。以前までまちづくりセンターは、市民活動団体が部屋を利用しているだけだったため、団体交流同士の交流会をすると面白いのではないかとなり交流会を開催している。団体に所属していなくても参加可能にすることで、さまざま活動をみてもらい自分に合うものをみつけてもらう機会にして[お宝さん]の発掘も目的の一つである。

（６）愛知県日進市

◆ 自治体の状況

総人口	91,547 人
高齢者人口	17,230 人
高齢化率	19.9% （全国平均 27.6%）
面積	34.91 ㎢
人口密度	2520.1 人／㎢ （全国平均 340.8 人/km²）

※面積・人口密度は平成 27 年国勢調査、それ以外は住民基本台帳平成 31 年 1 月 1 日現在より

◆訪問調査実施概要

第１回目ヒアリング調査

・日時：2019 年 10 月 3 日
・場所：長久手市会議室棟 2 階会議室 H
・お話しを伺った方　：日進市社会福祉協議会　富岡亜希子氏

第２回目ヒアリング調査

・日時：2019 年 12 月 9 日
・場所：日進市社会福祉協議会中央福祉センター内
・お話しを伺った方　：日進市社会福祉協議会　富岡亜希子氏

◆調査結果

取組の特徴

市、社会福祉協議会の施策も積極的に住民活動を支援するものを作っており、立ち上げでも丁寧に代表者に寄り添い周囲の人間関係の調整にも手を加えている。

（１）どのように住民参加による生活支援サービス団体の立ち上げ支援をおこなっているのか

１）地域の生活課題と背景

日進市は人口増加の一途を辿っており、本市の将来推計人口における65歳以上の割合は、平成27年度以降19.5%前後で落ち着いているが、75歳以上の割合は上昇し、令和７年には11.6%と平成17年当時のほぼ倍になることが予測されている。

現状のままでは、障害福祉サービスや介護保険サービス等の事業費が大幅に増加していくことが予測され、今後も社会状況の変化等によるさらなる社会保障経費の増大が見込まれるため、既存施策の見直しや転換等を図っている。そのため小学校区ごとに調査、座談会で課題を積極的に見つけている。市の福祉コミュニティ意識調査では、全市的の特徴として「持ち家が多い」「65歳以上と同居が多い」、また「夫婦と未婚の子世帯が約５割」「名古屋市で働く人が約４割」「ボランティア活動をしていない人が８割超」といったことを課題として明らかにしている。住民を招いた座談会では、全市的な共通課題の多くは、独居を含む高齢者の問題や防災・防犯の協力について挙げられている。有事の際の助け合いの必要性を住民は感じているが、隣近所で助けを求める声に地域での対応ができていないということも課題に挙げられた。また、各小学校区において特徴のある課題としては、買い物する場所や交通手段の確保がある。

２）どのように支援をおこなっているのか（支援体制）

地域福祉計画との一体的な策定をはじめ、社協の体制強化や人材育成方法を改めて見直し、地域で活動する諸団体、福祉事業所、行政機関等、地域ネットワークや協働ネットワークなどによる重層化した支え合いの仕組みづくりを検討している。

それにより一部の地域においてまちづくりを担う組織が発足し、徐々に取り組みが進んでおり、日進市社会福祉協議会でも、まちづくり協議会の立ち上げを進めている。

3）支援における問題・課題

日進市では、区制度が存在しており、19 の行政区にそれぞれ区長が存在している。目的としては行政での円滑な運営・福祉の向上・住民の声を行政に反映するためである。その中でも区長は地域の代表として、区民の意見をまとめる、市行政の連絡事項など地域活動をスムーズに進める役割を担っている。しかしながら、区によっては区長の権限が強い地域も存在しているそうだ。区長の任期が 1～2 年であり、コーディネーター曰く「信頼関係を築きつつも互助活動の立ち上げまで進めるには少なくとも２年は必要」と話す。五色園地区では、２年間区長を担った方が「ワンコインサービスが必要である」と提案し、地域の人たちを動かした事例もある。

（２）支援の実践例

【香久山ワンコインサービス】

１）団体概要

香久山区自治会と連携し、香久山区の住民が安心して生活できる環境を整えることを目的とし、住民に対して軽度な日常生活の援助、その他住民の生活の質の向上に関する活動を、地域住民から依頼を受け行っている。平成31 年４月に活動がスタートし、会員は約 20 人（主に 60 歳代の男女が会員）おり、定期的に月平均６件の依頼がある。組織図としては区長、副区長が２人おり、１人の副区長は会館建て直し担当、もう一人はまちづくり協議会担当、まちづくり協議会のなかに１つの部会活動として香久山ワンコインサービスが位置づけられている。

２）取組みを始めた経緯

現在のまちづくり協議会の代表者は、社会福祉協議会に相談をした当初、「地域のことを話し合ったり、地域のために何かしたい」といった考えがあるものの特に動きはなく、連絡もつかないことが多かった。並行して、地域の民生委員の中からは、住民からゴミ出しや移動支援など家事を頼まれるものの民生委員としての仕事の範囲について悩みがあった。そこで、社協の生活支援コーディネーターがまちづくり協議会で話合いの機会を提案したところ日進市内の五色園区でワンコインサービスをしていることが話題に挙がる。実際に見学に行ったところ、代表者のイメージが固まりワンコインサービスの活動を進めていく。また、広報に関しては、他のまちづくり協議会が定期的に広報誌を作成していることを代表者に伝えて他のまちづくり協議会の定例会に参加できるようにコーディネーターが調整を行い同行も行った。ワンコインサービスへの準備が進む一方で、“ワンコインサービスの責任は誰がとるのか”“保険はどうするのか”といった問題が発生。状況を滞ってしまうことを懸念したコーディネーターにより、代表者、区長、副区長、CSW、地域担当コーディネーターで話合いの場を設定し、区の傘下に入る組織図作りをした。そのほか、コーディネーターとしては、会則作りの事務手続き、県社会福祉協議会・ふれあい総合保険への加入手続き、地域でチラシ作りの支援を行う。金銭面では、社会福祉協議会のまちづくり協議会運営助成金や市の助成を活用している。

３）コーディネーターとしての支援姿勢と配慮

・会議等の話合いの場面では、パワーバランスをよく観察し活動への理解者はどのくらいいるのか、どのくらいの頻度で会議に参加しているのか、どこに座っているのか等を把握するように心がけている。個人的な意見や批判的な意見を発言する人がいる場合は座る位置等に細心の考慮を行うようにしている。会議終了後にコーディネーターに直接意見を言いにくる場合も多く、なるべく会議中に発言するように促す。

・会議等で煮詰まったり方向が不明瞭になった場合は、住民の主体性を尊重するためにも選択肢を提示する等にしている。

・地域住民の活動へ介入する際は、常に住民の立場に立ち物事を考えるようにしている。住民は地域内でトラ

ブルを起こしたとしてもその地で暮らしていかなければならないためである。

・窓口に来る住民は「よくわからないけど、地域のために何かやりたい」と来ることが多く「得意なことは？」と聞いても「得意なことなんて全然ない」と答えることも多いため「好きなことはありますか」と聞くようにしている。同じように「前職は？」と聞くと専業主婦などは答えにくく委縮してしまわないように一つ一つの質問には注意を払っている。

・住民活動は数字だけでは表せられない価値や結果もあり、たとえ10人しか集まらないとしても、いつも来ている人が来なかったら“○○さん宅に見に行こう”と声が出るのは小さい活動ならではである。大切な社会資源であり、見守りとかもお互いにできており非常に価値がある活動だと感じている。

４）効果的な取組みのための工夫や苦労した点

住民にとって自身たちの活動を客観的にみる、評価する機会は少ない。そのため、コーディネーターは意識的に素晴らしい活動ということを共有したり視覚的に価値がわかるようにマスコミや市報誌に載せてもらうようにしている。また、[つどいの場紹介ブック]を作成し、地域内のつどいの場を１冊の冊子にまとめた。活動に従事している住民に渡すときも「ここに載せたよ、あなたがやっていることを載せました」と必ず掲載箇所を一緒に見てもらうようにしている。

（３）地域資源に対する考え方

１）地域資源の把握の仕方

・ 日進市の「第２次日進市地域福祉計画・第４次日進市地域福祉活動計画」に、「社会資源一覧地図」があり、社会資源、地域資源を可視化している。ウェブサイトに掲載しているので、誰にでも見られるようになっている。実際に住民活動が始動しそうなときは、活動に合った地域資源があるか使いやすい地域資源はなにか等、探すようにしている。

（７）愛知県知多市

◆ 自治体の状況

総人口	85,394 人
高齢者人口	23,481 人
高齢化率	27.4% （全国平均 25.6%）
面積	45.90 ㎢
人口密度	1,860.4 人/㎢

※面積は平成 27 年国勢調査、それ以外は住民基本台帳令和 2 年 3 月 1 日現在より

◆訪問調査実施概要

・日時：2019 日 10 月 3 日
・場所：ゆいの会事務所
・お話しを伺った方　：知多市　　松下典子氏
　　五十嵐美代子氏
　　知多市役所　山本浩己氏

◆調査結果

取組の特徴

・生活支援体制整備を NPO 法人が受託している。

（１）どのように住民参加による生活支援サービス団体の立ち上げ支援をおこなっているのか

１）地域の生活課題と背景

・知多市は、佐布里池の梅林や海水浴場の新舞子マリンパークなどの観光資産、県内最古級の岡田簡易郵便局をはじめとする文化財も多く存在するまちである。人口は平成 27 年をピークに減少に転じている。一世帯当たりの人数も昭和 45 年は 4.25 人であったものが以降減少を続け、平成 27 年では 2.48 人まで減少し、世帯の少人数化も進んでいる。また、平成 27 年の年齢別調査では、40～44 歳と 65～69 歳の年齢層が多く、5 ～10 年の間には 75 歳以上の後期高齢者が急激に増加傾向にあり、要支援・要介護認定者の数も増加の一途を辿っている。急速な高齢化に伴い、介護の大きな課題のひとつとして認知症高齢者の増加が想定され、認知症になっても住み慣れた地域で安心して暮らせるよう症状や見守りについての理解を深める取組が求められている。一方、障がい者福祉に関する市民アンケートにおいて、障がいや障がいのある人への理解が難しく、地域に障がいのある人のためのサービス情報が届いていないことが分かり、地域への情報発信を重要な課題としている。また、高齢者を始め、障がい者、児童、若者の各分野において、できる限り住み慣れた地域で暮らし続けるため、地域包括ケアシステムの構築と同時に共生社会づくりを掲げ、地域ぐるみの取組みを目指している。

２）どのように支援をおこなっているのか（支援体制）

・「みんなの居場所・サロンづくり学習会」は、地域介護予防活動担い手育成事業の一環で 1 年に１回（講座は４日間実施）の居場所立上げ講座である。講座内容は、基本的にゆいの会が計画し、行政と協働して決定している。なお、講座の講師は、実践している人が講師となって立上げの動機や仲間との取り組み等の体験と対話を核に市民のできる事を共有する内容としている。受講生は、受講後も自主的に集まり、週に１回～月１回、サロンや居場所という形で年々活動が立ち上がっている。ゆいの会は、活動の支援も行っている。立ち上げの際は、活動する人たちの声を聞きながら応援するという形で自発性を大事にするようにしている。活動したいと感じる人が“やらされ感”を持つことがないように“やりたいことは何か”、“支援できることはなにか”を把握するようにしている。常に地域や活動の変化や状態を把握して「次はこんな情報や勉強会があるから、良かったらどうぞ」と声をかけるようにしている。

・場所探しや備品等が必要といった内容で相談に来るよりは、“場所があるから、何かできないか”、“集会所でできるのはこんなことだと思う”といった資源を活用する相談が多い。そのため、ゆいの会では広く情報を集約して地域資源を円滑に回せるように常に情報集約と発信を行っている。

・2007 年に開校した「大人の学校」という知多市市民活動センターで活動する市民活動団体が中心となって提供する総合的な人材育成プログラムがあった。対象は団塊世代の人たちであり、退職後に地域のことを知ってもらう地域デビューのための講座。1 年かけて地域の課題を受講生が探しテーマを決め学習、実践する。9 年間で

275 人が修了した。現在、知多市内で常設の居場所の活動を行っている人は、この学校の [地域貢献実践コース]を受講していた男性が多い傾向がある。その拠点を伴走支援していくことで地域活動を広げている。

・生活支援コーディネーターとしては、“小学校区に 1 つの常設拠点”を目標に地域の課題解決と資源開発の連携、連動を重ねて進めている。住民活動をする人の声を丁寧に聞き地域活動が実践しやすい環境整備に努めている。

・現在まで地域内の情報共有の環境が整っておらず、既存の組織と新規の組織が話し合える機会がなかった。これから地域に求められる居場所を作っていくとなるとつながりが重要であり、地域の人が動きやすいようにしていくことが重要である。在宅ケアセンター、包括支援センター、保健センター等と関係を構築し制度と制度外サービスの情報を共有することを務めている。なお、今後は地域の実態や住民の生活での困りごと、要支援 1.2 の人を地域のささえあいでできる活動に発展、移行していく等を構築する人材育成、情報共有体制で支援していく予定である。

・「地域助けあい養成講座」は 2019 年度から開講した講座で知多市地域介護予防活動担い手育成事業の一環で、住民参加型在宅福祉サービス活動を長年実践してきた NPO のリーダーを講師として、活動を継続するための学習会を開催している。実践者に講師をしてもらうことで受講生には現場のイメージを持ってもらえる上、同じ地域で活躍している人なので、親近感も湧きやすくなっている。

・知多市長寿課から、知多市介護予防・日常生活支援推進事業補助金（地域支援事業）という高齢者を対象にした活動助成金がある。生活支援体制整備事業の一環としての居場所・地域活動に関するものである。また、活動実態に合わせ 2019 年度から自家用車による移動支援として自動車保険の一部を補助金で使えるようになっている。

４）生活支援体制整備事業に関して

ゆいの会は、平成 28 年度に第 1 層 SC を NPO 法人として受託した。翌年の平成 29 年度には第 2 層 SC として NPO 法人あゆみ、NPO 法人だいこんの花、NPO 法人ゆいの会の 3 法人が中学校区 3 校区をそれぞれ受託した。知多市の特徴として、1 層、2 層の SC を NPO 法人が担っている。平成 30 年度に社会福祉協議会も 2 校区 2 層 SC を受託している。

（８）福岡県大川市

◆ 自治体の状況

総人口	34,838 人
高齢者人口	11,456 人
高齢化率	33% （全国平均 25.6%）
面積	33.62 ㎢
人口密度	1,036.2 人／㎢ （全国平均 340.8 人/km²）

※面積・人口密度は平成 27 年国勢調査、それ以外は住民基本台帳平成 31 年 1 月 1 日現在より

◆訪問調査実施概要

・日時：2019 日 10 月 9 日
・場所：大川市役所 3 階第 1 委員会室
・お話しを伺った方　：大川市健康課　課長補佐・川野文裕氏、高齢者支援係長・近藤大輔氏、古賀一澄氏
大川市社会福祉協議会
事務局次長　　中村雄一氏
生活支援コーディネーター　増田美枝子氏

木室たんぽぽの会　代表　一ノ瀬直子氏
ドリームたぐち　　代表　酒見精司氏

◆調査結果

取組の特徴

・学校区での居場所づくりを核に、食事の提供など支え合いの活動が生み出されており、今後生活の中のちょっとした困り事のお手伝い活動を取り組もうとしている。
・校区のリーダーを発掘し、市の事業についての趣旨や意図を丁寧に伝え、信頼関係を作る中で住民のやりたい活動を支えている。

（１）どのように住民参加による生活支援サービス団体の立ち上げ支援をおこなっているのか

１）地域の生活課題と背景

大川市は 480 年の歴史からなる、木工関連企業が集積した日本を代表するインテリアのまちであるが、市の人口は減少傾向にある。特に生産年齢人口及び年少人口の減少が目立っており、高齢化率が急速に進んでいる。したがって、今後も増加が見込まれる高齢者のニーズに応えつつ、若い世代の流出を抑え、流入を確保するための都市づくりが課題である。

２）どのように支援をおこなっているのか（支援体制）

・一般介護予防事業「ゆうゆう会」：地区の公民館で行われる介護予防事業。老人会を中心に、「ゆうゆう会」の名称で、77 箇所で実施され、1 回 2,500 円の補助（月 2 回まで）あり。65 才以上が利用可能。
・日常生活圏域を対象とした居場所：同じく一般介護予防事業であるが、ゆうゆう会との差別化を図るために、日常生活圏域を対象とした居場所の取り組みに対し、補助の要綱を策定した。
1 回 2,000 円の補助(年間 52 回まで)あり。65 才以上を中心に年齢を問わず誰でも利用可能。現在、2 箇所で実施（うち市が補助金を交付しているのは 1 箇所）。
・資金以外の支援：助成案内。申請書類作成の補助。

３）支援における問題・課題

・行政：市内 6 校区ごとに 6 つの協議体ができており、2 校区での活動は活発である。他 4 地域での活動を活発化するためには、リーダーの発掘が課題である。木室たんぽぽの会（後述）が地域支援課の「まちづくり支援金」を活用して活動資金を得た事例があり、住民参加による生活支援サービス団体への財政的支援については、他部署との調整・協議が必要である。

・社協：ボランティアセンターに登録する団体は 7 団体程度と、登録団体数は多くない。聴覚障害者等の支援に取り組むなど活動歴の長い福祉系の団体もあるが、現在の社協の体制は職員数が少なく、積極的な支援や調整には思うように取り組めていない現状がある。

（２）支援の実践例

【木室たんぽぽの会】

１）団体概要

2018 年４月、同じ学区の近所付き合いの希薄化を背景に、地域に興味をもち「ひと昔まえの様な交流のある地域をつくろう」という目的で活動を始めた多世代交流の場である。「お花見会」「味噌づくり」「七夕まつり」「お月見会」「さつま芋掘り」「防災訓練」など、年間を通して多種多様な交流イベントを開催している。毎週土曜日は、「たんぽぽカフェ（大人の脳トレ）」「たんぽぽ塾（小学生寺子屋）」を開催している。「たんぽぽカフェ」では、脳トレや健康チェックを行っており、「たんぽぽ塾」では宿題やワークを行っている。

木室たんぽぽの会の活動メンバーは全体で 40 名程である。主要メンバーは区長、民生委員、地域の代表者、有志で集まり運営委員会を 3 か月に 1 回開いている。なかでも実行委員として 5 名程で企画等打ち合わせを頻繁にしている。

２）取組みを始めた経緯

地域フォーラムに参加した地域の代表者、有志の方が集まり、6 校区ごとに協議体が結成された。木室地区では、話合いの結果、「さまざまな行事を通して顔の見える関係づくりをしよう」と決まった。廃園になったばかりの幼稚園跡地があり、市の売却先が決まるまでの間、利用して良いという情報があった。また、廃園になった卒園児の保護者たちが「木室幼稚園をこよなく愛する会」を立ち上げ、園が荒れないように草刈りや掃除などのボランティアを実施していたため、その会の何人かに声をかけ協力してもらった。地域住民もこの活動を知り、「旧木室幼稚園を多世代で誰でも交流できる共生型の居場所にしたい！」と協力をしてくれるようになった。

３）団体の立上げ・活動に対する金銭的支援に関する取組み

市健康課の補助（前述の日常生活圏域を対象にした居場所で、財源は一般介護予防事業）が決定する前、社協が生活支援体制整備事業の委託金の中から費用を一部充当し、清算の支援をしてくれた。

４）団体の立上げ・活動に対する非金銭的支援に関する取組み

生活支援コーディネーターが、ボランティア依頼書等の文書作成や、呼び掛け先への同行をしてもらい助かった。また、木室たんぽぽの会へのメンバーに対し、会議の案内文作成・発出を行っているので、負担なく活動ができている。

５）効果的な取組みのための工夫や苦労した点

市健康課による補助の対象は“高齢者”であるが、活動場所が旧木室幼稚園であったこともあり木室たんぽぽの会の代表は主な対象として“子ども”を考えていたため、当初すれ違いが発生していたが、市の担当者が補助の趣旨を丁寧に伝えてくれたため、「子どものために活動するのであれば、同じように高齢者のためにも何かできたら」という思いが強くなる。現在は、子どもと高齢者の居場所として、多様な世代の元気を生み出す事業となっている。

【ドリームたぐち】

１）団体概要

2018 年 5 月より、多世代交流の場である「お楽しみ会」（ニュースポーツ、輪投げ、食事の提供）を、これまで 3 回開催してきた。また、大人も子どもも気軽に立ち寄れる「いこいの場」（無料のお茶とお菓子付）を、田口コミュニティセンターを会場に月 2 回、土曜日の午前中に開いている。この他、草取り、買い物や通院の送迎、子どもの預かりなどちょっとしたお手伝いを行う「お困りごとお助けサービス」を実施する予定としている。

２）取組みを始めた経緯

区長会、民生委員、婦人会、老人クラブなどに携わる人々が集まって地域に課題について話し合う協議体の会議が数回あったが、話し合いに留まっているだけでは何も始まらないとの代表の酒見氏の提案で、まずは一度イベントを開催しようと活動が始まった。

現在、運営委員は全部で 30 名程度おり、主要メンバー6 名が実行委員として企画運営を進めている。

３）団体の立上げ・活動に対する金銭的支援に関する取組み

食費以外の経費について、社協が生活支援体制整備事業の委託金の中から費用を一部充当している。

４）団体の立上げ・活動に対する非金銭的支援に関する取組み

生活支援コーディネーターがチラシや名刺の作成を担っている。会議にも毎回出ており、イベントの際は、写真撮影をはじめ運営のサポートを行っている。また、田口コミュニティセンターの使用料は、社協の事業として減免されているので、ドリームたぐちの負担分は無く運営ができている。

5）効果的な取組みのための工夫や苦労した点

居場所づくりのイメージを具体化するために、木室たんぽぽの会と合同で、企業の保養所跡地を使って住民主体で様々な助け合いに取り組んでいる福津市に見学に行った。

現在、田口コミュニティセンターを会場にしているが、高齢者や子どもが歩いて通うには不便であり、今後はより参加者が通いやすい場所の確保が課題となっている。

（９）東京都荒川区

◆ 自治体の状況

総人口	217,278 人
高齢者人口	50,157 人
高齢化率	23% （全国平均 25.6%）
面積	10.16 ㎢
人口密度	21,385 人／㎢ （全国平均 340.8 人/km²）

※面積は平成 27 年国勢調査、それ以外は令和 2 年 1 月 1 日荒川区 HP 現在より

◆訪問調査実施概要

・日時：2019 日 11 月 15 日
・場所：荒川区社会福祉協議会
・お話しを伺った方　：荒川区社会福祉協議会　地域ネットワーク課　地域福祉活動促進専門員　鈴木訪子氏

・日時：2019 日 12 月 10 日
・場所：荒川区社会福祉協議会
・お話しを伺った方　：荒川区社会福祉協議会　地域ネットワーク課　地域福祉活動促進専門員　鈴木訪子氏

◆調査結果

取組の特徴

・地域資源や住民から得られた情報は迅速にネットワーク等で共有し情報提供することで地域内で、循環型の支援を行っている

・住民からの相談は、すぐにニーズに繋がらなくても実際に足を運び住民の意思や背景に耳を傾ける

（１）どのように住民参加による生活支援サービス団体の立ち上げ支援をおこなっているのか

１）地域の生活課題と背景

荒川区は、東京都の北東部に位置しており、東西に細長く、区内はほぼ低地で平坦であるが、日暮里地区の一部は山手台地となっている。東京の下町として早くから住宅地、商業地、工業地帯として開発され、交通アクセスが優れており、都電をはじめとする公共交通機関が発達している。

町会・自治会は、120 団体あり、加入率は約 60%で、都市部として比較的に高い傾向がある。高齢者の夫婦世帯、独居世帯が増加しており、地域での見守り支援ニーズが高まっている。高齢化率は、特別区の中で 5 番目、生活保護受給世帯割合が特別区の中で 4 番目に高いことが明らかとなっている（東京都福祉行政統計）。また、子育ての転入が多く高齢者の孤立対策だけでなく、安心して子育てができる環境づくりや子どもの貧困対策も取り組んでいる。

２）どのような支援をおこなっているのか（支援体制）

[荒川ボランティアセンター]

荒川区内において、誰もが安心して暮らせる街づくりを目指し幅広いボランティアグループ、住民活動、地域活動の拡充推進を図り、多様で幅広い領域のボランティア活動・市民活動を支援している。ボランティアグループ、ＮＰＯ、市民活動団体・個人の活動を支援していくと共に、住民や企業、ボランティアグループ、ＮＰＯとの協働のもと地域のさまざまな課題を発掘し、その地域課題に対応するボランティア・市民活動を生み出す視点や行動力をもってさまざまな事業を進めている。また、いつでも誰でもが気軽にボランティア・市民活動に参加できる環境整備も行っている。

様々な立場で活動をする人々、団体の情報交換、連携、協働の場を構築するといった中間支援機関としての役割もあり、地域の多くの方にボランティア・市民活動に参加いただけるよう、個人・ボランティアグループ等への情報提供と支援を行い、ボランティアを必要とする人々への支援を実施している。

[ふれあい粋・活サロン]

民生委員・児童委員、町会・自治会、商店街、教育機関、ボランティア等の協力を得て、地域の中で孤立しがちな高齢者、聴覚障がい者の高齢者、家族介護者、ひきこもり家族会、子育て中の親子の孤立を予防する目的で月に 1 回程度、または介護予防を目的に週 1 回程度の集いの場、お茶会、交流会等を実施している。2020 年 3 月現在で 97 か所で開催している。

・地区内にある地域サロンのほとんどに顔を出しており、常に関係性を構築し継続するようにしている。社会福祉協議会と地域の距離が近くなることによって、小さな声も聞こえるようになり、困りごとがあればすぐに相談しに足を運んでくれるようになってくるため、早い段階で具体的な活動に発展することができる。

・相談＝情報としてとらえており相談のなかからどのように情報を得るかを念頭に相談を受けるようにしていると話す。物資不足が相談内容だった場合には、本人たちが周知するよりも社会福祉協議会が様々な団体のネットワークに声をかけることができるため職員同士でも相談内容は共有するようにしている。

支援における問題・課題

・住民のなかで、地域課題を意識してもらいつなげることが必要となってくる。
・地域資源マップは、包括支援センター等が作成していることも多いが有効的な活用までつながっているとは言えない。
・引き継ぎや新人教育をする際にマニュアルがない。
・ボランティアセンターにおける住民活動のサービス開発の取り組みやノウハウが生活支援体制整備の事業と連携が不十分だと感じている。

（２）支援の実践例

【三ノ輪地域食堂】

１）団体概要

ひとり暮らしの男性高齢者や孤食をしている高齢者を対象に月に１回月曜日 11 時 30 分～13 時 00 分まで行っており参加費 300 円で食事できる。主催は東京ほくと医療生活協同組合診療所であり、会場は都電カフェ三ノ輪（都電三ノ輪駅近くにあるジョイフル三ノ輪商店街の入り口に立地する現役の喫茶店）。診療所が母体であるため、栄養バランスを意識した食事を提供しているのが特徴であり毎回何品食べたのかを参加者全員で確認するなど工夫を凝らした活動となっている。ボランティアは、診療所の組合員、調理師・南千住西部地域包括ケアの職員と包括から呼びかけたボランティア（軽度認知症のある方）も参加し平均して 15 名ほどが参加している。全体の参加者は平均して 25 名程度である。

２）取組みを始めた経緯

（三ノ輪地域食堂が立ち上がる前）

汐入地区にある生協系の診療所から、区内のふれあい粋・活サロンは、女性高齢者の参加者が多く、男性高齢者の参加が少ない、ひとり暮らしの男性高齢者の食生活も、偏りがちであり、男性高齢者を対象にした食事の提供をする「子ども食堂」の高齢者バージョンとして「汐入地域食堂」が立ち上がった。

立ち上げにあたり、他地区の町会主催で開催している[カレークラブ（男性高齢者を対象にした食事提供）]の見学に行き、話を聞きイメージを固める。１回の開催に対してボランティアを含めると 50 名近い参加があり、狙い通り男性高齢者の参加が多い。そのうちボランティアは 15 名程度となっている。

（三ノ輪地域食堂の立ち上がり）

商店街に都電カフェをオープンした F さんから、「午前中はあまり客が入らないから高齢者のためのプログラムを無償で場所を貸すから地域でやるのはどうだろうか」と荒川区社会福祉協議会に相談に訪れたことがきっかけとなる。店主自らが認知症予防のためにも取り組みたいといった意志もあったという。都電三ノ輪駅から徒歩１分、商店街に入ってすぐの立地、店内は広くてバリアフリー等好条件であった。関係機関に情報を共有したところ、高齢者福祉課の生活支援体制整備体制の担当職員が汐入地域食堂を開催していた東京ほくと医療生活協同組合診療所のスタッフに「汐入地区でも活動が喜ばれているので三ノ輪地区でも地域食堂をやってみませんか」と声をかけたところ、これがきっかけとなり三ノ輪地域食堂が始まった。開催までは何度か話合いが設けられ“誰が対象となるのか”“立地的に、声掛けをすればふらっと立ち寄れることが魅力ではないか”等、様々なことを話合った。食器等は、店主がすべて貸出を許可したものの自分たちで持ち込みたいとなりお互いの要望や考えを深める機会を設けた。当初は、お店の空き時間を活用するとのことだったが台所の衛生面や時間的な制約もありお店の休日に開催することになり、2019 年 12 月 9 日に三ノ輪地域食堂がオープンした。地域の民生委員の力を借り参加者の呼びかけを行うほか、商店街に買い物に来ている男性高齢者に「寄っていきませんか」との声掛けを行い新たな参加者も増え、改めて店舗で活動を行う良さを実感している。また、居場所に様々な人が集まることで

商店街のにぎわいにも寄与している。

３）効果的な取組みのための工夫や苦労した点

・店主から相談があった際に、すぐに会場となる喫茶店に足を運び会場や会場周辺の状況を把握する。

・会場のアクセスや広さなどの条件を確認し、得られた情報は迅速に広く関係機関に周知を行う。

・活動候補団体が現れた際には、見学や話し合いに同行同席してマッチングが円滑にいくように寄り添う。

・話合いの際に、活動する人や場所の長所を活かせるように方向がずれたりした場合は提案を行う。

・地域の商店街や民生委員児童委員などにも情報を常に共有し地域に認められる活動になるように気を配る。

・フードバンクとつなぎ、お米などの食材の提供を受けられるようにする。

・活動を周知するために、チラシの作成支援のほか新聞社に情報を提供し取材にきてもらう。地域の活動を応援するためには、「やっている活動は素晴らしい」「あなたたちの力で地域がこんな風に変わる」「役割はすごく大きい」と外から評価して自信を持ってもらうことが必要であり、マスコミ等を通した広報という支援は重要だという。

4　活動支援プランニングシート」の試用について 試用後のアンケート結果

1）試用後のアンケート調査実施概要

改良した「活動支援プランニングシート」の使用感等に関して、モニターアンケート調査を実施した。

（1）対象者

令和元年 8 月以降全国 5 か所にて実施した手引書の使い方説明会のいずれかに参加した、もしくは当会とつながりがあり、実際に生活支援サービス団体・活動の支援を行った経験がある方

（2）方法

対象者には、活動支援プランニングシートを記入後、Web フォームを送付し記述式アンケートを実施した。

（3）回答期間

令和 2 年 2 月 28 日（金）～3 月 19 日（木）

（4）回収件数

11 件（約 40 名中）

※活動支援プランニングシート及びモニターアンケート両方の記入をもって有効回答とし、（2）自由記述の回答結果」に掲載した。

（5）アンケート回答者概要

①回答者の所属

市区町村担当職員、社会福祉協議会担当職員、NPO 法人担当職員

②回答者の職種

第 1 層生活支援コーディネーター、第 2 層生活支援コーディネーター、地域福祉活動促進専門員、NPO 法人代表理事・福祉拠点普及促進コーディネーター、社会福祉士、保健師

③回答者の勤続年数

3 年～34 年

2）自由記述の回答結果

（1）活動支援プランニングシートはどのような場面で使用できると思いますか。

地域の方々と連携していくうえで**見える化**してあれば理解しやすい
活動を重ねていくなかでの**課題などに気づきやすい**
地域活動、ボランティア活動取り組みたいと希望している住民と一緒に**具体的な活動のイメージづくり**をするとき
市民活動、住民参加のグループ活動立ち上げから事業展開するまでの行程
活動を開始するときの支援とその後の**振り返り**
インテーク、モニタリング等の**意識をもって、しっかり事例に向き合い**たいとき
新たな地域活動が始まろうとするとき、**支援側として意図的にどのようなサポートをするか**な

ど確認や振り返りをするような場合
住民からやりたいことについて相談を受けるとき
活動の立ち上げに関する相談を受けた際、関係機関への情報提供など
支援開始の段階から途中のプロセスも大事なので、ふりかえりながら支援途中に確認の機会が欲しい。 継続的に使用できるとよい。
相談受付時・市民活動開始後に、定期的に
窓口に相談に来庁された際に聞き取りをした内容を書き留めて、どういう支援を必要とされているか把握する場面に使いたいと思います。

・活動支援プランニングシートを使用することで、住民活動に対する支援体制の“見える化”が期待できるため、支援開始してからの過程の確認、共有、振り返りが可能になる。住民と具体的な活動のイメージづくりや課題の発見等にも効果があると考えられる。

（２）活動支援プランニングシートを使用したいと思いますか。また、同僚などに共有できると思いますか。

「はい」「いいえ」「その他」	理由
「はい」と答えた人：**7 人**	どのように記入すればいいのか、分かりにくいところもあった。 **きちんと理解できれば共有していける**と思う。
	住民とコーディネーターが協働で、新しい活動を作り出すための知恵や情報を出しあうことができるから。
	使いやすいものであれば、使用したいが、かえって面倒なら使うことはなくなると思います。
	共通の様式、評価基準があることで、活動ごとに整理して考えることができる。
	人事異動により担当者が交代していくので、**支援経過を整理し記録**していくために使いたいと思います。
	地域に今あるものを活用するという観点から、**地域の持ち味・強みを再確認することができる**ため。**支援の方向性が明確になる**ため
	職員個々の感覚でなく、ある程度共有した指標や計りをもって支援した方が、組織にとってはよいと思うため
「いいえ」と答えた人：**なし**	
その他「まだよくわから	活動支援を完了していないため、シートの良さを実感できてい

ない」と答えた人	ない。実際にその場で使用してみないと何ともいえない。
その他「1セクター（行政・社協等）だけの取り組みでなく協働で企画から実践の取り組みを共有支援する」と答えた人	関係者の理解と協力がなければ、新しい仕組み、住民主体の企画、実践が前に進まない。 相互理解して地域の新しい生活空間と仕組みが創られていく。
その他「部分的に使用するなら可能かもしれない。シンプルに作り変えると記録として活用できると思う。」と答えた人	実際には課題が多く出てくるため、方法を随時変更していくため、何度も計画の立て直しが必要。シートが多すぎる。**一枚で相談を受けた記録と経過を記載し、裏面に評価など必要最低限の情報にできたほうが利用しやすい。**
その他「使用できると思うが記録に慣れていない人には難しい」と答えた人	２層生活支援コーディネーターは兼務で従事している人が多く、**多忙で記録などは後回し**になっている。

活動支援プランニングシートを使用していきたいと答えたのは半数以上であり、使用したくないと答えた人はいなかった。共通の様式、評価基準があることで活動ごとに整理することができる上、職員個々の感覚ではなく共有した指標や計りをもって支援することが可能であるという意見があった。

生活支援コーディネーターは兼務で従事している等、業務が多忙であるためシートの枚数（全6ページ）が負担になりかねないこともうかがえるが、全てのシートを埋めることが目的ではないため、業務状況・環境に合わせて使用を推奨する。

（３）活動支援プランニングシートの良い点を教えてください。

今回の事例はプランニングシートにそって進めたものではないが、はじめからシートを使っていけば進めやすいと思った
地域にある様々な社会資源・人・もの・場、資金・情報を探し、**具体的につなげる、つながりを繰り返し**ながらその記録ができる
これまでの経験（市民セクター・NPO）で**当たり前にしてきたことが一つの視点で整理**できる。また新しい時代の暮らし**新しい価値観を一般社会、市場に広く周知できる機会が持てる。**これからの公共の在り方、市民セクターの基盤づくりに役立つ
お互いの言葉をそのまま記録できること
自分たちの活動の振り返りができる、記録として残せる、経過を見られる
事前チェックを付けていくことで、**気付いていなかった点にも考えが及ぶことができる**。支援計画で住民側、支援者側それぞれのアクションに分かれており、**対比して考えることができる**
相談を受けたことを他メンバーと**客観的に共有**することができる。**複数メンバーで支援すると**

きに活用しやすい。
地域の持ち味・強みを再確認でき、**当該団体の活動以外の支援にも役立てる**ことができる。
活動の現状を把握したうえで、多角的な視点によりどのような活動支援をしていったらいいかを考えることができると思います。
アセットや価値の項目で中間支援の必要な視点が理解できる。但し、生活支援コーディネーター業務は所属先で孤独な状況にあるので、プランニングシートはチームで記入できる環境があるとよい。
チェック欄が最も共有しやすいと感じました。

良い点としては、記録として保存し共有することができる、支援の際に抜けが防ぐことができる、客観的に共有することができるため複数メンバーで支援することができる、チェック欄が最も共有しやすい等といった回答が得られた。

前回のシートの良い点として挙げられていた“共有のしやすさ”“保存性”“ワンチェックの見やすさ・整理のしやすさ”等を活かしつつも改良することができた。

（４）活動支援プランニングシートの悪い点をお教えください。

何を問われているのか、分かりにくいところがあった。
高齢者福祉の視点が強すぎる。地域福祉の視点がほしい。
現場観が何処まで伝えられるか、活動、体感しないと理解しにくいことを表現、伝えることがむつかしい
アセット項目にその他か自由記入欄があるとよいかな。項目に当てはまらないこともある。
一度に記入すると時間を要するが、随時記入できると短縮できると思う。
シートが多い。住民主体の取り組みについて、**支援者側が計画を立てることはとても難しい。進捗に合わせて助言やコーディネートしていく進め方のほうが多い。**
記入時間がかかるので、慣れるまでは大変だと思います。
アセット・価値の項目の内容が専門職と地域で使う言葉が違う。**地域活動者には専門職が使う言葉は難しい。**
Ｐ３の支援計画とＰ６の支援計画のスケジュールは１つのページにまとめた方がいいのではないかと感じました。
Ｐ３のメモ欄には、「現在不明瞭な点」など「職員がリスクマネジメントしないといけない」と思えるようなフレーズが記載されていると有難いと思います。毎年、全メンバーに申し送りは難しいので、読むだけで「気を付けないと！」と思えるフレーズがあると嬉しいと思うので。

悪い点としては、シートが多い、記入時間がかかる、専門職と地域で使う言葉が異なる、項目に当てはまらないこともあるため、アセット項目にその他か自由記述欄があるとよい等といった回答が得られた。記入時間に関しては何度か使用することで記入時間の短縮が期待できる。

また生活支援コーディネーターを対象に改良を行っているため、住民に伝える際は変換して伝えるなどの配慮することが重要になってくると考えられる。

（５）活動支援プランニングシートの記入時間はどのくらいでしたか。

1 時間～2 時間ぐらい
30 分。※住民と一緒に作成する場合は、1 時間～1 時間 30 分必要。
まとめる時間が必要でした。**書くのは 3～5 時間**、見直しも含め。
時間のある時に分けて記入したためはっきりしないが、相談があった時にそのまま記入していけるところもあるので、時間はかからないと思う。
1 か所 2 時間　計 4 時間
1 時間
15 分
1～2 時間程度
60 分
約 1 時間位です。
不慣れなうちは、30 分前後かかるように思います。

記入時間に関しては、一番短いもので 15 分程度、長いもので 3～5 時間（見直しを含む）であり、平均して **1 時間 30～40 分程度**であった。今回は、“初めての記入”“すべてのシートへの記入”“過去事例を記入している点”を考慮し、今後は更に短い時間での記入の可能性がある。

（６）その他ご意見・ご感想等ございましたらお教えください。

行政から委託されて事業を開始して 2 年半弱なので、高齢者部門は？？？が多いです 行政の施策やシニアさんの意見を聞きながら少しずつ動き出せてきました
相談者である地域住民と一緒に作成し、新しい活動を作り出せると楽しいと思います。
行政は目の前の制度と予算の範囲で事業を進めていく。市民活動は、見えている課題は明確でできる事からいつもボランティアで開拓、事業をけん引してきているが継続していくのが困難、この仕組みを構築していくためには市民コーディネーターの人件費の確保が急務。国の制度は３層のコーディネーターに人件費がない。
シートのひな型を作成することは大変だと思います。少しでも簡単に記入でき、支援に結び付けることができれば、何を支援すればいいのかと悩んでいるコーディネーターの活動の真安になると思います。私はまだまだ生活支援コーディネーターの仕事を理解できていないので、何から動き出せばいいのかわからない状態です。3 年くらいは試行錯誤しながら、地域の人たちと一緒に悩んでいきたいと思います。65 歳以上の人口が 50%以上を占めるこの地域で、課題は山積みですが、地域の力で解決していることも多く、その力を大切にして支援ができるようにしたいと思

います。次年度は、フードドライブとこども食堂に関心のある地域があり、取り組むための勉強会からスタートしたいと思います。はじめての取り組みが実現するといいなと思っています。
自分たちの活動を思うとき、**参考程度の認識ならよいのですが、きちんと取り組もうとすると、量の多さや答え難さから、利用しにくいような気がします。**」
特になし
「住民に課題を気づかせる、利用できる資源を提示するなど、相談を受けて課題を整理することに役立てることができるかもしれない」
「貴重な機会をいただきありがとうございました。お役に立てましたら幸いです。」
「今回の事例は 2007 年開始の団塊世代キャリヤ活用事業に参加した人のつながりから応援している事例。地域活動は積極的なアドバイスよりも、求められたときに的確なアドバスができるように支援者が情報を集めておくことが必要である。地縁組織から生まれる自発的な地域活動は時間がかかるので 3 年では十分な成果は見られない。」
「(生活支援コーディネーターとして)(CSW として)(○○コーディネーターとして)今後した方がよい支援」みたいな箇所もあると、自分には良いかと思います。 兼務している職員だったり、**「生活支援コーディネーターは何をするのかわからない」と自信を持って回答する職員には、「考えながら仕事しよう」という気持ちになるように思います。**いずれにしても、このように整理していただいて現場は有難いです。 多くの職員に使用していただくために、厚労省も正式に推奨してくださるよう願っています。

第３章　コロナウイルス感染拡大予防による「住民のやる気を支える支援を学ぶワークショップ」中止と事後対応について

１　研修会中止の経緯

自治体や中間支援組織を対象に、改訂版の手引書の使い方の解説、活用方法等について啓発するワークショップ研修会を愛知・東京の 2 会場で開催予定であったが、新型コロナウイルス感染予防のため、次の通り開催を中止した。

令和 2 年 3 月 10 日（火）　愛知会場（会場　ウィルあいち）: 2 月 27 日（木）中止決定
令和 2 年 3 月 17 日（火）　東京会場（会場　東京ウィメンズプラザ）: 3 月 5 日（木）中止決定

２　事後対応

代替案として、東京会場で予定されていた研修内容を組み替え、参加者がいない状態で動画撮影し、編集後にネット配信を行う。

愛知会場、東京会場の研修申込者、手引きの使い方説明会（５カ所）参加者等に通知するほか、関係者へメール、当会 facebook ページなどを通じて広く告知する。当会公式 HP に、URL リンクを掲載する。

１）配信する研修の内容

（１）「住民のやる気を引き出す支援」が必要な背景とアセット重視の考え方（25 分）
講師：日本大学文理学部 教授　内藤 佳津雄

（２）住民のやる気を支えるには ～事例報告とクロストーク～
「まちづくり協議会のワンコインサービス事業立上げ支援について」（20 分）
講師：日進市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター　富岡 亜希子
「住民が主役の地域づくりを」（20 分）
講師：荒川区社会福祉協議会 地域福祉活動促進専門員　鈴木 訪子
「クロストーク」（20 分）
荒川区社会福祉協議会 地域福祉活動促進専門員　鈴木 訪子
一般社団法人全国食支援活動 専務理事　平野 覚治
日進市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター　富岡 亜希子

（３）協働的態度で話をきく　信頼関係を形成して活動への動機づけを高める（20 分）
講師：日本大学文理学部 教授　内藤 佳津雄

（４）活動支援プランニングシートの使い方マニュアル動画（20 分）

（１）～（３）の研修資料は、本報告書資料集に「研修会テキスト（東京会場）」として掲載した。

第４章　生活支援コーディネーターが住民のやる気を支える支援の手引き

１　作成の目的

平成 30 年度老人保健健康等増進事業で「地域住民の社会参加等を基盤とした互助促進の手法に関する調査研究事業」を実施し、住民のやる気を支える視点をもった団体評価の手法を『住民のやる気を支える支援の手引き』を成果物として作成・提案した。この手引きの内容をさらに検討し、地域で活動する生活支援コーディネーター等が住民活動の立ち上げに関わったり、支援したりする現場で活用できるよう改編した。

２　内容

次頁より、本事業の成果物として作成したカラー冊子『生活支援コーディネーターが住民のやる気を支える支援の手引き』を収載する。

生活支援コーディネーターが

住民のやる気を支える

支援の手引き

令和元年度 厚生労働省老人保健健康増進等事業

基礎自治体や中間支援組織等による住民主体の活動を
促進するための手法に関する調査研究事業

一般社団法人
全国食支援活動協力会

はじめに

平成 30（2018）年度、私たちは厚生労働省老人保健健康増進等事業「地域住民の社会参加活動等を基盤とした互助促進の手法に関する調査研究事業」を行い、住民のやる気を支える視点を持った団体評価の手法を「住民のやる気を支える支援の手引き」で提案しました。この冊子は昨年度制作した手引きの内容をさらに検討し、地域で活動する生活支援コーディネーターのみなさんが住民活動を立ち上げたり、支援したりする現場で活用できるよう改編したものです。

この冊子の基にあるのは、人口減少・超高齢社会に対応できる地域社会をどうつくったらよいかという問いです。身体と心の健康、孤立や孤独に陥らないための社会的関係の構築、日常生活の自立といった多様な課題に対して、これからは地域住民やボランティアによるインフォーマルな取り組みを増やしながら介護予防や生活支援の体制をつくっていく努力をしなければなりません。

高齢者の介護予防や生活支援を住民参加でつくろうとすると「やる気がある地域住民がいない」「ボランティアがいない」という声も聞きます。では地域の課題解決に関心がある人は全くいないのか、というとそんなことはないようです。近年、特に制度にはない自宅を使っての住み開き、コミュニティカフェ・地域食堂などの地域の人が参加できる“居場所”の取り組みが大きく広がりました。また、子ども食堂の活動も全国的に広がっています。地域に開かれた参加の場は多様な人の“居場所”になり、新しい取り組みが動き出す土壌にも成り得る可能性があります。

孤立や孤独、食事や家事や移動の日常生活、介護や認知症など高齢者の生活課題は山積みです。しかし、生活支援を住民参加でつくっていくのであれば、課題から考えるだけではなく、他者のためになにかをやりたいと考える人の「やる気」を積極的に育ててやる気のある人を増やす、という発想の転換をしてみてはどうでしょうか。

生活支援コーディネーターなどが、特に居場所活動の開発を行う場面を念頭に置き、アセスメントと支援計画の立案を支援するツールとしてこの冊子を作成しました。ニーズ（困りごとや足りないもの）重視からアセット（強みや良さ）重視へと視点を転換することにより、信頼感を醸成し活動への動機づけを高めていくための手法がまとめられています。ぜひ多くの方に活用していただき、相互扶助の基盤づくりへとつながることができれば幸いです。

この手引きでは
住民活動を支援する時の
発想の転換と具体的な方法
（活動支援プランニングシートを使った進め方）
をご提案します。

目次

はじめに

第１章　考え方　P5

［1］ニーズ重視とアセット重視　P6

（1）住民活動の立ち上げに難しさを感じていませんか？　P6

（2）視点の転換 アセット重視で考えてみる　P8

（3）アセット重視の考え方の特徴　P12

［2］「アセット重視」で支援するって…
いったいどうやってやることなの？　P16

アセット重視で考える、住民のやる気を支える支援の POINT 1
今ある“強みや良さ”（アセット）を見つけて共有する　P16

アセット重視で考える、住民のやる気を支える支援の POINT 2
地域資源を把握しつなげて、支援計画を立てる　P18

アセット重視で考える、住民のやる気を支える支援の POINT 3
活動を価値づけて、共有する　P20

アセット重視で取り組みやすい
様々な取り組みが生まれる可能性がある 参加型の居場所　P22

［3］人はどんなときにやる気になるの？
《協働的な態度について》　P24

（1）住民の「やる気」を高めるために　P24

（2）協働的態度の心構えと技法　P25

（3）現役コーディネーターに聞いた
「やる気」を高めるためのヒント　P28

第２章　活動支援プランニングシートを
使った進め方 P31

［1］活動支援プランニングシート　P32

（1）シート使用場面のイメージ　P32

（2）シートの構成　P33

（3）シートの使い方の流れ　P34

（4）活動支援プランニングシート　P35

［2］活動支援プランニングシートの使い方　P40

［3］活動支援プランニングシートを使った事例紹介　P58

付録　P69

地域資源マップ

支援メニューの例

地域資源の活用から見た事例紹介

第１章

考え方

[1] ニーズ重視とアセット重視

(1) 住民活動の立ち上げに難しさを感じていませんか？

地域には課題がたくさん
どの制度に当てはめると解決
できるかな。。。

交流の拠点ができるといいよね。でも町会ではこれ以上の活動はできないよ…

一人暮らしの多い地域に交流拠点が必要だ。
3年後には立ち上げたい。町会にお願いにいこうかな。
やってくれるかな。。。

話し合いっていわれても、私はたいしたこと言えないから…

居場所づくりをめざして、地域で話し合いの場をもたないと。
誰に声をかけたらいいかな。。。

お年寄りの居場所づくりがしたいわけじゃない…

親子サロンをつくりたいって相談を受けたけど、やって欲しいのは高齢者サロンなんだけどな。。。

歩いて行ける範囲に、サロンが立ち上がるといいけれど。担い手と場所の当てがない!

身近な場所にあったら参加したいけれど…

できることなら手伝いたいけど、あそこは遠くて通えないな…

この地区には体操教室がないから、使わなくなった施設を有効活用しよう。やってくれる人を探さないと。。

地域にある課題を、「解決しなきゃいけない」視点で取り組んだり、今ある制度や、すぐに思いつく資源で対応しようとすると、行き詰まりを感じてしまうのでは?

(2) 視点の転換 アセット重視で考えてみる

人の“やりたい”思いを大切に、
今ある、持っていること(アセット)
から始めて、

つなげて、
つなげて、

料理が大好きだから、みんなで
食べたり教えあったりメニューを
考えたりする活動をしてみたい

男性限定の「男
の料理教室」を
やっています

地域のおまつりで「流しそうめ
ん」をやりたいねとアイデアが
出た。力仕事なので男の人の
手助けが欲しい。
誰か手伝ってくれないかな?

自宅の居間でみんなで集まってなにかやりたい。
マージャンは認知症予防になるし、男性も興味を持つんじゃないかな

授業で孤独死について勉強した。
自分もなにか役に立ちたい!

若者から年寄りまで一人暮らしの人が増えている。経営しているカフェで近所の人同士の交流イベントとかできないかな?
楽しそう

夏休み中、家にばかりいる子どもたちが、体験できることはないかな?
昨日、ご近所の高齢者が「入院するので、ペットの散歩どうしよう」と困ってるって聞いた

動物のお世話したーい!!

住民のできること、やってみたい動機から始めてみませんか?
見落としている「アセット」はありませんか?

地域で住民主体の活動をもっと増やせるといいけど…
「今までのやり方だとうまくいかない」
「『活動したい』と相談に来る人がいない」
「地域資源がつながらない」
という声がありました

一方で、
「住民の様々な思いや気持ちをしっかり受けとめつつ、伴走した支援ができれば、住民の方々は楽しみながら活動してくれます。近々、新しい住民活動が立ちあがる予定です」
という声もありました

今、地域住民の
社会参加がうまくいかない
積極的に地域活動をする人はいない
と感じているなら
発想を転換してみませんか？

(3) アセット重視の考え方の特徴

「住民のやる気を支える支援の手引き」

一般社団法人 全国食支援活動協力会編
平成 30 年度報告書より

ニーズ重視とアセット重視

「アセット（資産）」重視という発想をご紹介します。これは、従来の「ニーズ（必要）」重視のアプローチへの反省から生まれてきたものです。

近年、世界的な潮流として、健康・福祉のための公共サービスについての考え方（アプローチ）が大きく変わりつつあります。アセット重視の考え方（アセット・ベースト・アプローチ）は各国で注目され、関連する政策や研究が増えてきました 。（本章では次の文献を参照しました。Garven,F,J.McLean and L.Pattoni,2016,Asset-Based Approaches:Their rise,role and reality,Dunedin Academic Press.）

ニーズ重視は、現在でも主流の考え方です。ニーズ重視とアセット重視は、けっして対立するものではありません。また、単純に入れ替わるような関係にもありません。それらは、互いに補い合うものです。そして、アセット重視のアプローチは、まったく新しいものというわけではなく、これまでさまざまな形で提案されてきた考え方や手法を総合したものです。日本の先進事例も含めて、アセットという言葉を使わずに、同じようなアプローチが実行されていることは少なくありません。

まずはニーズ重視の考え方の特徴から見てみましょう。それは、ニーズを抱えた人に的を絞って、サービスやお金などの資源を集中的に投入することで、社会の健康・福祉が向上するという考え方です。ニーズ重視の考え方は、「ないもの」に着目します。なかでも、特に急を要し、重大なものが優先されます。このアプローチでは、病気や身体・認知機能の低下によって健康・福祉が損なわれたときや、そのおそれがあるときに、必要なサービスを提供し、欠けたところを補うこと、または、その

ための基盤を整備することが、公的機関の役割とされます。

ニーズ重視の考え方が想定する住民像は、専門職が提供するサービスの受け手です。このため、住民参加の度合いは低くなります。住民が参加するとしても、専門職が主導する場面が多くなります。また、取り組みの時間幅は、ニーズがみたされるまでの期間に限定されます。そして、サービスを評価する際には、客観性が重視されます。

まとめると、「なぜ病気になるのか？」、そして「いかにして素早く治療するか？」が、ニーズ重視の考え方の基本的な問いであると言えるでしょう。

では、アセット重視の考え方とはどのようなものでしょうか。ここでいうアセットは、健康・福祉を促進し、またはそれらを失うことを防ぎ、より根本的には、生きる上での選択肢を増やし、自由を拡大する、さまざまな資源のことを指しています。

アセットには物やお金も含みますが、心理的な側面（誇り、熱意、自信、有意味感、目的、楽観性、一貫性など）や、社会的な側面（知識、経験、技能、ソーシャル・キャピタルなど）も、大事な構成要素とされます 。これらのアセットは、個人がそれぞれ別個に有しているというよりも、人と人の「つながり」のなかに蓄えられています。

アセット重視の考え方は、「あるもの」に着目します。その前提には、人が、健康・福祉を維持・向上するための力を有しているという見方があります。公的機関の役割は、住民や地域が持つ様々なアセット（強み）を伸ばすことです。そこで想定される住民像は、サービスの受け手というよりも、共同で問題の解決をはかるパートナーです。当然のことながら、住民参加の度合いは高く、専門職が関わるとしても、住民が主導する場面が多くなります。

ただし、住民の強みと対応能力を伸ばす取り組みには、長い時間がかかります。そして、個人というよりもコミュニティが対象となることから、空間的な広がりをともないます。さらに、サービスを評価する際には、客観的な指標だけでは不十分で、主観的な要素を組み込む必要があります。

ニーズ重視の考え方とは対照的に、「なぜ健康になるのか？」、そして「いかにして長く健康を保つか？」こそが、アセット重視の考え方の基本的な問いということになります。 **（東京大学：祐成 保志）**

「アセット」は、一般的には財産や資産という意味で用いられる言葉ですが、ここで言う「アセット」は、地域の健康や福祉にとってプラスになる様々な資源のことを指しています。地域福祉のアセットには「モノ」や「お金」だけではなく、心理的・社会的な「誇り」「熱意」「知識」「経験」なども含まれ、これがとても重要な要素です。

アセット重視の考え方では「あるもの」に着目します。すでにあるものを持ち寄って、地域のためになにができるかを考えます。この前提にあるのは、「人は、健康・福祉を維持・向上するための力を持っている」という見方です。

特徴

- **アセットの構成要素**
  - **◎「モノ」「お金」だけでなく**
  - **◎心理的な側面（誇り、熱意、自信、有意味感、目的、楽観性、一貫性など）や**
  - **◎社会的な側面（知識、経験、技能、ソーシャルキャピタルなど）も、大切な構成要素**
    個人が有しているというより、人と人の「つながり」の中にある
- **着眼点：**「あるもの」に着目
- **対応の仕方：**人が、健康・福祉を維持向上するための力を持っていることを前提に、その力を強みとして伸ばすことが公的機関の役割
- **住民との関係：**住民と共に。協働で問題解決をはかるパートナー
- **主な対象：**個人よりも空間的な広がりを持つコミュニティ
- **時間幅：**長い時間がかかる
- **住民参加の度合い：**高い。主導する場面も多くなる

これまで地域の課題や困りごとへの対応を軸に住民活動の立ち上げをすすめる中で、「うまくいかないな」と難しさを感じていたら、少し視点を変えてみませんか？

住民が本来持っている「アセット」を“強みや良さ”として伸ばすことで、地域の介護予防や健康増進が期待できるかもしれません。「アセット」を引き出して、主体的な活動になるような住民のやる気を支える支援について考えてみましょう。

コラム

「アセット重視の考え方を活かした保健・福祉施策」

保健・福祉分野でのアセット重視の考え方は、近年、イギリスで取り入れられ成果をあげています。2010 年代に緊縮財政を経験したイギリスでは、保健・福祉分野における公的資金や利用できる資源が不足し、健康格差の拡大が顕在化しました。その解決策として打ち出された考え方のひとつが、アセット重視の考え方です。

保健・福祉分野での公的サービスは、利用者のニーズに基づいて提供されるのは言うまでもありません。しかし、限られた予算・資源では、公的なサービスですべてのニーズを満たすことはますます難しくなってきています。対処しきれないニーズをそのままにしておくことは、健康格差につながります。そこで、注目を集めているのが、サービスの利用者や地域コミュニティの参加を通して、地域住民のやる気を促すアセット重視の考え方なのです。

アセット重視の考え方では、顕在化したニーズへの対応として地域住民が必要とするサービスを住民自らが提供することに加えて、ニーズそのものが発生することの予防に重点がおかれます。地域住民が持つアセットに注目し、地域住民ができること・やりたいことからサービスを組み立てることにより、地域住民の主体性を最大限に活かす方法です。この考え方を取り入れたイギリスの自治体では、保健・福祉サービスに対する住民の高い満足度とニーズの削減との両立を実現しています（イギリス・ケンブリッジシャーの事例）。　（産業能率大学：中島 智人）

[2]「アセット重視」で支援するって…いったいどうや

アセット重視で考える、住民のやる気を支える支援の POINT 1
今ある“強みや良さ”（アセット）を見つけて共有する

「やる気のある人になかなか会えません」という生活支援コーディネーターの声を聞きました。

もしかしたらそれは、「行政や社会福祉協議会がして欲しいことをやりたい人がいない」ということなのかもしれません。思いのある人の話を聞いて、その人が今持っている“強みや良さ”を把握することからすすめましょう。

■まずは相手の思いをよく聞くことから

地域の集まりやボランティア講座などで「地域で人のためになにか活動をしたい」という思いを持った人に会ったら、思いや意向を詳しく聞いてみましょう。「よく聞く」とは、コーディネーターの価値観や既存の施策に当てはめながら聞くのではなく、相手の話を先入観なく受けとめることです。思わぬ“強みや良さ”が分かるかもしれません。その“強みや良さ”がアセットです。思わずこぼす言葉もキャッチしましょう。

たとえば…
- ▶地域の中で集まれる場をつくってみたい
- ▶閉じこもりがちな近所の高齢者のことが気になっている
- ▶楽しいことなら友人も一緒にやりたいと言っている
- ▶空いている部屋があって、住み開きに興味がある

■小さなことでも価値があり、小さなことからでも始められることを示す

はじめからボランティアメンバーが十分に揃わなくても大丈夫。少ない人数でもできることから始めればいい。人の気持ちは不思議で、肯定的に認められることで気持ちが前向きになります。

■マイナス面ではなくプラス面を見つける

助成事業など制度の枠に当てはめると、条件を満たしているかどうかマイナス面に目がいきがちです。アセット重視の考え方では、マイナス面からではなくプラス面から見つけていきます。

たとえば…
- ・構成メンバー　**３人しかいないからマイナス** ではなく **３人もいる** と捉える
- ・会則の有無　**会則がないからマイナス** ではなく **役割分担や活動日の運営ができている** と捉える
- ・対象者　**対象者が絞り込めていないからマイナス** ではなく **多様な人が参加できる** と捉える

■住民の要望をかなえるのとはちょっと違います

熱意がある住民から「こんなことしたいから社協で支援して欲しい！」「支援がないとできない！」と言われたときはどんな関わりをすればいいのか迷います。その活動は営利や政治・宗教の布教を目的としていないでしょうか。その人は地域課題を感じているでしょうか。またその活動は地域社会にとってどんな価値があるでしょうか。そのあたりを把握し判断するコーディネーターの目が必要です。

ってやることなの？

今ある“強みや良さ”ってなに？ どんなこと？ アセット＝今ある“強みや良さ”の例

人に関すること

★仲間がいる
★住民主体の活動である
★様々な世代・立場の人がいる
➡ 担い手がいますね！

★利用しそうな人がいる
★地域の人が多く参加する
★様々な世代・立場の人が参加できる
★利用者も担い手になることができる
➡ 参加者がいますね！

元PTA仲間で始めようって思っています

近くの大学のボランティアサークルから手伝いに来てくれるみたい

“お客さん”が担い手にもなりお茶をいれるよ

赤ちゃん連れのママにも来て欲しい

場に関すること

★場所が確保できている
★アクセスしやすい場所である
★空き家や空き店舗を活用している
➡場所がありますね！

バス停前の便利な会場が借りられた

子どもが独立して部屋が空いているよ

モノ・資金に関すること

★モノ・資金が確保できている
★モノ・資金を提供する人がいる
➡ モノ・資金がありますね！

フードドライブの食材を使わせてもらっています

食器は持ち寄りで揃えられそう

情報・ネットワークに関すること

★地域の多様な機関との連携がある
★専門職と連携している
➡ 情報・ネットワークがありますね！

隣の市にあるコミュニティカフェは先輩格。いいなと思うところを真似しています

メンバーの一人が民生委員・児童委員。担当の高齢者にカフェの情報を伝えてもらっています

運営に関すること

★定期的に運営している
★メディアを通して活動の広報ができる
★活動計画が立てられる
➡運営ができていますね！

月2回、開催しています

材料の買い出しは飯田さん、コーヒー担当は山田さん。役割分担ができています

“強みや良さ”を把握するガイド「アセット項目チェックリスト」P36に掲載

アセット重視で考える、住民のやる気を支える支援の POINT 2

地域資源を把握しつなげて、支援計画を立てる

「地域資源がなくて」という生活支援コーディネーターの声を聞きました。

アセット重視の視点で取り組むなら、前もってコミュニティ全体を眺める視点でなるべくたくさんの地域資源を把握しておきます。いざというときに支援計画として活きてきます。

■すぐにマッチングできなくても、たくさん引出しを増やすつもりで

「いつか支援計画に活用できるかも」というアンテナを常にはっておき、地域資源の引出しを一つ一つ増やしていきましょう。今直面している課題にすぐに活用できなくてもいいのです。手持ちの札が増えれば、必要なときに「あっ、あれをつなぐといいかもしれない」とピンときて、思いもよらない化学反応がおきるときがきっとくるでしょう。

たとえば…

- ▶「子どもの居場所に来ている小学生」が、数日入院する高齢者の「犬の散歩」をお手伝い
- ▶居場所までの送迎に、デイサービスが使っていない時間帯で車両を貸してもらえることに

■小さな動き、一見福祉とは違う分野の活動も、大切な地域資源

これまで「地域資源」と認識されてこなかった小さな活動や、一見福祉とは違う分野に感じられて見過ごされてきた活動も、大切な地域資源です。

たとえば…

- ▶数人の仲間で行っている、編み物や囲碁将棋などの趣味の集い
- ▶犬の散歩で出会う顔見知りの人たち
- ▶環境や災害などをテーマにした<まちづくり活動>

■別の角度からも考えてみる

会場探しをするときは、公共施設の一般貸出しの会議室を思い浮かべるだけではなく、ロビーや受付の前は使えないか、すでに使っている部屋で空いている時間はないかなど、別の角度からも考えてみましょう。人材やモノ・資金などについても、様々な切り口から考えます。

■“強みや良さ”が活かせる支援を考える

どんな地域資源をつなぐと活動の“強みや良さ”が活かせるかを考え、支援計画を立てます。“強みや良さ”を活かした支援は、「できそうな気がしてきた！」という気持ちにさせ、住民のやる気を奮い立たせることにつながるでしょう。（参考：P72～73“支援メニューの例”）

たとえば…

- ▶人・担い手支援：ボランティア団体や地域包括支援センターなどの専門職へ、担い手として関われるかを相談
- ▶人・利用者の支援：参加者募集の広報支援や、交通手段がない参加者の送迎について可能性を検討
- ▶場の支援：公共施設利用の手続き支援や、民間スペースの貸出し情報の提供
- ▶モノ・資金の支援：助成金の情報提供や申請書の書き方支援、寄付物品のマッチング
- ▶情報・ネットワーク / 運営状況の支援：意見交換の場の設定、先進事例見学の同行、取材の働きかけ
- ▶運営基盤の支援：話し合いでの合意形成のサポート、活動やミーティングに参加、事務局機能を担う

地域資源ってなに? これって地域資源になる?

場 所

➡ 空き時間の活用

デイサービスセンターで使わない
夜の時間帯に食事会ができないかな

➡ 空きスペースの活用

社会福祉協議会の
受付カウンター前を
フリマスペースにしたら、
人が集まってきそう

➡ 空き時間の活用

スナックが営業していない昼間の時間帯、
使ってもいいですよという人がいたよ

➡ 空きスペースの活用

スーパーのイートインコーナーは、
ファミリー層も来やすい場所だね

➡利用対象の特徴

高齢者施設にキッチンがある。地域食堂にすれば、
子どもたちも来られるんじゃないかな

人 材

➡ モノ・資金の提供

隣町のスーパーが食材の寄付を
始めたようだ。うちの町ではどうかな

➡ 専門的スキルや特技の提供

栄養士に献立をチェック
してもらえると安心

➡ スタッフとして関わる

最近活動に参加した人は、会社勤務時代、
経理をやっていたと聞いたよ

➡ スタッフとして関わる

家庭菜園をしている人たちが
仲間になってくれるみたい

資 金

➡ モノをまわして
資金・物品を調達

フリーマーケットで資金づくり
食器やテーブルは
リサイクル品で用意しよう

➡ 直接資金を依頼する

町会に寄付を
呼びかけられるかな

➡ 助成金を獲得する

民間にこんな助成金
があるんですね

地域資源をみつけるヒント“地域資源マップ”
支援計画を立てるときのヒント“支援メニューの例”をP70～73に掲載

アセット重視で考える、住民のやる気を支える支援の POINT 3

活動を価値づけて、共有する

活動の“強みや良さ”を把握し（POINT1）、地域資源をつなげて支援計画を立て（POINT2）、その活動が実現したら、その先にどんなことがおきるのでしょうか。将来期待できそうな成果や高まった価値を評価し、共有しましょう。ここで言う「評価」とは活動に点数をつけることではありません。プラス面を積極的に価値づける「評価」です。

価値の評価軸は様々で、活動回数や参加人数の多寡が評価されることもありますが、ここでは安心して住みやすい地域づくりにつながるかの視点で考えます。

■小さな活動も価値があることを伝える

「集まっておしゃべりしているだけで、地域に役立っているなんて大層な…」と感じる住民の方も多いようです。そんなとき「こうした活動こそが、地域の見守りにつながる活動ですよね」と、価値を見つけだすことが大切です。自分たちの活動に公の価値があるとわかることで、仲間内の活動の認識から、新しい人を受け入れることに意識が切り替わるなど、さらに地域に役立つ活動に発展していくきっかけになります。

■言葉にして認識することで、めざすものを明確にする

「お互いさまだから」「楽しくやっているだけ」と、価値を自覚していない人もいます。だから、この活動が行われたら、どんな価値が生み出されるのか、住民と支援者が一緒になって考え、言葉にして認識することが大切なのです。活動のめざしていることの価値が明確になることで、さらに住民はやる気になります。

■誰にとっての価値か

住民側と支援者側では価値観が分かれることがあるかも知れません。支援者の価値観を押しつけてしまうと、「やらされている」と感じて住民のやる気は冷めてしまいます。あくまで活動の主体は住民にあることを忘れず、一方で地域の課題を伝えながら、尊重しあって価値を共有していくことが求められます。

■地域の人とも価値を共有する

活動を始めて一年後を目安に、振り返りの機会を設けましょう。新たに生まれたり、さらに高まった価値はないかを住民と支援者で一緒に確認します。

また、利用者や活動に関わっていない地域住民に、活動を紹介する機会をもちましょう。活動内容だけでなくどんな価値があるかを伝えることが大切です。地域で活動が認められることで、さらに住民のやる気は支えられます。

価値ってなに? どんなこと?

地域性

住民：いつも来ている人が今日はお休み。帰りに寄ってみます

支援者：心配な人を気にかけている活動ですね

★心配な人を気にかける目を増やせる

住民：おしゃべりしてたら、ゴミ出しに困っているという話を聞いちゃって

支援者：さらなる地域課題が見つかりましたね

★さらなる潜在的な地域課題を発見する

開放性・展開性

住民：カフェの空き時間での会食会は、商店街を歩く人に声がかけやすくて参加者が増えているよ

支援者：誰でも利用しやすい活動になっていますね

★誰でも利用者になれる

住民：「ここの活動を見学して自分もやってみたいと思った」と言われました

支援者：モデル的な活動になりましたね

★後発の団体・取り組みが生まれる

継続性

住民：活動のあと、お茶を飲みながら反省会と次回の活動の内容を決めています

支援者：運営の仕組みが確立しましたね

★運営の仕組みや体制が整備されている

住民：自分たちでも資金調達しようと、町内会に呼びかけてフリマの品を集めました

支援者：資金調達は、継続のために大切ですよね

★継続のための資源(場・資金・備品など)が調達できる

課題解決性

住民：「この地域に住んで10年、初めて近所の人と話した」と言う参加者がいた

支援者：孤立していた人を地域とつなげましたね

★孤立している人を減らせる

住民：「高齢の、特に男性の食事は偏りがあって心配」から始まった地域食堂です

支援者：子どもの参加が必須の制度でしたが、高齢者にも適用できるようになりました

★施策横断的な取り組みや施策づくりのきっかけになる

施策適合性

住民：ワンコインでゴミを出す活動を始めました

支援者：高齢者が安心して地域に住み続けることができますね

★生活支援によって高齢者が安心して生活できるようになる

住民：地域食堂のスタッフは、自分も楽しいからお手伝いしている人が多いです

支援者：スタッフの生きがいにもなっているんですね

★高齢者の生きがいづくりができる

“価値”を把握するガイド「価値項目チェックリスト」を38に掲載

アセット重視で取り組みやすい

様々な取り組みが生まれる可能性がある 参加型の居場所

■あるものから：気のあう仲間と、自宅でもできる

居場所には様々なタイプがあります。毎日オープンしている常設型もあれば月１回少人数で集うもの、活動内容も会食会、健康体操、学習支援など決まっているところもあれば、特にプログラムはなく各々好きなように過ごすところもあります。

居場所づくりは、使える地域資源が限られていても、今あるものから始められる活動です。気の合う数人の仲間と、自宅の一室で、月１回、特にプログラムを考えずにお茶だけ用意している居場所はたくさんあります。

自分たちの考える自由な集いの場なら、やってみたいと思う人はいるのではないでしょうか。

■住民活動の基本：担い手と受け手が、同じ立場でともにいられる場

地域での活動は、お互いさまの関係づくりが大切です。

居場所の最大の特徴は、同じ立場でともにいる関係づくりがしやすいことです。たとえば、食事を提供するとき、小さな子どもも配膳をしたり、スタッフと参加者が一緒のテーブルについて食べたりすることで、年齢や役割に関係なく平等に交わることができます。ともにこの場をつくっていることが、生きがいややる気を支えることにつながります。

■子どもから高齢者の参加、若い担い手による、多世代の交流が生まれる

住民参加による生活支援サービスは、担い手の高齢化、不足が指摘されていますが、子ども食堂・地域食堂、子どもや多世代を対象にした居場所は、勢いがある分野です。勢いは、数が増えているだけではありません。担い手の年齢層が若いことも大きな特徴です。担い手の半分以上が現役世代（64歳以下）で、40歳未満の参加率も高いという調査結果が出ています。さらに、子ども食堂で高齢者の受け入れをしたり、高齢者の食事会を多世代の地域食堂にする活動も増えてきています。

居場所は多世代の交流の場になり、若い担い手の参加も期待できる可能性を持っているといえます。

■食は人を集めてつなぐ

食事の提供を中心に据えた居場所も数多くあります。美味しいものをみんなで一緒に食べる楽しみは、人と人を結びつける営みであり、地域文化にもかかわる多面性があります。さらに手づくりの食事の良さは、食べる人の健康や好みを考えてつくられること。「おいしいものを食べてうれしい」「おいしく食べてもらえてうれしい」気持ちのやりとりができます。

「食」は、人々を集めてつなぐ役割を果たす機能が、極めて大きいと言えます。

■人が集まることで、みんなの欲しいものがわかる

本当の困りごとは、正面から「困ってませんか」と聞かれるよりも、何気ないおしゃべりの中からポロリとこぼれ出ることが多いようです。

人々が集うことで、お互いの困りごとを知る機会になり、居場所から、会食会や子ども食堂・地域食堂といった活動や、買物支援、移動支援、食材・惣菜の提供といった派生サービスが生まれた例もあります。

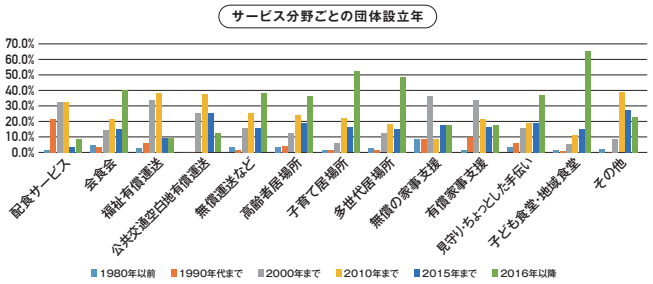
居場所は、地域の生活支援のプラットフォームになり得る取り組みです。

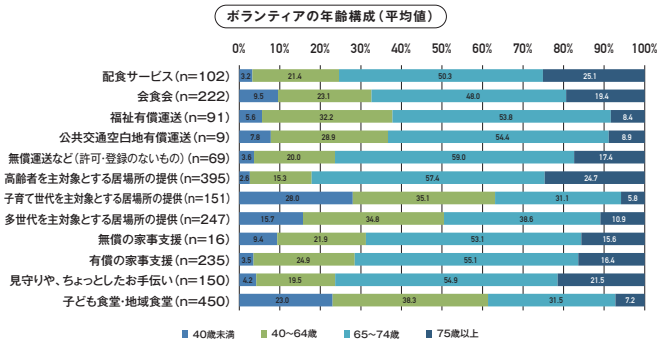
居場所をプラットフォームした住民参加による生活支援の広がりイメージ

居場所のイメージ

- 居場所は、誰でも来られる、自由な場所です。
- 運営メンバーがおり、居場所を管理運営します。運営定例会などで場所の使い方を検討します。
- 誰でも入れるメーリングリストなどがあり、「欲しい」「あげます」「参加者募集」「協力者募集」などの情報交換を行います。
- 必要に応じて関係者が集まり、活動の検討や課題解決の相談をします。

近年増えている活動と、担い手の年齢構成





グラフは、住民参加による生活支援サービスの支援の実態と評価の視点の把握を目的に実施した「行政・社協向け」と「運営団体向け」のアンケート調査の結果をまとめたもの。一般社団法人全国食支援活動協力会編「住民のやる気を支える支援の手引き」［平成31（2019）年3月］より引用。

[3] 人はどんなときにやる気になるの？《協働的な態度

住民が積極的に活動を持続していく、そんなやる気を高めるためにはどうしたらいいでしょうか。
ここでは、住民側の動機と、支援者側の心構えと技法に分けて記載します。

（1）住民の「やる気」を高めるために

ボランティア活動には内発的動機づけが必要

人が目標に向かって行動を起こしたり、その行動を続けたりするための原動力としての「やる気」を動機づけといいます。金銭などの報酬が得られることによって生じる動機づけを外発的動機づけと言います。一方で人は、自分がやりたいこと、好奇心をもてること、人に認められることに動機づけられます。このような動機づけを内発的動機づけといい、自発的なやる気ということができます。

内発的動機づけが高まる一番の要因は本人にとっての興味や好奇心、楽しさです。自分が関心をもち、やりたいと思っていることには、内発的動機づけが高まり、それによって行動を始めたり、継続させたりしていくことができます。ボランティア活動の一番の原動力はこの内発的動機づけにあります。

内発的動機づけを高める「自律性」、「人間関係の良さ」、「有能感」

内発的動機づけを高める要因は、好奇心以外にもいくつかあります。１つは、自分の目標に価値があると思えることとその目標が達成できそうだと感じられること（有能感）が必要です。まず、自分が選んだ目標に価値があると思えることが大切であり、そのためには、周囲から社会的に価値を認めることが大切です。地域のことを考えて、なにか活動をしようということはとても重要な決意です。まずはその活動をしようという意思を認めることが活動への内発的動機づけを高める第１歩です。そして、その目標に向けてどのように行動したらうまく目標を達成できるのか、その道筋が明確になるほど実際に行動をしようという内発的動機づけが高まります。活動に必要な情報提供や助言はやる気を高めます。

もう１つは、自分で決めること（自律性）が重要です。目標や方法を自分で決められる自由度がある方が内発的動機づけは高まります。逆に、ルールに縛られすぎる、他人の言うことばかり聞かないといけないといった状況は「やらされ感」が高まり、内発的動機づけが低下してしまいます。一方で、生活支援コーディネーターとして、住民活動やボランティアにやって欲しいこともあると思います。しかし、その要望や制約が強すぎると、ボランティア側の「やらされ感」が高まりやすくなります。ボランティア活動は自発性が大切です。「やらされ感」が高まりすぎると活動への内発的動機づけが低下してしまいます。また、押しつけられていると感じるような関係ができてしまうと、もうこちらの話すら聴いてくれないこともあります。

どうしたら、こちらの言うことに耳を傾け、こちらの考えていることをやってみようかなと考えてくれるのでしょうか。そこには好感や信頼感といった「人間関係の良さ」が前提です。良好な人間関係があるからこそ、こちらの話を聴いてくれるのです。そのために、まずは相手の話を聴き、信頼感をつくっていくことが大切です。「この人の言うことなら少しは聴いてみようかな」と思えるのです。まずはこちらの話を聴かせる前に相手の話をよく聴くこと、その人のやりたいことを尊重することが大切です。

（2）協働的態度の心構えと技法

住民の「やる気」を高めるためには、良好な人間関係をつくっていくような協働的態度が大切です。

協働的態度の背後にある基本的な考え方

協働的態度の背景には以下のような考え方があります。うわべだけの良好な関係をつくっても長い期間の中で本音が見抜かれてしまいます。

- **内発的動機づけを阻害する言動をしない**

  まず、相手にいじわるをしない、けちをつけないことが大切なのはいうまでもありません。こちらの価値観や考え方、求めることを押しつけないで相手の強みや良さを積極的に評価することが関係づくりの始まりです。

- **話を聴く姿勢を示す**

  基本的態度として、相手の話を聴こうとすることが大切です。話を聴こうとする気持ちが根底に求められます。

- **熱意を持って対応する**

  相手を支援しようとすることが必要です。そのためには、支援の方策を全力で考える、時折訪問して活動を見るといったことが大切です。

話を聴くときの基本的な姿勢や行動

相手の話を聴こうとする気持ちが相手に積極的に伝わるように話すことがとても大切です。特に、初めて話しをするときには、相手も非常に緊張して、こちらがどのような人か探っています。わずかな手がかりを頼りにして、「この人は話をちゃんと聴いてくれるか」「騙されたり、ひどいことを言われたりしないか」と警戒や心配をしながら話をしているのです。支援者の側がコミュニケーションの配慮をしながら、良い関係を構築していくことが大切です。

●話を聴く基本的態度・姿勢

視線・まなざし

話を聴くときには基本的に視線を向けましょう。メモや資料ばかり見ないようにしましょう。ただし、凝視しすぎると心の中を覗き込まれているように感じられることがありますので時々視線を外します。ただし、視線を向けるときは数秒間は必ず向けるようにして、「ちらっ」と見るのはやめましょう。

目線

同じ高さになるように同じ椅子に座りましょう

表情

困った顔や不快そうな顔をしないようにしましょう

くせに注意

腕組や脚組は威圧的になるのでやめましょう

座る位置と姿勢

相手と 90 度の角度か、斜め向かいに座り、真正面に座るのは避けましょう。真正面に座ると強制感が高まりやすくなります。座る姿勢は、相手側にやや前傾した姿勢をとります。背もたれに寄りかかりながら話を聴くのは横柄な感じがします。

● 話を聴いていることを積極的に示す応答をしましょう

・積極的にうなずき、あいづちをする・・・

深いうなずき、浅いうなずき、様々なあいづち

・反復を活用する・・・

相手の話のポイントを繰り返す、特に感情や意思を示した発言は繰り返して共感しましょう。

（例）住民「男性向けの活動をなにかやりたいと思っているんです」

コーディネーター「男性向けの活動をやりたいと考えていらっしゃるんですね」

● 相手の話を引き出す、質問力と励まし

・基本は広がる (open な) 質問を使う

閉じた（closed な）質問 (はい、いいえで答えられるような質問) ばかり続けると事務的で押しつけられているように感じやすくなります。

・相手のやりたいこと、目標などを認める

相手にとっての良いこと、価値を感じていることに対してポジティブな感情を示す。

（価値を共有：やる気を高める）

・課題が発見されたら解決に向けて協力するなど、励ます

課題はそのまま放置すると不安になってしまいます。解決に向けて一緒に取り組んでいくことを話して励まします。

（例）コーディネーター「協力者はいますか ?」

住民「いえ、いません」

コーディネーター「そうなんですね」

(ここで止めると「いない」結論で終わってしまい不安になります)

コーディネーター「では、見つける方法を一緒に考えていきましょう」

・解決策として提案があるときには、最後に同意を求める形式で言う

コーディネーター「… という方法もありますが、どう思いますか ?」

（「提案をすぐにやりましょう」と伝えるのではなく、相手に必ず感想や同意を求めながら進めることが大切です)

（日本大学：内藤 佳津雄）

(3) 現役コーディネーターに聞いた「やる気」を高めるためのヒント

住民活動の立ち上げ経験豊富な現役コーディネーターに、住民活動の「やる気」を高めるために大切にしていること、気をつけていることなど、現場で役立つヒントを伺いました。

最初に住民の話を聞くとき、気をつけていること

住民が相談に来たら、しっかり聞く

多くのコーディネーターから聞いた言葉です。

リラックスしてもらうことから

相談の窓口は敷居が高く、本当に困っている人ほど窓口には来ないです。ちょっと会ったとき、思わずつぶやくことを聞き逃さないようにしています。

相談にいらしたときは、まずはお茶を出します。それからちょっと雑談してリラックスしてもらい、相手の話をゆっくり聞きます。

S さん
60 歳代　女性
社会福祉協議会に勤務。ボランティアコーディネーターなど歴 34 年。元保育士。社会福祉士。

思いや考えを徹底的に語ってもらう

最初に住民の「思いや考え」を徹底的に語ってもらいます。自分たちの思いや活動理念を自らの口で語れることは強みです。後々、活動が煮詰まりそうになってもぶれません。

「活動を始めたいと思った背景や原点」「やりたい活動の具体的なイメージ」も語ってもらいます。

相談時にここまでイメージがない場合は、参考となる活動を紹介します。

M さん
30 歳代　男性
社会福祉協議会に勤務。生活支援コーディネーター歴 2 年。社会福祉士。

住民の思いを引き出す「問いかけの言葉」

「よくわからないけれど、地域のためになにかやりたい」との相談があります。みなさんに主役になっていただきたくて「得意なこと」を伺っても、「なにもない」と答える人も多いです。

そんなときは「好きなことはなんですか？」と聞いています。

T さん
40 歳代　女性
社会福祉協議会に勤務。コミュニティソーシャルワーカー（歴 6 年）、生活支援コーディネーターを兼務（歴 3 年）。社会福祉士・保育士。

住民主体の意識を高めるために、大切なこと

住民から「活動しよう」の言葉が出るまで待つのが仕事

Oさん
60歳代　女性
社会福祉協議会の事務局長。社会福祉士。

計画段階では、何度も集まって話し合いをすることがあります。
住民から「いつまでも話し合っていないで、活動を始めよう」という言葉が出るまで待ちます。
社協が先に「こうしましょう」と言ったら、やらされ感が出てしまいます。だからその言葉が出るまで待つんです。
話し合いの日程も、できるだけ住民の方の都合に合わせます。こちらの都合で決めたら「行けません」という人が出てきます。

「楽しい」の連鎖が活動の原点に

Rさん
30歳代　男性
社会福祉協議会に勤務。生活支援コーディネーター歴2年。

活動の主役はあくまでも住民のみなさんです。コーディネーターを始め、専門職は裏方作業のお手伝いにすぎません。
「自分たちで、自分たちの地域を良くしたい」という気持ちを尊重し、みなさんが楽しみながら活動できるように後方支援しています。

自分たちで必要性を感じて取り組む

Mさん

住民が取り組む地域福祉活動の課題意識や重点項目は、住民が感じたものを尊重しています。住民自身が必要性を感じて、地域のことは自分たちでやろうと納得して取り組むことが充実した活動につながると思います。

地域住民に、地域に必要な活動であることを伝え理解してもらう

Sさん

新しく地域活動が立ち上がったら、地域の人々に、どんな地域貢献をしている活動なのかを伝えています。地域の人たちに知ってもらい理解されることで、活動者のやる気がでて、活動が地域に根づいていきます。

地域に新しい資源が生まれたことは、本当にすごいこと

Oさん

住民主体の活動が立ち上がり、まちに新しい資源が一つ生まれたことは、本当にすごいことだと思います。まちの財産なんです。
だから広く認めて欲しい。行政やメディアにもアピールしますし、地域の人から「すごく助かった」という話を聞いたら小さいエピソードでも団体に伝えるようにしています。

地域資源をつなげる工夫

集いの場（居場所）がもたらす支援の手

Mさん
30歳代　女性
社会福祉協議会に勤務。
生活支援コーディネーター歴2年。社会福祉士。

ボランティアと困りごとを抱える方が集いの場（居場所）を通して顔見知りになると、次の活動に発展していきます。
たとえば、ゴミ出しに不便を感じる方が「誰かにお手伝いして欲しいな」と思っていても気兼ねしてなかなかお願いできないですよね。
何度か顔を合わせ、会話をしていくうちに「じゃあ次のゴミの日にお手伝いに行くね」と、新たな支援が始まっていきます。

人が行き交う場所は、情報も集まり行き交う

Sさん

今、相談窓口カウンター前をフリマスペースにしています。不要品を持って来る人、欲しいものはないかを見に来る人、いつも人が行き交います。地域資源を把握するひとつの方法です。

次につなげる

たとえば、ボランティア保険加入に来た人がいたら、ただ手続きして帰すなんてもったいない。被災地支援に行くと聞いたら「今度向こうの様子を教えてください」と伝えることで、次につながります。

関係なさそうでも紹介

新しい人やモノに出会ったら、その場で必ず誰かに、すぐに関係がなさそうでも紹介しています。一度つながっておくと、新しい活動が生まれることに必ず役立ちます。

丁寧に対応する

Sさん
30歳代　男性
社会福祉協議会に勤務。
生活支援コーディネーター歴4ヶ月。社会福祉士。

「手伝って欲しい」と連絡があったら、時間を調整し、すぐに行けるようであれば「すぐに行きます」と答えます。一度断ってしまうと、遠慮されて関係が切れてしまうこともあるからです。自分がすぐ対応できないときは、別の職員に時間が空いているか聞いて行ってもらうようにしています。

「すごいですね」という言葉をよく使うと、多くのコーディネーターから聞きました。技法として使っているのではなく、「本当にすごいと思っているから」だとも伺いました。
住民と支援者との信頼関係を築くことが根底にあることを、たくさんのヒントから実感できます。

第２章

活動支援プランニングシートを使った進め方

[1] 活動支援プランニングシート

このシートは、生活支援コーディネーターなど住民活動の立ち上げや発展に関わる人がアセスメントとそれに基づく支援計画の立案、評価をアセット重視の視点で行うためのツールです。

(1) シート使用場面のイメージ

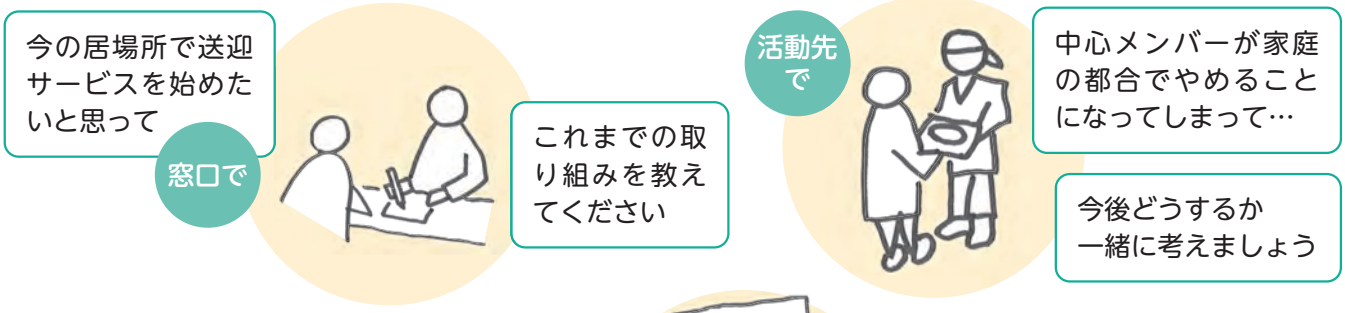
- すでに持っている“強みや良さ”の把握と、それを活かす支援計画を立案します。
- アセスメント → 支援計画の立案 → 評価過程が可視化できます。
- 団体情報と支援の記録の一元化ができます。

■取り組みの立ち上げ

- 住民から、新しく活動を立ち上げたい、という相談を受けたとき。
- 活動がない地域に取り組みを立ち上げたいとき。

■取り組みの発展

住民活動団体から、活動のメニューを増やしたり発展させたい、という相談を受けたとき。



■支援のスキルアップ

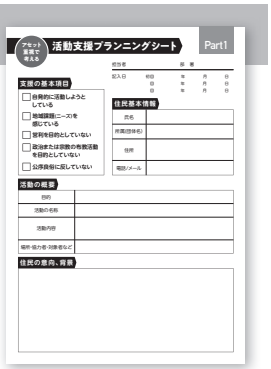
アセット重視の支援手法を学ぶ研修を行うとき。

(2) シートの構成

Part1

基本項目、活動概要など

支援の基本項目（チェック欄）／住民基本情報／活動の概要／住民の意向、背景（記載欄）



Part2-1

アセット項目チェックリスト

“強みや良さ”／支援の着眼点／事後（3つのチェック欄）

Part2-2

支援計画

メモ／支援計画／使う地域資源（記載欄）

Part3-1

価値項目チェックリスト

事前／事後（2つのチェック欄）

Part3-2

価値の評価

事前／事後（記載欄）

活動支援プランニングシートのダウンロード

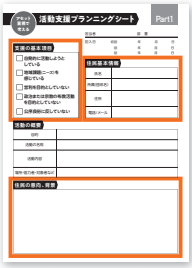
一般社団法人全国食支援活動協力会のホームページよりダウンロードできます。

http://www.mow.jp/

(3) シートの使い方の流れ

①住民の話を聞く

活動を始めたいなどの意向がある住民から地域でやりたいことや気持ち、背景、現在の状況などを聞き取り、記入する。



②アセットの把握をする

今持っている“強みや良さ”を項目にチェックする。

③“支援の着眼点”を見つける

支援や資源の調達が必要だと考える項目にチェックをする。

④支援計画を考える

③で着眼した項目に対する支援計画を考える

参考付録　・地域資源マップ　・支援メニューの例

⑤価値の評価（事前評価）

この活動によって、生まれたり高まることが期待できる価値の項目にチェックをする。

⑥支援策を実行する

⑦価値の評価（事後評価）を行う

〈活動立ち上がり後、１年後を目安〉

活動が立ち上がって１年を目安に、生まれたり高まった価値の項目をチェックし、評価を行う。

アセット重視で考える

活動支援プランニングシート

Part1

担当者　　部　署

記入日				
	初回	年	月	日
	回	年	月	日
	回	年	月	日

支援の基本項目

- ☐ 自発的に活動しようとしている
- ☐ 地域課題(ニーズ)を感じている
- ☐ 営利を目的としていない
- ☐ 政治または宗教の布教活動を目的としていない
- ☐ 公序良俗に反していない

住民基本情報

氏名	
所属(団体名)	
住所	
電話/メール	

活動の概要

目的	
活動の名称	
活動内容	
場所・協力者・対象者など	

住民の意向、背景

Part2-1 アセット項目チェックリスト

■〔強みや良さ〕今ある”強みや良さ”に該当する項目にチェック
■〔支援の着眼点〕支援や資源の調達が必要だと考える項目にチェック
■〔事後〕一年後を目安に、”強みや良さ”を再度チェック

			チェック欄		
			年　月　日		年　月　日
			強みや良さ	支援の着眼点	事後
1 人・担い手	1-1	担い手の数（　　人）現状で足りている			
	1-2	地域の住民や団体が主体となっている			
	1-3	多様な世代、多様な立場の人が担い手になっている			
	1-4	活動に必要な有資格者や、ノウハウを持っている人がいる			
2 人・利用者	2-1	利用者の数（　　人）現状で足りている			
	2-2	地域の人の参加が多くある			
	2-3	多様な世代、多様な立場の人が参加できる			
	2-4	多様な利用者が担い手にもなることができる			
3 場	3-1	活動内容にあった場所を確保できている			
	3-2	地域の人なら知っている場所で活動している			
	3-3	様々な立場の人にとってアクセスしやすい場所で活動している			
	3-4	空き家、空き店舗、空き時間などを活用している			
4 モノ・資金	4-1	活動するための資金・備品がある　現状で足りている			
	4-2	地域から資金・備品の提供を受けている			
	4-3	地域外から資金・備品の提供を受けている			
	4-4	環境に配慮した資源を活用している			
5 情報ネットワーク	5-1	地域や行政の情報を常に入手できるネットワークがある			
	5-2	町会・自治会、地域の行政・教育機関・施設・団体・商店など、地域の多様な機関と連携している			
	5-3	地域を越えた多様な機関と連携したり、取材や見学に応じることができる			
	5-4	専門職と連携している			
6 運営状況	6-1	定期的に開催している			
	6-2	地域の課題をつかんでおり、その課題を解決する活動を行っている			
	6-3	会報紙やチラシ、新聞・インターネットなどのメディアを通して活動の様子を発信・広報している			
	6-4	見学や研修など、活動を向上させる機会に参加している			
7 運営基盤	7-1	活動理念や目標を定めた会則、役割分担などの決まりごと、活動計画を立てられる			
	7-2	意思決定のしくみが明確である			
	7-3	安全に活動するための配慮がある			
	7-4	お金を適正に管理できる			

支援計画

メモ

（支援者側の考え、気づいた点）

支援計画

（住民側のアクション）	（支援者側のアクション）

使う地域資源

Part3-1 価値項目チェックリスト

■〔事前〕この活動がめざす価値／期待できると考える項目にチェック
■〔事後〕一年後を目安に生まれたり高まったと考えられる項目にチェック
■〔価値の共有〕高まった価値・良い評価は団体や地域と共有しましょう

			チェック欄	
			年 月 日	年 月 日
			事 前	事後
地域性	1	心配な人を気にかける目を増やせる		
	2	地域に安心感を生み出す		
	3	地域に活気を生み出す		
	4	さらなる潜在的な地域課題を発見する		
	5	さらなる地域の多様な主体の連携を通じて、まちづくりにつなげる		
開放性・展開性	6	誰でも担い手として参加できる		
	7	誰でも利用者になれる		
	8	多世代の交流ができる		
	9	多様な人の参加により、思いもよらなかった新たな活動が生まれる		
	10	後発の団体・取り組みが生まれる		
継続性	11	運営を担う人材が育成できる		
	12	運営の仕組みや体制が整備されている		
	13	継続のための資源（場・資金・備品など）が調達できる		
	14	様々な機関と連携し情報を得ることができる		
	15	利用者や地域からの信頼を得ることができる		
課題解決性	16	地域に見守りの体制ができる		
	17	孤立している人を減らせる		
	18	制度にない新たな取り組みが生まれる		
	19	施策横断的な取り組みや施策づくりのきっかけになる		
	20	中間支援や専門機関との連携ができる		

施策適合性（高齢者を対象にした活動の場合）	21	安否確認や相談によって高齢者が安心して生活できるようになる		
	22	生活支援によって高齢者が安心して生活できるようになる		
	23	高齢者の生きがいづくりができる		
	24	高齢者の健康増進・介護予防につながる		
	25	要支援・要介護の高齢者が参加できる		

価値の評価

事 前

（この活動がめざす価値、期待できること）

事 後

（新たに生まれたり高まったと考えられる価値）

[2] 活動支援プランニングシートの使い方

ケーススタディ

中本悠子さん

青空町に住む中本さん（72 才）
「なにか地域活動を始めたい（かも）」
と思っています

－現状－

ふれあい商店街で喫茶店を経営していた中本悠子さんは、店主であった夫が２年前に亡くなり、また自身が高齢になったこともあり、１年前にお店を閉めました。

商店街仲間からは「せっかく立地がいいところでやっていたのに場所がもったいない」と言われることが多く、以前から「ゆっくりおしゃべりできる、昔ながらの喫茶店がなくなってさみしい」「最近は子どもが商店街に来なくなったけれど、子どもにも商店街に来てほしい」という声もありました。

－中本さんの思い－

「お店を閉めて１年経ったけど、家にいても退屈」
「よく来てくれていた一人暮らしのお客さん、どうしているのかな」
「うちは立地も良かったし、お店でまたなにか始めようかな」
「隣町で空き店舗を使った居場所カフェを見たけれど、ここでもできるのかしら」

中本さんは自分の思いを民生委員・児童委員に話したところ…

中本さんから話を聞いた民生委員・児童委員は、
生活支援コーディネーターの加藤さんに中本さんの話をしました。

そうでしたか～
それでは、中本さんにお話を
伺ってきますね！

生活支援コーディネーター
加藤さん

加藤さんは【活動支援プランニングシート】を
持って、中本さんを訪ねました。

01 住民の話を聞く

活動を始めたいなどの意向がある住民から、
地域でやりたいことや気持ち、背景、現在の状況などを聞き取り、記入します。

こんにちは！
生活支援コーディネーターの
加藤です

こんにちは～
中本です

民生委員・児童委員さんから
お話を伺ったのですが、閉めた喫茶店で
なにかやりたいって思って
いらっしゃるそうですね

そうなんです。
商店街で 30 年間も経営していたから、
地域の人も知っている場所でね

いいですね。
地域の人もよく知っている
場所なんですね

よく一人暮らしの
お客さんも来ていて、居場所にも
なっていたんです

すてきですね

主人と始めたんだけど、
2 年前に主人が亡くなってね、
一人ではとても続けられ
なくて閉めたの

なるほど、そこでなにか
始めたいと思ったんですね

場所がもったいないし、
わたしもなにかしたい気持ちもあったから…

なるほど、
そうでしたか！

そうなの。実は隣町で
空き店舗を使った居場所カフェを見てね、
あれなら私にもできるんじゃないかって

立地もいいところだし、
人が来やすい場所ですしね。
いいかもしれませんね

記入するところ➡ Part1

① 【支援の基本項目】
内容を住民の人から聞き出しすべてに✓が入れば住民活動の立ち上げを支援する。

営利目的じゃないかな？

地域課題を把握してるかな？

中本さんの話を聞いたところ、「支援の基本項目」には全部✓が入るよ。支援する基準になるね！

② 【住民基本情報】
記入する。

③ 【住民の意向、背景】
住民の気持ちや意向、活動を始めたいと思った背景を記入する。

熱意や思いは？

なぜ活動したいと思ったんだろう

日付を書いて、今後も住民の気持ちに変化があったら追記していこう！

活動支援プランニングシート　Part1

アセット重視で考える

担当者　加藤　　部　署

記入日　初回　2020 年 2 月 14 日
回　年　月　日
回　年　月　日

1 **支援の基本項目**

- ☑ 自発的に活動しようとしている
- ☑ 地域課題(ニーズ)を感じている
- ☑ 営利を目的としていない
- ☑ 政治または宗教の布教活動を目的としていない
- ☑ 公序良俗に反していない

2 **住民基本情報**

氏名	中本 悠子
所属(団体名)	特になし
住所	●●区青空町123
電話/メール	yuuko-nakamoto@○○.jp

活動の概要

目的	
活動の名称	
活動内容	
3 所・協力者・対象者など	

住民の意向、背景　支援者の意向等は書かない

■2月14日
- ふれあい商店街で喫茶店を30年間やっていたが、ご主人の死去と自身の高齢を理由に2019年1月に閉店。
- 商店街仲間から「昔ながらのマスターとゆっくり話ができる喫茶店がなくなってさみしい」「商店街の入口にあって立ち寄りやすい、場所がもったいない」「子どもにも商店街に遊びに来て欲しい」「商店街に、いろんな人と交流できる場所が欲しい」と言われたことがある。
- 中本さんは、高齢を理由に店を閉じたものの「なにかやってみたい」と考えている。
- 店をやっていたとき、お客で来ていた一人暮らしの高齢者のことも気になっている。
- 隣町の空き店舗利用の居場所カフェを見て、これならできるのではと考えている。

記入するところ➡ Part2-2

④【メモ】
住民の話を聞いて、支援者としての考えや疑問、気になったことなどを記入する。

活動場所の周辺はどうなっているかな

商店街との連携を考えないといけない

支援計画 ④ Part2-2

メモ

（支援者側の考え、気づいた点）

- 本人のやる気もあり、空き店舗は自由に使える
- 地域包括支援センターへ参加対象者の相談
- 周知はどうするか
- 商店街での人間関係、様子、雰囲気はどうか
- 「子どもにも来てもらいたい」→　青空小・PTA・子ども会・幼稚園は？

支援計画

（住民側のアクション）

活動を行う場所や周辺環境など、支援者として気になっているところや気づいた点を記入しよう

使う地域資源

02 アセットの把握をする

今持っている“強みや良さ”の項目にチェックします。

（※活動を始める団体・人が今持っている・あるものなど）

居場所カフェをするとしたら、なにが使えそうですか？

それはいいですね！

まだ捨ててない食器もたくさんあって…

パン屋さんから残ったものがもらえるかもしれない、食べ物は多分大丈夫ね～

面白そうって言ってくれる商店街仲間もいるの

記入するところ➡ Part2-1

⑤【アセット項目チェックリスト】

［強みや良さ］
【1-2】地域の住民や団体が主体となっている
➡中本さんが主体で立ち上がりそう

［強みや良さ］
【5-1】地域や行政の情報を常に入手できるネットワークがある
➡中本さんは商店街で喫茶店を経営していたため、商店街のネットワーク、民生委員・児童委員とも面識がある

すべてのチェック項目に〇が付くことが目的ではありません。住民の話をよく聞き［強みや良さ］を把握しよう！

Part2-1 アセット項目チェックリスト 5

■（強みや良さ）今ある“強みや良さ”に該当する項目にチェック
■（支援の着眼点）支援や資源の調達が必要だと考える項目にチェック
■（事後）一年後を目安に、“強みや良さ”を再度チェック

			チェック欄		
			2020年 月 14日		年 月 日
			強みや良さ	支援の着眼点	事後
1 人・担い手	1-1	担い手の数（　　人）現状で足りている			
	1-2	地域の住民や団体が主体となっている	○		
	1-3	多様な世代、多様な立場の人が担い手になっている			
	1-4	活動に必要な有資格者や、ノウハウを持っている人がいる			
2 人・利用者	2-1	利用者の数（　　人）現状で足りている			
	2-2	地域の人の参加が多くある			
	2-3	多様な世代、多様な立場の人が参加できる			
	2-4	多様な利用者が担い手にもなることができる			
3 場	3-1	活動内容にあった場所を確保できている	○		
	3-2	地域の人なら知っている場所で活動している	○		
	3-3	様々な立場の人にとってアクセスしやすい場所で活動している	○		
	3-4	空き家、空き店舗、空き時間などを活用している	○		
4 モノ・資金	4-1	活動するための資金・備品がある　現状で足りている	○		
	4-2	地域から資金・備品の提供を受けている			
	4-3	地域外から資金・備品の提供を受けている			
	4-4	環境に配慮した資源を活用している			
5 情報・ネットワーク	5-1	地域や行政の情報を常に入手できるネットワークがある	○		
	5-2	町会・自治会、地域の行政・教育機関・施設・団体・商店など、地域の多様な機関と連携している			
	5-3	地域を越えた多様な機関と連携したり、取材や見学に応じることができる			
	5-4	専門職と連携している			
6 運営状況	6-1	定期的に開催している			
	6-2	地域の課題をつかんでおり、その課題を解決する活動を行っている			
	6-3	会報紙やチラシ、新聞・インターネットなどのメディアを通して活動の様子を発信・広報している			
	6-4	見学や研修など、活動を向上させる機会に参加している			
7 運営基盤	7-1	活動理念や目標を定めた会則、役割分担などの決まりごと、活動計画を立てられる			
	7-2	意思決定のしくみが明確である			
	7-3	安全に活動するための配慮がある			
	7-4	お金を適正に管理できる			

03 “支援の着眼点” を見つける

支援や資源の調達が必要だと考える項目にチェックをします。

（※“支援の着眼点”：現段階で支援が必要だと考えられるもの）

面白そうって言ってくれる商店街仲間がいるのはいいですね。手伝ってもらえそうですか

それでしたら、活動の内容を考えてみませんか？大体でいいので、イメージが決まったら、仲間に声をかけてみてはどうでしょうか

手伝ってもらえるかどうか、そこまではわからないわ

そうよね、そうしてみるわ

記入するところ➡ Part2-1

⑥【アセット項目チェックリスト】

[支援の着眼点]
【1-1】担い手の数（　　人）現状で足りている
➡商店街仲間は賛同しているようだが、何人が手伝ってくれるかわからない状態

[支援の着眼点]
【5-1】町会・自治会、地域の行政・教育機関・施設・団体・商店など、地域の多様な機関と連携している
➡孤立しがちな高齢者の居場所になるといいと思っている
➡子どもたちに来てもらいたいと思っているが、教育機関とのつながりはない

支援が必要だと思う項目にチェックをしよう。年月日の入れ忘れに注意！

Part2-1 アセット項目チェックリスト ⑥

■〔強みや良さ〕今ある“強みや良さ”に該当する項目にチェック
■〔支援の着眼点〕支援や資源の調達が必要だと考える項目にチェック
■〔事後〕一年後を目安に、“強みや良さ”を再度チェック

			チェック欄		
			2020年	2月14日	年 月 日
			強みや良さ	支援の着眼点	事後
1 人・担い手	1-1	担い手の数（　　人）現状で足りている		○	
	1-2	地域の住民や団体が主体となっている	○		
	1-3	多様な世代、多様な立場の人が担い手になっている			
	1-4	活動に必要な有資格者や、ノウハウを持っている人がいる			
2 人・利用者	2-1	利用者の数（　　人）現状で足りている			
	2-2	地域の人の参加が多くある			
	2-3	多様な世代、多様な立場の人が参加できる			
	2-4	多様な利用者が担い手にもなることができる			
3 場	3-1	活動内容にあった場所を確保できている	○		
	3-2	地域の人なら知っている場所で活動している	○		
	3-3	様々な立場の人にとってアクセスしやすい場所で活動している	○		
	3-4	空き家、空き店舗、空き時間などを活用している	○		
4 モノ・資金	4-1	活動するための資金・備品がある　現状で足りている	○		
	4-2	地域から資金・備品の提供を受けている			
	4-3	地域外から資金・備品の提供を受けている			
	4-4	環境に配慮した資源を活用している			
5 情報・ネットワーク	5-1	地域や行政の情報を常に入手できるネットワークがある	○		
	5-2	町会・自治会、地域の行政・教育機関・施設・団体・商店など、地域の多様な機関と連携している		○	
	5-3	地域を越えた多様な機関と連携したり、取材や見学に応じることができる			
	5-4	専門職と連携している			
6 運営状況	6-1	定期的に開催している			
	6-2	地域の課題をつかんでおり、その課題を解決する活動を行っている			
	6-3	会報紙やチラシ、新聞・インターネットなどのメディアを通して活動の様子を発信・広報している			
	6-4	見学や研修など、活動を向上させる機会に参加している			
7 運営基盤	7-1	活動理念や目標を定めた会則、役割分担などの決まりごと、活動計画を立てられる		○	
	7-2	意思決定のしくみが明確である		○	
	7-3	安全に活動するための配慮がある			
	7-4	お金を適正に管理できる			

04 支援計画を考える

03 で着眼した項目に対する支援計画を考えます

もしかしたら、お金が必要になってくるかもしれない

【支援策計画】
助成金の申請情報を伝える（必要に応じて）

まずは、活動内容を考えてきてもらおう

【支援計画】
居場所カフェの見学を勧める

使える資源はなにかな

【使用する地域資源】
カフェ（空き店舗）
商店街、商店街仲間
民生委員・児童委員

活動計画書を簡単でいいから作成してきてもらおう

【支援計画】
活動計画例を紹介し、必要であれば作成の支援

地域資源マップ

ヒアリング調査、ワークショップで伺った「自分の地域にある使えそうな地域資源」を参考に、アセット項目のカテゴリ別に作成しました。

P70-71 地域資源マップ

支援メニューの例

支援メニューの例
支援計画を立てるときのガイドとなる支援策の例をアセット項目のカテゴリ別にまとめました。

人・担い手の支援	ボランティア説明会や担い手養成講座を開催する
	ボランティア説明会や担い手養成講座の参加者と活動団体のマッチングを行う
	力になってくれそうな人や団体(地域のキーパソン、町会・自治会、地域のボランティアグループ、事業者、教育機関など)を紹介する
	担い手募集を自治体・社協の機関紙やウェブサイトで広報したりポスター・チラシなどを掲示する
	担い手のスキルアップにつながる情報の提供や講座を開催する
	福祉・医療・介護などの専門領域につなげる
	後継者やリーダーの補佐役を育てるための支援をする
人・利用者の支援	対象者の情報を持っている機関や団体(地域包括支援センター、事業所、協議体など)に紹介する
	地域組織(町会・自治会、老人会など)に紹介する
	地域の保育園・幼稚園、高齢者施設、障害者施設などに紹介する
	利用者募集を機関紙やウェブサイトで告知したり告知したりポスター・チラシなどを掲示する
	送迎など、利用者のアクセスを支援する
	利用者が安心して参加できるよう同行するなどの支援をする
場の支援	公民館・集会所などの施設利用、予約などの手続きや情報を提供する
	活動に活用できそうな公共施設や空き家等を紹介する
	民間の貸し会場やシェアスペースの情報を提供する
	福祉施設、学校施設などの空き時間に使えそうな場所の情報を提供する
	企業・店舗などの空き時間に使えそうな場所の情報を提供する
	公共施設の利用料を減免する
	空き家・空き店舗の借り上げ金を補助する
	活動内容に合った設備整備の支援をする

人・担い手の支援　たとえば、担い手のスキルアップにつながる、衛生管理の情報を伝えたり、傾聴講座を開催するなど
場の支援　たとえば、店舗が営業していない時間帯で、活動に活用できそうな情報を提供するなど
モノ資金の支援　たとえば、フードドライブや地元のスーパーで、食材提供をしてくれる情報を提供するなど

モノ資金の支援	市町村内の利用できそうな助成金・補助金・委託金の情報の提供や、担当窓口の紹介をする
	国や都道府県の利用できそうな助成金・補助金・委託金の情報の提供や窓口の紹介をする
	民間助成団体が行う助成金情報を紹介する
	助成金等の申請への推薦や、申請書の書き方の助言をする
	広報誌やウェブサイトで地域に物品の寄付を呼びかける
	地域住民や企業からの寄付物品のマッチングを行う
	リサイクル物品の仲介をする
	生活支援サービスの助成要件を見直す(条件を緩和するなど)
情報・ネットワーク／運営状況の支援	地域の情報や課題、ニーズを団体に伝える
	地域内の意見交換の場を設定する
	協議体の情報を団体に伝える
	広報誌やウェブサイトで団体の活動を広報する
	活動発表の機会をつくったり発表者として推薦する(研修会での事例紹介など)
	活動事例や先進事例を紹介したり見学に同行する
	団体の活動内容に応じた中間支援団体を紹介する
	チラシ・パンフレットやホームページの制作を支援する
	自治体広報、地元紙、ローカルメディアに取材してもらうよう働きかけを行う
	医療・福祉・介護・教育機関など他領域との連携を支援する
運営基盤の支援	話し合いの場のセッティングや合意形成のサポートをする
	活動日に出向いてスタッフとして活動に参加したり、ミーティングに出席する
	活動プランづくりを支援する(運営方法や役割分担など)
	会則づくりや会計管理などの運営に関するノウハウを教える
	定期的に連絡を取り、運営状況を見守る
	事務局や問い合わせ先としての機能を担う
	定期的に交流会を開催したり、一周年、三周年などの記念日を設定して活動を盛り立てる
	ボランティア保険の紹介や手続きを行う
	活動継続が困難になったりトラブルが起きたとき、課題整理や助言を行う

P72-73 支援メニューの例

記入するところ➡ Part2-2

⑦【支援計画】

住民側のアクション
- 活動計画を立てる
- 仲間を決めて、役割を決める
- 喫茶店を使えるように環境整備する（掃除など）

支援者側のアクション
- 定期的な連絡をする（週１回は必ず）
- 近くの居場所カフェや似ている活動の見学を勧める
- 地域包括支援センターに連絡し、居場所を利用しそうな人について相談する
- 活動計画の立て方を必要に応じて支援する
- 助成金の申請情報を必要に応じて伝える
- 近隣の教育機関とつなぐ（計画がはっきりしてから）

支援計画 Part2-2

メモ

（支援者側の考え、気づいた点）
- 本人のやる気もあり、空き店舗は自由に使える
- 地域包括支援センターへ参加対象者の相談
- 周知はどうするか
- 商店街での人間関係、様子、雰囲気はどうか
- 「子どもにも来てもらいたい」→　青空小・PTA・子ども会・幼稚園は？

⑦

支援計画

（住民側のアクション）	（支援者側のアクション）
・活動計画を立てる ・仲間に声をかけ、役割を決める ・喫茶店を使えるように環境整備する（掃除など）	・定期的な連絡をする（1週間に１回は必ず） ・近くの居場所カフェや似ている活動の見学を勧める（同行する） ・地域包括支援センターに連絡し、利用対象者の相談をする ・活動計画の立て方を必要に応じて支援 ・必要に応じて助成金の申請情報を伝える ・近隣の教育機関とつなぐ（計画などがはっきりしてから）

⑧

使う地域資源

空き店舗（ふれあい商店街の喫茶店“ブロッサム”）
商店街
商店街の協力してくれる仲間
　○○さん（薬局の店主）・○○さん（パン屋さん）
民生委員・児童委員

⑧【使う地域資源】
記入する

場所などの物理的なものだけでなく
人やネットワークも大切な地域資源です。
付録の [地域資源マップ][支援メニューの例][地域資源の活用から見た事例紹介] を参考に見てみよう！

＝後日＝

中本さんが、活動計画を決めて加藤さんのところに来ます。
活動が立ち上がるまでの支援内容や変更点は、このシートに随時、記録・更新していきます。

おお～！すごいですね！
では、一緒に
頑張りましょうね！

手伝ってもらいながら
だったけど、活動計画が
できました！

記入するところ➡ Part1

⑨【活動の概要】

活動の [目的][活動の名称][活動内容]
[場所・協力者・対象者] を記入する

この欄は、変更や更新がある度に随時追記・修正して、更新しよう！
（既存の団体が新たに活動を立ち上げる場合などは、新たな活動の情報を記入）

アセット重視で考える　活動支援プランニングシート　Part1

担当者　加藤　　部　署

記入日　初回　2020 年 2 月 14日
　　回　　年　　月　　日
　　回　　年　　月　　日

支援の基本項目

- ☑ 自発的に活動しようとしている
- ☑ 地域課題(ニーズ)を感じている
- ☑ 営利を目的としていない
- ☑ 政治または宗教の布教活動を目的としていない
- ☑ 公序良俗に反していない

住民基本情報

氏名	中本 悠子
所属(団体名)	特になし
住所	●●区青空町123
電話/メール	yuuko-nakamoto@○○.jp

⑨ **活動の概要**

目的	ふれあい商店街の空き店舗を使って、誰もが立ち寄れる居場所カフェにする
活動の名称	居場所カフェ
活動内容	週に2回、地域の高齢者や子供たちがお茶やお菓子を食べながら話したり、勉強や遊ぶことのできる場の提供をする
場所･協力者･対象者など	場　所：ふれあい商店街喫茶店“プロッサム” 対象者：商店街周辺の人・高齢者・子ども（特に幼稚園生・小学生）

住民の意向、背景

■2月14日
- ふれあい商店街で喫茶店を30年間やっていたが、ご主人の死去と自身の高齢を理由に2019年1月に閉店。
- 商店街仲間から「昔ながらのマスターとゆっくり話ができる喫茶店がなくなってさみしい」「商店街の入口にあって立ち寄りやすい、場所がもったいない」「子どもにも商店街に遊びに来て欲しい」「商店街に、いろんな人と交流できる場所が欲しい」と言われたことがある。
- 中本さんは、高齢を理由に店を閉じたものの「なにかやってみたい」と考えている。
- 店をやっていたとき、お客で来ていた一人暮らしの高齢者のことも気になっている。
- 隣町の空き店舗利用の居場所カフェを見て、これならできるのではと考えている。

05 価値の評価（事前評価）

この活動によって、生まれたり高まることが期待できる
評価の項目にチェックをします。

中本さんがつくる居場所カフェの1年後を想定して、どんなことができそうかな？

地域にとって安心感や活気が増えるきっかけになるかな、そうなるといいな

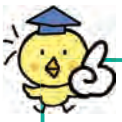
高齢者と子どもの交流ができるかな

年月日の入れ忘れ注意

記入するところ➡ Part3-1

⑩【価値項目チェックリスト】

「事前評価」の欄に“支援すること”で生まれたり高まることが期待できる項目に○をつける



すべてのチェック項目に○が付くことが目的ではなく、活動を通して生まれる・高まる価値を考えよう！

Part3-1 価値項目チェックリスト ⑩

■〔事前〕この活動がめざす価値／期待できると考える項目にチェック
■〔事後〕一年後を目安に生まれたり高まったと考えられる項目にチェック
■〔価値の共有〕高まった価値・良い評価は団体や地域と共有しましょう

			チェック欄 2020年2月14日 事前	チェック欄 年 月 日 事後
地域性	1	心配な人を気にかける目を増やせる	○	
	2	地域に安心感を生み出す	○	
	3	地域に活気を生み出す	○	
	4	さらなる潜在的な地域課題を発見する		
	5	さらなる地域の多様な主体の連携を通じて、まちづくりにつなげる		
開放性・展開性	6	誰でも担い手として参加できる		
	7	誰でも利用者になれる		
	8	多世代の交流ができる	○	
	9	多様な人の参加により、思いもよらなかった新たな活動が生まれる		
	10	後発の団体・取り組みが生まれる		
継続性	11	運営を担う人材が育成できる		
	12	運営の仕組みや体制が整備されている		
	13	継続のための資源（場・資金・備品など）が調達できる		
	14	様々な機関と連携し情報を得ることができる		
	15	利用者や地域からの信頼を得ることができる	○	
課題解決性	16	地域に見守りの体制ができる		
	17	孤立している人を減らせる	○	
	18	制度にない新たな取り組みが生まれる	○	
	19	施策横断的な取り組みや施策づくりのきっかけになる		
	20	中間支援や専門機関との連携ができる		
施策適合性（高齢者を対象にした活動の場合）	21	安否確認や相談によって高齢者が安心して生活できるようになる		
	22	生活支援によって高齢者が安心して生活できるようになる		
	23	高齢者の生きがいづくりができる	○	
	24	高齢者の健康増進・介護予防につながる		
	25	要支援・要介護の高齢者が参加できる		

記入するところ➡ Part3-2

⑪【事前】

今後は、近隣の大学生や
子育て世代の親も来るように
なるといいな

⑪ **事 前**

（この活動がめざす価値、期待できること）

- **元気高齢者のやりがい、生きがいにつながるような居場所になるといい。**
- **近隣の大学生や子育て世代の親の交流もできるかもしれない。**
- **地域包括支援センターと連携して、「気になっている人」が来られるようにしたい。**

メモとして使用する。
（期待できることなど）

［価値項目チェックリスト］
の内容以外に、考えられる価値や
期待できることを書こう！

06 支援計画を実行する

手伝ってくれる仲間が見つかったか、役割分担やお店の片付け、オープンまでの準備…定期的に様子を確かめよう

まず山田さんと一緒にお店の掃除をして、使える食器を確かめよう

隣町に参考になりそうな居場所や子ども食堂があったな。一度、中本さんと一緒に行ってみよう

鈴木さんは、人の話を聞くのが上手だから、手伝ってもらいたいな

近隣の一人暮らし高齢者の状況はどうかな、地域包括支援センターに聞いてみよう

チラシ作成が上手な人がいるわ、頼んでみよう

中本さんと一緒に、前に出すぎないように見守りつつ…
地域にあるものに目を向けて、つなげていこう！

住民の話を聞く ▶ アセットの把握をする ▶ 支援の着眼点を見つける ▶ 支援計画を考える ▶ 価値の評価（事前評価） ▶ 支援計画を実行する ▶ 一年後 ▶ 価値の評価（事後評価）

▼

一年後

07 価値の評価（事後評価）を行う

中本さん、カフェが
無事に立ち上がって１年が
経ちましたね

はい！
加藤さんと商店街の仲間が
手伝ってくれた
おかげです！

中本さんの気持ちが商店街に
今までなかった居場所カフェを
つくったんですよ！ すごいです！

そうかしら、
最初はわからないことだらけ
だったけど、あっという間に
１年経ったわ

１年経ってみて、
いかがですか？

大変なこともあるけど、
楽しみながらやっているわ。
最近は近くの小学生が遊びに
来るようになったの

おお～！ すごいですね！
多世代交流ですね～

あとは、
なにかしら…？

フリマをやることで
資金づくりだけでなく、商店街にも
活気が出てきたと思います。
商店街に居場所カフェがあるって
安心感がありますよね～

そうだと
嬉しいわ～♪

記入するところ➡ Part2-1

⑬【アセット項目チェックリスト】

活動が立ち上がったことで、どんな“強みや良さ”が増えたかな？

Part2-1 アセット項目チェックリスト

⑬

■〔強みや良さ〕今ある”強みや良さ”に該当する項目にチェック
■〔支援の着眼点〕支援や資源の調達が必要だと考える項目にチェック
■〔事後〕一年後を目安に、”強みや良さ”を再度チェック

			チェック欄		
			2020年 2月14日		21年2月24日
			強みや良さ	支援の着眼点	事後
1 人・担い手	1-1	担い手の数（　　人）現状で足りている		○	○
	1-2	地域の住民や団体が主体となっている	○		○
	1-3	多様な世代、多様な立場の人が担い手になっている			
	1-4	活動に必要な有資格者や、ノウハウを持っている人がいる			
2 人・利用者	2-1	利用者の数（　　人）現状で足りている			○
	2-2	地域の人の参加が多くある			○
	2-3	多様な世代、多様な立場の人が参加できる			
	2-4	多様な利用者が担い手にもなることができる			
3 場	3-1	活動内容にあった場所を確保できている	○		○
	3-2	地域の人なら知っている場所で活動している	○		○
	3-3	様々な立場の人にとってアクセスしやすい場所で活動している	○		○
	3-4	空き家、空き店舗、空き時間などを活用している	○		○
4 モノ・資金	4-1	活動するための資金・備品がある　現状で足りている	○		○
	4-2	地域から資金・備品の提供を受けている			
	4-3	地域外から資金・備品の提供を受けている			
	4-4	環境に配慮した資源を活用している			
5 情報ネットワーク	5-1	地域や行政の情報を常に入手できるネットワークがある	○		○
	5-2	町会・自治会、地域の行政・教育機関・施設・団体・商店など、地域の多様な機関と連携している		○	○
	5-3	地域を越えた多様な機関と連携したり、取材や見学に応じることができる			
	5-4	専門職と連携している			
6 運営状況	6-1	定期的に開催している			
	6-2	地域の課題をつかんでおり、その課題を解決する活動を行っている			○
	6-3	会報紙やチラシ、新聞・インターネットなどのメディアを通して活動の様子を発信・広報している			
	6-4	見学や研修など、活動を向上させる機会に参加している			
7 運営基盤	7-1	活動理念や目標を定めた会則、役割分担などの決まりごと、活動計画を立てられる		○	○
	7-2	意思決定のしくみが明確である		○	○
	7-3	安全に活動するための配慮がある			
	7-4	お金を適正に管理できる			○

チェック欄［事後］に、活動が立ち上がったことで生まれた・高まった“強みや良さ”に○をつける

［事後］
【5-2】町会・自治会、地域の行政・教育機関・施設・団体・商店など、地域の多様な機関と連携している
➡地域包括支援センターから紹介された人が来るようになった
➡近隣の教育機関（幼稚園、小学校）にも周知され連携体制が整った

［事後］
【2-2】地域の人の参加が多くなる
➡居場所カフェが商店街の中に立ち上がったことが話題になり、買物ついでにちょっと寄る地域の人が増えた

記入するところ➡ Part3-1

⑭【価値項目チェックリスト】

チェック欄 [事後] に活動が立ち上がったことで高まった価値や新たに生まれた価値に〇をする

活動が立ち上がったことで、生まれた価値、高まった価値はなにかな？

Part3-1 価値項目チェックリスト

⑭

■〔事前〕この活動がめざす価値／期待できると考える項目にチェック
■〔事後〕一年後を目安に生まれたり高まったと考えられる項目にチェック
■〔価値の共有〕高まった価値・良い評価は団体や地域と共有しましょう

			チェック欄 2020年2月14日 事前	チェック欄 21年2月24日 事後
地域性	1	心配な人を気にかける目を増やせる	〇	〇
	2	地域に安心感を生み出す	〇	〇
	3	地域に活気を生み出す	〇	〇
	4	さらなる潜在的な地域課題を発見する		
	5	さらなる地域の多様な主体の連携を通じて、まちづくりにつなげる		
開放性・展開性	6	誰でも担い手として参加できる		
	7	誰でも利用者になれる		〇
	8	多世代の交流ができる	〇	〇
	9	多様な人の参加により、思いもよらなかった新たな活動が生まれる		
	10	後発の団体・取り組みが生まれる		
継続性	11	運営を担う人材が育成できる		
	12	運営の仕組みや体制が整備されている		
	13	継続のための資源（場・資金・備品など）が調達できる		〇
	14	様々な機関と連携し情報を得ることができる		〇
	15	利用者や地域からの信頼を得ることができる	〇	
課題解決性	16	地域に見守りの体制ができる		〇
	17	孤立している人を減らせる	〇	〇
	18	制度にない新たな取り組みが生まれる	〇	〇
	19	施策横断的な取り組みや施策づくりのきっかけになる		
	20	中間支援や専門機関との連携ができる		
施策適 高齢者を対象に	21	安否確認や相談によって高齢者が安心して生活できるようになる		〇
	22	生活支援によって高齢者が安心して生活できるようになる		
	23	高齢者の生きがいづくりができる	〇	〇

[事後]
【継続性 13】継続のための資源 (場・資金・備品等) が調達できる
➡定期的に不要品のフリーマーケットを開催することで、資金を生み出すことができている
➡商店街のにぎわいづくりにもなっている

[事後]
【地域性 1 】心配な人を気にかける目を増やせる
➡商店街の中のカフェのため、買物ついでに立ち寄りやすい。一人で来た人や孤立しがちな人にとっても、居心地の良い場になっている

記入するところ➡ Part3-2

⑮【事後】
メモとして使用する（良い点・今後についてなど）。

【価値項目チェックリスト】の内容以外に生まれたり高まった価値があったら記入しよう！

価値の評価

Part3-2

事 前

（この活動がめざす価値、期待できること）

- 元気高齢者のやりがい、生きがいにつながるような居場所になるといい。
- 近隣の大学生や子育て世代の親の交流もできるかもしれない。
- 地域包括支援センターと連携して、「気になっている人」が来られるようにしたい。

⑮ **事 後**

（新たに生まれたり高まったと考えられる価値）

- **当初は小学生の自主学習スペースになることを想定していたが、近隣大学の教育サークルの学生が子どもたちの先生役として週に1回学習支援をしている。**

［事後］
当初は小学生の自主学習スペースになることを想定していたが、近隣大学の教育サークルの学生が子どもたちの先生役として週に 1 回学習支援をしている
地域包括支援センターが月に一度「なんでも相談」をしてくれるようになり、参加する高齢者の安心感が増した

主人が亡くなって
しばらく元気が出なかった
けれど、思い切って
始めて良かったわ

参加した人が、
カフェがあるおかげで
「知り合いが増えた」
「おしゃべりするのが楽しい」
って言ってました。
ここができて、
みんな喜んでいます

役に立っているのね、
うれしいわ

もちろんです。
商店街にも活気が出たと感じます。
無理なくこれからも続けられるように
したいですね

私も健康に
気をつけて
頑張るわね

[3] 活動支援プランニングシートを使った事例紹介

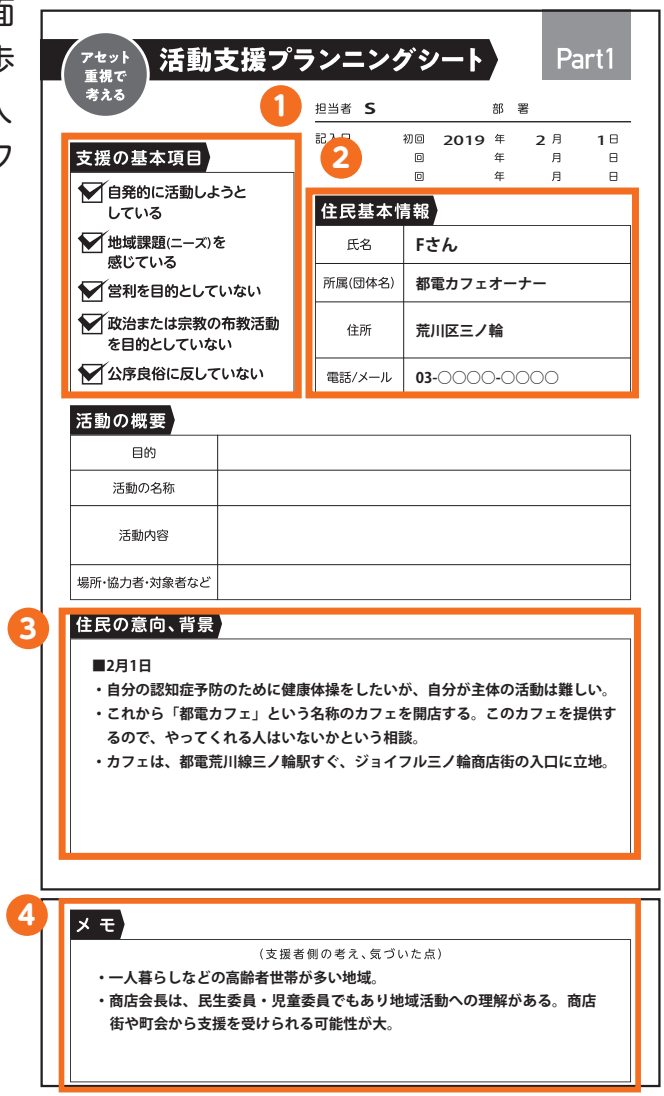
実際に立ち上がった活動を振り返りながら記入した、シートの記載例をご紹介します。

Sさんは、荒川区社会福祉協議会に勤務するコーディネーターです。
2019年2月、「都電カフェ」という店のオープンを予定している男性Fさんの相談を受けました。

住民の話を聞く ▶ アセットの把握をする ▶ 支援の着眼点を見つける ▶ 支援計画を考える ▶ 価値の評価（事前評価） ▶ 支援計画を実行する ▶ 三ヶ月後 ▶ 価値の評価（事後評価）

01 住民の話を聞く

Fさんの思いをじっくり聞きました。
「高齢になってきた自分のためにも認知症予防になる健康体操をしたい」
「会場として、お客さんがあまり来ない午前中、毎日でもカフェを貸し出したい」
「自分では活動ができないので、誰か活動してくれる人はいないかな」との相談でした。
話をする中で、高齢者が多い地域で、孤立などの課題を感じていることもわかりました。
都電カフェは、東京都荒川区を走る路面電車（都電荒川線）の三ノ輪駅から徒歩1分にあるジョイフル三ノ輪商店街の入口に立地。店内は広さもあり、バリアフリーであることもわかりました。


アセット重視で考える
活動支援プランニングシート
Part1
1
担当者 S　部 署
記入日 初回 2019 年 2 月 1 日
回 年 月 日
回 年 月 日
2
支援の基本項目
自発的に活動しようとしている
地域課題(ニーズ)を感じている
営利を目的としていない
政治または宗教の布教活動を目的としていない
公序良俗に反していない
住民基本情報
氏名 Fさん
所属(団体名) 都電カフェオーナー
住所 荒川区三ノ輪
電話/メール 03-○○○○-○○○○
活動の概要
目的
活動の名称
活動内容
場所・協力者・対象者など
3
住民の意向、背景
■2月1日
・自分の認知症予防のために健康体操をしたいが、自分が主体の活動は難しい。
・これから「都電カフェ」という名称のカフェを開店する。このカフェを提供するので、やってくれる人はいないかという相談。
・カフェは、都電荒川線三ノ輪駅すぐ、ジョイフル三ノ輪商店街の入口に立地。
4
メモ
（支援者側の考え、気づいた点）
・一人暮らしなどの高齢者世帯が多い地域。
・商店会長は、民生委員・児童委員でもあり地域活動への理解がある。商店街や町会から支援を受けられる可能性が大。

記入するところ➡ Part1

①【支援の基本項目】
すべてに✓が入ったので、支援を開始しました。

②【住民基本情報】
記入しました。

③【住民の意向、背景】
聞いた内容を記載しました。

記入するところ➡ Part2-2

④【メモ】
コーディネーターとして気づいたことを記載しました。

住民の話を聞く ▶ **アセットの把握をする** ▶ 支援の着眼点を見つける ▶ 支援計画を考える ▶ 価値の評価（事前評価） ▶ 支援計画を実行する ▶ 三ヶ月後 ▶ 価値の評価（事後評価）

02 アセットの把握をする

アセットリストを見ながら“強みや良さ”にチェックをつけました。

記入するところ➡ Part2-1

⑤【アセット項目チェックリスト】

［強みや良さ］
【3-1】活動内容にあった場所を確保できている
【3-3】様々な立場の人にとってアクセスしやすい場所で活動している
➡駅近くにあるカフェで、広さもありバリアフリーという、人が集まりやすい条件が揃っている

【3-4】空き時間などを活用
➡来客が少ない午前中を貸し出すので、活動してくれる人はいないかという希望

【6-2】地域の課題をつかんでいる
➡動機は、自分の認知症予防だが、高齢者が多い地域であり、自分と同じ課題を抱えている人がいることを感じている

Part2-1 アセット項目チェックリスト

■〔強みや良さ〕今ある”強みや良さ”に該当する項目にチェック
■〔支援の着眼点〕支援や資源の調達が必要だと考える項目にチェック
■〔事後〕一年後を目安に、”強みや良さ”を再度チェック

5

			チェック欄		
			2019年 月 1 日		年 月 日
			強みや良さ	支援の着眼点	事後
1 人・担い手	1-1	担い手の数（　　人）現状で足りている			
	1-2	地域の住民や団体が主体となっている			
	1-3	多様な世代、多様な立場の人が担い手になっている			
	1-4	活動に必要な有資格者や、ノウハウを持っている人がいる			
2 人・利用者	2-1	利用者の数（　　人）現状で足りている			
	2-2	地域の人の参加が多くある			
	2-3	多様な世代、多様な立場の人が参加できる			
	2-4	多様な利用者が担い手にもなることができる			
3 場	3-1	活動内容にあった場所を確保できている	○		
	3-2	地域の人なら知っている場所で活動している			
	3-3	様々な立場の人にとってアクセスしやすい場所で活動している	○		
	3-4	空き家、空き店舗、空き時間などを活用している	○		
4 モノ・資金	4-1	活動するための資金・備品がある　現状で足りている			
	4-2	地域から資金・備品の提供を受けている			
	4-3	地域外から資金・備品の提供を受けている			
	4-4	環境に配慮した資源を活用している			
5 情報・ネットワーク	5-1	地域や行政の情報を常に入手できるネットワークがある			
	5-2	町会・自治会、地域の行政・教育機関・施設・団体・商店など、地域の多様な機関と連携している			
	5-3	地域を越えた多様な機関と連携したり、取材や見学に応じることができる			
	5-4	専門職と連携している			
6 運営状況	6-1	定期的に開催している			
	6-2	地域の課題をつかんでおり、その課題を解決する活動を行っている	○		
	6-3	会報紙やチラシ、新聞・インターネットなどのメディアを通して活動の様子を発信・広報している			
	6-4	見学や研修など、活動を向上させる機会に参加している			
7 運営基盤	7-1	活動理念や目標を定めた会則、役割分担などの決まりごと、活動計画を立てられる			
	7-2	意思決定のしくみが明確である			
	7-3	安全に活動するための配慮がある			
	7-4	お金を適正に管理できる			

「場所が確保されていること」「地域の課題を感じていること」が強みであることを確認したよ！

03 “支援の着眼点”を見つける

アセットリストを見ながら“支援の着眼点”にチェックをつけました。

記入するところ➡ Part2-1

⑥【アセット項目チェックリスト】

【1-1】担い手確保の支援が必要
➡活動の担い手探しが一番の支援

【2-1】利用者確保の支援が必要
➡利用者確保の支援も必要

【5-4】専門家と連携する支援が必要
➡認知症予防や一人暮らしの高齢者対策を目的とするため、それらに対応できる専門家との連携が必要

【6-1】定期的に開催する支援が必要
➡定期的な開催ができる担い手を探す必要がある

【7-3】安全に活動するための配慮がある
➡活動中の保険について情報を提供

Part2-1 アセット項目チェックリスト ⑥

■（強みや良さ）今ある”強みや良さ”に該当する項目にチェック
■（支援の着眼点）支援や資源の調達が必要だと考える項目にチェック
■（事後）一年後を目安に、”強みや良さ”を再度チェック

			チェック欄 2019年 強みや良さ	2月1日 支援の着眼点	年 月 日 事後
1 人・担い手	1-1	担い手の数（　　人）現状で足りている		○	
	1-2	地域の住民や団体が主体となっている			
	1-3	多様な世代、多様な立場の人が担い手になっている			
	1-4	活動に必要な有資格者や、ノウハウを持っている人がいる			
2 人・利用者	2-1	利用者の数（　　人）現状で足りている		○	
	2-2	地域の人の参加が多くある			
	2-3	多様な世代、多様な立場の人が参加できる			
	2-4	多様な利用者が担い手にもなることができる			
3 場	3-1	活動内容にあった場所を確保できている	○		
	3-2	地域の人なら知っている場所で活動している			
	3-3	様々な立場の人にとってアクセスしやすい場所で活動している	○		
	3-4	空き家、空き店舗、空き時間などを活用している	○		
4 モノ・資金	4-1	活動するための資金・備品がある　現状で足りている			
	4-2	地域から資金・備品の提供を受けている			
	4-3	地域外から資金・備品の提供を受けている			
	4-4	環境に配慮した資源を活用している			
5 情報・ネットワーク	5-1	地域や行政の情報を常に入手できるネットワークがある			
	5-2	町会・自治会、地域の行政・教育機関・施設・団体・商店など、地域の多様な機関と連携している			
	5-3	地域を越えた多様な機関と連携したり、取材や見学に応じることができる			
	5-4	専門職と連携している		○	
6 運営状況	6-1	定期的に開催している		○	
	6-2	地域の課題をつかんでおり、その課題を解決する活動を行っている	○		
	6-3	会報紙やチラシ、新聞・インターネットなどのメディアを通して活動の様子を発信・広報している			
	6-4	見学や研修など、活動を向上させる機会に参加している			
7 運営基盤	7-1	活動理念や目標を定めた会則、役割分担などの決まりごと、活動計画を立てられる			
	7-2	意思決定のしくみが明確である			
	7-3	安全に活動するための配慮がある		○	
	7-4	お金を適正に管理できる			

「この場所を使って、高齢者を対象にした活動を定期的にできる団体を探すこと」「適した専門職と連携すること」が、支援の着眼点であることを確認したよ！

住民の話を聞く ▶ アセットの把握をする ▶ 支援の着眼点を見つける ▶ **支援計画を考える** ▶ 価値の評価（事前評価） ▶ 支援計画を実行する ▶ 三ヶ月後 ▶ 価値の評価（事後評価）

04 支援計画を考える

コーディネーターのＳさんは、早速、開店の準備が進む都電カフェを見に行き、その後、支援計画を考えました。

記入するところ➡ Part2-2

⑦【支援計画】

住民側のアクション
・会場を貸し出す際の条件などを整理してもらう

支援者側のアクション
・活動団体のマッチングを行う。様々なネットワークを使い声かけをする

⑧【使う地域資源】
社会福祉協議会がもっているネットワークを活用する。

支援計画 Part2-2

メモ

（支援者側の考え、気づいた点）
・一人暮らしなどの高齢者世帯が多い地域。
・商店会長は、民生委員・児童委員でもあり地域活動への理解がある。商店街や町会から支援を受けられる可能性が大。

⑦ 支援計画

（住民側のアクション）	（支援者側のアクション）
●会場貸出の条件整理 ・使える曜日、時間帯 ・使える備品 ・トイレの使い勝手の検討（2Fにあるとのこと） ●その他 ・気になることの検討	●会場の確認 ・広さ、バリアフリー、使える備品、使い勝手の確認 ●団体のマッチング ・活動してくれそうな団体を探す ・様々なネットワークを活用 例）体操教室をする団体 観光ボランティアの団体 鉄道好きな団体 ベーゴマなどの昔遊びの団体　など

⑧ 使う地域資源

カフェの空き時間
民生委員・児童委員、商店街、町会・自治会
公的機関（高齢者福祉課、地域包括支援センター、高齢者見守りステーション）
ボランティア（高齢者介護予防サロン運営）
荒川子ども応援ネットワークの関係者

＝後日＝

「この場所を使って、一人暮らしなどの高齢者を対象にした食事会ができたら」という団体が見つかりました。

荒川区の汐入地区で、一人暮らしなどの男性高齢者を対象に食事提供をしている「汐入地域食堂」を運営している団体が手をあげました。

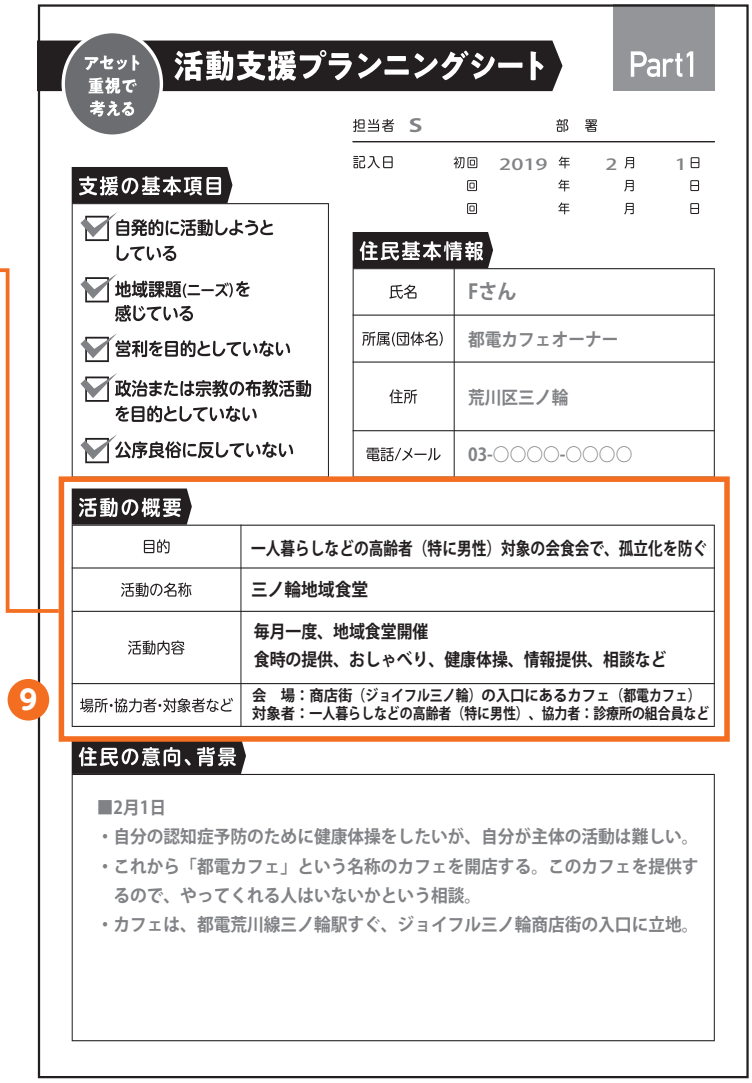
汐入地域食堂は、地域医療や認知症カフェなどに長年取り組んできた東京ほくと医療生活協同組合汐入診療所の看護師長が、一人暮らしのなどの高齢者、特に男性の食に偏りがあることに気づき立ち上げた活動です。主に高齢者を対象に、「子ども食堂」のような食事提供をしています。

同じような活動を三ノ輪地区でもできないかと、カフェの見学やＦさんと打合せを重ね、活動のイメージをつくりました。

記入するところ➡ Part1

⑨【活動の概要】

月１回、一人暮らしなどの高齢者（特に男性）を対象に、地域食堂を開催することになった



アセット重視で考える

活動支援プランニングシート　Part1

担当者 S　部署

記入日　初回 2019 年 2 月 1 日
回　年　月　日
回　年　月　日

支援の基本項目

- ☑ 自発的に活動しようとしている
- ☑ 地域課題(ニーズ)を感じている
- ☑ 営利を目的としていない
- ☑ 政治または宗教の布教活動を目的としていない
- ☑ 公序良俗に反していない

住民基本情報

氏名	Fさん
所属(団体名)	都電カフェオーナー
住所	荒川区三ノ輪
電話/メール	03-○○○○-○○○○

活動の概要

目的	一人暮らしなどの高齢者（特に男性）対象の会食会で、孤立化を防ぐ
活動の名称	三ノ輪地域食堂
活動内容	毎月一度、地域食堂開催 食時の提供、おしゃべり、健康体操、情報提供、相談など
場所・協力者・対象者など	会　場：商店街（ジョイフル三ノ輪）の入口にあるカフェ（都電カフェ） 対象者：一人暮らしなどの高齢者（特に男性）、協力者：診療所の組合員など

住民の意向、背景

■2月1日
- 自分の認知症予防のために健康体操をしたいが、自分が主体の活動は難しい。
- これから「都電カフェ」という名称のカフェを開店する。このカフェを提供するので、やってくれる人はいないかという相談。
- カフェは、都電荒川線三ノ輪駅すぐ、ジョイフル三ノ輪商店街の入口に立地。

住民の話を聞く ▶ アセットの把握をする ▶ 支援の着眼点を見つける ▶ 支援計画を考える ▶ **価値の評価（事前評価）** ▶ 支援計画を実行する ▶ 三ヶ月後 ▶ 価値の評価（事後評価）

05 価値の評価（事前評価）

コーディネーターのＳさんが、この活動がめざす方向や期待できることにチェックをつけました。

記入するところ➡ Part3-1

⑩【価値項目チェックリスト】

地域に活気を生み出す
➡高齢者の集いの場ができることで、定期的に通う人が増え、商店街活性化に寄与することが期待できる

誰でも利用者になれる
➡商店街を往来する人に声かけすることで、買物ついでの人、これまでサロンに来なかった新たな層の参加者が期待できる

様々な機関と連携し情報を得ることができる
➡診療所が関わることで、認知症予防などに関する専門的な知識を得ながら取り組むことができる

孤立している人を減らせる
➡一人暮らしなどの高齢者が多いこの地域に活動が生まれると、孤立している人と地域がつながることが期待できる

Part3-1 価値項目チェックリスト

■〔事前〕この活動がめざす価値／期待できると考える項目にチェック
■〔事後〕一年後を目安に生まれたり高まったと考えられる項目にチェック
■〔価値の共有〕高まった価値・良い評価は団体や地域と共有しましょう

⑩

			チェック欄 2019年7月1日 事前	チェック欄 年 月 日 事後
地域性	1	心配な人を気にかける目を増やせる		
	2	地域に安心感を生み出す		
	3	地域に活気を生み出す	○	
	4	さらなる潜在的な地域課題を発見する		
	5	さらなる地域の多様な主体の連携を通じて、まちづくりにつなげる		
開放性・展開性	6	誰でも担い手として参加できる		
	7	誰でも利用者になれる	○	
	8	多世代の交流ができる		
	9	多様な人の参加により、思いもよらなかった新たな活動が生まれる		
	10	後発の団体・取り組みが生まれる		
継続性	11	運営を担う人材が育成できる		
	12	運営の仕組みや体制が整備されている		
	13	継続のための資源（場・資金・備品など）が調達できる		
	14	様々な機関と連携し情報を得ることができる	○	
	15	利用者や地域からの信頼を得ることができる		
課題解決性	16	地域に見守りの体制ができる		
	17	孤立している人を減らせる		
	18	制度にない新たな取り組みが生まれる	○	
	19	施策横断的な取り組みや施策づくりのきっかけになる		
	20	中間支援や専門機関との連携ができる		
施策適合性（高齢者を対象にした活動の場合）	21	安否確認や相談によって高齢者が安心して生活できるようになる		
	22	生活支援によって高齢者が安心して生活できるようになる		
	23	高齢者の生きがいづくりができる		
	24	高齢者の健康増進・介護予防につながる	○	
	25	要支援・要介護の高齢者が参加できる		

高齢者の健康増進・介護予防につながる
➡高齢者の食の栄養の偏りが気になることから始まった団体が取り組むので、高齢者に合った食事提供が期待できる

住民の話を聞く ▶ アセットの把握をする ▶ 支援の着眼点を見つける ▶ 支援計画を考える ▶ **価値の評価（事前評価）** ▶ 支援計画を実行する ▶ 三ヶ月後 ▶ 価値の評価（事後評価）

記入するところ➡ Part3-2

「価値項目チェックリスト」の内容以外では…

⑪【事前】

⑪

価値の評価　Part3-2

事 前

（この活動がめざす価値、期待できること）

・担い手や参加者の声かけに、地域の人（民生委員・児童委員、町会・自治会、商店街など）が関わるようになれば、地域とのつながりが深まり顔見知りが増える。

事 後

（新たに生まれたり高まったと考えられる価値）

住民の話を聞く ▶ アセットを把握する ▶ 支援の着眼点を見つける ▶ 支援計画を考える ▶ 価値の評価（事前評価） ▶ **支援策を実行する** ▶ 三ヶ月後 ▶ 価値の評価（事後評価）

06 支援計画を実行する

2019年11月にプレで実施、
12月から正式にスタートしました。

▶ 三ヶ月後

住民の話を聞く ▶ アセットの把握をする ▶ 支援の着眼点を見つける ▶ 支援計画を考える ▶ 価値の評価（事前評価） ▶ 支援計画を実行する ▶ 三ヶ月後 ▶ **価値の評価（事後評価）**

07 価値の評価（事後評価）を行う

活動スタートから三ヶ月経った時点で、これまでの活動を振り返りました。
【アセット項目チェックリスト】[事後] に、支援したことで生まれたり高まった“強みや良さ”に○をしました。

記入するところ➡ Part2-1

⑩【価値項目チェックリスト】

【1-1】担い手の数約 15 人　現状で足りている
➡汐入地域食堂のスタッフおよび地域のボランティが参加し、担い手は足りている

【1-3】多様な立場の人が担い手になっている
➡地域包括支援センターから呼びかけた軽度認知症のある人が、ボランティアとして参加している

【2-1】利用者の数約 25 人 現状で足りている
➡事前に対象者への PR を行ったほか、当日は商店街を行き交う人々に声をかけ、買物ついでに気軽に寄る人もいる

【5-3】取材に応じることができる
➡カフェスペースを活用し、一人暮らしのなどの男性高齢者を対象にした居場所として、新聞に取り上げられた

Part2-1 アセット項目チェックリスト ⑩

■〔強みや良さ〕今ある”強みや良さ”に該当する項目にチェック
■〔支援の着眼点〕支援や資源の調達が必要だと考える項目にチェック
■〔事後〕一年後を目安に、”強みや良さ”を再度チェック

			チェック欄		
			2019年 2月1日		20年3月1日
			強みや良さ	支援の着眼点	事後
1 人・担い手	1-1	担い手の数（　　人）現状で足りている		○	○
	1-2	地域の住民や団体が主体となっている			
	1-3	多様な世代、多様な立場の人が担い手になっている			○
	1-4	活動に必要な有資格者や、ノウハウを持っている人がいる			
2 人・利用者	2-1	利用者の数（　　人）現状で足りている		○	○
	2-2	地域の人の参加が多くある			
	2-3	多様な世代、多様な立場の人が参加できる			
	2-4	多様な利用者が担い手にもなることができる			
3 場	3-1	活動内容にあった場所を確保できている	○		○
	3-2	地域の人なら知っている場所で活動している			
	3-3	様々な立場の人にとってアクセスしやすい場所で活動している	○		○
	3-4	空き家、空き店舗、空き時間などを活用している	○		○
4 モノ・資金	4-1	活動するための資金・備品がある　現状で足りている			
	4-2	地域から資金・備品の提供を受けている			
	4-3	地域外から資金・備品の提供を受けている			
	4-4	環境に配慮した資源を活用している			
5 情報・ネットワーク	5-1	地域や行政の情報を常に入手できるネットワークがある			
	5-2	町会・自治会、地域の行政・教育機関・施設・団体・商店など、地域の多様な機関と連携している			
	5-3	地域を越えた多様な機関と連携したり、取材や見学に応じることができる			○
	5-4	専門職と連携している		○	○
6 運営状況	6-1	定期的に開催している		○	○
	6-2	地域の課題をつかんでおり、その課題を解決する活動を行っている	○		○
	6-3	会報紙やチラシ、新聞・インターネットなどのメディアを通して活動の様子を発信・広報している			
	6-4	見学や研修など、活動を向上させる機会に参加している			
7 運営基盤	7-1	活動理念や目標を定めた会則、役割分担などの決まりごと、活動計画を立てられる			
	7-2	意思決定のしくみが明確である			
	7-3	安全に活動するための配慮がある		○	○
	7-4	お金を適正に管理できる			

住民の話を聞く ▶ アセットの把握をする ▶ 支援の着眼点を見つける ▶ 支援計画を考える ▶ 価値の評価（事前評価） ▶ 支援計画を実行する ▶ 三ヶ月後 ▶ **価値の評価（事後評価）**

記入するところ➡ Part3-1

⑭【価値項目チェックリスト】

【価値項目チェックリスト】[事後] に、活動が立ち上がったことで生まれたり高まった価値に○をしました

[事後]
当初想定した価値は、すべて確認できた

[事後]
【地域性 1】心配な人を気にかける目を増やせる
➡地域での顔見知りが増え、お互いに気をかけるつながりが広がっている

[事後]
【開放性・展開性 6】誰でも担い手として参加できる
➡地域包括支援センターから呼びかけた軽度認知症のある人が、ボランティアとして参加している

[事後]
【課題解決性 16】中間支援や専門機関との連携ができる
【施策適合性 21】安否確認や相談によって高齢者が安心して生活できるようになる
➡行政や社協、地域包括支援センター、医療機関と連携し、高齢者が地域で安心して暮らせるネットワークがつくられている

Part3-1 価値項目チェックリスト

⑭

■〔事前〕この活動がめざす価値／期待できると考える項目にチェック
■〔事後〕一年後を目安に生まれたり高まったと考えられる項目にチェック
■〔価値の共有〕高まった価値・良い評価は団体や地域と共有しましょう

			チェック欄 2019年2月1日 事前	チェック欄 20 年3月1日 事後
地域性	1	心配な人を気にかける目を増やせる		○
	2	地域に安心感を生み出す		
	3	地域に活気を生み出す	○	○
	4	さらなる潜在的な地域課題を発見する		
	5	さらなる地域の多様な主体の連携を通じて、まちづくりにつなげる		
開放性・展開性	6	誰でも担い手として参加できる		○
	7	誰でも利用者になれる	○	○
	8	多世代の交流ができる		
	9	多様な人の参加により、思いもよらなかった新たな活動が生まれる		
	10	後発の団体・取り組みが生まれる		
継続性	11	運営を担う人材が育成できる		
	12	運営の仕組みや体制が整備されている		
	13	継続のための資源（場・資金・備品など）が調達できる		
	14	様々な機関と連携し情報を得ることができる	○	○
	15	利用者や地域からの信頼を得ることができる		
課題解決性	16	地域に見守りの体制ができる		○
	17	孤立している人を減らせる		
	18	制度にない新たな取り組みが生まれる	○	○
	19	施策横断的な取り組みや施策づくりのきっかけになる		
	20	中間支援や専門機関との連携ができる		
施策適合性（高齢者を対象にした活動の場合）	21	安否確認や相談によって高齢者が安心して生活できるようになる		○
	22	生活支援によって高齢者が安心して生活できるようになる		
	23	高齢者の生きがいづくりができる		
	24	高齢者の健康増進・介護予防につながる	○	○
	25	要支援・要介護の高齢者が参加できる		

記入するところ➡ Part3-2

⑮【事後】
活動が立ち上がったことで、生まれたり高まった価値を記入しました。

価値の評価　Part3-2

事 前

（この活動がめざす価値、期待できること）

・担い手や参加者の声かけに、地域の人（民生委員・児童委員、町会・自治会、商店街など）が関わるようになれば、地域とのつながりが深まり顔見知りが増える。

⑮ **事 後**

（新たに生まれたり高まったと考えられる価値）

・新聞に取り上げられたことで、活動内容が広く地域にPRでき、新たな参加者獲得につながっている
・また、担い手のやりがいにもつながった。

・開催日には、地域包括支援センターと高齢者見守りステーションが交互に参加しており、高齢者の相談に対応している。
・専門職と連携することで、安心感のある居場所づくりになっている。

価値の共有

コーディネーターのＳさんは、「三ノ輪地域食堂」の価値を人に伝え共有しています。

地域へ・メディアへ

一人暮らしなどの高齢者が多い地域で、特に食のバランスが偏りがちな男性に来て欲しいと考え開催している居場所です。カフェの空き時間を活用しているところも特徴的です。

Ｆさんに

地域の大勢の人に関わってもらうことで、顔見知りの関係が広がりましたね。すごいですね。

行政へ

高齢者向けのメニュー提供や、商店街入口という立地の良さが、高齢者の参加につながっています。ボランティアは元気高齢者で、介護予防の効果もあります。高齢者施策に貢献している活動です。

三ノ輪地域食堂の活動の様子

都電カフェの入口

東京新聞 荒川版　2019年（令和元年）12月13日（金曜日）

食べて、話して交流を

カレーなどを食べる人たち＝荒川区で

1人暮らし高齢者へ 地域食堂

南千住にオープン

地域の高齢者らが食事をしながら楽しく会話する「三ノ輪地域食堂」が9日、荒川区南千住1の都電カフェ三ノ輪のスペースを借りてオープンした。今後、月に1度、月曜日に開催する予定。

地域食堂は、1人暮らしの男性高齢者らが地域とつながれる場所をつくろうと、区内の東京ほくと医療生活協同組合沒入診療所（南千住8）が開設する。11月に試験的に実施し、正式オープンとなった。

初日の9日のメニューは、ボランティアらが調理したカレー、みそ汁、デザートなどだった。午前11時半の開店と同時に、続々と高齢者らが入店し、料理が運ばれると、「温かいカレーはおいしい」などと満足そうに平らげた。

沒入診療所看護師長の鈴木良恵さんは「1人暮らしだと作るのも大変。みんなの顔を見ておいしく食べてほしい」と話した。

地域食堂は食事代300円。来年1月6日、2月3日にも開催が決まっている。問い合わせは、共催の区社会福祉協議会荒川ボランティアセンター＝電03（3802）3338＝へ。

（天田優里）

東京新聞に掲載（2019.12.13）

食事をしながらおしゃべり

付 録

地域資源マップ

支援メニューの例

地域資源の活用から見た事例紹介

地域資源マップ

人

- 地域の人が活躍する
- 多世代/多様な人が関わる
- 誰でも担い手、利用者になる
- 専門性がある人と連携する

専門性のある人

相談や指導ができる

- 民生委員・児童委員
- 医師
- 看護師
- 保健師
- 栄養士
- 社会福祉士
- 介護福祉士
- ケアマネジャー
- 精神保健福祉士
- 音楽療法士
- 大学の先生　・学校の教員
- プロボノ（職業上持っている知識やスキルを無償提供して社会貢献する専門家）
- 食生活改善推進員
- 防災士　など

地域で活動する人

役職がある人 活動できる人

- 町会・自治会
- 老人会・老人クラブ
- 婦人会
- 青年団・壮年団
- PTA
- まちづくり推進委員
- 介護予防サポーター
- 地域福祉推進委員
- ボランティア団体、NPO
- 認知症サポーター
- スクールガード
- 地域サポーター
- 生協
- 地域経済団体（ロータリークラブ、ライオンズクラブ、青年会議所など）　など

地域の人

住んでいる人 働いている人 学んでいる人 遊びに来る人

- 高齢者
- 退職した人
- 働いている人
- 働いていない人
- 子育て中の人
- 主婦・主夫
- 保育園児・幼稚園児
- 小学生
- 中学生
- 高校生
- 専門学生
- 大学生
- 大学院生
- 障害者
- 外国人
- 観光客
- ボランティア　など

場

- 空き家・空き店舗
- 空きスペース・時間帯
- 集まりやすさ
- 設備がある（防音・キッチンつきなど）
- アクセスしやすい

公共施設など

費用が安い

- 公民館・集会所
- 児童館
- 小・中・高校、大学
- 図書館
- スポーツ施設（体育館・グラウンド）
- 役所
- 社会福祉協議会
- 病院（待合室・プレイルーム）
- 児童養護施設（グラウンド・プレイルーム）
- 子ども家庭支援センター
- 精神保健福祉センター
- ヘルスケアセンター
- 市民活動サポートセンター
- 地域活動支援センター
- 生活支援センター　など

子どもに関する施設

- 小・中・高校、大学
- 児童館
- 学童保育
- 放課後等デイサービス
- 子育てサロン
- 子ども食堂 など

高齢者などに関する施設

利用者が限定

- 特別養護老人ホーム
- 有料老人ホーム
- グループホーム
- デイサービス
- デイケア
- 障害者福祉センター　など

娯楽・集客・宗教施設

- 美術館
- 博物館
- 科学館
- 水族館
- 植物園
- 遊園地
- 駅・空港
- スポーツ施設（民間）
- 神社
- 教会
- お寺　など

店舗・民間施設・企業

そこならではの魅力がある

- 喫茶店
- 居酒屋
- コンビニエンスストア
- スーパー
- ショッピングモール（イートインスペース・オープンキッチン）
- 銭湯・温泉（食事処・入浴場・休憩場）
- 企業（ロビー・貸しスペースなど）　など

ヒアリング調査、ワークショップで伺った「自分の地域にある使えそうな地域資源」を参考に、アセット項目のカテゴリ別に作成しました。

モノ・資金

・資金を調達する
・モノを提供してもらう
・モノを借りる
・地域活動でつくっているものを活用する

物品貸出または寄付が期待できる施設など

高齢者関係
・特別養護老人ホーム
・有料老人ホーム
・グループホーム
・デイサービス
・デイケア
・障害者福祉センター
など

子ども関係
・小・中・高校
・大学
・児童館
・学童保育
・放課後等デイサービス
・子育てサロン
・子ども食堂　など

地域経済団体
・ロータリークラブ
・ライオンズクラブ
・青年会議所　など

地域内
・町会・自治会
・老人会、老人クラブ
・婦人会・青年団・壮年団
・漁協・農協　・生協
・NPO法人
・地方自治体
・教会　・神社
・お寺(おてらおやつクラブ)
・児童館・公民館
・社会福祉協議会
・地域包括支援センター
・ボランティア協議会
・保健センター・保健所
・図書館
(処分本の寄付など)
・スポーツ施設(公共・民間)
(スポーツ用品の貸出)
・商店会
・個人商店
・スーパー
(賞味期限が近い商品寄付など)
・温泉・銭湯
・青少年の家、自然の家

借りるも大切な視点

やっていることつくっているものを活用

物品の貸出・提携が期待できる施設など

・水族館(環境スクール)
・植物園　・遊園地
・科学館
(夏休みの自由研究イベント)
・博物館　・美術館
・社会奉仕団体
・商工会議所　・企業
・生協　・農協
・中間支援組織
・障害者施設
(施設で作られた物品)
・依存症更生施設
(入居者がつくる農作物の利用など)
・配食サービス(配食弁当の利用)
・ショッピングモール など

身近でできることもある

資金調達方法

・地域振興券
・フードバンク
・リサイクル品
・引き出物
(地域内でフリーマーケット)
・募金
・クラウドファンディング
・地域通貨
・助成金　など
・寄付　・バザー
・コンビニ
・不要入歯回収
・ペットボトルキャップ

情報・ネットワーク

・担い手や参加者の呼びかけをする
・課題を解決するための相談ができる

専門性の高い地域の情報を持つ施設

・地方自治体
・病院
・保健センター、保健所
・精神保健福祉センター
・障害者福祉センター
・社会福祉協議会
・地域包括支援センター
・ボランティア協議会
・図書館
・教育機関
・児童館
・子ども家庭支援センター
・児童相談所
・福祉事務所
・就労移行支援事業所
・国際協力協会
・警察
・消防署　など

教育、医療 防犯防災 関係者など

専門性の情報・地域の情報を持つ人

・医師
・看護師
・保健師
・栄養士
・社会福祉士
・ケアマネジャー
・介護福祉士
・精神保健福祉士
・学校教員
・警察官
・防災士
・鍼灸師・あんま師
(地域の高齢者の情報を持っている可能性)
・モデル的活動団体の人
(ノウハウの情報提供)
など

地域の情報に特化した人

・民生委員・児童委員
・小・中・高生
・専門学校生
・大学生
・大学院生
・子育て中の人
・地域のコミュニティグループ
(婦人会・老人会・町会・青年団・壮年団など)
・地域のボランティアグループ
・まちづくり推進委員
・食生活改善推進員
・認知症サポーター
・地域福祉推進委員
・スクールガード
・介護予防サポーター
・地域サポーター
など

地域の中に特徴あるコミュニティ

紙媒体 インターネット TV・ラジオ 地域枠

広報媒体・手段

・広報誌
・ポスター・チラシ
(回覧板・掲示板など)
・地方情報コーナー
・ボランティア冊子
・新聞
・SNS
・住民向けメール
・ラジオ
・ケーブルテレビ

支援メニューの例

支援メニューの例
支援計画を立てるときのガイドとなる支援策の例をアセット項目のカテゴリ別にまとめました。

人・担い手の支援	ボランティア説明会や担い手養成講座を開催する
	ボランティア説明会や担い手養成講座の参加者と活動団体のマッチングを行う
	力になってくれそうな人や団体(地域のキーパソン、町会・自治会、地域のボランティアグループ、事業者、教育機関など)を紹介する
	担い手募集を自治体・社協の機関紙やウェブサイトで広報したりポスター・チラシなどを掲示する
	担い手のスキルアップにつながる情報の提供や講座を開催する
	福祉・医療・介護などの専門領域につなげる
	後継者やリーダーの補佐役を育てるための支援をする
人・利用者の支援	対象者の情報を持っている機関や団体(地域包括支援センター、事業所、協議体など)に紹介する
	地域組織(町会・自治会、老人会など)に紹介する
	地域の保育園・幼稚園、高齢者施設、障害者施設などに紹介する
	利用者募集を機関紙やウェブサイトで告知したり告知したりポスター・チラシなどを掲示する
	送迎など、利用者のアクセスを支援する
	利用者が安心して参加できるよう同行するなどの支援をする
場の支援	公民館・集会所などの施設利用、予約などの手続きや情報を提供する
	活動に活用できそうな公共施設や空き家等を紹介する
	民間の貸し会場やシェアスペースの情報を提供する
	福祉施設、学校施設などの空き時間に使えそうな場所の情報を提供する
	企業・店舗などの空き時間に使えそうな場所の情報を提供する
	公共施設の利用料を減免する
	空き家・空き店舗の借り上げ金を補助する
	活動内容に合った設備整備の支援をする

人・担い手の支援 たとえば、担い手のスキルアップにつながる、衛生管理の情報を伝えたり、傾聴講座を開催するなど

場の支援 たとえば、店舗が営業していない時間帯で、活動に活用できそうな情報を提供するなど

モノ資金の支援 たとえば、フードドライブや地元のスーパーで、食材提供をしてくれる情報を提供するなど

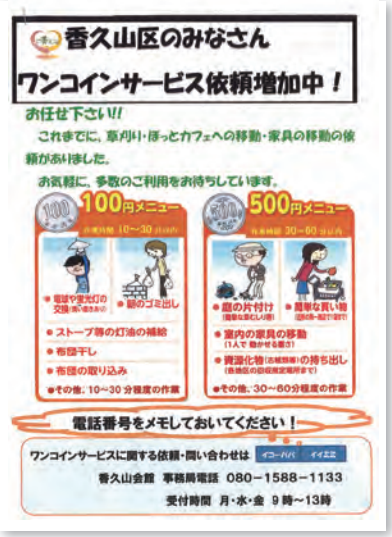
モノ資金の支援	市町村内の利用できそうな助成金・補助金・委託金の情報の提供や、担当窓口の紹介をする
	国や都道府県の利用できそうな助成金・補助金・委託金の情報の提供や窓口の紹介をする
	民間助成団体が行う助成金情報を紹介する
	助成金等の申請への推薦や、申請書の書き方の助言をする
	広報誌やウェブサイトで地域に物品の寄付を呼びかける
	地域住民や企業からの寄付物品のマッチングを行う
	リサイクル物品の仲介をする
	生活支援サービスの助成要件を見直す（条件を緩和するなど）
情報・ネットワーク／運営状況の支援	地域の情報や課題、ニーズを団体に伝える
	地域内の意見交換の場を設定する
	協議体の情報を団体に伝える
	広報誌やウェブサイトで団体の活動を広報する
	活動発表の機会をつくったり発表者として推薦する（研修会での事例紹介など）
	活動事例や先進事例を紹介したり見学に同行する
	団体の活動内容に応じた中間支援団体を紹介する
	チラシ・パンフレットやホームページの制作を支援する
	自治体広報、地元紙、ローカルメディアに取材してもらうよう働きかけを行う
	医療・福祉・介護・教育機関など他領域との連携を支援する
運営基盤の支援	話し合いの場のセッティングや合意形成のサポートをする
	活動日に出向いてスタッフとして活動に参加したり、ミーティングに出席する
	活動プランづくりを支援する（運営方法や役割分担など）
	会則づくりや会計管理などの運営に関するノウハウを教える
	定期的に連絡を取り、運営状況を見守る
	事務局や問い合わせ先としての機能を担う
	定期的に交流会を開催したり、一周年、三周年などの記念日を設定して活動を盛り立てる
	ボランティア保険の紹介や手続きを行う
	活動継続が困難になったりトラブルが起きたとき、課題整理や助言を行う

地域資源の活用から見た事例紹介

地域の課題を解決したり、みんなで集まる居場所をつくった事例を、どんな地域資源を組み合わせることで実現したのかの視点からご紹介します。

「地域のことを考える地域住民」
×
「民生委員・児童委員の悩み」
＋
「隣町のワンコインサービス活動見学」
＝
ワンコインサービスの誕生

愛知県日進市 香久山ワンコインサービス



★活動概要★

香久山区（自治会）と連携し、香久山地区の住民が安心して生活できる環境を整えることを目的に住民に対して軽度な日常生活の援助など、地域住民から依頼を受け行っている。平成 31（2019）年４月に活動がスタートし、サービス提供会員は約 20 人（大学生から高齢者まで。主に 60 歳代の男女が会員）おり、月平均６件の依頼がある。

★取り組みを始めた経緯★

当時の区長より「地域のことを話し合ったり、地域のためになにかしたい」といった相談があり、地域の福祉に関することを話し合ったり、仕組みづくりを行う「まちづくり協議会（まち協）」の設置を日進市社会福祉協議会から提案する。その後、まち協の設置に向けて準備会を開催したことを皮切りに地縁組織（老人クラブ、子ども会、女性の会、民生委員・児童委員など）の代表らと話し合いを重ねながら設置準備を進めていったが、初めのうちは区長も具体的なイメージが固まってはいなかった。並行して、地域の民生委員･児童委員の中からは、住民からゴミ出しや移動支援などを頼まれることがあり、どこまでが民生委員・児童委員としての活動範囲なのかという悩みも社会福祉協議会では聞くことがあった。そこで、社協のコミュニティソーシャルワーカー（生活支援コーディネーター兼務）が区長と相談し日進市内の五色園区ですでに実施されていたワンコインサービスを見学したところ、活動のイメージが急速に固まった。

★市社協による団体への支援ポイントと配慮★

- 住民活動をする上で、名前はできるだけ早く覚えるようにし会議や打ち合わせの際は“名前＋用件”で声をかけるようにする。
- 会議で反論が続くときは、「反論＋代替案」を併せて発言することを提案した。
- 見学などには、なるべく様々な考えの人に同行をお願いし、多様な視点の説明を地域でしていただけるように機会を設ける。
- 会議で発言できる参加者が、会議外で意見をコミュニティソーシャルワーカー（生活支援コーディネーター兼務）に伝え賛同を得ようとしても会議などで発言していただくように働きかける。

「読み聞かせボランティア」
×
「近所の主婦」　＝　図書館の設置
＋
「民間団体、企業の助成金」

香川県琴平町 まちじゅう図書館

★活動概要★

「ことひらまちじゅう図書館」の活動は、琴平町内にあるカフェの店内や診療所の玄関脇、寺の受付などに「絵本ボックス」を設置し、まちのあちこちで自由に本を借りられる取り組みである。

また、大人と子どもが一緒に楽しめる「小さな居場所」をまちじゅうに設置し、人と人が触れ合うことで、まちの記憶を伝え子どもたちの郷土愛を育み、さらには大人の人々の生きがいづくりにもつなげている。

令和元（2019）年 12 月現在、18 ヶ所の図書館が活動している。

★取り組みを始めた経緯★

30 ～ 40 代の子育て世代を含めた近隣の主婦たちにより、子どもの読書支援ボランティア団体「415（よいこ）のわ」の活動が始まる。活動の傍ら自主的に行った勉強会で、「サテライトライブラリー」が話題にあがったことから、元図書館司書が「415（よいこ）のわ」と一緒に取り組みたいと手を挙げ、「415（よいこ）のわ」から派生する形で「ことひらまちじゅう図書館」が立ち上がった。

資金面では団体メンバーが助成金獲得を模索する一方、琴平町社会福祉協議会でも助成金の情報提供や申請書作成のサポートを行った。また、琴平町社会福祉協議会が町内にある「おやじの会」とつなげて、「絵本ボックス」を制作してもらうなどが実現した。

★町社協による団体への支援ポイントと配慮★

・あくまでも住民が主体。支援者側からの提案が多いと“やらされ感”が出てしまう。住民から「やろう」と言ってくるのを“待つ”ことが重要。
・相談や悩みをキャッチした際は後回しにせずすぐに対応することで、困りごとが発生したときに声を上げやすい環境づくりをしている。
・活動に関わる人のモチベーションを下げないように声をかけ、「すごいことをやっていますね」と伝えることを心がけている。
・話し合いの際は、全体のバランスを考えてフォローする言葉を投げかけたり、批判的な発言が出たときは先に進める視点で発言したりする。

「商店街にある（現役）喫茶店」×「医療生協診療所の組合員」＝地域食堂

東京都荒川区 三ノ輪地域食堂

★活動概要★

一人暮らしや孤食をしている高齢者、特に男性を対象に月１回 11 時 30 分～ 13 時まで地域食堂を開催。主催は東京ほくと医療生活協同組合汐入診療所、会場は「都電カフェ」（都電三ノ輪駅近くにあるジョイフル三ノ輪商店街の入口に立地する、現役の喫茶店）。診療所が主催のため栄養バランスを意識した食事を 300 円（参加費）で提供している。ボランティアは診療所の組合員、調理師・南千住西部地域包括支援センターの職員と包括から呼びかけたボランティア（軽度認知症のある方）も参加し、平均 15 名程いる。参加者は平均 25 名程である。

★取り組みを始めた経緯★

商店街で都電カフェを経営するオーナーが「お客さんが少ない午前中に、高齢者のための介護予防プログラムをやってもらえないか」と荒川区社会福祉協議会に相談したことがきっかけである。オーナー自らの認知症予防のためにも取り組みたい意志があった。都電三ノ輪駅から徒歩１分、商店街に入ってすぐの立地、店内は広くてバリアフリーなど、好条件であった。早速、関係機関に情報を共有し、活動の立ち上げを模索した。高齢者福祉課の生活支援整備体制の担当職員が、汐入地区で汐入地域食堂を開催していた東京ほくと医療生活協同組合診療所に「三ノ輪地区でも地域食堂を開催してみては？」と声をかけた。当初、お店の空き時間を活用するとのことであったが、台所の衛生面、時間的な制限の問題などがあり、お店の休日に行うことで解決するなど話し合いを重ねた結果、地域食堂をすることが決定。令和元（2019）年 12 月９日に三ノ輪地域食堂がオープンした。

地域の民生委員・児童委員の力を借り参加者の呼びかけを行うほか、買物に来ている男性高齢者に「寄っていきませんか」との声かけはしやすく、新たな参加者も増え、店舗で活動を行う良さを実感している。また、居場所に様々な人が集うことで、商店街のにぎわいにも寄与している。

★区社協による団体への支援ポイントと配慮★

・オーナーから話があった際、すぐに喫茶店に足を運び、会場や会場周辺の状況を確認した。
・会場のアクセスや広さなどの条件が良かった。得られた情報は広く関係機関に周知した。
・活動候補団体が現れた際は、見学や話し合いに同行同席し、マッチングが上手くいくように寄りそった。
・地域の商店街や民生委員・児童委員などにも情報を常に共有し、地域に認められる活動になるよう気を配った。
・活動を周知するためのチラシの作成支援と新聞掲載のサポートをした。

「空き店舗」×「地域住民」×「町会」×「近隣の大学生」＋「市の助成金」＝コミュニティカフェ

石川県金沢市 天親カフェ

★活動概要★

空き店舗（元酒販店）を活用して、町会員がコミュニティカフェを週１回運営している。スタッフの手作業により会場が装飾され、体操や手芸といったプログラムは用意されることなく集まっておしゃべりする居場所となっている。参加費は協力費として 100 円を寄付、飲み物とお茶菓子が提供される。また、近隣の大学生がボランティア講師となり、子どもを対象に学習支援を行っている。毎回５～６人の子どもが訪れている。月１回は、ワークショップなどのイベントを開催し、幅広い世代の交流拠点として地域のつながりを深めている。

★取り組みを始めた経緯★

町内で孤独死が発生したことを背景に、「町内でつながりが必要」と住民から声があがった。金沢市社会福祉協議会の職員が住民と話し合う機会を設け、課題の明確化と住民の思いの整理を行ったところ、「やっぱり交流拠点が必要」という思いがわかった。活動のイメージを固めるため、他の居場所の見学に職員が同行したのち、コミュニティカフェ開催を決定。場所は、元酒販店の店主の奥様が「今は使っていないから」と空き店舗を提供、住民の中から担い手となる中心メンバーも決まってきた。続いて運営資金を確保しようと、活動資金を得るために市の助成金に申請することになった。しかし、町会単位での申請が条件だったため、中心メンバー自らが提案書を作成し「町会活動として位置づけてもらえるよう」町会総会で提案し認められた。その後、助成金の給付が決定、会場の環境整備や広報活動などの準備が整い、令和元（2019）年８月に天親カフェがオープンした。

カフェオープン後、運営スタッフが話し合う中で、「高齢者だけでなく子どもにとっても居場所が必要ではないか」という声が出てきた。同時期に市が地域で行う子どもの学習支援教室に対する助成を開始したこともあり、運営スタッフの間でカフェのスペースを有効活用しつつ子どもにとって、家と学校以外の第三の居場所づくりをしようという話にまとまった。町内で子どもに関する活動に関心のある方の協力を得て、９月に学習支援の取り組み「天親カフェ寺子屋」がオープンした。

★市社協による団体への支援ポイントと配慮★

- 地域活動は住民主体で活動することが望ましいため、「自主性」を尊重している。地域住民が必要性を感じて、地域のことは自分たちでやろう思い、納得・合意して取り組んでもらえるよう配慮している。
- 職員による誘導はせず、行き詰った際は、選択肢を何案か提案するなどしている。提案する際は、図や絵で見せるなど、伝え方を工夫している。
- 「こういう取り組みは面白いですね」「そういうのができたら楽しそうですね」「本当にすごいですね」「すてきな感じに仕上がりましたね」など頻繁に褒める言葉をかけ、活動へのモチベーションが下がらないようにする。

「協議体」×「地区ネット」×「全国から参拝者が訪れる観光資源」×「観光協会・商工会」×「観光商工課」＝ 買物支援

香川県琴平町 こんぴら朝市

★活動概要★

身近な商店街にある店が年々減ってきており、高齢者が日常の買物に困るようになってきたことを背景に、買物難民支援を目的にした「こんぴら朝市」を開催している。

会場は、全国から参拝者が訪れる金比羅宮の参道入口にある一之橋公園。第２・４日曜日の朝９時から正午まで、産直野菜や果物、パン、葛湯やコーヒー、ポップコーンなどを販売している。日用品のほか、観光客向けの物販もありにぎわっている。また、一人では外出が難しい高齢者も朝市に来られるように移動支援を行っている。

★取り組みを始めた経緯★

琴平町には、生活支援体制整備事業の協議体「ささえ愛こんぴら」や、民生委員・児童委員などの地区の役員、学校 PTA、観光協会や商工会がメンバーになっている地区ネット「こんぴらアイネット」がある。どちらも琴平町社会福祉協議会が立ち上げ支援を行い、現在も連携しながら取り組んでいる。

「ささえ愛こんぴら」や「こんぴらアイネット」で地域課題を話し合ったところ、高齢者が買物に困っていることがあげられた。平成 30（2018）年秋、「こんぴらアイネット」で出た買物支援の課題が、協議体「ささえ愛こんぴら」に投げかけられたことをきっかけに、「ささえ愛こんぴら」を実施主体として朝市を開催することが決まり、その後２ヶ月に一度の話し合いを継続して内容を詰めていった。

多くの参拝者が訪れる金比羅宮の参道入口にある公園を会場にできないかとのアイデアが出て、琴平町観光商工課に協力を要請したり、観光協会や商工会を通じて参加店舗の募集をかけたりするなど、協働体制で準備を進めた。平成 31（2019）年１月に第１回を開催し、以降月２回第２・４日曜日に行っている。

★町社協による団体への支援ポイントと配慮★

- 住民主体の活動の事務局として、協働体制で臨んでいる。会議の進行や実現に向けての話のとりまとめを行うほか、使える物品や場所の情報、人と人をつなげる役割を担っている。話し合いのまとめ役として、「こんなことを言っていましたよね」など、話の呼び水になるような声かけをしている。
- 何回もよく話し合う。話し合いの中で、住民から「いつまで話していても仕方ない、自分たちでやらなければ」という声が出るまで待つ。「社協が言ってきたから」では、やらされ感が出てしまう。
- 話し合いの日程も住民に合わせる。社会福祉協議会で日時を決めて「来てください」というと、「行けません」という人が出てくる。
- 活動がマンネリ化しないように、半年や一年の記念にいつもと違うことを提案するなど、盛り立てる工夫をしている。

「区長・民生委員など地域役員、有志（協議体）」
×
「閉園旧園舎（幼稚園）」
＋
「助成金」

＝ **多世代の居場所**

福岡県大川市　木室たんぽぽの会

★活動概要★

木室たんぽぽの会は、小学校区内の近所同士の付き合いが希薄化してきたことを背景に、地域に興味をもち「ひと昔前のような交流のある地域をつくろう」を目的とした、多世代交流の場である。

「お花見会」「味噌づくり」「七夕まつり」「お月見会」「さつま芋掘り」「防災訓練」など、年間を通して多種多様な交流イベントを開催している。また、毎週土曜日は、「たんぽぽカフェ（大人の脳トレ）」「たんぽぽ塾（小学生寺子屋）」を開催。「たんぽぽカフェ」では、脳トレや健康チェック、「たんぽぽ塾」では宿題やワークを行っている。また、企業からロス食品の提供を受け高齢者と子どもの交流クッキングも行っている。

★取り組みを始めた経緯★

大川市では、閉園になった幼稚園跡地の有効活用を検討していた。生活支援体制整備事業の委託を受けた大川市社会福祉協議会と育児サークルは以前から「多世代交流の居場所があったらいいなあ」という想いがあり、育児サークルのメンバーへ協力を依頼した。その後、地域の代表者、有志の方へ呼びかけ、協議体を結成。話し合いの結果、「様々な行事を通して顔の見える関係づくりをしよう」と方向性が打ち出された。また、卒園児の保護者たちが「木室幼稚園をこよなく愛する会」を立ち上げ、園の敷地内が荒れないように草刈りや掃除などを行っており、そのメンバーにも声をかけた。

現在、活動メンバーは 40 名程。主要メンバーの区長、民生委員、地域の代表者、有志で、運営委員会を 3 か月に 1 回開いている。なかでも 5 名程が実行委員として、企画などの打ち合わせを頻繁にしている。

★団体から見た市社協からの支援ポイントと配慮★

- 大川市役所健康課が考える対象は「高齢者」だったが、団体は「子ども」を考えていたため、当初すれ違いが発生した。しかし、委託を受けている社協と何度も話を重ねることで、「子どものためになるのと同じように、高齢者にもなにかできたら…」という思いへ変化していった。
- 事務作業、情報提供、助成金申請、ボランティア依頼書の文書作成など、支援が必要な際は休みの日であっても迅速に対応してくれた。
- 現場への同行なども常に気にかけてくれたおかげで、孤立感を感じることがなく安心して行動できた。

「空き店舗（元喫茶店）」×「麻雀」＋「住民の寄付」＝麻雀サロン

愛知県長久手市 麻雀サロン「オリオン」

活動概要★

元喫茶店にて、健康麻雀や茶話会のサロンを月１回程度開催している。店主が元々麻雀好きだったこともあり、サロンには麻雀卓や囲碁盤が設置され、ゲームをしながら住民同士の交流が深まっている。

参加費 100 円。平均して 20 名程度が参加。男性が多いが、最近では女性の参加者も少しずつ増えてきている。

★取り組みを始めた経緯★

以前喫茶店を経営していた 80 代の店主（男性）のもとに、見守りとして地域包括支援センターの職員が訪れていた。職員は、「現在使用されていない喫茶店のスペースを、なにかに活用することができないか」と考え、コミュニティソーシャルワーカーと生活支援コーディネーターに情報共有。地域包括支援センターの職員とコミュニティソーシャルワーカーと生活支援コーディネーターが連携し、元喫茶店主に空き店舗の状況を確認したところ「環境整備をすれば使用できそう」とわかった。そこで､元喫茶店主に「ご自分も楽しみながら、地域の交流の場としてみんなで集いませんか」と提案した。

その後、月２回程度電話や訪問を行うなかで、「好きなことや趣味はなんですか」との質問に、「麻雀は長いことやっていた」とわかり、麻雀ができる居場所づくりに展開した。当初、元喫茶店主は「場所代は不必要」と考えていたが、地域住民の居場所として継続していくために「参加費 100 円」の徴収を勧めた。参加費の 80％は水道や光熱費代、残りをお茶・お菓子代にすることを提案して承諾を得た。なお、麻雀牌・麻雀卓はすべて住民からの寄付で成り立っている。

★市社協、地域包括支援センターなどによる団体への支援ポイントと配慮★

・生活支援サポーター１名が運営サポートに入っていて、麻雀講師も兼ねている。今後、運営サポートの生活支援サポーターを増やしていくことで、開催の回数や時間も増やすことができ、交流の場として安定した継続を確立させることができるのではと期待を寄せている。

・個人所有の空きスペースの活用については、所有者だけではなく、取り巻く家族にも配慮をしながら取り組みを進めていかなければならない。

・元喫茶店主の意向を確認するには、信頼関係の構築が必須だったので、十分時間をかけて行った。

・麻雀牌、麻雀卓などの備品は、参加者から「電動麻雀卓を持ってきてあげる」と声があがるなど、住民からの寄付が多く助かったが、参加人数が増加すると卓が足りなくなり、他の喫茶店から借りたりしていた。この状況を参加者や他の喫茶店に伝えたところ情報が集まり、「使用されなくなったこたつ机」をいただいたり、「生活支援サポーターの中に日曜大工が得意な人がいて修繕してもらう」など、地域資源がつながっていった。

地域住民の社会参加活動等を基盤とした互助促進の手法に関する調査研究事業

委員構成

研究委員会

（委員長）

内藤 佳津雄　日本大学文理学部　教授

（委　員）

秋山 由美子　特定非営利活動法人 日本地域福祉研究所　理事

石田 惇子　一般社団法人 全国食支援活動協力会　代表理事

石橋 智昭　公益財団法人 ダイヤ高齢社会研究財団　研究部長

日下 直和　社会福祉法人 香川県社会福祉協議会　事務局長

鈴木 訪子　社会福祉法人 荒川区社会福祉協議会　地域福祉活動促進専門員

隅田 耕史　特定非営利活動法人 フェリスモンテ　事務局長

清水 洋行　千葉大学大学院人文科学研究院　教授

祐成 保志　東京大学大学院人文社会系研究科・文学部　准教授

高橋 良太　社会福祉法人 全国社会福祉協議会　地域福祉部長

中島 智人　産業能率大学経営学部　教授

中野 智夫　長久手市福祉部　次長（福祉、長寿、子育て、保険医療、健康推進担当）

原田 晃樹　立教大学コミュニティ福祉学部 教授

平野 覚治　一般社団法人 全国食支援活動協力会　専務理事

松下 典子　特定非営利活動法人 ゆいの会　理事

三政 貴秀　小坂町福祉課町民福祉班

ワーキング部会

清水 洋行　千葉大学大学院人文科学研究院　教授

鈴木 訪子　社会福祉法人 荒川区社会福祉協議会　地域福祉活動促進専門員

内藤 佳津雄　日本大学文理学部　教授

中島 智人　産業能率大学経営学部　教授

平野 覚治　一般社団法人 全国食支援活動協力会　専務理事

令和元年度 厚生労働省老人保健事業推進費等補助金
老人保健健康増進等事業

基礎自治体や中間支援組織等による住民主体の活動を
促進するための手法に関する調査研究事業

生活支援コーディネーターが

「住民のやる気を支える支援の手引き」

一般社団法人 全国食支援活動協力会 編

手引き編集チーム
伊藤浩巳・齋藤志恩(一般社団法人 全国食支援活動協力会)
宮地成子(場所づくり研究所 有限会社プレイス)

デザイン　カタヤナギユウイチ
イラスト　梶原香央里

一般社団法人 全国食支援活動協力会
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀6-19-21
TEL 03-5426-2547　http://www.mow.jp/

発行日　2020年3月30日

第５章　まとめ

１　生活支援体制整備におけるサービス開発で求められる「やる気を支える支援」

人口減少・超高齢社会に対応するため、私たちは介護予防や生活支援の体制づくりを地域住民やボランティアによるインフォーマルな取り組みを増やしていくことが急務であるが、現在、住民参加による生活支援サービスは担い手の高齢化や人材不足が課題と考えられ、その体制づくりは容易なことではない。

当会が平成 30 年度老人保健健康等増進事業「地域住民の社会参加活動などを基盤とした互助促進の手法に関する調査研究事業」で行ったアンケートで、住民参加による生活支援サービス運営団体の支援に関して、①立上げ準備や立上げ後の段階で団体に寄り添う支援が必要とされていること、②特徴や規模に合わせた支援、特にまちづくりへの貢献や住民同士の交流、ニーズへの柔軟な対応といった住民参加によるサービスならではの特長に目を向けた、団体を育てる伴走的な支援が求められていることが分かった。

各地の優れた生活支援コーディネーターは、寄り添い、伴走的な支援を行うことで住民主体のサービス開発を実現している。本事業ではそれらの支援事例から得た経験や知恵を、「住民のやる気を支える」手法として確立させることと、団体支援の現場で活用できるツールを開発することを到達目標とした。

２　生活支援コーディネーターの課題

生活支援体制整備事業で配置されている生活支援コーディネーターの役割のひとつにサービスの創出が挙げられているが、その成果やサービス創出の意識には地域ごとに差がある。ヒアリング調査では、生活支援コーディネーターの多くが他事業との兼任や多忙であること、町会自治会など既存の住民団体は自治会役員の高齢化や役割の集中などの課題があり担い手の負担が大きいと考えていること、ボランティアグループや NPO と接する機会があまりない、という声も聞かれた。

住民主体の生活支援の取り組みを推進するためには、社会福祉協議会・ボランティアセンター等のコーディネーターなど住民主体の活動の立上げや伴走支援・協働の経験をもつ人々との連携・協働により、生活支援コーディネーター業務においても住民活動の活性化のノウハウが活かされることが必要だと考える。

３　本年度事業での提案「『アセット重視』への考え方転換」

高齢者の介護予防や生活支援を住民参加でつくろうとすると、「やる気がある地域住民がいない」「ボ

ランティアがいない」という声も聞く。では地域の課題解決に関心がある人は全くいないのか、というとそんなことはなく、住民主体の取り組みを増やしていくためには、地域の課題解決に関心を持つ主体的な住民に伴走的な支援をして、やる気を継続させ、活動を育てるというアプローチが重要である。

本事業では、制度や取り組んで欲しいことの必要性からではなく、住民側の発案を育てていく視点で、すでにある様々な地域資源を活かすという考え方＝「アセット重視」の考え方に基づいた支援の手法を提案した。「アセット」は一般的には財産や資産といった意味で用いられる言葉であるが、ここで言う「アセット」は地域の健康や福祉にプラスになる様々な地域資源を指している。「アセット重視」の考え方は近年イギリスで保健福祉施策に取り入れられ、住民自らがサービスと提供することに加え、予防の面からも成果を上げている。

国内では、優れた生活支援コーディネーターや社会福祉協議会・ボランティアセンター等のコーディネーターの多くが「アセット」という言葉を使わずに同じような手法でサービス開発を行ってきている。しかし、これまでの支援からの発想の転換を促す狙いもあり、本事業では敢えて「アセット重視」という耳慣れない用語を全面的に取り入れた。『生活支援コーディネーターが住民のやる気を支える支援の手引き』では、「アセット重視」の考え方で取り組む推奨例として、近年各地で取り組みが活発化している参加型の居場所を取り上げた。

参加型の居場所の特徴は、次の通りである。（以下、『生活支援コーディネーターが住民のやる気を支える支援の手引き』23 頁より抜粋し編集）

■あるものから：気の合う仲間と、自宅でもできる

居場所には様々なタイプがあります。毎日オープンしている常設型もあれば月 1 回少人数で集うもの、活動内容も会食会、健康体操、学習支援など決まっているところもあれば、特にプログラムはなく各々好きなように過ごすところもあります。

居場所づくりは、使える地域資源が限られていても、今あるものから始められる活動です。気の合う数人の仲間と、自宅の一室で、月 1 回、特にプログラムを考えずにお茶だけ用意している居場所はたくさんあります。

自分たちの考える自由な集いの場なら、やってみたいと思う人はいるのではないでしょうか。

■住民活動の基本：担い手と受け手が、同じ立場でともにいられる場

地域での活動は、お互いさまの関係づくりが大切です。

居場所の最大の特徴は、同じ立場でともにいる関係づくりがしやすいことです。たとえば、食事を提供するとき、小さな子どもも配膳したり、スタッフと参加者が一緒のテーブルについて食べたりすることで、年齢や役割に関係なく平等に交わることができます。ともにこの場をつくっていることが、生きがいややる気を支えることにつながります。

■子どもから高齢社の参加、若い担い手による、多世代の交流が生まれる

住民参加による生活支援サービスは、担い手の高齢化、不足が指摘されていますが、子ども食堂・地域食堂、子どもや多世代を対象にした居場所は、勢いがある分野です。勢いは、数が増えているだけではありません。担い手の年齢層が若いことも大きな特徴です。担い手の半分以上が現役世代（64 歳以下）で、40 歳未満の参加率も高いという調査結果が出ています。さらに、子ども食堂で高齢者の受け入れをしたり、高齢者の会食会を多世代の地域食堂にする活動も増えてきています。

居場所は多世代の交流の場になり、若い担い手の参加も期待できる可能性を持っているといえます。

■食は人を集めてつなぐ

食事の提供を中心に据えた居場所も数多くあります。美味しいものをみんなで一緒に食べる楽しみは、人と人とを結びつける営みであり、地域文化にもかかわる多面性があります。さらに手づくりの食事の良さは、食べる人の健康や好みを考えてつくられること。「おいしいものを食べてうれしい」「おいしく食べてもらえてうれしい」気持ちのやりとりができます。

「食」は、人々を集めてつなぐ役割を果たす機能が、極めて大きいといえます。

■人が集まることで、みんなの欲しいものがわかる

本当の困りごとは、正面から「困っていませんか」と聞かれるよりも、何気ないおしゃべりの中からポロリとこぼれ出ることが多いようです。

人々が集うことで、お互いの困りごとを知る機会となり、居場所から、会食会や子ども食堂・地域食堂といった活動や、買物支援、移動支援、食材・惣菜の提供といった派生サービスが生まれた例もあります。

このような特徴を持つ参加型の居場所は、人と人との関係の中に蓄えられた、今ある“強みや良さ”（アセット）をゆるやかに結びつけ、住民主体による生活支援を生み出す基盤となる可能性があると考える。

居場所をプラットフォームにした 住民参加による生活支援の広がりのイメージ

『生活支援コーディネーターが住民のやる気を支える支援の手引き』23 頁より抜粋

4　活動支援プランニングシートについて

「アセット重視」の考え方に基づいて住民活動の立上げを支援し育てるため、アセスメント→支援計画の立案→評価を行う共有ツールとして「活動支援プランニングシート」を作成・提案した。シート使用のフローは「活動の“強みや良さ”（アセット）の把握 」「支援の着眼」「評価」の３工程があり、それぞれの工程で①活動の“強みや良さ”を把握するための「アセット項目リスト」、②活動により生まれ、高まった価値を把握するための「価値項目リスト」を使用する。これらのリストにチェックすることで、どんな地域資源をつなげば活動の“強みや良さ”が活かせるかを考えることができ、「地域で人のためになにか活動をしたい」という思いをもった住民の前向きな気持ちを引き出すことができる。また、活動が立ち上がって 1 年を目安に、将来期待できそうな成果や高まった価値をチェックし評価を行うことで、生活支援コーディネーターが自らの支援の効果について振り返り、記録を残すことができる。さらに、冊子の巻末には、生活支援コーディネーターが支援計画を立案する際に役立ててもらおうと、リソース別に分

類された地域資源マップ、支援メニュー例を付録した。

「活動支援プランニングシート」の使用場面のイメージは、①「団体や取り組みの立上げ」（住民から新しく活動を始めたいと相談を受けたときや、コーディネーターが地域に取り組みを立ち上げたいとき）、②「取り組みの発展や課題整理」（活動メニューを増やすとき、活動が停滞しているときの支援）、③自治体等による生活支援コーディネーターを対象とした「研修」（アセット重視の支援手法の研修にて、改良した手引書を教材ツールとして活用する）が挙げられる。このシートを使うことで、意識を持って事例に向き合い、意図を持った支援計画の立案ができる。また、支援プロセスと活動の価値が一元的に記録されることにより、見える化・支援ノウハウの共有ができると考える。

生活支援コーディネーター等によるモニターアンケート調査では、

・支援体制の見える化（支援過程の確認・共有）が期待できる

・客観的に共有することができ、複数メンバーで支援することができる

・住民との活動のイメージづくり、課題の発見ができる

・一定の指標があることにより、経験の少ない職員でも支援ができる

・チェックをすることにより、気づかなかった点にも考えが及ぶことができる

といった回答を得ることができた。

５　成果物『生活支援コーディネーターが住民のやる気を支える支援の手引き』を使った展開について

各地の生活支援コーディネーターから、多忙さや経験不足に加え、協議体や職場内でサービス開発の意識が少ないこと、サービス創出の難しさを多く聞いた。このことは生活支援体制整備の展開を考えると、大きな課題である。また、地域住民による介護予防や生活支援の体制づくりのボトムアップのためには、生活支援コーディネーターだけでなく、ボランティアセンター、社会福祉協議会、自治体、中間支援団体なども、地域の課題解決に関心を持つ住民のやる気を継続させ、活動を育てる伴走的な支援について知る必要がある。住民主体の活動が各地で数多く立ち上がり活発な運営が継続していくために、本手引きを活用し、住民活動開発に関わる方々にアセット重視の考え方とその手法を理解いただきたいと考える。

「アセット重視の考え方」は、コーディネーター個人ではなく、職場単位や地区・市町村単位で面的展開ができてこそその効果が発揮できる。そうしたことから、都道府県レベルでの生活支援コーディネーター研修などの機会を活用し、アセスメント→支援計画の立案→評価を順序立てて計画的に行う「活動支援プランニングシート」のような、生活支援コーディネーターの後方支援となり得るツールの普及を図ることが望ましいと考える。

資 料 集

１．手引書の使い方説明会案内・資料（東京都荒川区）.....資料-1

２．手引書の使い方説明会案内・資料（香川県高松市）.....資料-18

３．手引書の使い方説明会チラシ・資料（愛知県長久手市）.....資料-35

４．手引書の使い方説明会資料（福岡県大川市）.....資料-52

５．研修会チラシ(愛知会場).....資料-67

６．研修会テキスト(愛知会場).....資料-69

７．研修会チラシ(東京会場).....資料-87

８．研修会テキスト（東京会場）.....資料-89

※手引書の使い方説明会資料（石川県金沢市）は、香川県高松市で使用したものと同一であるため、掲載を省略した。

令和元年度厚生労働省老健事業

「基礎自治体や中間支援組織等による住民主体の活動を促進するための手法に関する調査研究事業」

住民と共に取り組む「高齢者、多世代の人々の居場所」づくりワークショップのご案内

荒川区では、地域住民により「子ども食堂」や「子どもの居場所」づくりが熱心に取り組まれ、現在 12 か所に広がり、さらに新たに 3 か所で計画されています。
「子ども食堂」や子どもの貧困などマスコミ等でも大きく報じられたことや身近な地域での活動が見える化されたことで、関心をもち応援をしたいと思い行動する住民や企業、団体がどんどん増えています。そのなかで、「高齢者の方々に食と居場所を」「子どもから高齢者まで世代間交流ができる居場所」を取り組みたいとの声があがり、活動が生まれてきています。

行政の施策の拡充とあわせて、暮らしやすい地域をつくるためには、地域住民がつながりあい、お互い様の支えあいが不可欠であると考えている住民、ボランティア、団体、企業などもあります。そんな思いをもった住民や荒川区内の様々な場所で、地域の居場所づくりをしたいと窓口に相談にみえる住民を受け止め、一緒に活動をつくりだすために必要な相談支援のあり方について、2018 年度作成した『住民のやる気を支える支援と評価のシート』 を使いながらワークショップを行います。
ぜひ、ご参加いただき窓口に、あるいは地域で出会う課題解決のために何かしたいと思う住民の皆さんと一緒に、様々な地域福祉活動をつくりだすための方法を体験してみませんか。

記

日時:2019 年 8 月 22 日(木)13:30～16:30
会場:荒川区社会福祉協議会 3 階ボランティア活動室
対象:行政職員・地域包括支援センター・高齢者みまもりスーテション・社協職員
定員:20 名

内容:
地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景
講師：内藤佳津雄（日本大学教授）

シートの使い方の説明とグループワーク
①ロールプレイと質疑応答（テーマ：高齢男性を対象にした会食会の立ち上げ）
②シートを実際に使って、活動の特徴や支援の着眼点の把握、強みの評価をしてみる
ファシリテーター：斉藤友歌里（全国食支援活動協力会事務局）
③発表と共有

主催: 一般社団法人 全国食支援活動協力会　　荒川区社会福祉協議会
共催:荒川区高齢者福祉課

参加申し込みは、社会福祉協議会地域ネットワーク課まで、所属、名前、電話番号をお知らせください。メール:jigyo@arakwa-shakyo.or.jp 電話 03-3802-3338

2019.8.22
“住民主体の活動を育てる支援の手法を学ぶ”説明会資料 in 荒川

地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景

http://www.mow.jp/

Meals on Wheels Japan

食を通じたコミュニティを生み出しています。

団体サポート

- 当会主催の研修会・セミナーへのご案内
- 全国の住民参加型食事サービス活動団体とのネットワーク
- 食支援活動に関する情報の発信（会報紙・メール・SNS等）
- 教育、調査研究、政策提言
- 助成情報の提供・推進、寄付物品の斡旋など

会員 120団体 (個人・団体)

その他にも　各地のネットワークを通じて
役立つ情報を提供しています。

2018年度助成実績

■**明治安田生命保険相互会社**
【地域支え合い活動助成プログラム】
助成事務局運営…12団体を選出

■**キユーピーみらいたまご財団**
【食の居場所づくり助成プログラム】
助成プログラムB 事務局運営
…27団体選出／スタートアップ助成20団体選出

■**「三菱電機SOCIO-ROOTS基金」による設立25周年記念事業の助成**
…こども食堂30団体に助成

■**寄付物品（シリアル）の斡旋**
企業からの寄贈食品を会食・配食サービス、
子どもの居場所に提供 (中央共同募金会との協働)

食を通じたコミュニティを生み出しています。

配食サービス
利用者の自宅まで食事を配達し、安否確認を行います。家事の負担軽減や栄養バランスの改善を目的としています。

コミュニティカフェ
来たい人が自由に出入りできて、食事のできる地域の居場所。コミュニティレストランとなっているところもあります。

会食会
集まって一緒に食事と会話を楽しむスタイル。仲間が主体的に食を通じたコミュニケーションの場をつくっています。

子ども食堂
孤食の解消、共食体験の提供、学習支援等テーマは様々。食を通し地域で子どもの成長を見守る取組みです。

料理教室
高齢者や男性を対象にした料理教室。介護予防の観点から元気なうちに調理技術と知識を身につけることが狙いです。

食育活動
食文化の継承や介護予防、子どもの健やか成長に向けて、食べ物と栄養についての知識を深める取組みです。

“住民主体の活動を育てる支援の手法を学ぶ”説明会資料
目次

◎アンケート調査結果から見えてきたこと

資料－3

Ⅰ.調査概要

	調査A
目的	行政や社協による、住民参加による生活支援サービス運営団体への支援状況を把握するとともに、支援課題やサービス運営団体の評価ポイントを把握することを目的として、調査を実施した。
調査対象	①都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署 ②　　〃　　の児童福祉所管部署 ③市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署 ④　　〃　　の児童福祉所管部署 ⑤都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会 ⑥市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会
調査方法	①、②：メールにて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ③、④：①、②を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ⑤：全国社会福祉協議会を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ⑥：⑤を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。
回答時期	平成30年11月～平成30年1月の２か月間

	調査B
目的	住民参加による生活支援サービスの運営実態を把握するとともに、団体が感じる課題や、活動について評価してほしいと考えるポイントを把握することを目的として、調査を実施した。
調査対象	住民参加による生活支援サービス運営団体
調査方法	調査Aの調査対象（①～⑥）および関連団体を通じ、各機関・団体が把握している団体にアンケートの回答記入フォームのURLを伝達し、回答を依頼した。
回答時期	平成30年11月～12月の１か月間

Ⅱ.回答状況

	有効回答数／配布数	回収率
都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署	43件／67件	64.2%
〃　　の児童福祉所管部署	56件／67件	83.6%
市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署	913件／1896件	48.2%
〃　　の児童福祉所管部署	835件／1896件	44.0%
都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会	29件／67件	43.3%
市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会	522件／1896件	27.5%

調査A（事業票）	回答事業数
都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署	59事業
〃　　の児童福祉所管部署	40事業
市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署	1408事業
〃　　の児童福祉所管部署	169事
都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会	32事業
市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会	852事業

Ⅱ.回答状況

調査Bは実施している生活支援サービスの分野を問わず調査対象とし、実施しているサービス分野を複数選択で調査し、1254件の回答を得た。

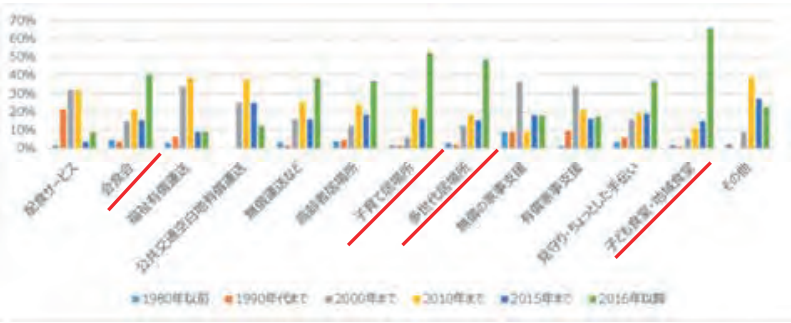
	n	%
全体	1254	100.0
配食サービス	114	9.1
会食会	235	18.7
福祉有償運送	97	7.7
公共交通空白地有償運送	13	1.0
無償運送など（許可・登録のないもの）	80	6.4
高齢者を主対象とする居場所	428	34.1
子育て世代を主対象とする居場所	161	12.8
多世代を主対象とする居場所	272	21.7
無償の家事支援（地域支援事業の訪問型サービスを含む）	21	1.7
有償の家事支援（地域支援事業の訪問型サービスを含む）	256	20.4
見守りや、ちょっとしたお手伝い	186	14.8
子ども食堂・地域食堂	475	37.9
上記のいずれも実施していない	74	5.9

１）新たな担い手が集まるサービス分野

こども食堂・地域食堂、子育て居場所、多世代居場所の５～６割が２０１６年以降に設立された団体だった。

➡ 地域を支える新しい担い手が生まれる機会になっている

図表１　サービス分野ごとの団体設立年

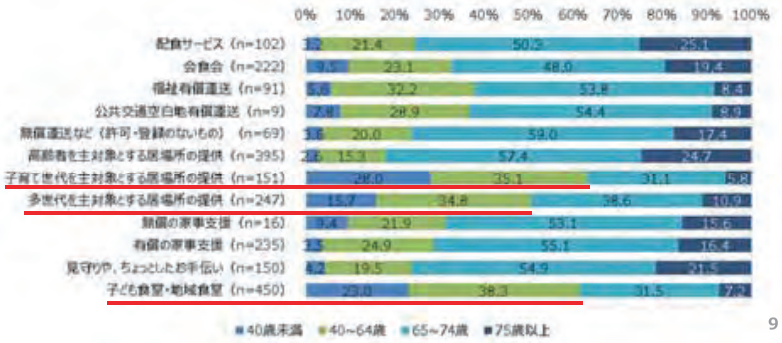


２）ボランティアの年齢について

子育て世代を主対象とする居場所、多世代を主対象とする居場所、子ども食堂・地域食堂は半分以上が現役世代（64歳以下）だった。

➡ 担い手確保と活動の継続性に向けたヒントが

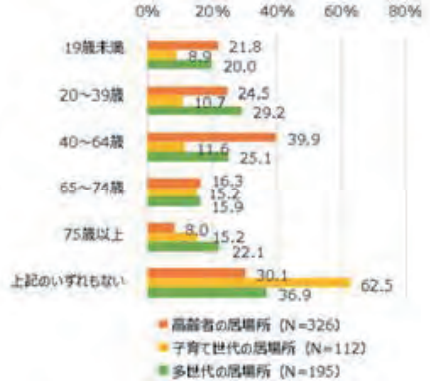
図表２　ボランティアの年齢構成（平均値）



３）多様な世代の利用者を受け入れる活動

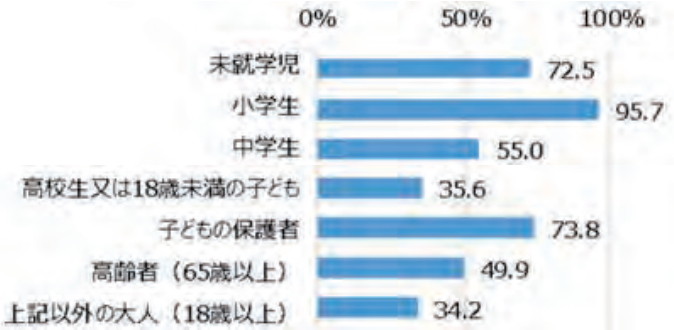
高齢者を主対象とする居場所でも、一定程度が64歳未満を受け入れたいと回答した。また、子育て世代を主対象とする居場所、多世代を主対象とする居場所でも、65歳以上を受け入れることに前向きな団体が一定程度見られた。

図表３　居場所づくりにおいて、今後受け入れたい年齢層

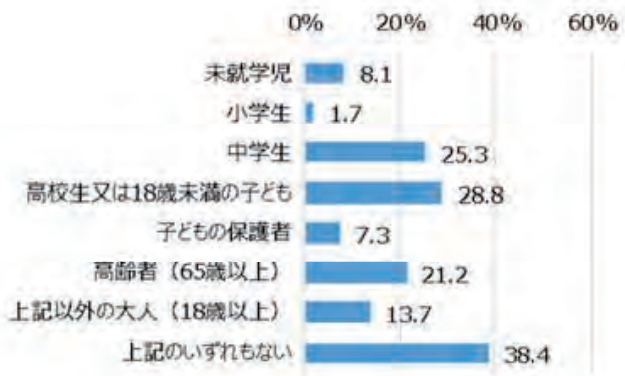


子ども食堂・地域食堂の半数程度が高齢者を受け入れていた。
今後新たに受け入れたいという回答も2割程度見られた。

図表４　子ども食堂・地域食堂で受け入れている年齢層



図表５　子ども食堂・地域食堂で今後新たに受け入れたい年齢層



４）居場所づくりから生み出される新たなサービス

限られた地域資源を有効に活用するための１つの方向性として、こうした担い手が集まりやすいサービス分野において、利用対象者の範囲（年齢層等）を広げ、多世代型の生活支援サービスを作り上げていくということが考えられる。

図表６　派生してサービスが生まれたことのある団体の割合

新たな担い手が集まりやすいだけではなく、派生して新たなサービスを生み出すプラットホームとなりうる可能性を秘めていると考える。

図表７
居場所づくりから生まれたサービスの種類

‥「多世代が集う共生の居場所づくり」とは‥

２　市町村の役割
～住民参加による生活支援サービスの必要性

背景
　総人口（とくに生産年齢人口）の減少
　（ただし、老年人口は2040年代まで増加）
　家族構造の変化（独居・老々世帯の増加）
　地域における人間関係の変化（孤独・孤立の発生）
　地域における社会的資源の変化

●人口減少・超高齢社会に対応できる社会・地域づくり
　地域における生活像
　身体的健康（フレイル、低栄養等）
　社会的関係（孤立・孤独に陥らない）
　心理的健康（幸福感、満足感など）
　日常生活の自立・自律
　　医療・介護や公費による支援だけでは困難

●「インフォーマル」な社会参加＆介護予防、生活支援が大きな課題

住民参加による生活支援サービスの必要性

でも、住民参加で活動する人、地域の高齢者支援に
ボランティア参加する人が少ない、いない・・・

- 地域の課題解決に関心がある人
- 地域の他者のために何かをしたい人
  →実はいる（子ども食堂の例！）が見過ごされてきた。

●他者に貢献する活動を地域に作っていくには、こうした発見されにくい「やる気」を育てる積極的支援が必要

●参加の場（オープンな居場所）を作ることが参加する人を増やし、社会参加＆介護予防の広がりに貢献する

3　アセット重視の考え方

図表3-1 ニーズ重視とアセット重視

	ニーズ重視	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか？」	「なぜ健康になるのか？」

- アセット重視の特徴

「あるもの」＋「長い時間軸」に着目して、まずはできるところから始め、時間をかけて市町村内全域に普及させていく。

ニーズ重視の支援はマイナス面について評価する（監査）が、アセット重視では、まずはあることが重要なので。プラス面に目を向けた評価を行う。

アセット重視：住民参加からコミュニティ主導へ

- 住民やコミュニティはサービスの受け手としてだけでなく、担い手であることを認識する。
- 住民やコミュニティは容易に地域での活動を行うことができる要件を示して多くの人・団体の参入を誘う。
- 参加したい人の価値や動機づけを理解する（地域に貢献する活動であれば、行政が望む価値を押し付けない）。
- 市町村は活動の立ち上げと継続をサポートすることを明確に示す。
- 各活動が地域で果たしている価値を認める（それを明確に伝える）。
- コニュニティに権限を委譲して、自分たちの将来と活動を自ら決めることを支援する。

4　評価の考え方

- 評価　とは①「テストで評価する」
  ②「仕事ぶりを評価している」

①はマイナス面をみているニュアンス（100点満点で減点されるところ（できない部分）を見ている）

②はプラス面をみているニュアンス（悪いところがあるかもしれないが良いところがそれを上回っている）

ここでは「評価」は②の意味として捉えている
・・・「高く評価する」と言い換えできる
「地域のために何かをしよう」というだけで大きな価値がある
・・・そのやる気を高く評価する（②の意味）

評価の考え方
活動への「やる気」を高めるには？

- 達成動機（目標を達成しようとするやる気）
  価値・期待理論
  価値：目標の価値が高い　期待：目標達成が見込める
  ※社会的価値を認める　達成への見通しがある
- 内発的動機（外的報酬ではないやる気）
  ・好奇心、自律、有能さ、人間関係　などが高める
  自律：自己決定・自由度（やらされ感がない）
  有能：価値あることができるという感覚
  人間関係：良い関係にある人が勧める・認める

「（高く）評価（すべき点を明らかにした）指標」の意義

- 「活動をすること」の社会的価値を明確にする
- 最低限どんな要件があると活動の支援を受けることができるのか明確にする（自分にもできる！ことがわかる）
- 活動を立ち上げるまでの道筋を明確にする（支援を受けられる）
- 活動を継続していくことへの見通しを明確にする
- 活動の継続への選択肢を明確にする
- 活動を始める、続けることの社会的意義を明確にする

●市町村が、住民に価値観を示して共有し、活動参加を促進する
●市町村が支援すべきポイントを明確にする
●市町村内で（支援をすることの）コンセンサスを得るための根拠とする

5　住民が立ち上げようとする活動に対する支援の心構え
協働的な態度

〇信頼関係（協働する関係）を形成する　〇活動への動機づけを高める

- 熱意をもって対応する
  支援の方策を全力で考える、時折訪問して活動を見る、よく話を聴く

- 話を聴く姿勢を示す（興味を持って話を聞く姿勢を明確にする）
  視線、前傾姿勢、うなづき・あいづち、反復等の面接基本態度

- 動機づけを阻害しない
  いじわるしない、けちをつけない、押し付けない、
  プラス面を積極的に評価する、価値を認める

※信頼関係ができていけば、市町村の望む支援を助けてくれる

住民のやる気を支える支援と評価のシートの使い方

一般社団法人全国食支援活動協力会
事務局　斉藤 友歌里

グループワークの準備

1）事前に書いて頂いた「あなたのまちの地域資源」を付箋に書き出してください
＊１枚の付箋に、１つのことを書きます

2）書き込んだ付箋を該当する項目ごとに、A4紙に貼ってください

例：立ち上げ支援に関する準備　に該当する地域資源の付箋
→立ち上げ支援に関する準備　のA4紙に貼る

住民のやる気を支える支援と評価のシート

✓**アセット重視の考え方がベース**
→「何かをやりたいな」と考えた住民や住民グループがあったらその良さを引き出し、様々な地域資源とつなげて強みを伸ばして応援する。

✓見逃しがちだった住民や団体の**「特徴や良さ」を見つけ**、適切な**地域資源とつなげる**ことにより、**新しい取組みを生み出す**。

✓これまで個人の力量や経験に基づいて行われてきた**コーディネートの工程を一般化**して、頭の整理をするツールとして活用。

この時間の目的

✓ シートの使い方を知っていただく

✓ 相談ケース対応のロールプレイ実演を見て、協働的な態度とは？を振り返っていただく

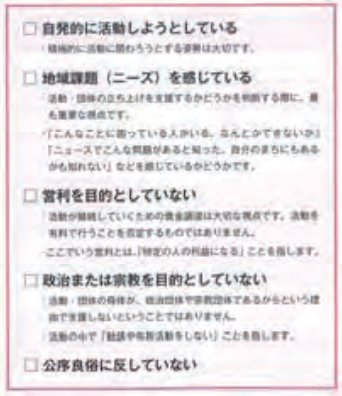
✓ 使い勝手を含めて検証を行い、より使いやすいシートへと改善を図ります

住民から、居場所の立ち上げについて
相談を受けた場面をイメージしてください

① シート１・２の使い方の説明
　ロールプレイ実演をします（前半・後半）
　　↓
② 支援策のアイディアをグループで出し合い、
　シート４を実際に使ってみます ★事前課題はここで使用

5

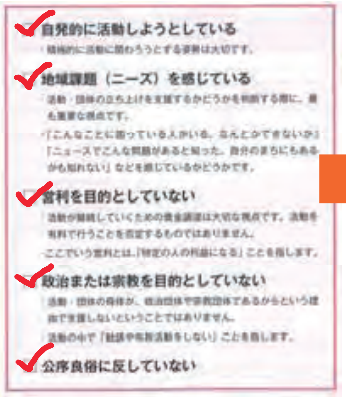
Step１ 支援するかどうかを決める



★シート１を見てください
最初の相談時にはシート１を使い、
支援するかどうかを判断します。

●支援者の心得
- 相談者の話をじっくり聞く
- 最初から理路整然と地域課題を話せる市民は少ないです。どんな課題を感じているかを、支援者が引き出すことが大切です。

6



★シート１にチェックをします

シート1にチェックがすべて入ったら
支援を始める、と判断します

7

Step２ 立ち上げ支援をする

★Step2-1 現状を把握します

●シート２を見てください。

地域性
Q地域に密着しているか？
継続性
Q一緒に活動できそうな人、仲間はいるか？
開放性
Q多様な人が参加できる場になりそうか？
課題解決性
Qどんな課題認識があるか？

8

●シート２

シート２は、相談者の話を聞きながら、特徴や良さを掘り下げていくために使います。

チェックの考え方

- 上から順に尋問するようにチェックしていくものではありません。
- 「チェック項目の数」や「どの項目にチェックがされたか」などにより、優劣をつけるものではありません。
- 「全項目をクリアする」ことを目指して使うものではありません。
- チェックがついたことにより、特徴や良さが確認できたと考えます。

●シート２

ロールプレイ前半

を実演します。

どのような「特徴や良さ」があるかを思い浮かべながら、

相談者の話を聞いてください。

ロールプレイ（前半）

◎相談者：安藤さん　60歳代　女性

～ある日のボランティアセンター～
「ひとり暮らしの高齢男性を対象に夕食の提供をしたい」、
という相談に訪れました

ロールプレイ（前半）

✔ 特徴や良さ

に当たる項目では、プレートを上げます

準備ができたら、ロールプレイを始めます

13

ロールプレイ（前半）のおさらい

◎相談者：安藤さん　60歳代　女性

- ある日、ボランティアセンターに安藤さんが「ひとり暮らしの高齢男性を対象に夕食の提供をしたい」という相談に訪れた。
- じっくり聞いてみると、鍼灸院が開催する認知症カフェでボランティア活動を続ける中で、**ひとり暮らしの高齢男性の食の課題**が見えており、**夕食を共にして孤立しないような居場所をつくりたい**、との思いがあることがわかりました。

14

●シート２

安藤さんの話から次の6つにチェック

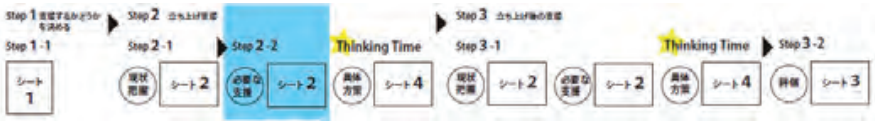
- 西町八丁目のひとり暮らしの男性高齢者が主な対象
- 食事づくりを手伝ってくれるというボランティア仲間がいる
- 月1回から始めたいという意思がある
- 医師や看護師の協力も見込める可能性がある

15

チェックの考え方

- **上から順に尋問するようにチェックしていくものではありません。**
- **「チェック項目の数」や「どの項目にチェックがされたか」などにより、優劣をつけるものではありません。**
- **「全項目をクリアする」ことを目指して使うものではありません。**
- **チェックがついたことにより、特徴や良さが確認できたと考えます。**

16



★Step2-2 必要な支援を考えます

- 「課題認識」と「活動イメージ」があることがわかりました。
- そこで、活動を立ち上げるのに、どんな支援を行ったら良いか、 相談者の話をよく聞きながら考えます。
- **支援の着眼点**を探す際にも、シート２を活用します。

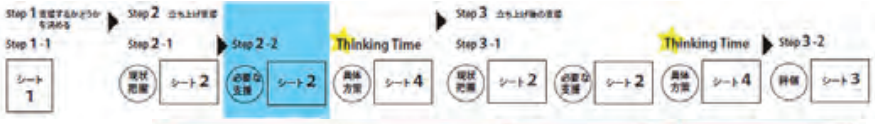
17

ロールプレイ（後半）

✓ 支援の着眼点 に当たる項目では、プレートを上げます

準備ができたら、ロールプレイを始めます

18

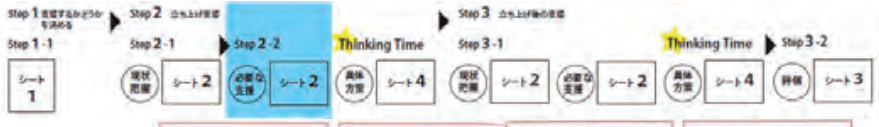


●シート２

必要な支援を考えます

特徴や良さ ✓

19

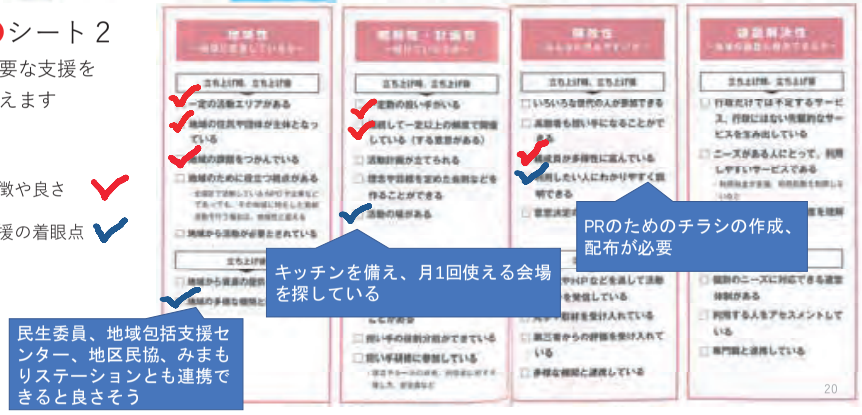


●シート２

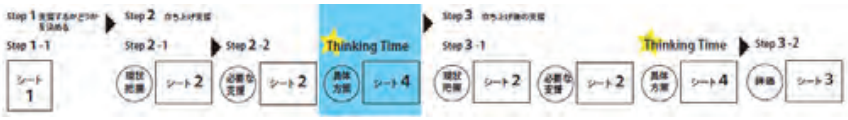
必要な支援を考えます

特徴や良さ ✓

支援の着眼点 ✓



20



Thinking Time

★<u>シート４を見ながら、具体的な支援を考えます</u>

→活動が定着し、ゆくゆくは地域を支えるインフラの１つになるように！

- わがまちに「あるもの」＝地域資源である「人・モノ・場所・資金・制度」等に着目しましょう。
- （支援者が）ひとりで悩むよりも、関係する機関や部署に情報を求めることも大切です。

21

グループワークの進め方　―立ち上げ支援をする

１）地域資源を貼り出した模造紙を作成（*「●班の地域資源」）

①シート２で見つけた「**支援の着眼点**」は３つ

②地域資源を使って具体的にどのような支援ができるか、

<u>各グループで３つ、支援策を考えます</u>

２）どんな意見が出たか、全体で共有します

→いくつかのグループから発表

22

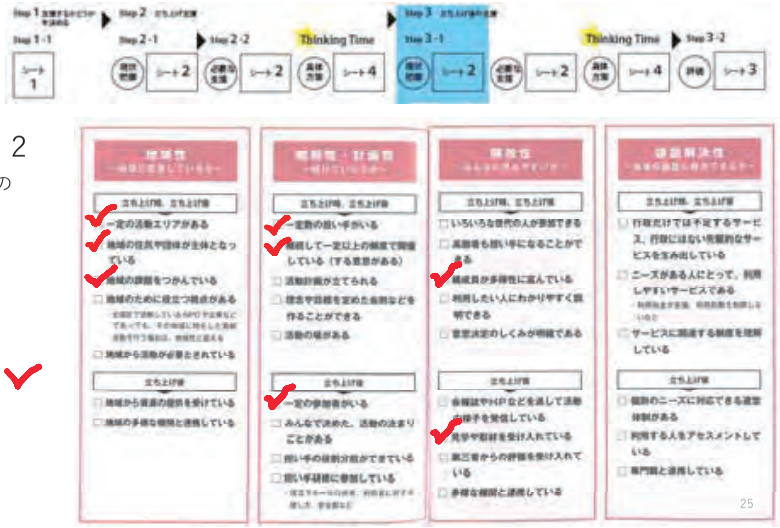
23

Step３ 立ち上がった後の支援をする

★<u>Step3-1 立ち上がった後の、活動の現状を把握します</u>

◎立ち上げ後（１年経過）の支援 事例シートを見てください

24



●シート２

立ち上げ後の
現状の把握

特徴や良さ ✓

★Step3-1　活動が立ち上がった後に必要な支援を考えます

- 会場の使用に不便がある（定期開催したい人が使いやすい仕組みは？）
- 新規ボランティアが少ない（ボランティア募集は？）。
- ひとり暮らしの男性高齢者に来てもらいたいが、参加はまだ少ない（どことつながると良いか？）。

26

グループワークの進め方　－立ち上がった後の支援をする

１）グループ内で話し合い

①シート２：「**支援の着眼点**」はどこか？

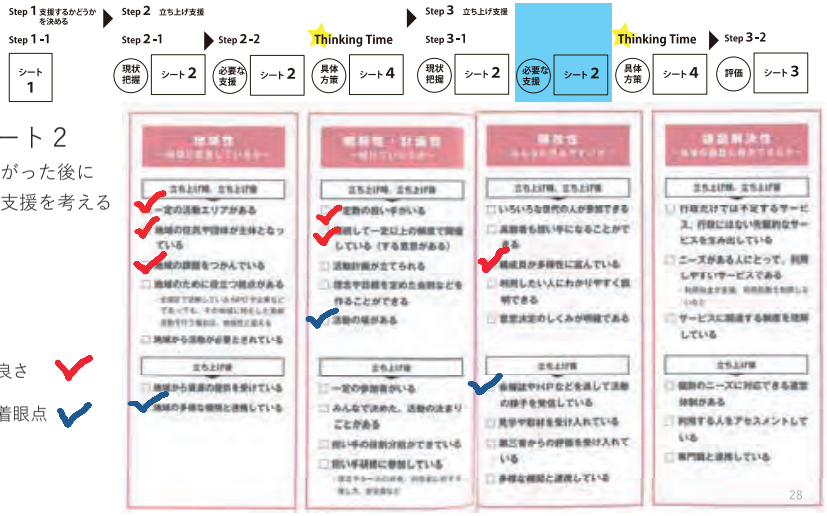
→グループで話し合って**青チェック**を入れます

②シート４：グループで**１つ**、支援策を考えます

２）どんな意見が出たか、全体で共有します

→いくつかのグループから発表

27



●シート２

立ち上がった後に
必要な支援を考える

特徴や良さ ✓

支援の着眼点 ✓

Thinking Time

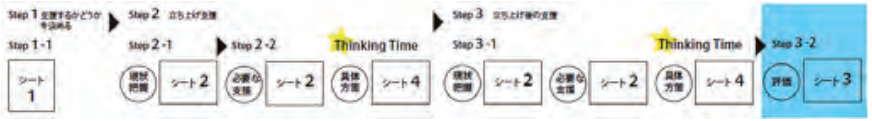
★<u>シート４を見ながら、具体的な支援を考えます</u>

～支援者の心得：支援は一律ではない～

- 活動・団体により、月1回の活動から常設拠点を運営しているところ、組織体制も有志グループから法人組織など多様です。
- そこで、支援も一律ではなく、各団体の特徴や良さに応じた多様な支援が求められます。

●シート４

具体的な支援を考える



★<u>Step3-2　**活動がどのように地域に役立っているかを見つけます**</u>

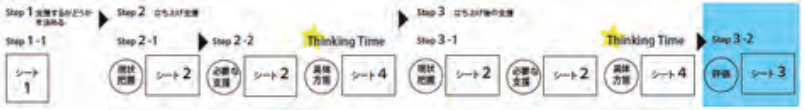
◎シート３「支援することで期待できる視点」を見てください

【何のために使うか？】

支援したことで、それぞれの活動が<u>**地域でどのような価値を生み出しているか**</u>を確認するために使います。

【どんなときに使うか？】

例えば年に１度、活動を振り返るときなどにシート３を使って価値を確認します。



●シート３

活動がどのように地域に役立っているかを見つける

地域に役立っている項目 ✔

Thinking Time

★<u>シート４を見ながら、具体的な支援を考えます</u>

～支援者の心得：支援は一律ではない～

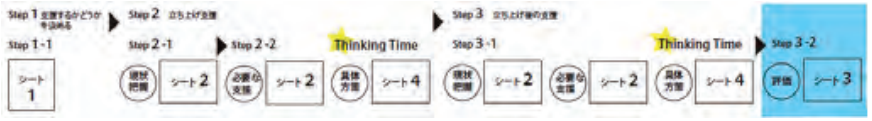
- 活動・団体により、月1回の活動から常設拠点を運営しているところ、組織体制も有志グループから法人組織など多様です。
- そこで、支援も一律ではなく、各団体の特徴や良さに応じた多様な支援が求められます。

29

●シート４

具体的な支援を考える

30



★<u>Step3-2　**活動がどのように地域に役立っているかを見つけます**</u>

◎シート３「支援することで期待できる視点」を見てください

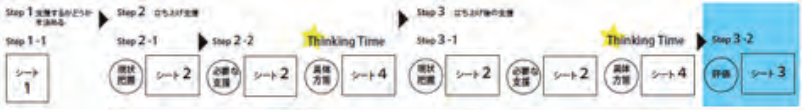
【何のために使うか？】

支援したことで、それぞれの活動が<u>**地域でどのような価値を生み出しているか**</u>を確認するために使います。

【どんなときに使うか？】

例えば年に１度、活動を振り返るときなどにシート３を使って価値を確認します。

28

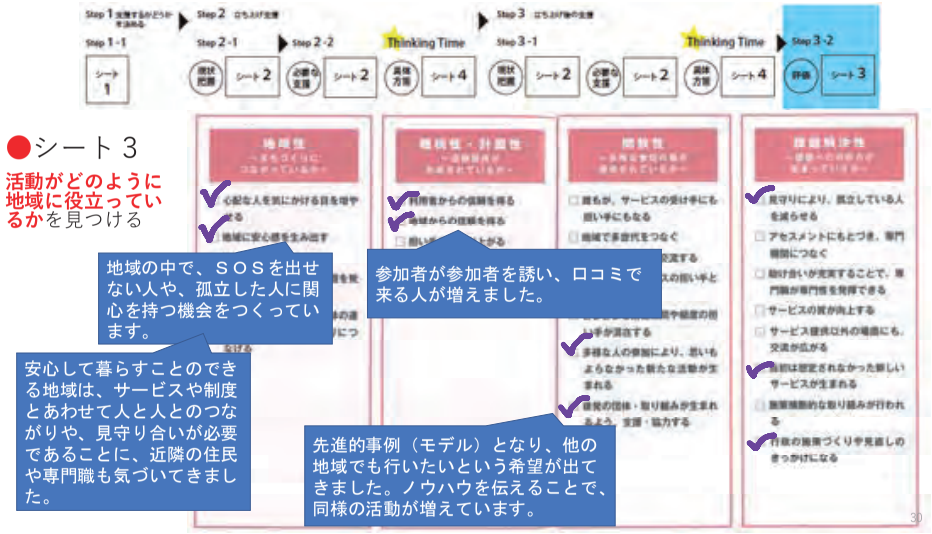


●シート３

活動がどのように地域に役立っているかを見つける

地域に役立っている項目 ✔

29



シート３（支援することで期待できる視点）の考え方

★ 活動が地域で果たしている価値を見つけ、共有するために使います

団体に伝える

「いつもの活動はこのようなことに役立っていますね」と伝えることで、住民のやる気は支えられます。

団体と一緒に考える

「どの項目にチェックできるか」を考えることで、活動の意義を改めて考えたり新たな活動に挑戦する機運が生まれるきっかけづくりになります。こうした使い方も住民のやる気を支えます。

地域住民に伝える

「●●地域食堂を行うようになって、スタッフや参加どうしの日常的な挨拶が増え、心配な人を気にかける目が増えるようになっています」などと地域住民に伝えることで、地域が団体を信頼する気持ちがさらに高まります。**活動を積極的に露出し、地域からの知名度・信頼度を上げることで、活動の担い手のやる気は支えられます。活動を新たに始めたい人の情報をキャッチするきっかけにもなります。**

令和元年度厚生労働省老健局事業
「基礎自治体や中間支援組織等による住民主体の活動を促進するための手法に関する調査研究事業」

「住民のやる気を支える支援と評価のシート」使い方 説明会（香川会場）

新しい生活支援サービスが生まれる可能性のある居場所をイメージしながら､「住民のやる気を支える支援と評価のシート」を使って住民主体の活動を育てる支援の手法について学びます。

『住民のやる気を支える支援と評価のシート』 について

地域住民の活動を地域の財産として育てるためには、活動を把握し、何を改善するのか、どんな支援の手立てがあるのかを協働的な態度で一緒に考え、評価していく姿勢がもとめられます。このシートは、それぞれの活動の特徴や良さを把握し、強みを評価する「住民のやる気を支える」ためのツールで、「住民のやる気を支える支援の手引」として、昨年度、厚生労働省老健局の補助事業において開発しました。今年度は、手引きを各地で実際に使用していただき検証を行い、より使いやすいものに改善していきます。

■ 開催日時　令和元年９月１９日（木）　１３：００～１６：３０

■ 会　場　香川県社会福祉総合センター　７階大会議室
（高松市番町１－１０－３５　TEL：０８７－８３５－３３３４）

■ 主　催　一般社団法人全国食支援活動協力会

■ 共　催　社会福祉法人香川県社会福祉協議会

■ 参加対象　市町社協職員及び生活支援コーディネーター、地域包括支援センター職員、社会福祉施設職員、市町行政担当職員等　　３０名程度

■ プログラム（予定）

１　地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景　（４０分）
講師：内藤 佳津雄 氏
（日本大学文理学部教授／「住民のやる気を支える支援の手引き」の策定委員会委員長）
平野 覚治（一般社団法人全国食支援活動協力会専務理事）

２　シートの使い方の説明とグループワーク（１５０分）　※休憩１０分含む。
①　ロールプレイと質疑応答（テーマ：高齢男性を対象にした会食会の立ち上げ等）
進行：平野 覚治（一般社団法人全国食支援活動協力会専務理事）他
※　ロールプレイ実演を通して協働的な態度を振り返ります。
②　シートを実際に使って、活動の特徴や支援の着眼点の把握、強みの評価をしてみる。
ファシリテーター：斉藤 友歌里（一般社団法人全国食支援活動協力会事務局）他
③　発表と共有

３　振り返りとアンケート記入（２０分）

■ 参加費　無料

■ 参加申込

裏面により９月１２日（木）までに　共催者連絡先（参加申込み先）までお申込みください。

■　その他

説明会で使用するテキストは「住民のやる気を支える支援の手引」で、当日お配りします。テキストを事前にご覧になりたい場合は、下記からダウンロードできます。

また、参加に当たっては、各市町ごとの基礎的なデータ（人口・世帯数、高齢化率等）や社会資源等について、わかる範囲でかまいませんので把握のうえご参加ください。

「住民のやる気を支える支援の手引」　http://mow.jp/pdf/roken_2018tebiki.pdf

■　主催者連絡先（プログラムに関するお問合せ先）

一般社団法人全国食支援活動協力会（担当：平野、斉藤）

〒158-0098　東京都世田谷区上用賀６－１９－２１

TEL：０３－５４２６－２５４７　FAX：０３－５４２６－２５４７

■　共催者連絡先（参加申込み先）

社会福祉法人香川県社会福祉協議会 地域福祉課（担当：松本、十河、日下）

〒760-0017　高松市番町１－１０－３５

TEL：０８７－８６１－０５４５　FAX：０８７－８６１－２６６４

---------- ＦＡＸ送付状 ----------

令和元年　　月　　日

（送り状なしで送付してください。）

香川県社会福祉協議会　地域福祉課　行

FAX　０８７－８６１－２６６４

「住民のやる気を支える支援と評価のシート」使い方 説明会
参 加 申 込 書

団体・機関名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿担当者名＿＿＿＿＿＿＿

TEL＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

No.	役職名	氏名	備考
1			
2			
3			

○　お手数ですが９月１２日（木）までにお申込みください。

○　記載された個人情報については、本事業実施目的のみに使用し適正に管理します。

地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景

Meals on Wheels Japan

【全国食支援活動協力会】で検索

市町村の役割
～住民参加による生活支援サービスの必要性～

背景

総人口（とくに生産年齢人口）の減少
（ただし、老年人口は２０４０年代まで増加）
家族構造の変化（独居・老々世帯の増加）
地域における人間関係の変化（孤独・孤立の発生）
地域における社会的資源の変化

●人口減少・超高齢社会に対応できる社会・地域づくり

地域における生活像

身体的健康（フレイル、低栄養等）
社会的関係（孤立・孤独に陥らない）
心理的健康（幸福感、満足感など）
日常生活の自立・自律

医療・介護や公費による支援だけでは困難

●「インフォーマル」な社会参加＆介護予防、生活支援が大きな課題

住民参加による生活支援サービスの必要性

でも、住民参加で活動する人、地域の高齢者支援に
ボランティア参加する人が少ない、いない・・・

地域の課題解決に関心がある人
地域の他者のために何かをしたい人
　→実はいる（子ども食堂の例！）が見過ごされてきた。

●他者に貢献する活動を地域に作っていくには、こうした発見されにくい「やる気」を育てる積極的支援が必要

●参加の場（オープンな居場所）を作ることが参加する人を増やし、社会参加＆介護予防の広がりに貢献する

◎アンケート調査結果から見えてきたこと

食を通じたコミュニティを生み出しています。

＼ 団体サポート ／

- 食支援活動に関する情報の発信（会報紙・メール・SNS等）
- 当会主催の研修会・セミナーへのご案内
- 全国の住民参加型食事サービス活動団体とのネットワーク
- 教育、調査研究、政策提言
- 助成情報の提供・推進、寄付物品の斡旋など

会員 120団体 (個人・団体)

その他にも、各地のネットワークを通じて
役立つ情報を提供しています。

＼ 2018年度助成実績 ／

■明治安田生命保険相互会社
【地域支え合い活動助成プログラム】
助成事務局運営…12団体を選出

■キユーピーみらいたまご財団
【食の居場所づくり助成プログラム】
助成プログラムB 事務局運営
…27団体選出／スタートアップ助成20団体選出

■「三菱電機SOCIO-ROOTS基金」による
設立25周年記念事業の助成
…こども食堂30団体に助成

■寄付物品（シリアル）の斡旋
企業からの寄贈食品を会食・配食サービス、
子どもの居場所に提供 (中央共同募金会との協働)

食を通じたコミュニティを生み出しています。

Ⅰ.調査概要

	調査A
目的	行政や社協による、住民参加による生活支援サービス運営団体への支援状況を把握するとともに、支援課題やサービス運営団体の評価ポイントを把握することを目的として、調査を実施した。
調査対象	①都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署 ②　〃　の児童福祉所管部署 ③市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署 ④　〃　の児童福祉所管部署 ⑤都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会 ⑥市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会
調査方法	①、②：メールにて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ③、④：①、②を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ⑤：全国社会福祉協議会を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ⑥：⑤を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。
回答時期	平成30年11月～平成30年1月の２か月間

	調査B
目的	住民参加による生活支援サービスの運営実態を把握するとともに、団体が感じる課題や、活動について評価してほしいと考えるポイントを把握することを目的として、調査を実施した。
調査対象	住民参加による生活支援サービス運営団体
調査方法	調査Aの調査対象（①～⑥）および関連団体を通じ、各機関・団体が把握している団体にアンケートの回答記入フォームのURLを伝達し、回答を依頼した。
回答時期	平成30年11月～12月の１か月間

Ⅱ.回答状況

	有効回答数／配布数	回収率
都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署	43件／67件	64.2%
〃　の児童福祉所管部署	56件／67件	83.6%
市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署	913件／1896件	48.2%
〃　の児童福祉所管部署	835件／1896件	44.0%
都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会	29件／67件	43.3%
市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会	522件／1896件	27.5%

調査A（事業票）	回答事業数
都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署	59事業
〃　の児童福祉所管部署	40事業
市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署	1408事業
〃　の児童福祉所管部署	169事
都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会	32事業
市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会	852事業

Ⅱ.回答状況

調査Bは実施している生活支援サービスの分野を問わず調査対象とし、実施しているサービス分野を複数選択で調査し、1254件の回答を得た。

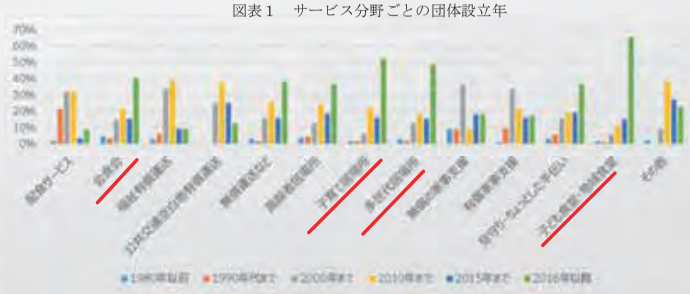
	n	%
全体	1254	100.0
配食サービス	114	9.1
会食会	235	18.7
福祉有償運送	97	7.7
公共交通空白地有償運送	13	1.0
無償運送など（許可・登録のないもの）	80	6.4
高齢者を主対象とする居場所	428	34.1
子育て世代を主対象とする居場所	161	12.8
多世代を主対象とする居場所	272	21.7
無償の家事支援（地域支援事業の訪問型サービスを含む）	21	1.7
有償の家事支援（地域支援事業の訪問型サービスを含む）	256	20.4
見守りや、ちょっとしたお手伝い	186	14.8
子ども食堂・地域食堂	475	37.9
上記のいずれも実施していない	74	5.9

1）新たな担い手が集まるサービス分野

こども食堂・地域食堂、子育て居場所、多世代居場所の５～６割が２０１６年以降に設立された団体だった。

➡ 地域を支える新しい担い手が生まれる機会になっている

図表１　サービス分野ごとの団体設立年

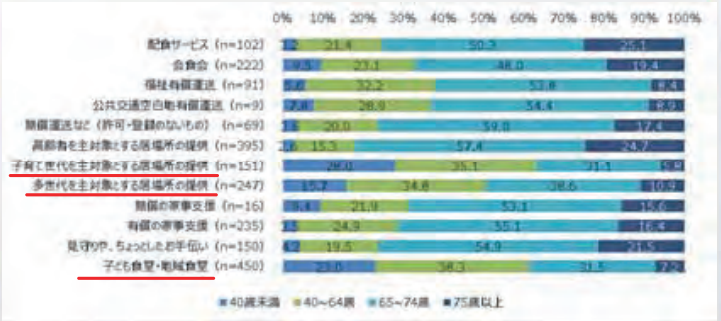


2）ボランティアの年齢について

子育て世代を主対象とする居場所、多世代を主対象とする居場所、子ども食堂・地域食堂は半分以上が現役世代（64歳以下）だった。

➡ 担い手確保と活動の継続性に向けたヒントが

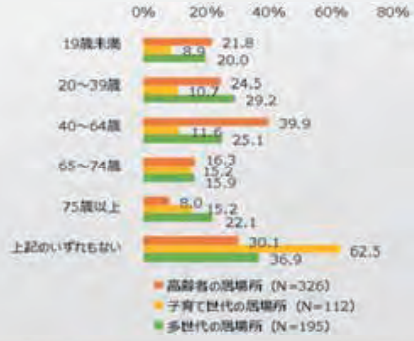
図表２　ボランティアの年齢構成（平均値）



3）多様な世代の利用者を受け入れる活動

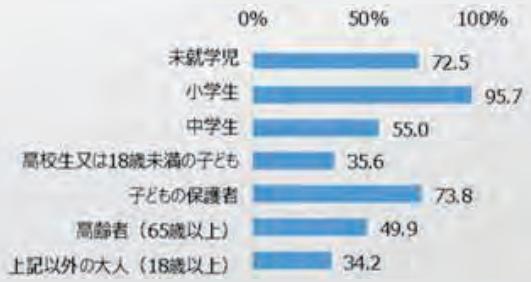
高齢者を主対象とする居場所でも、一定程度が64歳未満を受け入れたいと回答した。また、子育て世代を主対象とする居場所、多世代を主対象とする居場所でも、65歳以上を受け入れることに前向きな団体が一定程度見られた。

図表３　居場所づくりにおいて、今後受け入れたい年齢層

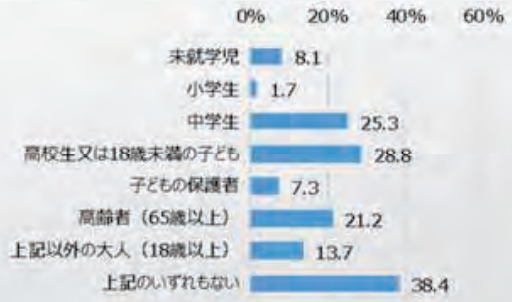


子ども食堂・地域食堂の半数程度が高齢者を受け入れていた。今後新たに受け入れたいという回答も2割程度見られた。

図表４　子ども食堂・地域食堂で受け入れている年齢層



図表５　子ども食堂・地域食堂で今後新たに受け入れたい年齢層



４）居場所づくりから生み出される新たなサービス

限られた地域資源を有効に活用するための１つの方向性として、こうした担い手が集まりやすいサービス分野において、利用対象者の範囲（年齢層等）を広げ、多世代型の生活支援サービスを作り上げていくということが考えられる。

図表６　派生してサービスが生まれたことのある団体の割合

新たな担い手が集まりやすいだけではなく、派生して新たなサービスを生み出すプラットホームとなりうる可能性を秘めていると考える。

図表７
居場所づくりから生まれたサービスの種類

・・「多世代が集う共生の居場所づくり」とは・・

近隣住民同士のつながり

高齢者の活躍の場

東京・稲城市
「支え合う会みのり」
高齢者が集う会食会では夏休みに近隣の子どもが集まり、多世代の空間へ

見守る大人

地域の子ども

北海道・登別市
「ゆめみ～る」

地域のおじいちゃん、おばあちゃんが孫世代のために活躍しています！

兵庫・明石市
「明舞ひまわり」

アセット重視の考え方

図表3-1 ニーズ重視とアセット重視

	ニーズ重視	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか？」	「なぜ健康になるのか？」

- アセット重視の特徴

「あるもの」＋「長い時間軸」に着目して、まずはできるところから始め、時間をかけて市町村内全域に普及させていく。

ニーズ重視の支援はマイナス面について評価する（監査）が、アセット重視では、まずはあることが重要なので。プラス面に目を向けた評価を行う。

アセット重視：住民参加からコミュニティ主導へ

- 住民やコミュニティはサービスの受け手としてだけでなく、担い手であることを認識する。
- 住民やコミュニティは容易に地域での活動を行うことができる要件を示して多くの人・団体の参入を誘う。
- 参加したい人の価値や動機づけを理解する（地域に貢献する活動であれば、行政が望む価値を押し付けない）。
- 市町村は活動の立ち上げと継続をサポートすることを明確に示す。
- 各活動が地域で果たしている価値を認める（それを明確に伝える）。
- コミュニティに権限を委譲して、自分たちの将来と活動を自ら決めることを支援する。

評価の考え方

- 評価　とは①「テストで評価する」
  ②「仕事ぶりを評価している」

①はマイナス面をみているニュアンス（１００点満点で減点されるところ（できない部分）を見ている）

②はプラス面をみているニュアンス（悪いところがあるかもしれないが良いところがそれを上回っている）

ここでは「評価」は②の意味として捉えている

・・・「高く評価する」と言い換えできる

「地域のために何かをしよう」というだけで大きな価値がある

・・・そのやる気を高く評価する（②の意味）

評価の考え方
活動への「やる気」を高めるには？

- 達成動機（目標を達成しようとするやる気）

  価値・期待理論

  価値：目標の価値が高い　期待：目標達成が見込める

  ※社会的価値を認める　達成への見通しがある
- 内発的動機（外的報酬ではないやる気）

  ・好奇心、自律、有能さ、人間関係　などが高める

  自律：自己決定・自由度（やらされ感がない）

  有能：価値あることができるという感覚

  人間関係：良い関係にある人が勧める・認める

『住民のやる気を支える支援と評価のシート』

※住民のやる気を支える支援の手引き（59頁～65頁）

☆シートは特徴や良さを把握し、強みを評価する「住民のやる気を支える」ためのツールとして昨年度に開発

・市町村が、住民に価値観を示して共有し、活動参加を促進する

・市町村が支援すべきポイントを明確にする

・市町村内で（支援をすることの）コンセンサスを得るための根拠とする

住民が立ち上げようとする活動に対する
支援の心構え・協働的な態度

○信頼関係（協働する関係）を形成する　○活動への動機づけを高める

- 熱意をもって対応する

  支援の方策を全力で考える、時折訪問して活動を見る、よく話を聴く
- 話を聴く姿勢を示す（興味を持って話を聞く姿勢を明確にする）

  視線、前傾姿勢、うなづき・あいづち、反復等の面接基本態度
- 動機づけを阻害しない

  いじわるしない、けちをつけない、押し付けない、

  プラス面を積極的に評価する、価値を認める

※信頼関係ができていけば、市町村の望む支援を助けてくれる

協働的態度を示す：面接の方法

基本的な聴く態度・姿勢・空間

・目線の高さ・・・同じ高さに

・姿勢・・・相手側にやや前傾

・座る位置・・・９０度または斜め向かい

・視線・まなざし・・・基本的に向けるが、向けすぎない

向けるときは数秒以上

・表情・・・とくに困惑や不快な表情に注意

・腕組、脚組・・・×

・髪やペンをいじる、指遊びをする・・・×

○傾聴＝聴こうとすることを相手に示すことで話しやすい環境を作る　→信頼関係を形成する

基本的傾聴技法

○相手に「聴いている」態度を明確に示すとともに重要なポイントを共有する

○うなづき・あいづち、　身振り・手振りを入れる
・バリエーションをつけましょう

○相手の話のポイントを繰り返す。とくに感情ややる気を表現した部分を繰り返す
「男性向けの何かをやりたいのです」
「子どもたちが嬉しそうな顔をしたんです」
「ひとりでいるのはつらいなあ」

要約する：相手のメッセージの全体像をまとめて繰り返す

引き出す力・・・質問力を高める

・基本は相手の話を聴くことが目的
・話を整理していくことも必要

○基本は広がる質問（openな質問）を使う
closedな質問（はい、いいえで答える質問）は押し付けにならないように気をつける

○課題が発見されたら解決に向けて協力することを伝えて励ます（いきなり解決案を提案しないことも必要）
「協力者はいるの？」→「いません」
→「そうなんですね」（ここまでで止めると不安）
→「じゃあ見つける方法を考えていきましょうね」（協働）

○聞き手の提案は最後にする（同意のある提案）
「・・・という方法もありますが、どう思いますか？」

ここからは、演習の時間です

協働的態度の演習

協働的に話を聞いてみよう

話のテーマ：これからやりたい・取り組みたいと思っていること
（地域活動ではなく、仕事でも遊びでも良い）

●２人１組で、「支援者（聞き手）」と「相談者（話し手）」になって、支援者役が話を聞く
●５分ぐらい話を聞き、その後２分ほどの振り返り（２回繰り返し、交代で一人が両方の役割を行う）

話のテーマ：これからやりたい・取り組みたいと思っていること
（地域活動ではなく、仕事でも遊びでも良い）

0　最初にあいさつとともに今日話をできる時間を必ず言う
　「こんにちは。ほんの５分ほどしかないのですが、話を聞かせてもらっていいですか」
1　相手の話に、積極的にうなずき・あいづちをいれて、とにかく聞く
2　反復を入れた受け答え、何か聞くときはオープンな質問を心がける
3　とくに「やりたい」ということについて詳細に（関心を持って）聞いて、共有する
4　自分の経験・考えは話さない（押しつけになるかも）。
5　ポジティブな感情（是認）を示す。「良いですね」、「面白そうですね」、「素晴らしい」
　・・・聞き手ではなく、相手にとっての良いことだと考える（価値を共有：やる気を高める）
6　その取り組みをするために、課題となっていることも聞いて、共有してみる
　「・・・をするために難しいことや課題になっていることはありますか？」
7　その解決方法を尋ねてみる（自分の経験は言わない）
　「どういうふうにしたら、うまくいきそうでしょうかね？」→答えを是認する
●実際は最後に解決法の案を提案する場合もあるが、必ず意向を尋ねたほうがよい
「・・・という方法もありますが、どう思いますか？」：今回はここまでいかなくて良いです

住民のやる気を支える支援と評価のシートの使い方

一般社団法人全国食支援活動協力会
事務局　斉藤 友歌里

1

住民のやる気を支える支援と評価のシート

＊**アセット重視の考え方がベース**
→**すでにあるものに着目**（人・物・資金・地域のために何かをしたいという熱意…）
→「何かをやりたいな」と考えた住民や住民グループがあったらその良さを引き出し、様々な地域資源とつなげて強みを伸ばして応援する。

✓見逃しがちだった住民や団体の「**特徴や良さ**」**を見つけ**、適切な**地域資源とつなげる**ことにより、**新しい取組みを生み出す**。

✓これまで個人の力量や経験に基づいて行われてきた**コーディネートの工程を一般化**して、頭の整理をするツールとして活用。

2

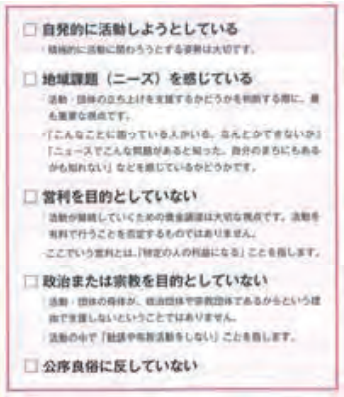
グループワークの目的

✓ シートを実際に使っていただく

✓ 使い勝手を含めて検証を行い、より使いやすいシートへと改善を図ります

3

Step１ 支援するかどうかを決める


☐ 自発的に活動しようとしている
積極的に活動に関わろうとする姿勢は大切です。

☐ 地域課題（ニーズ）を感じている
活動・団体の立ち上げを支援するかどうかを判断する際に、最も重要な視点です。
「こんなことに困っている人がいる。なんとかできないか」「ニュースでこんな問題があると知った。自分のまちにもあるかも知れない」などを感じているかどうかです。

☐ 営利を目的としていない
活動が継続していくための資金調達は大切な視点です。活動を有料で行うことを否定するものではありません。
ここでいう営利とは、「特定の人の利益になる」ことを指します。

☐ 政治または宗教を目的としていない
活動・団体の母体が、政治団体や宗教団体であるからという理由で支援しないということではありません。
活動の中で「勧誘や布教活動をしない」ことを指します。

☐ 公序良俗に反していない

★シート１を見てください
<u>最初の相談時にはシート１を使い、支援するかどうかを判断します</u>。

●支援者の心得
- 相談者の話をじっくり聞く
- 最初から理路整然と地域課題を話せる市民は少ないです。どんな課題を感じているかを、支援者が引き出すことが大切です。

4

自発的に活動しようとしている

・積極的に活動に関わろうとする姿勢は大切です。

地域課題（ニーズ）を感じている

・活動・団体の立ち上げを支援するかどうかを判断する際に、最も重要な視点です。

・「こんなことに困っている人がいる、なんとかできないか」「ニュースでこんな問題があると知った、自分のまちにもあるかも知れない」などを感じているかどうかです。

営利を目的としていない

・活動が継続していくための資金調達は大切な視点です。活動を有料で行うことを否定するものではありません。

・ここでいう営利とは、「特定の人の利益になる」ことを指します。

政治または宗教を目的としていない

・活動・団体の母体が、政治団体や宗教団体であるからという理由で支援しないということではありません。

・活動の中で「政談や布教活動をしない」ことを指します。

公序良俗に反していない

5

★シート１にチェックをします

シート1にチェックがすべて入ったら支援を始める、と判断します

Step 2 立ち上げ支援をする

★Step2-1 現状を把握します

●シート２を見てください。

地域性
Q地域に密着しているか？
継続性
Q一緒に活動できそうな人、仲間はいるか？
開放性
Q多様な人が参加できる場になりそうか？
課題解決性
Qどんな課題認識があるか？

6

●シート２

シート２は、相談者の話を聞きながら、特徴や良さを掘り下げていくために使います。

7

●シート２

ロールプレイ前半を実演します。

どのような「**特徴や良さ**」があるかを思い浮かべながら、相談者の話を聞いてください。

8

ロールプレイ（前半）

◎相談者：安藤さん　60歳代　女性

～自治体主催の「まちづくり学習会」に参加した安藤さん～
ボランティア活動をする中で「一人暮らしの高齢男性の食生活」が気になっていて、何か活動をしたいと考えています。

9

ロールプレイ（前半）

✓ 特徴や良さ

◎アセスメントシート（表）
安藤さんが行いたいと思っている活動の「特徴や良さ」をメモします

準備ができたら、ロールプレイを始めます

10

●シート２

安藤さんの話から次の5つにチェック

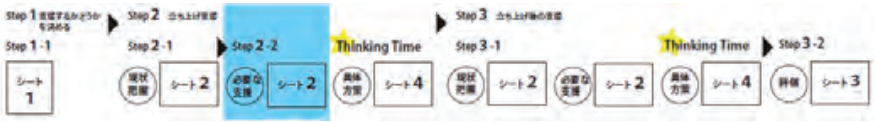
- 西町八丁目で、孤立しがちな男性高齢者を主な対象にしたい
- 食事づくりを手伝ってくれるというボランティア仲間がいる
- 鍼灸院に通う高齢者がボランティアとして参加してくれる
- 毎月1回から始めたいという意思がある

11

チェックの考え方

- **上から順に尋問するようにチェックしていくものではありません。**
- **「チェック項目の数」や「どの項目にチェックがされたか」などにより、優劣をつけるものではありません。**
- **「全項目をクリアする」ことを目指して使うものではありません。**
- **チェックがついたことにより、特徴や良さが確認できたと考えます。**

12



★<u>Step2-2　必要な支援を考えます</u>

- 「課題認識」と「活動イメージ」があることがわかりました。
- そこで、活動を立ち上げるのに、どんな支援を行ったら良いか、 相談者の話をよく聞きながら考えます。
- **支援の着眼点**を探す際にも、シート２を活用します。

13

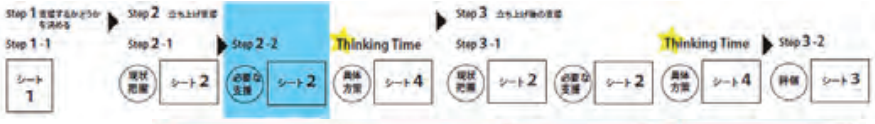
ロールプレイ（後半）

支援の着眼点 に当たる項目では、プレートを上げます

◎アセスメントシート（裏）「安藤さんが行いたい活動の課題だと思うこと」をメモをします

準備ができたら、ロールプレイを始めます

14

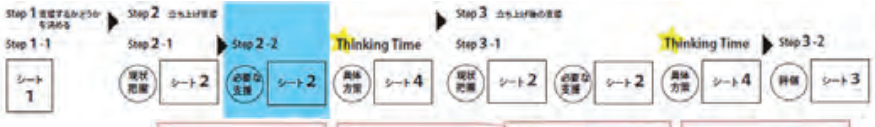


●シート２

必要な支援を考えます

特徴や良さ

15

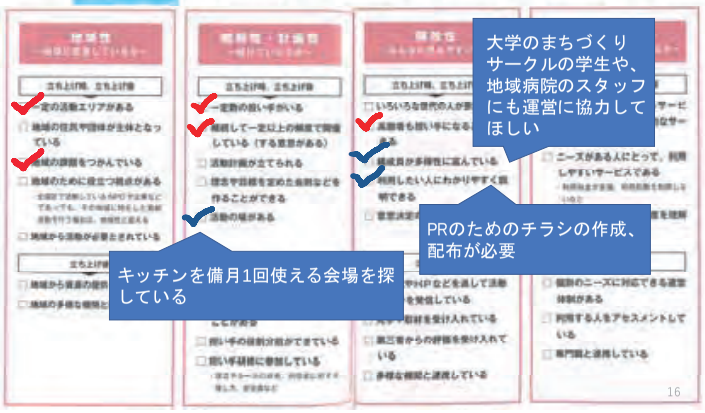


●シート２

必要な支援を考えます

特徴や良さ

支援の着眼点



16

Thinking Time

★<u>シート４を見ながら、具体的な支援を考えます</u>

→活動が定着し、ゆくゆくは地域を支えるインフラの１つになるように！

- わがまちに「あるもの」＝地域資源である「人・モノ・場所・資金・制度」等に着目しましょう。
- （支援者が）ひとりで悩むよりも、関係する機関や部署に情報を求めることも大切です。

17

グループワークの進め方　―立ち上げ支援をする

１）安藤さんの話を聞いて、あなたのまちにある関連しそうな「地域資源」を付箋に書き出してください（*「●班の地域資源」）

＊<u>１枚の付箋に、１つのことを書きます</u>

２）地域資源をもとに、支援策を考えます

①シート２で見つけた「**支援の着眼点**」は３つ

②地域資源を使って具体的にどのような支援ができるか、

<u>各グループで３つ、支援策を考えます</u>

３）どんな支援策が出たか、全体で共有します

→いくつかのグループから発表

18

19

Step３ 立ち上がった後の支援をする

★<u>Step3-1 立ち上がった後の、活動の現状を把握します</u>

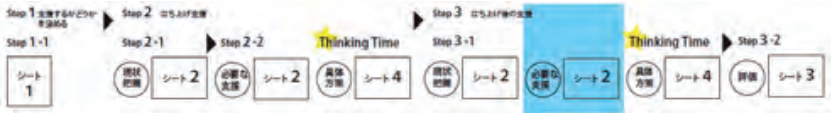
◎立ち上げ後（１年経過）の支援 事例シートを見てください

20

●シート２

立ち上げ後の
現状の把握

特徴や良さ ✓



★Step3-1　活動が立ち上がった後に必要な支援を考えます

- ひとり暮らしの男性高齢者にもっと来てもらいたい（どことつながると良いか？）。
- 会場の使用に不便がある（定期開催したい人が使いやすい仕組みは？）
- 生活の困りごとを抱える参加者に対して、関係機関につなげてあげたい気持ちもある（相談先、連携先とつながるためには？）。
- 開催回数を増やしてほしいという要望がある（ボランティア募集は？）。

グループワークの進め方　－立ち上がった後の支援をする

１）グループ内で話し合い

①シート２：「**支援の着眼点**」はどこか？
　　→グループで話し合って**青チェック**を入れます
②シート４：グループで**１つ**、支援策を考えます

２）どんな意見が出たか、全体で共有します

→いくつかのグループから発表

★Step3-2　活動がどのように地域に役立っているかを見つけます

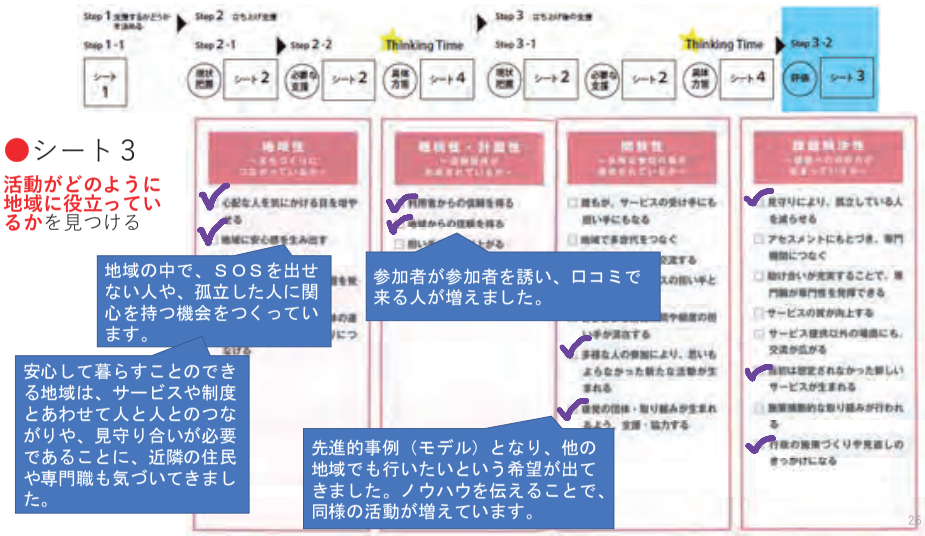
◎シート３「支援することで期待できる視点」を見てください

【何のために使うか？】

支援したことで、それぞれの活動が**地域でどのような価値を生み出しているか**を確認するために使います。

【どんなときに使うか？】

例えば年に１度、活動を振り返るときなどにシート３を使って価値を確認します。



シート３（支援することで期待できる視点）の考え方

★ 活動が地域で果たしている価値を見つけ、共有するために使います

団体に伝える

「いつもの活動はこのようなことに役立っていますね」と伝えることで、住民のやる気は支えられます。**時折訪問して活動を見る**ことも、住民にとって励みになります。

団体と一緒に考える

「どの項目にチェックできるか」を考えることで、活動の意義を改めて考え、新たな活動に挑戦する機運が生まれるきっかけづくりになります。

地域住民に伝える

「●●地域食堂を行うようになって、スタッフや参加どうしの日常的な挨拶が増え、心配な人を気にかける目が増えるようになっています」などと地域住民に伝えることで、地域が団体を信頼する気持ちがさらに高まります。**活動を積極的に露出し、地域からの知名度・信頼度を上げる**ことで、活動の担い手のやる気は支えられます。**発信することで、活動を新たに始めたい人の情報をキャッチする**きっかけにもなります。

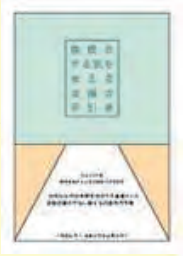
27

令和元年度厚生労働省老健事業
「基礎自治体や中間支援組織等による住民主体の活動を促進するための手法に関する調査研究事業」

無料

“住民主体の活動を育てるには？

新しい生活支援サービスが生まれる可能性のある居場所をイメージしながら、平成30年度厚生労働省老健事業で作成した「住民のやる気を支える支援と評価のシート」を使って住民主体の活動を育てる支援の手法を学びませんか？



日時　１０月２日（水）１３：３０～17：００

会場　長久手市福祉の家　２階集会室
（〒480－1102愛知県長久手市 前熊下田171番地）

定員　約３０名程度（先着順）

対象
- 自治体職員
- 社会福祉協議会職員
- 生活支援コーディネーター
- コミュニティソーシャルワーカー
- 住民主体の活動に携わる職員など

- 地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景(講義)
- グループワーク（ロールプレイ）
- 質疑応答
- アンケート＆グループインタビュー

お申し込みは、下記応募フォーム・裏面のFAX・電話にてお願いします。

応募フォーム　http://www.city.nagakute.lg.jp/chouju/event/ju.html

お問い合わせ　0561-56-0639(長久手市役所長寿課)

申し込み締切　9月25日まで

主催：一般社団法人全国食支援活動協力会
〒158-0098　東京都世田谷区上用賀6－19－21
☎０３－５４２６－２５４７（平日9：00～17：00）
✉ infomow@mow.jp
協力：愛知県長久手市役所福祉部長寿課

“住民主体の活動を育てるには？
参加申込書

下記に必要事項をご記入の上、FAXにてお送りください

0561-63-2940（長久手市役所長寿課）

ふりがな	
名前	
電話番号 （携帯可）	
所属	
職種	
メールアドレス	

地域の居場所の可能性と
「やる気を支える支援」が必要な背景

Meals on Wheels Japan

[全国食支援活動協力会]で検索

市町村の役割
～住民参加による生活支援サービスの必要性～

背景

総人口（とくに生産年齢人口）の減少
（ただし、老年人口は２０４０年代まで増加）
家族構造の変化（独居・老々世帯の増加）
地域における人間関係の変化（孤独・孤立の発生）
地域における社会的資源の変化

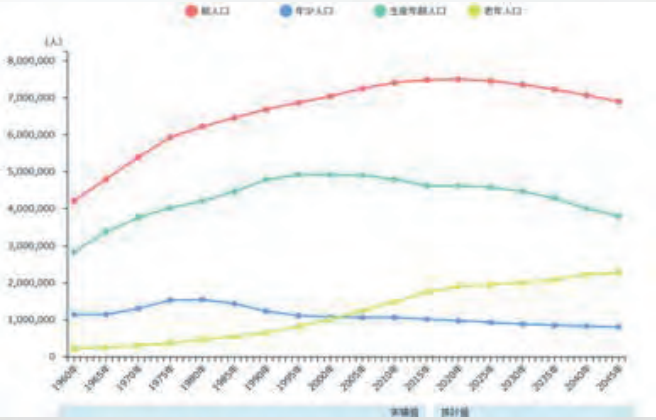
●人口減少・超高齢社会に対応できる社会・地域づくり

地域における生活像
身体的健康（フレイル、低栄養等）
社会的関係（孤立・孤独に陥らない）
心理的健康（幸福感、満足感など）
日常生活の自立・自律

医療・介護や公費による支援だけでは困難

●「インフォーマル」な社会参加＆介護予防、生活支援が大きな課題

愛知県の人口の推移（RESASより）



住民参加による生活支援サービスの必要性

でも、住民参加で活動する人、地域の高齢者支援に
ボランティア参加する人が少ない、いない・・・

地域の課題解決に関心がある人
地域の他者のために何かをしたい人
　→実はいる（子ども食堂の例！）が見過ごされてきた。

●他者に貢献する活動を地域に作っていくには、こうした発見されにくい「やる気」を育てる積極的支援が必要

●参加の場（オープンな居場所）を作ることが参加する人を増やし、社会参加＆介護予防の広がりに貢献する

食を通じたコミュニティを生み出しています。

団体サポート

- 食支援活動に関する情報の発信（会報紙・メール・SNS等）
- 当会主催の研修会・セミナーへのご案内
- 全国の住民参加型食事サービス活動団体とのネットワーク
- 教育、調査研究、政策提言
- 助成情報の提供・推進、寄付物品の斡旋など

会員 120団体 (個人・団体)

その他にも、各地のネットワークを通じて
役立つ情報を提供しています。

2018年度助成実績

■明治安田生命保険相互会社
【地域支え合い活動助成プログラム】
助成事務局運営…12団体を選出

■キユーピーみらいたまご財団
【食の居場所づくり助成プログラム】
助成プログラムB 事務局運営
…27団体選出／スタートアップ助成20団体選出

■「三菱電機SOCIO-ROOTS基金」による
設立25周年記念事業の助成
…こども食堂30団体に助成

■寄付物品（シリアル）の斡旋
企業からの寄贈食品を会食・配食サービス、
子どもの居場所に提供 (中央共同募金会との協働)

◎アンケート調査結果から見えてきたこと

Ⅰ.調査概要

	調査A
目的	行政や社協による、住民参加による生活支援サービス運営団体への支援状況を把握するとともに、支援課題やサービス運営団体の評価ポイントを把握することを目的として、調査を実施した。
調査対象	①都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署 ②　〃　の児童福祉所管部署 ③市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署 ④　〃　の児童福祉所管部署 ⑤都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会 ⑥市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会
調査方法	①、②：メールにて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ③、④：①、②を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ⑤：全国社会福祉協議会を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ⑥：⑤を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。
回答時期	平成30年11月～平成30年1月の２か月間

	調査B
目的	住民参加による生活支援サービスの運営実態を把握するとともに、団体が感じる課題や、活動について評価してほしいと考えるポイントを把握することを目的として、調査を実施した。
調査対象	住民参加による生活支援サービス運営団体
調査方法	調査Aの調査対象（①～⑥）および関連団体を通じ、各機関・団体が把握している団体にアンケートの回答記入フォームのURLを伝達し、回答を依頼した。
回答時期	平成30年11月～12月の１か月間

Ⅱ.回答状況

	有効回答数／配布数	回収率
都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署	43件／67件	64.2%
〃　　の児童福祉所管部署	56件／67件	83.6%
市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署	913件／1896件	48.2%
〃　　の児童福祉所管部署	835件／1896件	44.0%
都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会	29件／67件	43.3%
市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会	522件／1896件	27.5%

調査A（事業票）	回答事業数
都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署	59事業
〃　　の児童福祉所管部署	40事業
市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署	1408事業
〃　　の児童福祉所管部署	169事
都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会	32事業
市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会	852事業

9

Ⅱ.回答状況

調査Bは実施している生活支援サービスの分野を問わず調査対象とし、実施しているサービス分野を複数選択で調査し、1254件の回答を得た。

	n	%
全体	1254	100.0
配食サービス	114	9.1
会食会	235	18.7
福祉有償運送	97	7.7
公共交通空白地有償運送	13	1.0
無償運送など（許可・登録のないもの）	80	6.4
高齢者を主対象とする居場所	428	34.1
子育て世代を主対象とする居場所	161	12.8
多世代を主対象とする居場所	272	21.7
無償の家事支援（地域支援事業の訪問型サービスを含む）	21	1.7
有償の家事支援（地域支援事業の訪問型サービスを含む）	256	20.4
見守りや、ちょっとしたお手伝い	186	14.8
子ども食堂・地域食堂	475	37.9
上記のいずれも実施していない	74	5.9

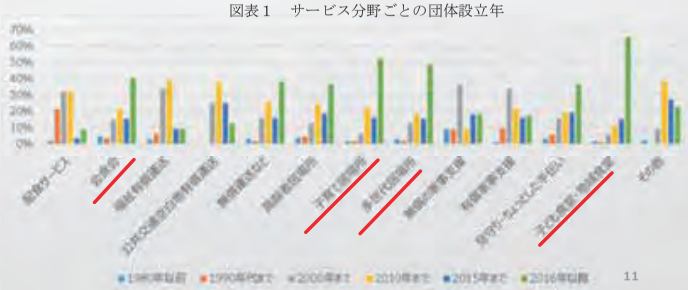
10

1）新たな担い手が集まるサービス分野

こども食堂・地域食堂、子育て居場所、多世代居場所の５～６割が２０１６年以降に設立された団体だった。

➡ 地域を支える新しい担い手が生まれる機会になっている

図表１　サービス分野ごとの団体設立年



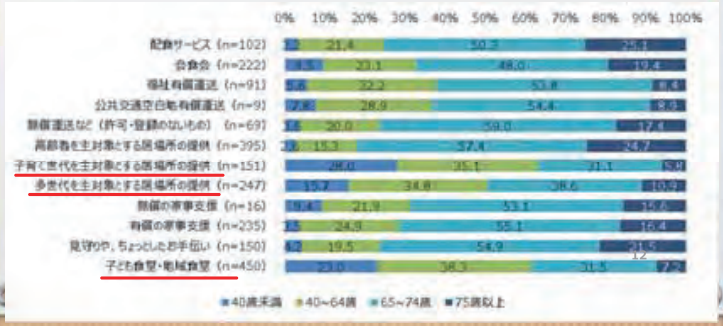
11

2）ボランティアの年齢について

子育て世代を主対象とする居場所、多世代を主対象とする居場所、子ども食堂・地域食堂は半分以上が現役世代（64歳以下）だった。

➡ 担い手確保と活動の継続性に向けたヒントが

図表２　ボランティアの年齢構成（平均値）

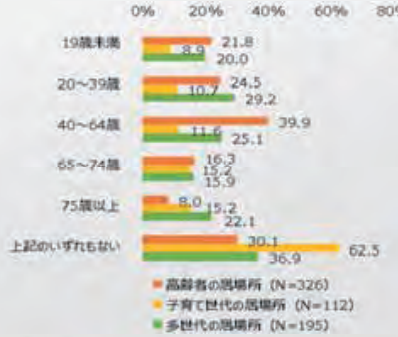


12

３）多様な世代の利用者を受け入れる活動

高齢者を主対象とする居場所でも、一定程度が64歳未満を受け入れたいと回答した。また、子育て世代を主対象とする居場所、多世代を主対象とする居場所でも、65歳以上を受け入れることに前向きな団体が一定程度見られた。

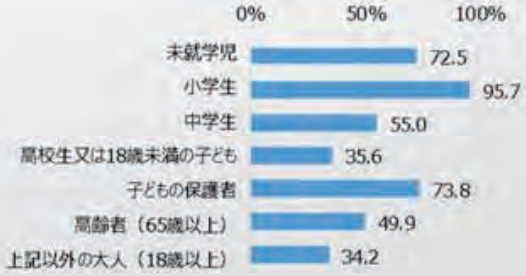
図表３　居場所づくりにおいて、今後受け入れたい年齢層



13

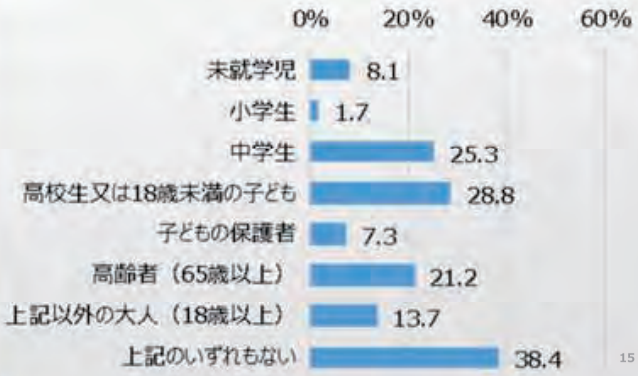
子ども食堂・地域食堂の半数程度が高齢者を受け入れていた。今後新たに受け入れたいという回答も2割程度見られた。

図表４　子ども食堂・地域食堂で受け入れている年齢層



14

図表５　子ども食堂・地域食堂で今後新たに受け入れたい年齢層



15

４）居場所づくりから生み出される新たなサービス

限られた地域資源を有効に活用するための１つの方向性として、こうした担い手が集まりやすいサービス分野において、利用対象者の範囲（年齢層等）を広げ、多世代型の生活支援サービスを作り上げていくということが考えられる。

図表６　派生してサービスが生まれたことのある団体の割合

16

新たな担い手が集まりやすいだけではなく、派生して新たなサービスを生み出すプラットホームとなりうる可能性を秘めていると考える。

図表７
居場所づくりから生まれたサービスの種類

17

・・「多世代が集う共生の居場所づくり」とは・・

近隣住民同士のつながり

高齢者の活躍の場

東京・稲城市
「支え合う会みのり」
高齢者が集う会食会では夏休みに近隣の子どもが集まり、多世代の空間へ

見守る大人

地域の子ども

北海道・登別市
「ゆめみ～る」

地域のおじいちゃん、おばあちゃんが孫世代のために活躍しています！

兵庫・明石市
「明舞ひまわり」

18

アセット重視の考え方

図表3-1 ニーズ重視とアセット重視

	ニーズ重視	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか？」	「なぜ健康になるのか？」

- アセット重視の特徴

「あるもの」＋「長い時間軸」に着目して、まずはできるところから始め、時間をかけて市町村内全域に普及させていく。

ニーズ重視の支援はマイナス面について評価する（監査）が、アセット重視では、まずはあることが重要なので。プラス面に目を向けた評価を行う。

アセット重視：住民参加からコミュニティ主導へ

- 住民やコミュニティはサービスの受け手としてだけでなく、担い手であることを認識する。
- 住民やコミュニティは容易に地域での活動を行うことができる要件を示して多くの人・団体の参入を誘う。
- 参加したい人の価値や動機づけを理解する（地域に貢献する活動であれば、行政が望む価値を押し付けない）。
- 市町村は活動の立ち上げと継続をサポートすることを明確に示す。
- 各活動が地域で果たしている価値を認める（それを明確に伝える）。
- コミュニティに権限を委譲して、自分たちの将来と活動を自ら決めることを支援する。

評価の考え方

- 評価　とは①「テストで評価する」
  ②「仕事ぶりを評価している」

①はマイナス面をみているニュアンス（１００点満点で減点されるところ（できない部分）を見ている）

②はプラス面をみているニュアンス（悪いところがあるかもしれないが良いところがそれを上回っている）

ここでは「評価」は②の意味として捉えている

・・・「高く評価する」と言い換えできる

「地域のために何かをしよう」というだけで大きな価値がある

・・・そのやる気を高く評価する（②の意味）

評価の考え方
活動への「やる気」を高めるには？

- 達成動機（目標を達成しようとするやる気）
  価値・期待理論
  価値：目標の価値が高い　期待：目標達成が見込める
  ※社会的価値を認める　達成への見通しがある
- 内発的動機（外的報酬ではないやる気）
  ・好奇心、自律、有能さ、人間関係　などが高める
  自律：自己決定・自由度（やらされ感がない）
  有能：価値あることができるという感覚
  人間関係：良い関係にある人が勧める・認める

『住民のやる気を支える支援と評価のシート』

※住民のやる気を支える支援の手引き（59頁～65頁）

☆シートは特徴や良さを把握し、強みを評価する「住民のやる気を支える」ためのツールとして昨年度に開発

・市町村が、住民に価値観を示して共有し、活動参加を促進する

・市町村が支援すべきポイントを明確にする

・市町村内で（支援をすることの）コンセンサスを得るための根拠とする

住民が立ち上げようとする活動に対する支援の心構え・協働的な態度

○信頼関係（協働する関係）を形成する　○活動への動機づけを高める

- 熱意をもって対応する
  支援の方策を全力で考える、時折訪問して活動を見る、よく話を聴く
- 話を聴く姿勢を示す（興味を持って話を聞く姿勢を明確にする）
  視線、前傾姿勢、うなづき・あいづち、反復等の面接基本態度
- 動機づけを阻害しない
  いじわるしない、けちをつけない、押し付けない、
  プラス面を積極的に評価する、価値を認める

※信頼関係ができていけば、市町村の望む支援を助けてくれる

協働的態度を示す：面接の方法

基本的な聴く態度・姿勢・空間
- 目線の高さ・・・同じ高さに
- 姿勢・・・相手側にやや前傾
- 座る位置・・・９０度または斜め向かい
- 視線・まなざし・・・基本的に向けるが、向けすぎない
  向けるときは数秒以上
- 表情・・・とくに困惑や不快な表情に注意
- 腕組、脚組・・・×
- 髪やペンをいじる、指遊びをする・・・×

○傾聴＝聴こうとすることを相手に示すことで話しやすい環境を作る　→信頼関係を形成する

基本的傾聴技法

○相手に「聴いている」態度を明確に示すとともに重要なポイントを共有する

○うなづき・あいづち、　身振り・手振りを入れる・バリエーションをつけましょう

○相手の話のポイントを繰り返す。とくに感情ややる気を表現した部分を繰り返す
「男性向けの何かをやりたいのです」
「子どもたちが嬉しそうな顔をしたんです」
「ひとりでいるのはつらいなあ」

要約する：相手のメッセージの全体像をまとめて繰り返す

引き出す力・・・質問力を高める

- 基本は相手の話を聴くことが目的
- 話を整理していくことも必要

○基本は広がる質問（openな質問）を使う
closedな質問（はい、いいえで答える質問）は押し付けにならないように気をつける

○課題が発見されたら解決に向けて協力することを伝えて励ます（いきなり解決案を提案しないことも必要）
「協力者はいるの？」→「いません」
→「そうなんですね」（ここまでで止めると不安）
→「じゃあ見つける方法を考えていきましょうね」（協働）

○聞き手の提案は最後にする（同意のある提案）
「・・・という方法もありますが、どう思いますか？」

「やる気を支える支援」の流れ（1/4）
～何かしたいとの出会い～

（１）個人

①窓口に相談に来る

②講座、教室、イベントの参加者

（２）既存の活動・集まり・団体

「やる気を支える支援」の流れ（2/4）
～支援の可能性を考える～

（1）生活支援サービスとして支援・協働したい

（2）「地域力」づくり（互助、社会貢献）
①将来、生活支援へつながりそう

②生活支援のニーズを発見する場

「やる気を支える支援」の流れ（3/4）
～活動づくり、グループづくりを支援する～

非金銭的支援から

①みてもらう
先行事例の紹介・見学（同行）

②つなぐ
先駆的団体につなぐ
庁内の他の部署につなぐ

③活動場所の確保

④広報の支援

「やる気を支える支援」の流れ（4/4）
～ランニングコストの出所につなぐ～

例）
①市民協働（まちづくり）の支援金など

②社会福祉協議会の助成金

③民間財団の助成金

④介護保険・高齢者福祉等の補助事業・委託事業など

住民のやる気を支える支援と評価のシートの使い方

一般社団法人全国食支援活動協力会
事務局　斉藤 友歌里

1

住民のやる気を支える支援と評価のシート

＊**アセット重視の考え方がベース**
→**すでにあるものに着目**（人・物・資金・地域のために何かをしたいという熱意…）
→「何かをやりたいな」と考えた住民や住民グループがあったらその良さを引き出し、様々な地域資源とつなげて強みを伸ばして応援する。

✓見逃しがちだった住民や団体の「**特徴や良さ**」**を見つけ**、適切な**地域資源とつなげる**ことにより、**新しい取組みを生み出す**。

✓これまで個人の力量や経験に基づいて行われてきた**コーディネートの工程を一般化**して、頭の整理をするツールとして活用。

2

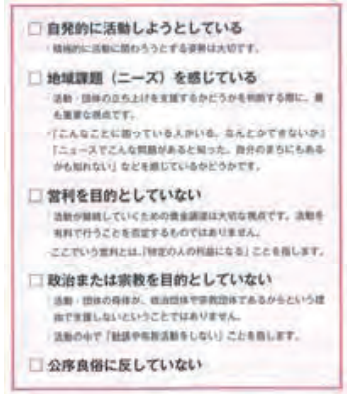
グループワークの目的

✓ シートを実際に使っていただく

✓ 使い勝手を含めて検証を行い、より使いやすいシートへと改善を図ります

3

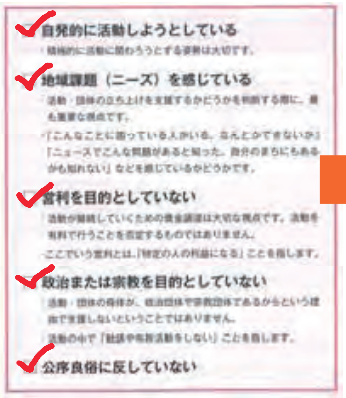
Step１ 支援するかどうかを決める


□ 自発的に活動しようとしている
□ 地域課題（ニーズ）を感じている
□ 営利を目的としていない
□ 政治または宗教を目的としていない
□ 公序良俗に反していない

★シート１を見てください

●「何かしたい」に出会ったら…
- まずは、相談者の話をじっくり聞く
- 最初から理路整然と地域課題を話せる市民は少ないです。どんな課題を感じているかを、支援者が引き出すことが大切です。

4



●シート１：
支援することを決定する最初の判断材料

シート1にチェックがすべて入ったら
支援を始める、と判断します

5

Step 2 立ち上げ支援をする

★Step2-1 現状を把握します

●シート２：人（団体）が持つ強みを把握し、必要な支援を見つける

地域性
Q地域に密着しているか？
継続性
Q一緒に活動できそうな人、仲間はいるか？
開放性
Q多様な人が参加できる場になりそうか？
課題解決性
Qどんな課題認識があるか？

6

●シート２

シート２は、相談者の話を聞きながら、特徴や良さを掘り下げていくために使います。

7

●シート２

ロールプレイ前半
を実演します。

どのような「**特徴や良さ**」があるかを思い浮かべながら、
相談者の話を聞いてください。

8

ロールプレイ（前半）

◎相談者：安藤さん　60歳代　女性

～自治体主催の「まちづくり学習会」に参加した安藤さん～
ボランティア活動をする中で「一人暮らしの高齢男性の食生活」が気になっていて、何か活動をしたいと考えています。

9

ロールプレイ（前半）

✓ 特徴や良さ

◎アセスメントシート（表）
安藤さんが行いたいと思っている活動の「特徴や良さ」をメモします

準備ができたら、ロールプレイを始めます

10

●シート２

安藤さんの話から次の5つにチェック

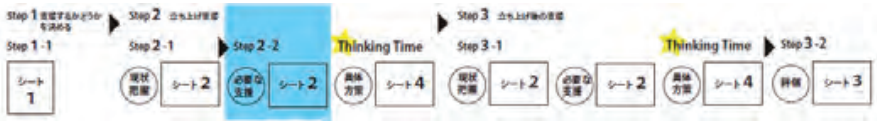
- 西町八丁目で、孤立しがちな男性高齢者を主な対象にしたい
- 食事づくりを手伝ってくれるというボランティア仲間がいる
- 鍼灸院に通う高齢者がボランティアとして参加してくれる
- 毎月1回から始めたいという意思がある

11

チェックの考え方

- **上から順に尋問するようにチェックしていくものではありません。**
- **「チェック項目の数」や「どの項目にチェックがされたか」などにより、優劣をつけるものではありません。**
- **「全項目をクリアする」ことを目指して使うものではありません。**
- **チェックがついたことにより、特徴や良さが確認できたと考えます。**

12



★Step2-2　必要な支援を考えます

- 「課題認識」と「活動イメージ」があることがわかりました。
- そこで、活動を立ち上げるのに、どんな支援を行ったら良いか、 相談者の話をよく聞きながら考えます。
- **支援の着眼点**を探す際にも、シート２を活用します。

13

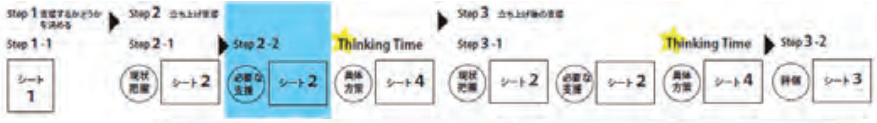
ロールプレイ（後半）

支援の着眼点　に当たる項目では、プレートを上げます

◎アセスメントシート（裏）「安藤さんが行いたい活動の課題だと思うこと」をメモをします

準備ができたら、ロールプレイを始めます

14

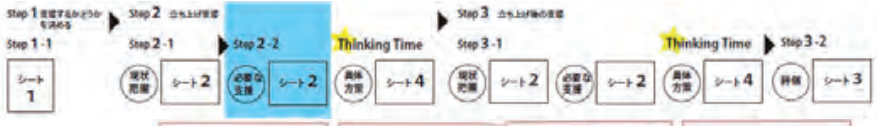


●シート２

必要な支援を考えます

特徴や良さ

15

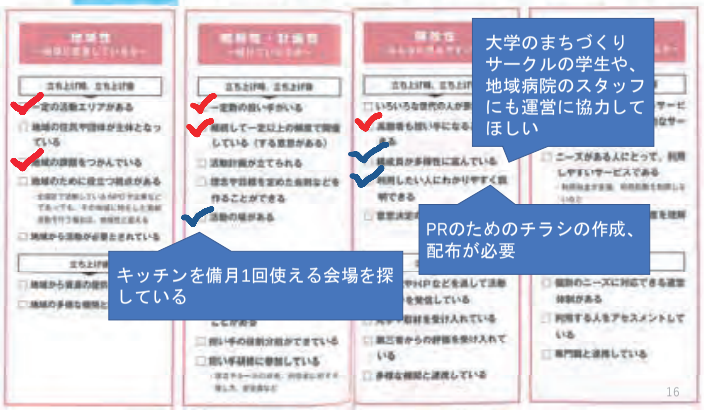


●シート２

必要な支援を考えます

特徴や良さ

支援の着眼点



16

Thinking Time

★シート４を見ながら、具体的な支援を考えます

→活動が定着し、ゆくゆくは地域を支えるインフラの１つになるように！

- わがまちに「あるもの」＝地域資源である「人・モノ・場所・資金・制度」等に着目しましょう。
- （支援者が）ひとりで悩むよりも、関係する機関や部署に情報を求めることも大切です。

17

グループワークの進め方　―立ち上げ支援をする

１）安藤さんの話を聞いて、あなたのまちにある関連しそうな「地域資源」を付箋に書き出してください（*「●班の地域資源」）

＊１枚の付箋に、１つのことを書きます

２）地域資源をもとに、支援策を考えます

①シート２で見つけた「**支援の着眼点**」は３つ

②地域資源を使って具体的にどのような支援ができるか、

各グループで３つ、支援策を考えます

３）どんな支援策が出たか、全体で共有します

→いくつかのグループから発表

18

19

Step３
立ち上がった後の支援をする

★Step3-1 立ち上がった後の、活動の現状を把握します

◎立ち上げ後（１年経過）の支援 事例シートを見てください

20

●シート２

立ち上げ後の
現状の把握

特徴や良さ ✓

★Step3-1　活動が立ち上がった後に必要な支援を考えます

- ひとり暮らしの男性高齢者にもっと来てもらいたい（どことつながると良いか？）。
- 会場の使用に不便がある（定期開催したい人が使いやすい仕組みは？）
- 生活の困りごとを抱える参加者に対して、関係機関につなげてあげたい気持ちもある（相談先、連携先とつながるためには？）。
- 開催回数を増やしてほしいという要望がある（ボランティア募集は？）。

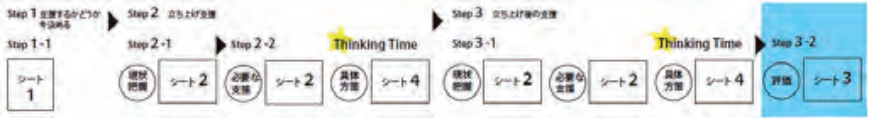
グループワークの進め方　－立ち上がった後の支援をする

1）グループ内で話し合い

①シート２：「**支援の着眼点**」はどこか？
　　→グループで話し合って**青チェック**を入れます
②シート４：グループで**１つ**、支援策を考えます

2）どんな意見が出たか、全体で共有します

→いくつかのグループから発表

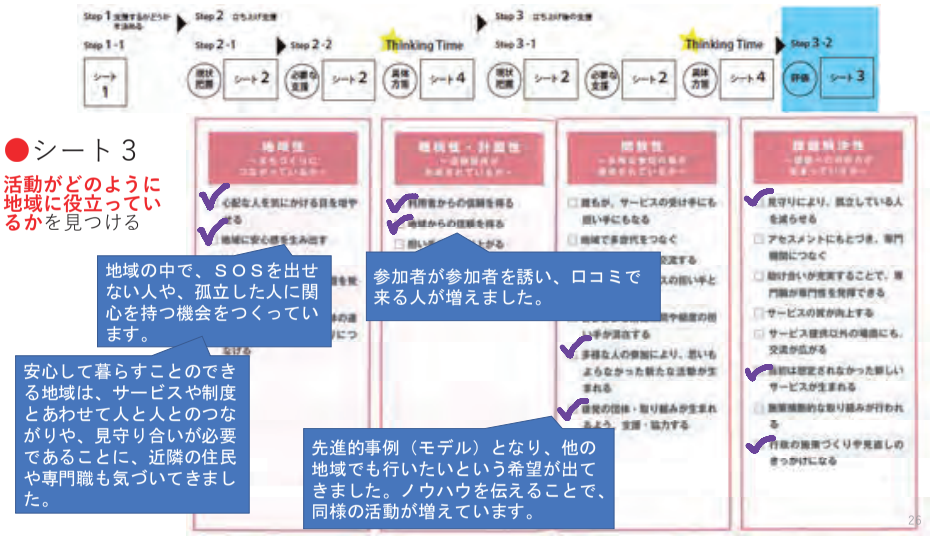


★Step3-2　活動がどのように地域に役立っているかを見つけます

●**シート３**：支援したことで、それぞれの活動が**地域でどのような価値を生み出しているか**を確認する

【どんなときに使うか？】

例えば年に１度、活動を振り返るときにシート３を使って価値を確認します。



シート３（支援することで期待できる視点）の考え方

★ 活動が地域で果たしている価値を見つけ、共有するために使います

<u>団体に伝える</u>

「いつもの活動はこのようなことに役立っていますね」と伝えることで、住民のやる気は支えられます。**時折訪問して活動を見る**ことも、住民にとって励みになります。

<u>団体と一緒に考える</u>

「どの項目にチェックできるか」を考えることで、活動の意義を改めて考え、新たな活動に挑戦する機運が生まれるきっかけづくりになります。

<u>地域住民に伝える</u>

「●●地域食堂を行うようになって、スタッフや参加どうしの日常的な挨拶が増え、心配な人を気にかける目が増えるようになっています」などと地域住民に伝えることで、地域が団体を信頼する気持ちがさらに高まります。**活動を積極的に露出し、地域からの知名度・信頼度を上げる**ことで、活動の担い手のやる気は支えられます。**発信することで、活動を新たに始めたい人の情報をキャッチする**きっかけにもなります。

→財政部局に支援する根拠を示す際の説得材料にもなり得る。

27

地域の居場所の可能性と「やる気を支える支援」が必要な背景

Meals on Wheels Japan

[全国食支援活動協力会]で検索

市町村の役割
～住民参加による生活支援サービスの必要性～

背景

総人口（とくに生産年齢人口）の減少
（ただし、老年人口は２０４０年代まで増加）
家族構造の変化（独居・老々世帯の増加）
地域における人間関係の変化（孤独・孤立の発生）
地域における社会的資源の変化

●人口減少・超高齢社会に対応できる社会・地域づくり

地域における生活像
身体的健康（フレイル、低栄養等）
社会的関係（孤立・孤独に陥らない）
心理的健康（幸福感、満足感など）
日常生活の自立・自律

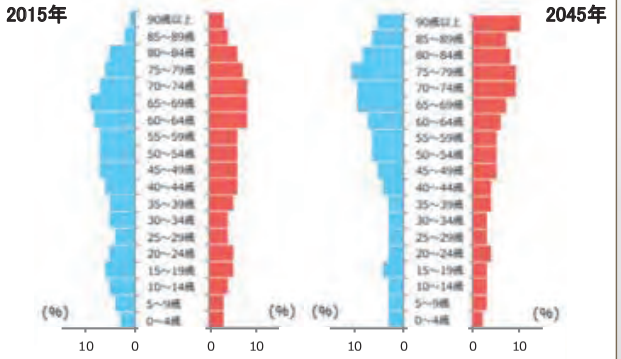
医療・介護や公費による支援だけでは困難

●「インフォーマル」な社会参加＆介護予防、生活支援が大きな課題

大川市の人口の推移（RESASより）

【出典】総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」
【注記】2020年以降は「国立社会保障・人口問題研究所」のデータ（平成30年3月公表）に基づく推計値。

大川市の人口ピラミッドの変化（RESASより）



【出典】総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」
【注記】2020年以降は「国立社会保障・人口問題研究所」のデータ（平成30年3月公表）に基づく推計値。

住民参加による生活支援サービスの必要性

でも、住民参加で活動する人、地域の高齢者支援に
ボランティア参加する人が少ない、いない・・・

地域の課題解決に関心がある人
地域の他者のために何かをしたい人
　→実はいる（子ども食堂の例！）が見過ごされてきた。

●他者に貢献する活動を地域に作っていくには、こうした発見されにくい「やる気」を育てる積極的支援が必要

●参加の場（オープンな居場所）を作ることが参加する人を増やし、社会参加＆介護予防の広がりに貢献する

◎アンケート調査結果から見えてきたこと

食を通じたコミュニティを生み出しています。

＼ 団体サポート ／

- 食支援活動に関する情報の発信（会報紙・メール・SNS等）
- 当会主催の研修会・セミナーへのご案内
- 全国の住民参加型食事サービス活動団体とのネットワーク
- 教育、調査研究、政策提言
- 助成情報の提供・推進、寄付物品の斡旋など

会員 120団体 (個人・団体)

その他にも、各地のネットワークを通じて
役立つ情報を提供しています。

＼ 2018年度助成実績 ／

■明治安田生命保険相互会社
【地域支え合い活動助成プログラム】
助成事務局運営…12団体を選出

■キユーピーみらいたまご財団
【食の居場所づくり助成プログラム】
助成プログラムB 事務局運営
…27団体選出／スタートアップ助成20団体選出

■「三菱電機SOCIO-ROOTS基金」による
設立25周年記念事業の助成
…こども食堂30団体に助成

■寄付物品（シリアル）の斡旋
企業からの寄贈食品を会食・配食サービス、
子どもの居場所に提供 (中央共同募金会との協働)

食を通じたコミュニティを生み出しています。

Ⅰ.調査概要

	調査A
目的	行政や社協による、住民参加による生活支援サービス運営団体への支援状況を把握するとともに、支援課題やサービス運営団体の評価ポイントを把握することを目的として、調査を実施した。
調査対象	①都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署 ②　〃　の児童福祉所管部署 ③市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署 ④　〃　の児童福祉所管部署 ⑤都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会 ⑥市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会
調査方法	①、②：メールにて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ③、④：①、②を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ⑤：全国社会福祉協議会を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。 ⑥：⑤を通じて電子調査票を送付し、回答を依頼した。
回答時期	平成30年11月～平成30年1月の２か月間

	調査B
目的	住民参加による生活支援サービスの運営実態を把握するとともに、団体が感じる課題や、活動について評価してほしいと考えるポイントを把握することを目的として、調査を実施した。
調査対象	住民参加による生活支援サービス運営団体
調査方法	調査Aの調査対象（①～⑥）および関連団体を通じ、各機関・団体が把握している団体にアンケートの回答記入フォームのURLを伝達し、回答を依頼した。
回答時期	平成30年11月～12月の１か月間

Ⅱ.回答状況

	有効回答数／配布数	回収率
都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署	43件／67件	64.2%
〃　の児童福祉所管部署	56件／67件	83.6%
市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署	913件／1896件	48.2%
〃　の児童福祉所管部署	835件／1896件	44.0%
都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会	29件／67件	43.3%
市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会	522件／1896件	27.5%

調査A（事業票）	回答事業数
都道府県、政令指定都市の高齢者保健福祉所管部署	59事業
〃　の児童福祉所管部署	40事業
市町村（政令指定都市除く）、特別区の高齢者保健福祉所管部署	1408事業
〃　の児童福祉所管部署	169事
都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会	32事業
市町村（政令指定都市除く）、特別区の社会福祉協議会	852事業

Ⅱ.回答状況

調査Bは実施している生活支援サービスの分野を問わず調査対象とし、実施しているサービス分野を複数選択で調査し、1254件の回答を得た。

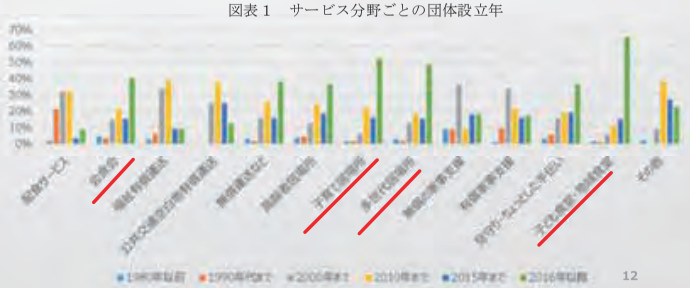
	n	%
全体	1254	100.0
配食サービス	114	9.1
会食会	235	18.7
福祉有償運送	97	7.7
公共交通空白地有償運送	13	1.0
無償運送など（許可・登録のないもの）	80	6.4
高齢者を主対象とする居場所	428	34.1
子育て世代を主対象とする居場所	161	12.8
多世代を主対象とする居場所	272	21.7
無償の家事支援（地域支援事業の訪問型サービスを含む）	21	1.7
有償の家事支援（地域支援事業の訪問型サービスを含む）	256	20.4
見守りや、ちょっとしたお手伝い	186	14.8
子ども食堂・地域食堂	475	37.9
上記のいずれも実施していない	74	5.9

1）新たな担い手が集まるサービス分野

こども食堂・地域食堂、子育て居場所、多世代居場所の５～６割が２０１６年以降に設立された団体だった。

➡ 地域を支える新しい担い手が生まれる機会になっている

図表１　サービス分野ごとの団体設立年

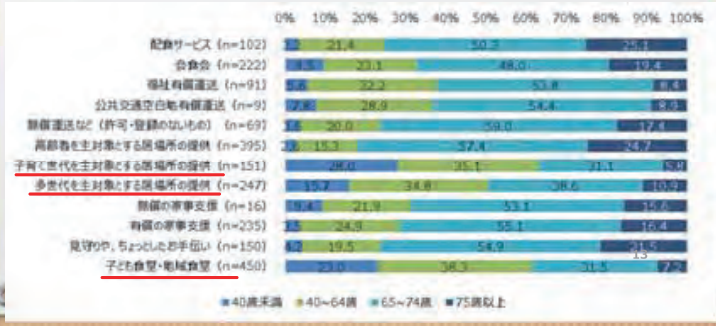


2）ボランティアの年齢について

子育て世代を主対象とする居場所、多世代を主対象とする居場所、子ども食堂・地域食堂は半分以上が現役世代（64歳以下）だった。

➡ 担い手確保と活動の継続性に向けたヒントが

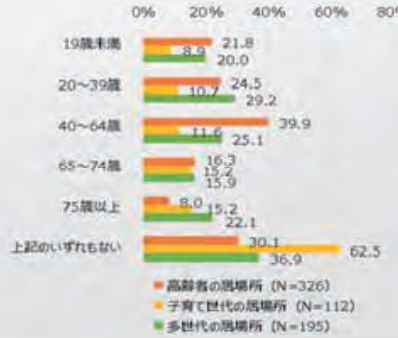
図表２　ボランティアの年齢構成（平均値）



3）多様な世代の利用者を受け入れる活動

高齢者を主対象とする居場所でも、一定程度が64歳未満を受け入れたいと回答した。また、子育て世代を主対象とする居場所、多世代を主対象とする居場所でも、65歳以上を受け入れることに前向きな団体が一定程度見られた。

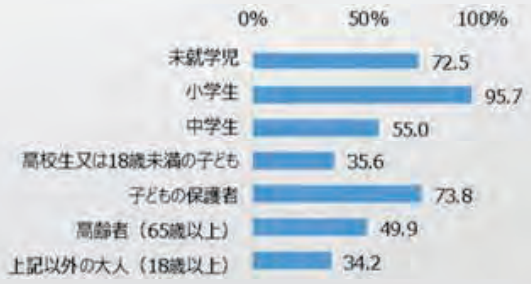
図表３　居場所づくりにおいて、今後受け入れたい年齢層



14

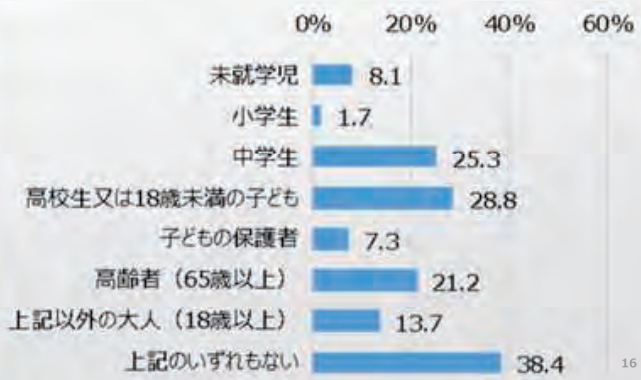
子ども食堂・地域食堂の半数程度が高齢者を受け入れていた。今後新たに受け入れたいという回答も2割程度見られた。

図表４　子ども食堂・地域食堂で受け入れている年齢層



15

図表５　子ども食堂・地域食堂で今後新たに受け入れたい年齢層



16

４）居場所づくりから生み出される新たなサービス

限られた地域資源を有効に活用するための１つの方向性として、こうした担い手が集まりやすいサービス分野において、利用対象者の範囲（年齢層等）を広げ、多世代型の生活支援サービスを作り上げていくということが考えられる。

図表６　派生してサービスが生まれたことのある団体の割合

17

新たな担い手が集まりやすいだけではなく、派生して新たなサービスを生み出すプラットホームとなりうる可能性を秘めていると考える。

図表７
居場所づくりから生まれたサービスの種類

18

・・「多世代が集う共生の居場所づくり」とは・・

近隣住民同士のつながり

高齢者の活躍の場

東京・稲城市
「支え合う会みのり」
高齢者が集う会食会では夏休みに近隣の子どもが集まり、多世代の空間へ

見守る大人

地域の子ども

北海道・登別市
「ゆめみ～る」

地域のおじいちゃん、おばあちゃんが孫世代のために活躍しています！

兵庫・明石市
「明舞ひまわり」

19

アセット重視の考え方

図表3-1 ニーズ重視とアセット重視

	ニーズ重視	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか？」	「なぜ健康になるのか？」

- アセット重視の特徴

「あるもの」＋「長い時間軸」に着目して、まずはできるところから始め、時間をかけて市町村内全域に普及させていく。

ニーズ重視の支援はマイナス面について評価する（監査）が、アセット重視では、まずはあることが重要なので。プラス面に目を向けた評価を行う。

アセット重視：住民参加からコミュニティ主導へ

- 住民やコミュニティはサービスの受け手としてだけでなく、担い手であることを認識する。
- 住民やコミュニティは容易に地域での活動を行うことができる要件を示して多くの人・団体の参入を誘う。
- 参加したい人の価値や動機づけを理解する（地域に貢献する活動であれば、行政が望む価値を押し付けない）。
- 市町村は活動の立ち上げと継続をサポートすることを明確に示す。
- 各活動が地域で果たしている価値を認める（それを明確に伝える）。
- コミュニティに権限を委譲して、自分たちの将来と活動を自ら決めることを支援する。

評価の考え方

- 評価　とは①「テストで評価する」
  ②「仕事ぶりを評価している」

①はマイナス面をみているニュアンス（１００点満点で減点されるところ（できない部分）を見ている）

②はプラス面をみているニュアンス（悪いところがあるかもしれないが良いところがそれを上回っている）

ここでは「評価」は②の意味として捉えている

・・・「高く評価する」と言い換えできる

「地域のために何かをしよう」というだけで大きな価値がある

・・・そのやる気を高く評価する（②の意味）

評価の考え方
活動への「やる気」を高めるには？

- 達成動機（目標を達成しようとするやる気）

  価値・期待理論

  価値：目標の価値が高い　期待：目標達成が見込める

  ※社会的価値を認める　達成への見通しがある
- 内発的動機（外的報酬ではないやる気）

  ・好奇心、自律、有能さ、人間関係　などが高める

  自律：自己決定・自由度（やらされ感がない）

  有能：価値あることができるという感覚

  人間関係：良い関係にある人が勧める・認める

『住民のやる気を支える支援と評価のシート』

※住民のやる気を支える支援の手引き（59頁～65頁）

☆シートは特徴や良さを把握し、強みを評価する「住民のやる気を支える」ためのツールとして昨年度に開発

・市町村が、住民に価値観を示して共有し、活動参加を促進する

・市町村が支援すべきポイントを明確にする

・市町村内で（支援をすることの）コンセンサスを得るための根拠とする

住民が立ち上げようとする活動に対する支援の心構え・協働的な態度

○信頼関係（協働する関係）を形成する　○活動への動機づけを高める

- 熱意をもって対応する
  支援の方策を全力で考える、時折訪問して活動を見る、よく話を聴く
- 話を聴く姿勢を示す（興味を持って話を聞く姿勢を明確にする）
  視線、前傾姿勢、うなづき・あいづち、反復等の面接基本態度
- 動機づけを阻害しない
  いじわるしない、けちをつけない、押し付けない、
  プラス面を積極的に評価する、価値を認める

※信頼関係ができていけば、市町村の望む支援を助けてくれる

協働的態度を示す：面接の方法

基本的な聴く態度・姿勢・空間

・目線の高さ・・・同じ高さに
・姿勢・・・相手側にやや前傾
・座る位置・・・９０度または斜め向かい
・視線・まなざし・・・基本的に向けるが、向けすぎない
　向けるときは数秒以上
・表情・・・とくに困惑や不快な表情に注意
・腕組、脚組・・・×
・髪やペンをいじる、指遊びをする・・・×

○傾聴＝聴こうとすることを相手に示すことで話しやすい環境を作る　→信頼関係を形成する

基本的傾聴技法

○相手に「聴いている」態度を明確に示すとともに重要なポイントを共有する

○うなづき・あいづち、　身振り・手振りを入れる
・バリエーションをつけましょう

○相手の話のポイントを繰り返す。とくに感情ややる気を表現した部分を繰り返す
「男性向けの何かをやりたいのです」
「子どもたちが嬉しそうな顔をしたんです」
「ひとりでいるのはつらいなあ」

要約する：相手のメッセージの全体像をまとめて繰り返す

引き出す力・・・質問力を高める

・基本は相手の話を聴くことが目的
・話を整理していくことも必要

○基本は広がる質問（openな質問）を使う
closedな質問（はい、いいえで答える質問）は押し付けにならないように気をつける

○課題が発見されたら解決に向けて協力することを伝えて励ます（いきなり解決案を提案しないことも必要）
「協力者はいるの？」→「いません」
→「そうなんですね」（ここまでで止めると不安）
→「じゃあ見つける方法を考えていきましょうね」（協働）

○聞き手の提案は最後にする（同意のある提案）
「・・・という方法もありますが、どう思いますか？」

「やる気を支える支援」の流れ（1/4）
～何かしたいとの出会い～

（１）個人

①窓口に相談に来る

②講座、教室、イベントの参加者

（２）既存の活動・集まり・団体

「やる気を支える支援」の流れ（２/4）
～支援の可能性を考える～

（１）生活支援サービスとして支援・協働したい

（２）「地域力」づくり（互助、社会貢献）

①将来、生活支援へつながりそう

②生活支援のニーズを発見する場

「やる気を支える支援」の流れ（３/4）
～活動づくり、グループづくりを支援する～

非金銭的支援から

①みてもらう

先行事例の紹介・見学（同行）

②つなぐ

先駆的団体につなぐ

庁内の他の部署につなぐ

③活動場所の確保

④広報の支援

「やる気を支える支援」の流れ（4/4）
～ランニングコストの出所につなぐ～

例）

①市民協働（まちづくり）の支援金など

②社会福祉協議会の助成金

③民間財団の助成金

④介護保険・高齢者福祉等の補助事業・委託事業など

住民のやる気を支える支援と評価のシートの使い方

一般社団法人全国食支援活動協力会
事務局　斉藤 友歌里

1

住民のやる気を支える支援と評価のシート

＊**アセット重視の考え方がベース**
→**すでにあるものに着目**（人・物・資金・地域のために何かをしたいという熱意…）
→「何かをやりたいな」と考えた住民や住民グループがあったらその良さを引き出し、様々な地域資源とつなげて強みを伸ばして応援する。

✓見逃しがちだった住民や団体の**「特徴や良さ」を見つけ**、適切な**地域資源とつなげる**ことにより、**新しい取組みを生み出す**。

✓これまで個人の力量や経験に基づいて行われてきた**コーディネートの工程を一般化**して、頭の整理をするツールとして活用。

2

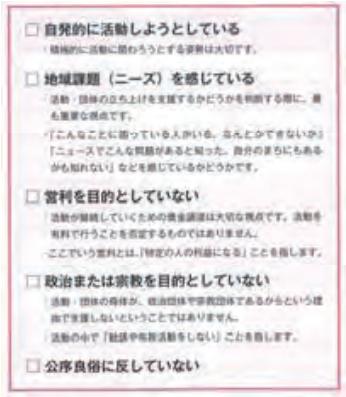
グループワークの目的

✓ シートを実際に使っていただく

✓ 使い勝手を含めて検証を行い、より使いやすいシートへと改善を図ります

3

Step 1 支援するかどうかを決める


□ 自発的に活動しようとしている
・積極的に活動に関わろうとする姿勢は大切です。

□ 地域課題（ニーズ）を感じている
・活動・団体の立ち上げを支援するかどうかを判断する際に、最も重要な視点です。
「こんなことに困っている人がいる。なんとかできないか」
「ニュースでこんな問題があると知った。自分のまちにもあるかも知れない」などを感じているかどうかです。

□ 営利を目的としていない
・活動が継続していくための資金調達は大切な視点です。活動を有料で行うことを否定するものではありません。
ここでいう営利とは、「特定の人の利益になる」ことを指します。

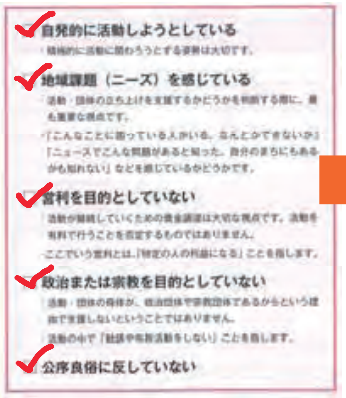
□ 政治または宗教を目的としていない
・活動・団体の母体が、政治団体や宗教団体であるからという理由で支援しないということではありません。
活動の中で「勧誘や布教活動をしない」ことを指します。

□ 公序良俗に反していない

★シート１を見てください

●「何かしたい」に出会ったら…
- まずは、相談者の話をじっくり聞く
- 最初から理路整然と地域課題を話せる市民は少ないです。どんな課題を感じているかを、支援者が引き出すことが大切です。

4



●シート１：
支援することを決定する最初の判断材料

シート1にチェックがすべて入ったら支援を始める、と判断します

5

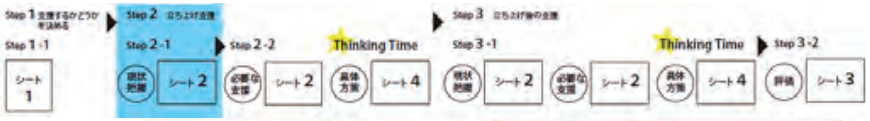
Step 2 立ち上げ支援をする

★Step2-1 現状を把握します

●シート２：人（団体）が持つ強みを把握し、必要な支援を見つける

地域性
Q地域に密着しているか？
継続性
Q一緒に活動できそうな人、仲間はいるか？
開放性
Q多様な人が参加できる場になりそうか？
課題解決性
Qどんな課題認識があるか？

6



●シート２

シート２は、相談者の話を聞きながら、特徴や良さを掘り下げていくために使います。

7

●シート２

ロールプレイ前半
を実演します。

どのような「**特徴や良さ**」があるかを思い浮かべながら、相談者の話を聞いてください。

8

ロールプレイ（前半）

◎相談者：安藤さん　60歳代　女性

～自治体主催の「まちづくり学習会」に参加した安藤さん～
ボランティア活動をする中で「一人暮らしの高齢男性の食生活」が気になっていて、何か活動をしたいと考えています。

ロールプレイ（前半）

✓ 特徴や良さ

◎アセスメントシート（表）
安藤さんが行いたいと思っている活動の「特徴や良さ」をメモします

準備ができたら、ロールプレイを始めます

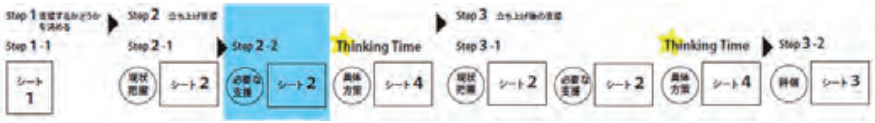
●シート２

安藤さんの話から次の5つにチェック

- 西町八丁目で、孤立しがちな男性高齢者を主な対象にしたい
- 食事づくりを手伝ってくれるというボランティア仲間がいる
- 鍼灸院に通う高齢者がボランティアとして参加してくれる
- 毎月1回から始めたいという意思がある

チェックの考え方

- **上から順に尋問するようにチェックしていくものではありません。**
- **「チェック項目の数」や「どの項目にチェックがされたか」などにより、優劣をつけるものではありません。**
- **「全項目をクリアする」ことを目指して使うものではありません。**
- **チェックがついたことにより、特徴や良さが確認できたと考えます。**



★Step2-2　必要な支援を考えます

- 「課題認識」と「活動イメージ」があることがわかりました。
- そこで、活動を立ち上げるのに、どんな支援を行ったら良いか、 相談者の話をよく聞きながら考えます。
- **支援の着眼点**を探す際にも、シート２を活用します。

13

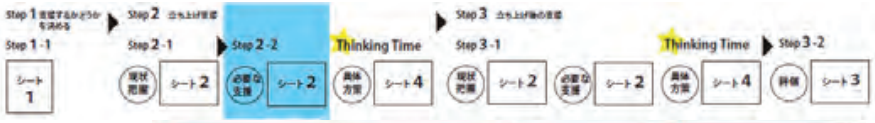
ロールプレイ（後半）

支援の着眼点　に当たる項目では、プレートを上げます

◎アセスメントシート（裏）「安藤さんが行いたい活動の課題だと思うこと」をメモをします

準備ができたら、ロールプレイを始めます

14

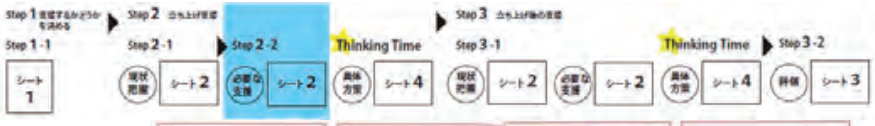


●シート２

必要な支援を考えます

特徴や良さ

15

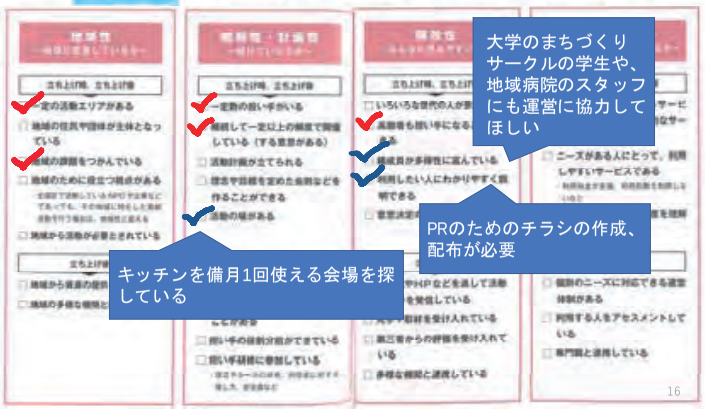


●シート２

必要な支援を考えます

特徴や良さ

支援の着眼点



16

Thinking Time

★<u>シート４を見ながら、具体的な支援を考えます</u>

→活動が定着し、ゆくゆくは地域を支えるインフラの１つになるように！

- わがまちに「あるもの」＝地域資源である「人・モノ・場所・資金・制度」等に着目しましょう。
- （支援者が）ひとりで悩むよりも、関係する機関や部署に情報を求めることも大切です。

17

グループワークの進め方　―立ち上げ支援をする

１）安藤さんの話を聞いて、あなたのまちにある関連しそうな「地域資源」を付箋に書き出してください（*「●班の地域資源」）

＊<u>１枚の付箋に、１つのことを書きます</u>

２）地域資源をもとに、支援策を考えます

①シート２で見つけた「**支援の着眼点**」は３つ

②地域資源を使って具体的にどのような支援ができるか、

<u>各グループで３つ、支援策を考えます</u>

３）どんな支援策が出たか、全体で共有します

→いくつかのグループから発表

18

19

Step３ 立ち上がった後の支援をする

★<u>Step3-1 立ち上がった後の、活動の現状を把握します</u>

◎立ち上げ後（１年経過）の支援 事例シートを見てください

20

●シート２

立ち上げ後の
現状の把握

特徴や良さ ✓

★Step3-1　活動が立ち上がった後に必要な支援を考えます

- ひとり暮らしの男性高齢者にもっと来てもらいたい（どことつながると良いか？）。
- 会場の使用に不便がある（定期開催したい人が使いやすい仕組みは？）
- 生活の困りごとを抱える参加者に対して、関係機関につなげてあげたい気持ちもある（相談先、連携先とつながるためには？）。
- 開催回数を増やしてほしいという要望がある（ボランティア募集は？）。

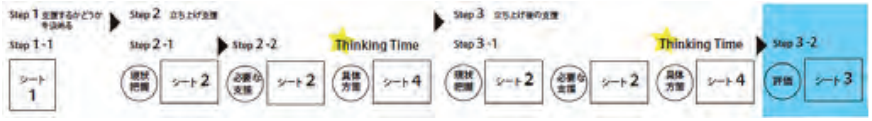
グループワークの進め方　－立ち上がった後の支援をする

１）グループ内で話し合い

①シート２：「**支援の着眼点**」はどこか？
　　→グループで話し合って**青チェック**を入れます
②シート４：グループで**１つ**、支援策を考えます

２）どんな意見が出たか、全体で共有します

→いくつかのグループから発表

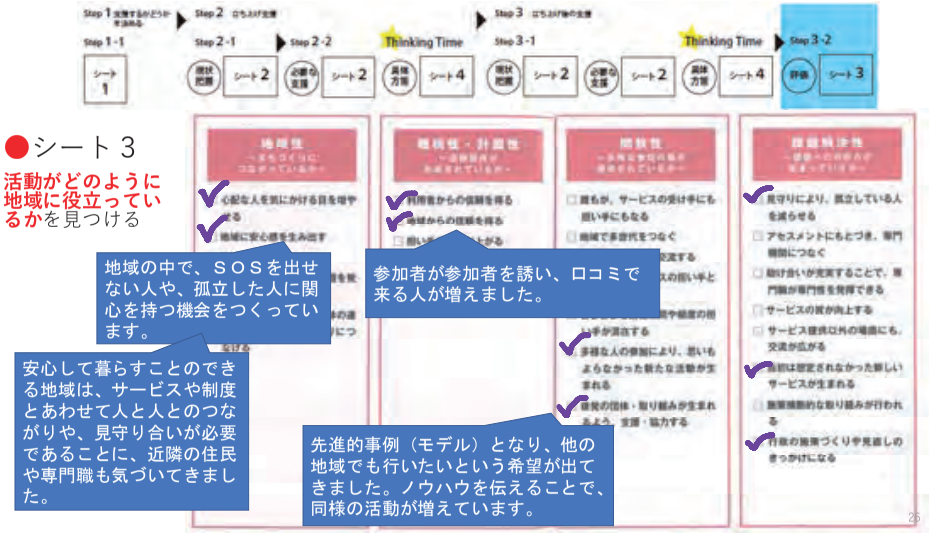


★Step3-2　活動がどのように地域に役立っているかを見つけます

●**シート３**：支援したことで、それぞれの活動が**地域でどのような価値を生み出しているか**を確認する

【どんなときに使うか？】

例えば年に１度、活動を振り返るときにシート３を使って価値を確認します。



シート３（支援することで期待できる視点）の考え方

★ 活動が地域で果たしている価値を見つけ、共有するために使います

<u>団体に伝える</u>

「いつもの活動はこのようなことに役立っていますね」と伝えることで、住民のやる気は支えられます。**時折訪問して活動を見る**ことも、住民にとって励みになります。

<u>団体と一緒に考える</u>

「どの項目にチェックできるか」を考えることで、活動の意義を改めて考え、新たな活動に挑戦する機運が生まれるきっかけづくりになります。

<u>地域住民に伝える</u>

「●●地域食堂を行うようになって、スタッフや参加どうしの日常的な挨拶が増え、心配な人を気にかける目が増えるようになっています」などと地域住民に伝えることで、地域が団体を信頼する気持ちがさらに高まります。**活動を積極的に露出し、地域からの知名度・信頼度を上げる**ことで、活動の担い手のやる気は支えられます。**発信することで、活動を新たに始めたい人の情報をキャッチする**きっかけにもなります。

→財政部局に支援する根拠を示す際の説得材料にもなり得る。

27

令和元年度厚生労働省老人保健健康増進等事業
「基礎自治体や中間支援組織による住民主体の活動を促進するための手法に関する調査研究事業」

参加費無料
定員80名
（先着順）

“住民主体の活動”を育てるには？

～住民のやる気を支える支援を学ぶワークショップ～

ニーズ（困りごとや足りないもの）重視からアセット（いまある強みや良さ）重視へ。
視点の転換によって信頼感を育て、やる気を支える支援をご一緒に考えましょう。

日時：3月10日（火）
時間：10:30～16:00
会場：ウィルあいち1階
セミナールーム
（地下鉄市役所駅徒歩10分）

- 住民のやる気を支える支援が必要な背景
- “ニーズ”から“アセット”へ転換の考え方
- 支援者の心構えと立ち上げ事例
- 「アセットリスト」「価値のリスト」を使った支援プラニングワークショップ

対象
- 自治体職員の方
- 社会福祉協議会職員の方
- 生活支援コーディネーター
- コミュニティソーシャルワーカー
- 住民活動開発に関わる方など
  興味関心のある方どなたでも

お問い合せ　一般社団法人 全国食支援活動協力会
〒158-0098　東京都世田谷区上用賀6-19-21
☎:03-5426-2547（平日10:00～17:00）
✉infomow@mow.jp

参加申込：電話か申し込みフォーム【裏面】からお申込ください

【参加申込】

電話 ☎:03-5426-2547(平日10:00～17:00)

申し込みフォーム https://forms.gle/TkCzCqvRZo32nVcF9

【プログラム】

開会 10:30～16:30予(受付10:00)

❋開会あいさつ・オリエンテーション

❋本事業の考え方

「住民のやる気を引き出す支援」が必要な背景とアセット重視の考え方

講師:内藤 佳津雄氏(日本大学文理学部 教授/本事業研究委員会委員長)

❋パネルトーク

「住民のやる気を支えるには」～住民の思いと支援

登壇者:鈴木 訪子氏(東京都荒川区社会福祉協議会 地域福祉活動促進専門員)

水橋 佑介氏(石川県金沢市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター)

松下 典子氏(NPO法人ゆいの会理事・知多市)

コメント:中野 智夫氏(長久手市福祉部次長)

進 行 :平野 覚治

(全国食支援活動協力会 専務理事/本事業ワーキング部会部会長)

❋ワークショップⅠ

“協働的”態度で話をきく

ファシリテーター:内藤 佳津雄氏(日本大学文理学部 教授)

❋ワークショップⅡ

支援プランニングシートの使い方

「アセットリスト」「価値のリスト」を使って支援のプランニングをしてみましょう

【会場までの交通機関】

●地下鉄「市役所」駅 2番出口より東へ徒歩約10分

●名鉄瀬戸線「東大手」駅 南へ徒歩約8分

●基幹バス「市役所」下車 東へ徒歩約10分

●市バス幹名駅1「市政資料館南」下車 北へ徒歩約5分

“住民主体の活動”を育てるには？

～住民のやる気を支える支援を学ぶワークショップ～

愛知会場

日　時　令和２年３月10日（火）10：30～16：00

会　場　：ウィルあいち１階　セミナールーム

主　催　一般社団法人 全国食支援活動協力会

タイムスケジュール

10：00	受付開始
10：30	**開会挨拶・オリエンテーション** 一般社団法人全国食支援活動協力会
10：35	**本事業の考え方** **「住民のやる気を引き出す支援」が必要な背景とアセット重視の考え方** 講師：内藤 佳津雄 氏（日本大学文理学部教授 / 本事業研究委員会委員長）
11：00	**パネルトーク** 「住民のやる気を支えるには」～住民の思いと支援～ 進行：平野覚治 氏（全国食支援活動協力会専務理事 / ワーキング部会部会長） 登壇者：鈴木訪子 氏（東京都荒川区社協地域福祉活動促進専門員 / ワーキング部会委員） 水橋佑介 氏（金沢市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター） 松下典子 氏（NPO 法人ゆいの会理事 / 研究委員） コメント：中野智夫 氏（長久手市福祉部次長 / 研究委員）
12：30	昼休憩（60 分）12：30～13：20
13：20	**ワークショップⅠ** **“協働的”態度で話をきく** ファシリテーター：内藤 佳津雄 氏 （日本大学文理学部教授 / 本事業研究委員会委員長）
13：35	休憩（10 分）13：35～13：45
13：45	**ワークショップⅡ** **活動支援プランニングシートの使い方** ファシリテーター：全国食支援活動協力会
16：00	**アンケート記入、閉会**

「住民のやる気を引き出す支援」が必要な背景とアセット重視の考え方

内藤佳津雄 氏（日本大学文理学部教授 / 本事業研究委員会委員長）

「住民のやる気を引き出す支援」が必要な背景とアセット重視の考え方

日本大学　内藤佳津雄

住民参加による生活支援等支援を開発する必要性

背景

総人口（とくに生産年齢人口）の減少

（ただし、老年人口は２０４０年代まで増加）

家族構造の変化（独居・老々世帯の増加：家族以外の生活支援力が必要）

地域における人間関係の変化（孤独・孤立の発生）

地域における社会的資源の変化（公的支援力の低下）

●人口減少・超高齢社会に対応できる社会・地域づくり

地域における生活像

身体的健康（フレイル、低栄養等）
社会的関係（孤立・孤独に陥らない）
心理的健康（幸福感、満足感など）
} 医療・介護や公費による支援だけでは困難

日常生活の自立・自律

「インフォーマル」な社会参加＆介護予防、生活支援が大きな課題

生活支援コーディネータの皆さんへ

生活支援コーディネータの役割として・・・
- 総合事業の通所型サービスBを作りたい
- 介護予防を担うグループ活動を作りたい
- ちょっとした訪問型支援の担い手を増やしたい

どれも重要な政策課題！しかし、ボランティア活動、住民参加型活動としての担い手がなかなか見つからない、引き受けてくれない、広がらない

必要性を説いて強く押してみる方法もありますが・・・
ボランティア活動とは、どういうもの？
ボランティアは何をしたいの？
＜もう一度立ち戻って考えないと活動は広がらないかもしれない＞

住民参加による生活支援サービスの必要性

- 地域の課題解決に関心がある人
- 地域の他者のために何かをしたい人

→実はいる（例えば、子ども食堂）が見過ごされがちである

住民参加・ボランティア活動は、活動者自身が「やりたいこと」をしたい
「やりたいこと」は、活動者自身が価値を感じたことである
「やりたいこと」は不明確だが、地域のために貢献したい人がいる

●他者に貢献する活動を地域に作っていくには、こうした発見されにくい「やる気」を育てる積極的支援が必要

アセット重視の考え方

図表3-1 ニーズ重視とアセット重視

	ニーズ重視	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか？」	「なぜ健康になるのか？」

- アセット重視の特徴

「あるもの」＋「長い時間軸」に着目して、まずはできるところから始め、時間をかけて市町村内全域に普及させていく。

ニーズ重視の支援はマイナス面について評価する（監査）が、アセット重視では、まずはあることが重要なので。プラス面に目を向けた評価を行う。

アセット重視の支援の始まり

■まずは思いをよく聞くこと
　地域の集まりやボランティア講座などで「地域で人のために何か活動をしたい」という思いをもった人との出会い
〇思いや意向を詳しく聞いてみる・・・思わぬ 強み や 良さ が分かるかも（アセットの発見）
（例）
地域の中で集まれる場を作ってみたい
閉じこもりがちな近所の高齢者のことが気になっている
楽しいことなら友人も一緒にやりたいと言っている
空いている部屋があって、住み開きに興味がある

■小さなことでも価値があり、小さなことからでも始められる
- はじめからボランティアが揃わなくても
- 活動計画が立てられなくても
- できることから始めればいい。

肯定的に認められることで前向きになり、活動につながる

■マイナス面ではなくプラス面を見つける

事業や制度の枠に当てはめると、条件を満たしていないこと（マイナス面）に目が行きやすい（ニーズ重視に陥らない）
・構成メンバー 3人しかいないから、「できない」のではなく、最初は 3人もいると捉える

※単に住民の要望をかなえるのとは違うことに留意する
　地域課題を感じて、自発的に活動を始めようとしていることが重要
　（営利でない、政治や宗教活動でない、公序良俗に反しないが前提）

アセット重視な活動への支援

■小さな活動、福祉とは違う分野の活動も大切な地域資源
（例）　・数人の仲間で行っている
　　・編み物や囲碁将棋などの趣味の集い
　　・犬の散歩で出会う顔見知りの人たち
　　・環境や市民活動などをテーマにした<まちづくり活動>

■こちらが作りたい活動にすぐにはマッチングできない
- 地域資源（アセット）を一つ一つ増やしていき、良好な人間関係を形成していきましょう（ネットワークづくり）
- 思いもよらないときにつながることがある
- 良好な関係の中からこそ、こちらの話を聴いてくれる人が現れる

（例）「子どもの居場所にきている小学生」が、数日入院する高齢者の「犬の散歩」をお手伝い →居場所までの送迎に、デイサービスの使っていない時間帯で車両を貸してもらえる

活動への「やる気」を高めることが重要

- 内発的動機づけ（外的報酬によらないやる気）
　本人にとっての興味や好奇心、楽しさによるやる気
　・・・ボランティア活動の一番の原動力は内発的動機づけ

●内発的動機づけを高める要因
①自分の目標に価値がある＋達成できそう（有能感）
・周囲から社会的に価値を認める
・目標に向けてどのように行動したら目標を達成できるのか道筋が明確
②自分で目標や方法を決めること（自律性）
・やらされ感の高い状況（ルールに縛られすぎる、他人の言うことばかり聞かないといけない）は内発的動機づけを低下させる
③良好な人間関係
・好感や信頼感といった「人間関係の良さ」があることによって、はじめてこちらの話を聴いてくれる
・そのために、まずは相手の話を聴き、信頼感を作っていくことが大切

参加型の居場所づくりを基盤とすることをお勧めする理由

●アセット重視で取り組みやすい活動形態である
■気のあう仲間、自宅でもできる、活動形態は自由
さまざまな頻度が可能：毎日オープン～月1回　　規模も多様：少人数～
活動内容も多様：会食、健康体操、学習支援、プログラムなしでも可能
■担い手と受け手が対等
■子ども～高齢者の参加による多世代の交流
（例）食事を提供するとき、小さな子どもも配膳をしたり、スタッフと参加者が一緒のテーブルについて食べたりすることができる
■食は人を集めてつなぐ
食事の提供を中心に据えた居場所・・・美味しいものをみんなで一緒に食べる楽しみは、 人と人を結びつける、地域文化の継承、健康づくりなど多くのメリットがある
■多様なサービスが生まれる基盤となる
お互いの困りごとを知る機会・ 解決しようとする動きにつながる（プラットフォームとしての機能）

「住民のやる気を支えるには」
～住民の思いと支援～

進行：

平野 覚治（全国食支援活動協力会専務理事 / ワーキング部会部会長）

登壇者：

鈴木 訪子 氏（東京都荒川区社協地域福祉活動促進専門員 / ワーキング部会委員）

水橋 佑介 氏（金沢市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター）

松下 典子 氏（NPO 法人ゆいの会理事 / 研究委員）

コメント：

中野 智夫 氏（長久手市福祉部次長 / 研究委員）

登壇者プロフィール

鈴木 訪子 氏

荒川区立保育園の保育士を退職後、障がいのある子をもつ親の会荒川のぞみの会の放課後の遊びの会の活動を取り組むなかで、おもちゃ図書館をつくる。1986 年より、荒川区社会福祉協議会におもちゃ図書館が常設となり、入職。現在は、地域ネットワーク課で、ボランティア・地域福祉活動を担当。

水橋 佑介氏

2010 年　金沢市社会福祉協議会入職。

2012 年　地域福祉課配属。地区社協支援業務の他、介護サービス事業者連絡会等団体事務、介護人材育成に関する業務を担当。

2018 年４月　生活支援体制整備事業受託に伴い、第２層生活支援コーディネーターとして担当地区の地域福祉活動支援に専従。市内中心部から山間部を含む１４地区を担当し、住民同士の支え合いの場や仕組みづくりを支援しています。

登壇者プロフィール

松下 典子 氏

NPO 法人ゆいの会　理事

知多市第１層生活支援コーディネーター（2016 年～）

1991 年地域福祉ボランティアグループ「結びの会」有償部門「ゆいの会」、住民互助在宅サービス団体設立代表　1994 さわやか福祉財団インストラクター、2002 年ゆいの会退任、地域福祉サポートちた代表，２００５年、知多地域成年後見センター設立、2009 年、日本福祉大学サービスラーニング非常勤講師等を経、2015 年、地域の居場所「つつじが丘３ハウス」、「知多市民をつなぐ Link ちた」を仲間とともに立上げ、学びと実践の場づくり、NPO の基盤づくりをしている。

中野智夫 氏

長久手市役所　福祉部　次長兼長寿課長

平成５年 入庁。 経済課配属。

平成９年 区画整理課配属。

平成１４年　愛知県実務研修生として、国際博推進局事業調整課。

平成１６年　万博推進室配属。

平成１８年　福祉課配属。

平成２４年　長寿課配属。

趣味はバレーボール。

住民が主役の地域づくりを

荒川区社会福祉協議会
地域ネットワーク課　地域福祉活動促進専門員
鈴木　訪子

荒川区ってこんな町

■人口　217,278人（内外国人19,353人）117,295世帯
■高齢化率　23%
■面積10.16km²
■町会・自治会　119　商店街40
■民生委員児童委員　7地区　200名
主任児童委員15名
■高年者クラブ
■地域包括支援センター・高齢者みまもりST　8か所
■公立小学校24校　中学校10校　私立中高校2校　都立高校・高専2校
保育・介護専門学校1校　大学1校
■再開発が進み、人口が増加。子育て世代が増加
■交通は便利

高齢者にも障がいのある人にも子ども連れの親にとっても乗りやすい都電が走り、地域活動に参加しやすい環境

荒川区社会福祉協議会の主な事業

1.地域福祉事業
おもちゃ図書館子育て交流サロン活動・ふれあい粋・活サロン事業,
2.ボランティアセンター事業
・ボランティア活動の推進,福祉教育の推進,　・地域活動サロンふらっと.フラット事業
3.在宅福祉事業
・車椅子の貸し出し,有償在宅サービス事業・にこにこサポート・障害児者移動支援
4.成年後見センターあんしんサポートあらかわ
5.生活福祉資金の貸付・受験生チャレンジ事業
6.助成事業　・地域福祉活動助成,福祉団体・施設への助成
7.被災地・被災者支援活動
8.区受託事業　・障がい者就労支援じょぶ・あらかわ,ファミリー・サポート・センター
・手話通訳派遣事業,手話講習会
9.指定管理施設の運営
①高齢者福祉施設3施設　・荒川老人福祉センター,荒川東部在宅高齢者通所サービスセンター,西尾久西部在宅高齢者通所サービスセンター
②障害者福祉施設4施設
・荒川区立福祉作業所,荒川生活実習所,あらかわ希望の家・分場,
障害者福祉会館アクロスあらかわ

ボランティアセンターは 敷居の低いよろず相談の窓口

・ボランティア活動をしたい・ボランティアの力を借りたい
・どこに相談に行ったらよいかわからない
・寄付をしたい・活動のための助成金を得る方法はないか
・自分の家を地域活動に使ってほしい
・路上で生活している、食べ物をもらえないか?
・ひとり暮らしの高齢者が沢山の猫を飼っていて、糞尿などの匂いで近所が困っている
・科学物質過敏症のため、外出ができない　などなど

地域住民・ボランティアさんの立ち寄り所

・おもちゃ図書館子育て交流サロンに遊びに来る子育て中の親子とボランティアさんたち
・使用済み切手やペットボトルキャップを届けてくれる人
・不要になった物品を寄付してくれる人
・ふれあい粋・活サロンの担い手さん
・民生委員さん、町会・自治会の役員さん
・様々な障がいのある人々
・家族介護者など
・「そばまで来たから顔を見に来た」というボランティアさん

様々な地域情報が入ってくる

心がけていること
★どんな話もしっかりと傾聴する
★断らない
すぐに解決できないことも多いけれど一緒に考えてみる
★できない理由を探すのではなくどうすればできるかを探る

荒川区の地域力を活かして～ボランティアセンタープラットフォーム

多様なボランティア団体
□企業組合　あうん
□あしいる(フードバンク
　隅田川医療相談会)
□アルコール依存症当事者の会
マック～NPO法人ワンステップ
□薬物依存症当事者の会
　ダルク
□DV被害者の支援　女性
　ネットSaya-Saya
□多文化共生センター東京
□35サポーネット
□男性介護者オヤジの会
□傾聴Vダンボの会

全社協・東社協・おもちゃの図書館全国連絡会・全国の子ども食堂のネットーく　など

相談・課題をつなぐことで　新たな活動を作り出す

荒川区の強みを活かして街づくりを

きどらず普段着で暮らせる街

困っている人がいるとほっとけない
おせっかいな人が多い

都電が真ん中を走り
交通の便がよく外出がしやすい

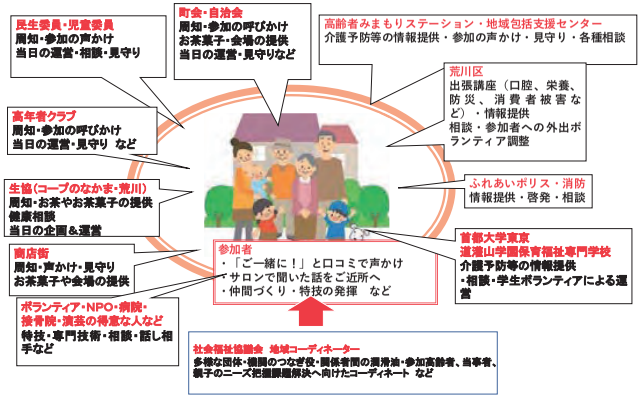
面積が小さい～最長距離でも自
転車で1時間かからない

商店街がたくさんある

住民の口コミ力

平成14年度から、ネットワーク型サロンづくりをスタート

顔と顔がつながり、助けたり助けられたりする関係をつくるために～サロンづくり



ネットワーク型ふれあい粋・活サロンで地域づくり

孤立・閉じこもりの防止

○歩いて行けるところにサロンがあるので気軽に出かけられ様々な人とふれあいがあり孤独感が癒され楽しみができ、閉じこもりの防止につながる

○決められたプログラムはないので、気楽に参加できる

○おしゃれして出かける場

地域の方々と知り合い　関わりができる

○普段同じ町内に住んでいるのに、全く知らなかった人達にとっては地域交流の拠点になり、地域の中に人と人とのつながりをつくる。

生活に役立つ情報が手に入る

地域の情報は、口コミが一番！

○同じ高齢者、子育て中の親達や地域の様々な立場の人々やボランティアと関わることで情報交換の場となり、福祉をはじめとする地域の情報や暮らしに役立つ情報が直接手に入る

ネットワーク型ふれあい粋・活サロンで地域づくり

生活上の困りごと・心配ごとを発見・相談・解決

○気軽に参加しおしゃべりをしている中で、暮らし中での困りごとや心配ごとを聞くことができ、高齢者みまもりステーション、地域包括支援センター、民生委員、社協など様々な立場の人々が参加しているので、その場で解決につながる。

○一人の相談から地域全体の問題として取り組むきっかけになる。

ネットワークで地域の福祉力を高める

○サロンの推進者である民生委員・児童委員、町会、商店街、ボランティア、高齢者見守りステーション・地域包括支援センター、行政、社協など、小地域福祉活動のキーパーソン同士がサロンを通じて連携することで、小地域での　見守りのネットワークが広がり、日常的な個別支援につなげていくことができる。

毎月　必ず顔を合わせることで、顔と顔がつながり　ネットワーク力に

様々な思いを活動に　テーマ型サロン

多様なニーズを解決するテーマ型サロン

○家族介護者のサロン　男性介護者のサロンM

○認知症の方を介護されている家族のためのサロン

○ろう高齢者のためのサロン　ふくろうの会

○私の話しをジックり聞いてほしい　～傾聴サロン

○シングルマザーサロン～子どもの貧困は、親が貧困な状況に

○不登校支援ネットワーク～カタリバ(当事者サロン)

～ツナグバ　・　ソフィア(当事者と支援者サロン)

○子ども食堂～ひとりぼっちでごはんを食べる子どもたちを、地域で支えたい

○多世代交流地域食堂～子どもから高齢者まで多世代で食を囲んで交流

○地域食堂～高齢者・特に男性高齢者のための会食サロン

○ひきこもり家族会サロン

○ふるさとサロン～東日本大震災で避難してきた方々

サロン活動から、地域のたすけあいの仕組みづくりを

サロン担い手交流会で、地域課題の抽出とその解決にむけての取り組みについて協議

サロンに参加しない人をどのように見守るか？

SOSを出せない、出さない人へのアプローチをするには

ふれあい粋・活サロン96か所（令和2年2月現在）

地区ネットワーク型サロン　56か所
●南千住地区9 ●荒川地区11●町屋地区6
● 東尾久地区 5●西尾久地区8 ●東日暮里地区8　　●西日暮里地区9

子育てサロン　　3か所

介護予防サロン　11か所　※毎週1回実施

テーマ型サロン 26か所

子ども食堂・子どもの居場所活動が広がり、住民と行政と専門機関等とのネットワーク「あらかわ子ども応援ネットワーク」ができたことで、支援者が増え活動が見える化

高齢者　特に、サロンには参加しない男性高齢者が参加したいと思う子ども食堂のような食堂をつくりたい！
ひとり暮らし高齢者は食生活も心配

地域食堂・多世代交流地域食堂

コミュニティカフェ立上げ支援
空き店舗が地域の居場所に
～天親カフェの取組み～

社会福祉法人金沢市社会福祉協議会
第２層生活支援コーディネーター
水橋　佑介（社会福祉士）

説明内容

①地域の概要説明（金沢市・味噌蔵地区・天神町）

②金沢市社協における地域福祉活動支援の体制について
（生活支援体制整備事業）

③天親カフェの取組み内容
（コミュニティカフェ・子どもの学習支援）

④これまでの支援経過

⑤支援する上で意識したこと・心がけたこと

金沢市・味噌蔵地区・天神町の概要

（H31.4.1時点）	金沢市	味噌蔵地区	天神町
人口	451,817人	6,685人	1,727人
高齢者数	119,075人	2,314人	524人
高齢化率	26.4%	34.6%	30.3%

・金沢市は、石川県の県庁所在地で中核市。地域福祉活動の基本圏域として、概ね小学校区単位に５４の地区社会福祉協議会が組織されています。

・味噌蔵地区は、市内中心部に位置し、地区内には金沢城公園や兼六園があり、加賀藩時代からの町家も多く残る地域です。

・天神町は、藩政期の街道沿いに商店街が栄え、長年地域で暮らされている方も多く住民同士の交流が残る一方、独居高齢者の増加が心配されています。

・天親カフェは「天親会」という単位町会（自治会）の取組みになります。

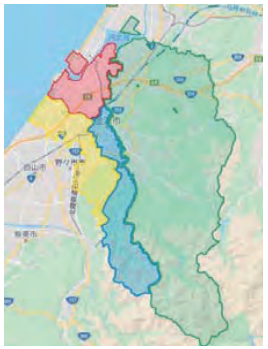
・天親会は約160人／60世帯（6班)で構成されています。

金沢市社協における地域福祉活動支援の体制（生活支援体制整備事業）について

・生活支援体制整備事業（金沢市委託事業）で、金沢市社協に生活支援コーディネーター（ＳＣ）５名配置。（第１層１名、第２層４名）

・第２層ＳＣは19の日常生活圏域（概ね中学校区）のうち、３～７圏域（小学校区11～15地区）を担当しています。

・ＳＣの主な業務として、担当地区における住民同士の支え合いの仕組みづくり「**地域安心生活支え合い事業**」の企画支援や、「**地域支え合い百万石通信・ブログ**」の作成を通じた支え合い活動の見える化を行い、地域福祉活動支援を行っています。



第２層ＳＣ別担当圏域

地域安心生活支え合い事業

・各地区社協が主体となり、地域内のニーズ調査や様々な関係者と協議し、住民が気軽に参加できるちょっとしたボランティアの仕組みづくりを行う事業です。

・コミュニティカフェの立上げや送迎による買い物支援の取組み等、地域の実情に合わせた活動が展開されています。

地域支え合い百万石通信・ブログ

・ＳＣが地域の様々な支え合いの取組みを取材し、取材結果をまとめたレポートおよびブログを作成しています。

・取材を通して取組みの効果や価値、強み等を見える化し、活動が地域にとって大切な役割を果たしていることの理解促進や、専門職向けに社会資源情報を提供しています。

天親カフェ取組み概要

会場：旧広岡酒店

日時：毎週火曜日午前１０時～午後４時

・「以前は人の往来もあり、井戸端会議やあいさつがあふれる町だった」
「一人暮らしの方が増えて、死後１週間誰にも気づかれなかった方もいた」
「顔見知りになったり会話ができる場所を作ることが必要じゃないかな」

⇒町内の仲良しグループ数人が町の現状について話し合う中で、「**町内で交流できる居場所作り**」の必要性が浮かびあがりました。

・町内に元酒屋だった店舗スペースが空いており、カフェの運営メンバーが手作業で飾りつけして、誰もがちょっと寄っておしゃべりできる居場所として天親カフェをスタートしました。

・カフェは飲み物とお茶菓子が用意され、参加者は１杯１００円の協力費を寄付する形で運営されています。

・体操や手芸といったプログラムは用意せず、集まっておしゃべりするだけの居場所です。

・訪れる多くの方から、**顔を合わせておしゃべりすると安心感が得られる**ことや、**カフェが毎週の習慣になっている**という声をお聞きします。

・カフェの運営にあたり町内外から様々な協力を得ています。

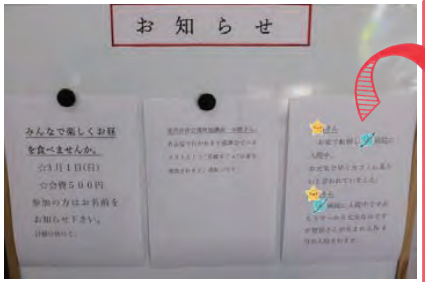
・昔の町内の写真や町会行事の記念写真の提供

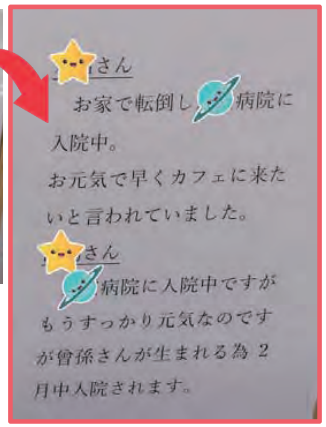
・テレビやコンポ等の設備の寄付

・昭和のチラシやポスターの展示

・料理やお菓子の差し入れ

カフェに寄るついでに向かいの魚屋で買い物される方も多いです。





・カフェ内には掲示板を設置し、参加者同士の情報交換に活用しています。

・**入院した情報を町内の方に把握してほしいという希望**の方もおり、運営メンバーが文章に起こして掲示しています。

町内の多世代が関わるきっかけになるように、天親カフェでは様々な企画をしています。

１２月には町内の子ども達を招いて、クリスマス会を開催しました。

他にも出張天親カフェとして、近隣の有料老人ホームの交流スペースを借りて、大学生のアカペラサークルによる演奏会を企画したこともあります。

また、せっかくカフェの場を整えたので、火曜日以外も活用できればという声があがってきました。

そこで、**多世代にとって身近な居場所を作りたいという趣旨から、子ども達向けに新たな取組み**を始めました。

天親カフェ寺子屋取組み概要

会場：旧広岡酒店

日時：毎週木曜日午後３時３０分～午後６時

・町内の小中学生が放課後に宿題やドリルに取組みながら、交流できる身近な居場所として、子どもの学習支援の取組みを行っています。

・金沢大学の大学生ボランティアに先生役をお願いしています。

・子どもにとって、**家庭や学校以外の第三の居場所となる空間**を目指しています。

宿題を持ち込んでみんなで取組んでいます。

・小学校低学年～中学年の子どもが多く参加しています。

・平均５名程度の参加があり、異学年でも交流して仲良くなる場になっています。

これまでの支援経過

時期	天親カフェ運営メンバーの動き	当方の関わり
数年前より	・町内の関係の希薄化を共有 ・居場所づくりの必要性を認識	
H30.12～H31.1	・新聞報道（市社協の地域づくりに関する研修会の記事）を見て、市社協に相談 ・市内にある町会主体で運営しているコミュニティカフェを見学	・相談時点の居場所づくりに対する考え・思いを聞取り ・先行事例の見学を提案し、見学調整 ・行程＆TODOを整理
H31.2～H31.3	・メンバー間でカフェの運営方法等話し合い ・天親会の総会で取組み案を提案、承認	・運営メンバーの自主性に任せて合意形成を見守る
H31.4～R01.7	・カフェの予算立て、スケジュールを協議 ・市にコミュニティ活性化事業助成金を申請 ・会場の掃除、飾りつけ等の準備	・予算立ての考え方等を助言 ・助成金に関して申請方法、疑問点等を市役所に確認
R01.8～R01.12	・8月天親カフェオープン ・9月天親寺子屋オープン	・2～3ヶ月毎に様子を伺い、その都度悩みや不安を把握

支援する上で意識したこと・心がけたこと

運営に携わる方々が持つ疑問や不安点の明確化と、解決に向けた方法の選択肢の整理

・関わり全体を通して、疑問や不安に思うことを一つ一つ洗い出し、**何のどの点に対して課題と感じているのか明確にすること**で、解決策を考えやすくなるよう、ヒアリングと考えの整理を特に意識しました。

・主にお金に関する不安があったので、助成金の種類や要件、自主財源、寄付の考え方等について情報を提供しつつ、天親カフェに適した方法を納得して決めてもらえるよう関わりました。

運営に携わる方々間の話し合いの機会を尊重

・当事者間で話し合ってもらうことを重視し、メンバー間の話し合いや打合せ、町会総会での提案等の機会には加わりませんでした。

・当事者による合意形成をしてもらうことが、**取組みを自分事だと捉えてやる気を引き出すことにつながる**と考え、あえてその場には参加しないようにして、その分事前の打合せや情報提供は丁寧に行いました。

～　住民のやる気を支えるには　～

“市民発”　の地域の居場所

NPO法人ゆいの会

松下典子　　2020.3.10

住民互助在宅サービス団体の実績活用

● **立ち上がりの経緯**

1990年～　“何とかしたい！”暮らしの課題、地域の課題
ボランティアグループの助け合い活動

1999年～　活動の組織化、法人化、社会的信頼
助け合いの継続的運営の基盤づくり

2000年～　**介護保険スタート**
①制度の限界。急変するくらし
②核家族化、一人世帯。
③孤立、多様な価値、バラバラ地域
④住宅開発地の未知の地域共同体

知多市の概況

- 人　　口　　８５１９０人（平成31年4月1日現在）
- 高齢化率　　２７．２７％
- 介護保険実施主体　　知多北部広域連合　（３市１町）

- **生活支援体制整備事業**

CO:　第1層SC　H28年　ＮＰＯ法人　受託
第２層SC　H29年　NPO　３法人　受託
H30年　社会福祉協議会　受託

協議体委員会：事務局NPO法人受託
毎月、行政、社協、NPOの3者会議

全く新しい時代

みんなで話し合い、考え、みんなで創る

常設居場所は地域みんなの生活学級

① 普段の暮らしを学び合う
② できる人ができる事からチームで実践
③ **住民が創る、不公平な地域福祉**
④ 住民自治、もう一つの公共

居場所・サロンのいろいろな姿

日常的
犬とも・飲みとも
ボランティア仲間
OB会・班・隣組

月1～4日
健康体操・季節行事
出前学習会・おしゃべり

週3日～5日
日替わりワーク　・朝市
多世代交流・おしゃべり
食事交流会・学習会

43か所（内常設7）

地域のたすけあい

常時対応・予約

家事支援・ゴミ出し
・住まいの小修繕
・水やり・庭の手入れ
・病院・買い物等
外出支援

NPO法人
日常生活、家事全般
配食・移動支援等

居場所の事例
みんなの参加でつくる地域の居場所

つつじが丘３ハウス全景

発足の経緯　～地域の居場所～

２５年
アンケート
“あったらいいな”
地域みんなの居場所

２６年
有志で発足
空家探し、賃貸契約
部屋、台所整備改修

２７年
活動スタート
出来ることから！

つつじが丘3ハウスの概要

- 所在地:　知多市つつじが丘3丁目6－7
- 　　電:　0562－55－7338

- 会員数:　61名（11月現在）
- 活動資金:　年会費（1000円）・サロン参加費（100円）
- 　寄付、自主事業（サークル参加費他）

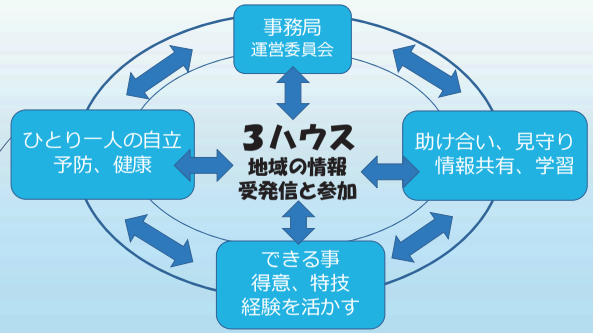
- H30年度実績
- 　運営委員:　12人
- 　参加人数:　延べ　3,371人/年
- 　決　　算:　1,469,596円（市補助金・家賃:30万円＋運営費30万円含む）

活動内容

月曜日～金曜日　毎日オープン
9：30～12：30

- しゃべり場サロン
- モーニング　（月・水）
- 予防、健康体操
- 文化・サークル活動
- 季節のイベント、部屋貸し
- 学習会・相談

“お互い様”の気もちが響きあう拠点

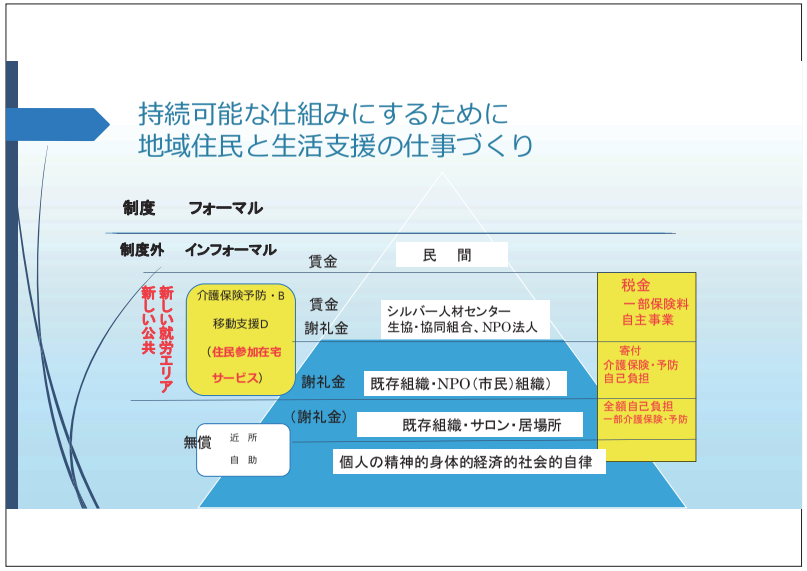


成果が出るまでに時間がかかる　＝活動現場の伴走支援

出典）平成28年度老人保健健康増進等事業「地域包括ケアシステムの構築に資する新しい介護予防・日常生活支援総合事業等の推進のための総合的な市町村職員に対する研修プログラムの開発及び普及に関する調査研究事業」報告書（三菱UFJリサーチ&コンサルティング）

NPOの取り組みとCO、中間組織の設置

資源開発	・住民参加在宅サービスの見える化、事業（PDCA）化 ・居場所は新しい時代の暮らし方、生き方の学びの場 ・既存組織、地域の公共機能の再考、協議、協働創設
ネットワーク	・トップダウン（垂直）とボトムアップ（水平）の連携、協働 ・テーマ、エリア、既存組織等、多面的重層的連携、協働 ・人と組織の連携、協働を調整機能NPOの中間組織が要
協議体	・変化、複雑化する個人と地域の暮らし、解決の提案 ・課題共有、整理、できる事の役割と地域支援を協議 ・市の施策、各種計画づくりに反映し住民自治力の構築



「協働的態度で話をきく」

信頼関係を形成して活動への動機づけを高める

内藤佳津雄 氏（日本大学文理学部教授 / 本事業研究委員会委員長）

協働的態度で話をきく

信頼関係を形成して
活動への動機づけを高める

日本大学　内藤佳津雄

協働的関係の形成に必要な基本的姿勢

①内発的動機づけを阻害する言動をしない
相手にいじわるをしない、けちをつけない
こちらの価値観や考え方、求めることを押しつけない
◎相手の強みやよさを積極的に評価すること

②話を聴く姿勢を示す
基本的態度として相手の話を聴こうとすることが大切
話を聴こうとする気持ちが根底に求められる

③熱意をもって対応する
相手を支援する行動を示す
・支援の方策を全力で考える
・時折訪問して活動を見る　など

話を聴くときの基本的な姿勢や行動
相手に「聴いている」態度を明確に示す姿勢が基本

- **視線、まなざし**
  基本的に視線を向ける（凝視しすぎない）
  メモや資料ばかり見ない
  視線を向けるときは数秒間は必ず向ける
  （「ちらっ」と見ない）
- **目　線**　：同じ高さ（同じ椅子に座る）
- **表　情**　：困った顔や不快そうな顔をしない
- **座る位置**：相手と90度の角度か、斜め向かいに座る
  （真正面に座ると強制感が高まるので、避ける）
- **座る姿勢**：相手側にやや前傾（背もたれに寄りかからない）
- **くせに注意**：腕組や脚組は威圧的になるのでやめる

話を聴いていることを積極的に示す応答
相手の話を引き出す質問力と励まし

- **積極的なうなずき・あいづち**
  バリエーションをつける
- **反復を活用する**
  相手の話のポイントを繰り返す
- **とくに感情や意思を示した発言は繰り返して共感**
  ボランティア
  「男性向けの活動を何かやりたいと思っているんです」
  コーディネーター
  「男性向けの活動をやりたいと考えていらっしゃるんですね」
- **基本は広がる(openな)質問を使う**
  閉じた（closedな）質問(はい・いいえで答えられるような質問)
  ばかり続けると事務的で押しつけられている感じになりやすい

- **相手のやりたいこと、目標などを認める**

  相手にとっての良いこと、価値を感じていることに対してポジティブな感情を示す。

  （価値を共有：やる気を高める）

  「良いですね」、「面白そうですね」、「素晴らしい」

- **課題が発見されたら解決に向けて協力するなど、励ます**

  課題はそのまま放置すると不安になるので、解決に向けていっしょに取り組むことを明言

  コーディネーター **「協力者はいますか?」**

  住 民 **「いえ、いません」**

  コーディネーター **「そうなんですね」**（ここで止めると「いない」結論で終わってしまい不安）

  コーディネーター **「では、見つける方法を一緒に考えていきましょう」**

- **解決策として提案があるときには、最後に同意を求める**

  コーディネーター

  「…という方法もありますが、どう思いますか?」

（「提案をすぐにやりましょう」と伝えるのではなく、相手に必ず感想や同意を求めながら進める）

[お問合せ先]

一般社団法人 全国食支援活動協力会
〒 158-0098 東京都世田谷区上用賀 6-19-21
☎ ０３－５４２６－２５４７
Fax ０３－５４２６－２５４８
E ﾒｰﾙ infomow@mow.jp

令和元年度厚生労働省老人保健健康増進等事業
「基礎自治体や中間支援組織による住民主体の活動を促進するための手法に関する調査研究事業」

参加費無料
定員80名
（先着順）

“住民主体の活動”を育てるには？

～住民のやる気を支える支援を学ぶワークショップ～

ニーズ重視（困りごとや足りないもの）からアセット重視（いまある強みや良さ）へ。
視点の転換によって信頼感を育て、やる気を支える支援をご一緒に考えましょう。

日時：3月17日（火）
時間：10:30～16:00
会場：東京ウイメンズプラザ
1F視聴覚室
（地下鉄表参道駅徒歩5分）

- 住民のやる気を支える支援が必要な背景
- “ニーズ”から“アセット”へ転換の考え方
- 支援者の心構えと立ち上げ事例
- 「アセットリスト」「価値のリスト」を使った支援プラニングワークショップ

対象
- 自治体職員の方
- 社会福祉協議会職員の方
- 生活支援コーディネーター
- コミュニティソーシャルワーカー
- 住民活動開発に関わる方など
  興味関心のある方どなたでも

お問い合せ　一社）全国食支援活動協力会
〒158-0098　東京都世田谷区上用賀6-19-21
☎:03-5426-2547（平日10:00～17:00）
✉infomow@mow.jp

参加申込：電話か申し込みフォーム【裏面】からお申込みください

【参加申込】

電話 ☎:03-5426-2547(平日10:00～17:00)

申し込みフォーム https://forms.gle/wJooWox7QNCs7caB8

【プログラム】

開会 10:30～16:30予(受付10:00)

❋開会あいさつ・オリエンテーション

❋本事業の考え方

「住民のやる気を引き出す支援」が必要な背景とアセット重視の考え方

講師:内藤 佳津雄 氏(日本大学文理学部 教授/本事業研究委員会委員長)

❋パネルトーク

「住民のやる気を支えるには」～住民の思いと支援

進 行 :平野 覚治(全国食支援活動協力会専務理事/本事業ワーキング部会部会長)

登壇者 :鈴木 訪子 氏(東京都荒川区社会福祉協議会 地域福祉活動促進専門員)

三政 貴秀 氏(小坂町福祉課町民福祉班/研究委員)

富岡 亜希子 氏(日進市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター)

❋ワークショップⅠ

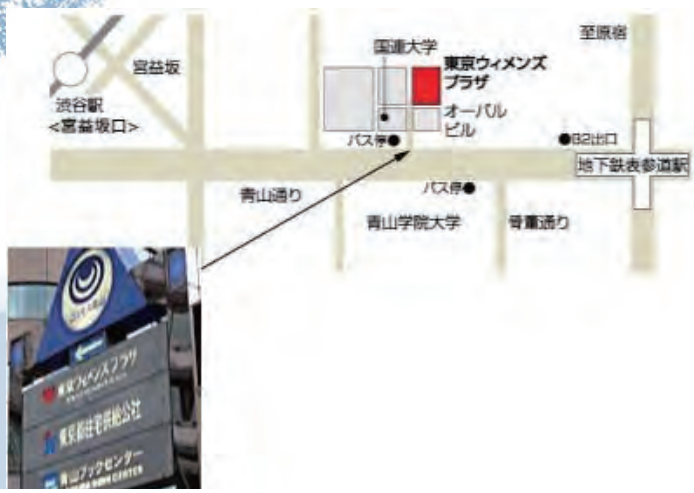
“協働的”態度で話をきく

ファシリテーター:内藤 佳津雄 氏(日本大学文理学部 教授)

❋ワークショップⅡ

支援プランニングシートの使い方

「アセットリスト」「価値のリスト」を使って支援のプラニングをしてみましょう



【会場までの交通機関】

●JR・東急東横線・京王井の頭線・東京メトロ副都心線
渋谷駅 宮益坂口から徒歩12分

●東京メトロ銀座線・半蔵門線・千代田線 表参道駅 B2
出口から徒歩7分

●都バス(渋88系統) 渋谷駅から2つ目(4分)青山学院前
バス停から徒歩2分

“住民主体の活動”を育てるには？

～住民のやる気を支える支援を学ぶワークショップ～

東京会場

日　時　令和２年３月17日（火）10：30～16：00

会　場　：東京ウィメンズプラザ視聴覚室

主　催　一般社団法人 全国食支援活動協力会

タイムスケジュール

10：00	受付開始
10：30	**開会挨拶・オリエンテーション** 一般社団法人全国食支援活動協力会
10：35	**本事業の考え方** **「住民のやる気を引き出す支援」が必要な背景とアセット重視の考え方** 講師：内藤 佳津雄 氏（日本大学文理学部教授 / 本事業研究委員会委員長）
11：00	**パネルトーク** **「住民のやる気を支えるには」～住民の思いと支援～** 進行：平野 覚治（全国食支援活動協力会専務理事 / ワーキング部会部会長） 登壇者：鈴木 訪子 氏(東京都荒川区社協地域福祉活動促進専門員 / ワーキング部会委員) 三政 貴秀 氏（秋田県小坂町福祉課町民福祉班 / 研究委員） 富岡 亜希子 氏（日進市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター）
12：30	昼休憩（60分）12：30～13：20
13：20	**ワークショップⅠ** **“協働的”態度で話をきく** ファシリテーター：内藤 佳津雄 氏 （日本大学文理学部教授 / 本事業研究委員会委員長）
13：35	休憩（10分）13：35～13：45
13：45	**ワークショップⅡ** **活動支援プランニングシートの使い方** ファシリテーター：全国食支援活動協力会
16：00	**アンケート記入、閉会**

「住民のやる気を引き出す支援」が必要な背景とアセット重視の考え方

内藤佳津雄 氏（日本大学文理学部教授 / 本事業研究委員会委員長）

「住民のやる気を引き出す支援」が必要な背景とアセット重視の考え方

日本大学　内藤佳津雄

住民参加による生活支援等支援を開発する必要性

背景

総人口（とくに生産年齢人口）の減少

（ただし、老年人口は２０４０年代まで増加）

家族構造の変化（独居・老々世帯の増加：家族以外の生活支援力が必要）

地域における人間関係の変化（孤独・孤立の発生）

地域における社会的資源の変化（公的支援力の低下）

●人口減少・超高齢社会に対応できる社会・地域づくり

地域における生活像

身体的健康（フレイル、低栄養等）
社会的関係（孤立・孤独に陥らない）
心理的健康（幸福感、満足感など）
日常生活の自立・自律

} 医療・介護や公費による支援だけでは困難

「インフォーマル」な社会参加＆介護予防、生活支援が大きな課題

生活支援コーディネータの皆さんへ

生活支援コーディネータの役割として・・・

- 総合事業の通所型サービスBを作りたい
- 介護予防を担うグループ活動を作りたい
- ちょっとした訪問型支援の担い手を増やしたい

どれも重要な政策課題！しかし、ボランティア活動、住民参加型活動としての担い手がなかなか見つからない、引き受けてくれない、広がらない

必要性を説いて強く押してみる方法もありますが・・・
ボランティア活動とは、どういうもの？
ボランティアは何をしたいの？
＜もう一度立ち戻って考えないと活動は広がらないかもしれない＞

住民参加による生活支援サービスの必要性

- 地域の課題解決に関心がある人
- 地域の他者のために何かをしたい人

→実はいる（例えば、子ども食堂）が見過ごされがちである

住民参加・ボランティア活動は、活動者自身が「やりたいこと」をしたい
「やりたいこと」は、活動者自身が価値を感じたことである
「やりたいこと」は不明確だが、地域のために貢献したい人がいる

●他者に貢献する活動を地域に作っていくには、こうした発見されにくい「やる気」を育てる積極的支援が必要

アセット重視の考え方

図表3-1 ニーズ重視とアセット重視

	ニーズ重視	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか?」	「なぜ健康になるのか?」

- アセット重視の特徴

「あるもの」＋「長い時間軸」に着目して、まずはできるところから始め、時間をかけて市町村内全域に普及させていく。

ニーズ重視の支援はマイナス面について評価する（監査）が、アセット重視では、まずはあることが重要なので。プラス面に目を向けた評価を行う。

アセット重視の支援の始まり

■まずは思いをよく聞くこと
　地域の集まりやボランティア講座などで「地域で人のために何か活動をしたい」という思いをもった人との出会い
〇思いや意向を詳しく聞いてみる・・・思わぬ 強み や 良さ が分かるかも（アセットの発見）
（例）
地域の中で集まれる場を作ってみたい
閉じこもりがちな近所の高齢者のことが気になっている
楽しいことなら友人も一緒にやりたいと言っている
空いている部屋があって、住み開きに興味がある

■小さなことでも価値があり、小さなことからでも始められる
- はじめからボランティアが揃わなくても
- 活動計画が立てられなくても
- できることから始めればいい。

肯定的に認められることで前向きになり、活動につながる

■マイナス面ではなくプラス面を見つける

事業や制度の枠に当てはめると、条件を満たしていないこと（マイナス面）に目が行きやすい（ニーズ重視に陥らない）
・構成メンバー 3人しかいないから、「できない」のではなく、最初は 3人もいると捉える

※単に住民の要望をかなえるのとは違うことに留意する
　地域課題を感じて、自発的に活動を始めようとしていることが重要
　（営利でない、政治や宗教活動でない、公序良俗に反しないが前提）

アセット重視な活動への支援

■小さな活動、福祉とは違う分野の活動も大切な地域資源
（例）　・数人の仲間で行っている
　　・編み物や囲碁将棋などの趣味の集い
　　・犬の散歩で出会う顔見知りの人たち
　　・環境や市民活動などをテーマにした<まちづくり活動>

■こちらが作りたい活動にすぐにはマッチングできない
- 地域資源（アセット）を一つ一つ増やしていき、良好な人間関係を形成していきましょう（ネットワークづくり）
- 思いもよらないときにつながることがある
- 良好な関係の中からこそ、こちらの話を聴いてくれる人が現れる

（例）「子どもの居場所にきている小学生」が、数日入院する高齢者の「犬の散歩」をお手伝い →居場所までの送迎に、デイサービスの使っていない時間帯で車両を貸してもらえる

活動への「やる気」を高めることが重要

- 内発的動機づけ（外的報酬によらないやる気）
　本人にとっての興味や好奇心、楽しさによるやる気
　・・・ボランティア活動の一番の原動力は内発的動機づけ

●内発的動機づけを高める要因
①自分の目標に価値がある＋達成できそう（有能感）
・周囲から社会的に価値を認める
・目標に向けてどのように行動したら目標を達成できるのか道筋が明確
②自分で目標や方法を決めること（自律性）
・やらされ感の高い状況（ルールに縛られすぎる、他人の言うことばかり聞かないといけない）は内発的動機づけを低下させる
③良好な人間関係
・好感や信頼感といった「人間関係の良さ」があることによって、はじめてこちらの話を聴いてくれる
・そのために、まずは相手の話を聴き、信頼感を作っていくことが大切

参加型の居場所づくりを基盤とすることをお勧めする理由

●アセット重視で取り組みやすい活動形態である
■気のあう仲間、自宅でもできる、活動形態は自由
さまざまな頻度が可能：毎日オープン～月1回　　規模も多様：少人数～
活動内容も多様：会食、健康体操、学習支援、プログラムなしでも可能
■担い手と受け手が対等
■子ども～高齢者の参加による多世代の交流
（例）食事を提供するとき、小さな子どもも配膳をしたり、スタッフと参加者が一緒のテーブルについて食べたりすることができる
■食は人を集めてつなぐ
食事の提供を中心に据えた居場所・・・美味しいものをみんなで一緒に食べる楽しみは、 人と人を結びつける、地域文化の継承、健康づくりなど多くのメリットがある
■多様なサービスが生まれる基盤となる
お互いの困りごとを知る機会・ 解決しようとする動きにつながる（プラットフォームとしての機能）

「住民のやる気を支えるには」
～住民の思いと支援～

進行：

平野 覚治（全国食支援活動協力会専務理事 / ワーキング部会部会長）

登壇者：

鈴木 訪子 氏（東京都荒川区社協地域福祉活動促進専門員 / ワーキング部会委員）

三政 貴秀 氏（小坂町福祉課町民福祉班 / 研究委員）

富岡 亜希子 氏（日進市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター）

登壇者プロフィール

鈴木訪子 (すずきことこ)

荒川区立保育園の保育士を退職後、障がいのある子をもつ親の会荒川のぞみの会の放課後の遊びの会の活動を取り組むなかで、おもちゃ図書館をつくる。1986 年より、荒川区社会福祉協議会におもちゃ図書館が常設となり、入職。現在は、地域ネットワーク課で、ボランティア・地域福祉活動を担当。

三政　貴秀（みまさ　たかひで）

秋田県小坂町役場福祉課町民福祉班（小坂町多世代型地域包括支援センター「まるねっと」）職員（介護保険・地域包括ケア・地域共生社会政策担当）

2010 年、秋田県小坂町役場入庁。入庁後から高齢者保健に関する業務に関わる。

16 年より厚生労働省老健局振興課において、総合事業や生活支援体制整備事業、地域包括支援センターなどを担当。

18 年 4 月に復帰し、現在に至る。

登壇者プロフィール

富岡　亜希子（とみおか　あきこ）

・社会福祉士・保育士

・生物機能工学科卒業

２０代　・住民参加でつくる公園等を設計

・介護保険事業計画、老人保健福祉計画、エンジェルプラン等の行政計画のコンサルタント業務

３０代　・遺伝子実験・学生支援

４０代　・日進市社会福祉協議会（地域福祉係）

・担当：CSW（福祉まちづくり協議会支援・つどいの場支援・個別相談・各種助成金・各種講座）

第１層生活支援コーディネーター　（市内全域）

好きなモノ：生ハム

住民が主役の地域づくりを

荒川区社会福祉協議会
地域ネットワーク課　地域福祉活動促進専門員
鈴木　訪子

荒川区社会福祉協議会の主な事業

1.地域福祉事業
おもちゃ図書館子育て交流サロン活動・ふれあい粋・活サロン事業,
2.ボランティアセンター事業
・ボランティア活動の推進,福祉教育の推進,　・地域活動サロンふらっと.フラット事業
3.在宅福祉事業
・車椅子の貸し出し,有償在宅サービス事業・にこにこサポート・障害児者移動支援
4.成年後見センターあんしんサポートあらかわ
5.生活福祉資金の貸付・受験生チャレンジ事業
6.助成事業　・地域福祉活動助成,福祉団体・施設への助成
7.被災地・被災者支援活動
8.区受託事業　・障がい者就労支援じょぶ・あらかわ,ファミリー・サポート・センター
・手話通訳派遣事業,手話講習会
9.指定管理施設の運営
①高齢者福祉施設３施設　・荒川老人福祉センター,荒川東部在宅高齢者通所サービスセンター,西尾久西部在宅高齢者通所サービスセンター
②障害者福祉施設４施設
・荒川区立福祉作業所,荒川生活実習所,あらかわ希望の家・分場,
障害者福祉会館アクロスあらかわ

荒川区ってこんな町

■人口　217,278人（内外国人19,353人）117,295世帯
■高齢化率　**23%**
■面積**10.16**km²
■町会・自治会　119　商店街40
■民生委員児童委員　７地区　200名
主任児童委員15名
■高年者クラブ
■地域包括支援センター・高齢者みまもりST　8か所
■公立小学校24校　中学校10校　私立中高校2校　都立高校・高専2校
保育・介護専門学校1校　大学1校
■再開発が進み、人口が増加。子育て世代が増加
■交通は便利

高齢者にも障がいのある人にも子ども連れの親にとっても乗りやすい都電が走り、地域活動に参加しやすい環境

ボランティアセンターは 敷居の低いよろず相談の窓口

・ボランティア活動をしたい・ボランティアの力を借りたい
・どこに相談に行ったらよいかわからない
・寄付をしたい・活動のための助成金を得る方法はないか
・自分の家を地域活動に使ってほしい
・路上で生活している、食べ物をもらえないか?
・ひとり暮らしの高齢者が沢山の猫を飼っていて、糞尿などの匂いで近所が困っている
・科学物質過敏症のため、外出ができない　などなど

心がけていること
★どんな話もしっかりと傾聴する
★断らない
すぐに解決できないことも多いけれど一緒に考えてみる
★できない理由を探すのではなくどうすればできるかを探る

地域住民・ボランティアさんの立ち寄り所

・おもちゃ図書館子育て交流サロンに遊びに来る子育て中の親子とボランティアさんたち
・使用済み切手やペットボトルキャップを届けてくれる人
・不要になった物品を寄付してくれる人
・ふれあい粋・活サロンの担い手さん
・民生委員さん、町会・自治会の役員さん
・様々な障がいのある人々
・家族介護者など
・「そばまで来たから顔を見に来た」というボランティアさん

様々な地域情報が入ってくる

荒川区の地域力を活かして～ボランティアセンタープラットフォーム

多様なボランティア団体
□企業組合　あうん
□あしいる(フードバンク
　隅田川医療相談会)
□アルコール依存症当事者の会
マック～NPO法人ワンステップ
□薬物依存症当事者の会
　ダルク
□DV被害者の支援　女性
　ネットSaya-Saya
□多文化共生センター東京
□35サポーネット
□男性介護者オヤジの会
□傾聴Vダンボの会

全社協・東社協・おもちゃの図書館全国連絡会・全国の子ども食堂のネットーく　など

相談･課題をつなぐことで　新たな活動を作り出す

荒川区の強みを活かして街づくりを

きどらず普段着で暮らせる街

困っている人がいるとほっとけない
おせっかいな人が多い

都電が真ん中を走り
交通の便がよく外出がしやすい

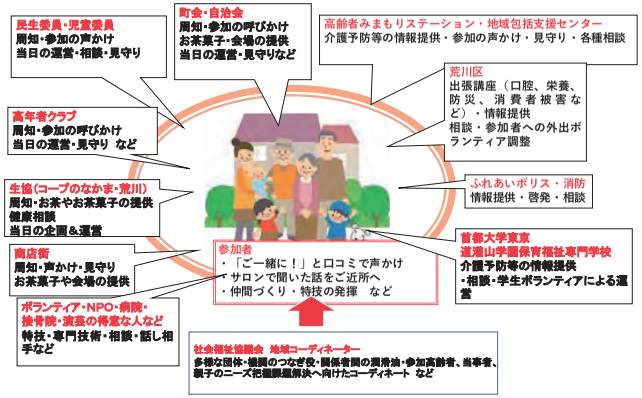
面積が小さい～最長距離でも自
転車で1時間かからない

商店街がたくさんある

住民の口コミ力

平成14年度から、ネットワーク型サロンづくりをスタート

顔と顔がつながり、助けたり助けられたりする関係をつくるために～サロンづくり



ネットワーク型ふれあい粋･活サロンで地域づくり

孤立・閉じこもりの防止

○歩いて行けるところにサロンがあるので気軽に出かけられ様々な人とふれあいがあり孤独感が癒され楽しみができ、閉じこもりの防止につながる
○決められたプログラムはないので、気楽に参加できる
○おしゃれして出かける場

地域の方々と知り合い　関わりができる

○普段同じ町内に住んでいるのに、全く知らなかった人達にとっては地域交流の拠点になり、地域の中に人と人とのつながりをつくる。

生活に役立つ情報が手に入る

地域の情報は、口コミが一番！

○同じ高齢者、子育て中の親達や地域の様々な立場の人々やボランティアと関わることで情報交換の場となり、福祉をはじめとする地域の情報や暮らしに役立つ情報が直接手に入る

ネットワーク型ふれあい粋・活サロンで地域づくり

生活上の困りごと・心配ごとを発見・相談・解決

○気軽に参加しおしゃべりをしている中で、暮らし中での困りごとや心配ごとを聞くことができ、高齢者みまもりステーション、地域包括支援センター、民生委員、社協など様々な立場の人々が参加しているので、その場で解決につながる。

○一人の相談から地域全体の問題として取り組むきっかけになる。

ネットワークで地域の福祉力を高める

○サロンの推進者である民生委員・児童委員、町会、商店街、ボランティア、高齢者見守りステーション・地域包括支援センター、行政、社協など、小地域福祉活動のキーパーソン同士がサロンを通じて連携することで、小地域での　見守りのネットワークが広がり、日常的な個別支援につなげていくことができる。

毎月　必ず顔を合わせることで、顔と顔がつながり　ネットワーク力に

サロン活動から、地域のたすけあいの仕組みづくりを

サロン担い手交流会で、地域課題の抽出とその解決にむけての取り組みについて協議

サロンに参加しない人をどのように見守るか？

SOSを出せない、出さない人へのアプローチをするには

ふれあい粋・活サロン96か所（令和2年2月現在）

地区ネットワーク型サロン　56か所
●南千住地区9 ●荒川地区11●町屋地区6
● 東尾久地区 5 ●西尾久地区8 ●東日暮里地区8　　●西日暮里地区9

子育てサロン　　3か所

介護予防サロン　11か所　※毎週1回実施

テーマ型サロン 26か所

様々な思いを活動に　テーマ型サロン

多様なニーズを解決するテーマ型サロン

○家族介護者のサロン　男性介護者のサロンM
○認知症の方を介護されている家族のためのサロン
○ろう高齢者のためのサロン　ふくろうの会
○私の話しをジックり聞いてほしい　～傾聴サロン
○シングルマザーサロン～子どもの貧困は、親が貧困な状況に
○不登校支援ネットワーク～カタリバ(当事者サロン)
～ツナグバ ・ ソフィア(当事者と支援者サロン)
○子ども食堂～ひとりぼっちでごはんを食べる子どもたちを、地域で支えたい
○多世代交流地域食堂～子どもから高齢者まで多世代で食を囲んで交流
○地域食堂～高齢者・特に男性高齢者のための会食サロン
○ひきこもり家族会サロン
○ふるさとサロン～東日本大震災で避難してきた方々

ひとりぼっちをつくらない

子ども食堂・子どもの居場所活動が広がり、住民と行政と専門機関等とのネットワーク「あらかわ子ども応援ネットワーク」ができたことで、支援者が増え活動が見える化

高齢者　特に、サロンには参加しない男性高齢者が参加したいと思う子ども食堂のような食堂をつくりたい！
ひとり暮らし高齢者は食生活も心配

地域食堂・多世代交流地域食堂

三ノ輪地域食堂

住民と一緒に新しい地域活動をつくりだすために大切にしていること

■アナログで顔と顔を合わせてつなぐ、つながる　「思い」を伝える　伝え合う
　思いを一緒に、活動プログラム・計画を描く
■相談は、断らない！計画にないことでも、必要である場合は受け止め柔軟に取り組む努力をする
■できない理由を考えるのではなく、どうすればできるのかを考える
■情報は、人がもってくる。たくさんの集まった情報・ニーズは、ボラセンで囲い込まないように
　地域住民・ボランティア・関係機関・行政に伝え共有する
■プラットフォーム型ネットワークする～目的を同じにし、それぞれの強みを活かし、機
　能するしくみづくりを協働する一緒に取り組むことのおもしろさを感じられる
■住民と一緒に汗を流す～活動の場にできるだけ顔を出す
■活動がスタートしたら、情報誌やマスコミに取材を依頼　→住民・ボランティアに光をあてる
■いつも高くアンテナをはりめぐらす。ネットワーク力があればあるほど、アンテナを高くすること
　ができる

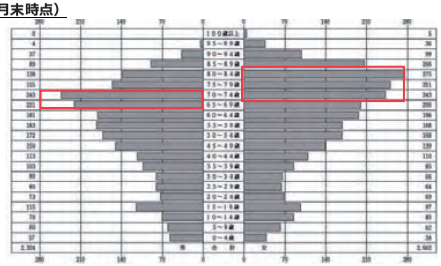
■職場内のネットワークは、みんなで意識化する～上司を仲間にし、情報を共有

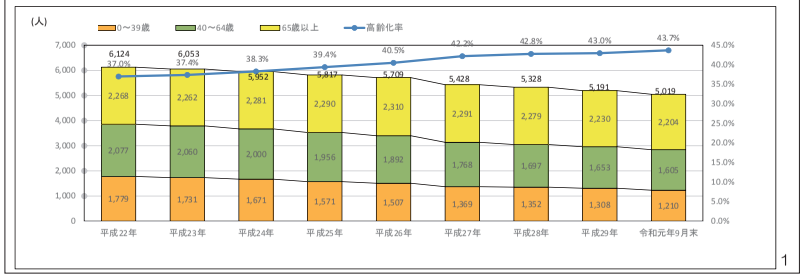
小坂町における「住民のやる気を引き出す支援」

小坂町役場福祉課
三政　貴秀

小坂町の人口・世帯の状況（令和２年１月末時点）

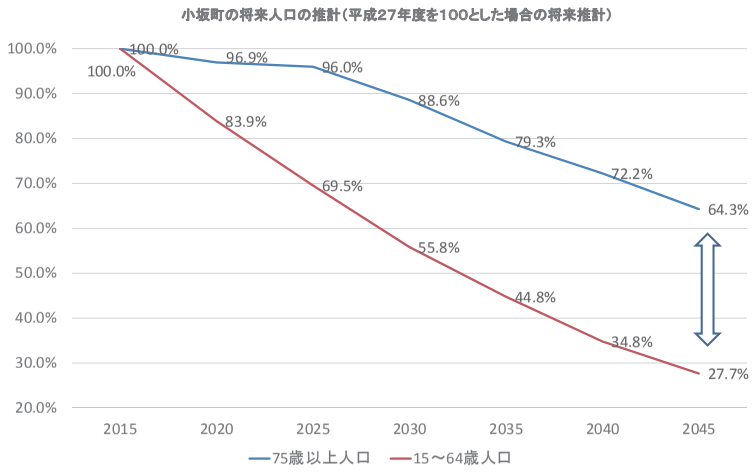
○秋田県の北東部に位置する山間地域
○人口：4,986 人（男 2,324人 女 2,662人）
○世帯数：2,385世帯
○高齢者人口：2,202人（うち75歳以上　1,295人）
○高齢化率：44.2%（75歳以上割合　26.0%）
○要介護認定率：14.2%（313人）
○１人当たり総生産２／２５位（秋田県市町村別）
○１人当たり所得４／２５位（秋田県市町村別）





1

小坂町の将来の人口推計



国立社会保障人口問題研究所の推計値を基に小坂町で作成

2

町を取り巻く地域環境の変化

〈現状〉あらゆる世代の人口減少

→人口減少に対応した変革の波にスピード感を持って対応する必要あり

〈課題〉・低下する“地域の課題解決力”

・医療や介護サービスを始めとした、あらゆる分野での人材不足

〈現状〉地域資源の縮小

→人口減少が進むことによる公共・市場サービス等の縮小

〈課題〉・生活基盤の維持・継続に向けた素早い対応

・生産性の向上や効率化による持続性の追求

・自助や互助の力をどう維持していくか（新たな支援の模索）

〈現状〉地域の繋がりの希薄化

→人口減少と住まい方の多様化による生活環境の変化

〈課題〉・地域と公的支援の連動性の強化

・小地域単位での現状や課題、ニーズ等の把握

・目指すべき地域像とのギャップをどう埋めていくか

・互助の力をどう維持していくか

3

住民のやる気を育てる支援に取り組む前に
忘れてはいけない大切なこと

役所の職員として
『1人ひとりの幸せにどこまで応えられるか』

4

地域づくりを支援しようとするうえで陥りがちなこと

○ 行政の考え方、働き方、事業、方法等を中心に置いたうえで、地域資源を自分たちの枠組みに巻き込もうとしていないか？
→補助制度、事業の進め方、事業評価などの進め方は適切か

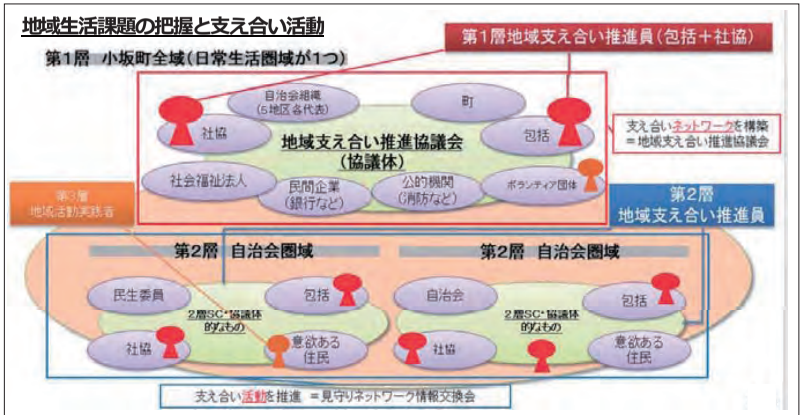
○ 解決するべきことを本質的に把握できているか？
→行政等からの支援とニーズのミスマッチは起きていないか
→解決するべき課題は地域（圏域or全域）で共感を得られるものか

○ 支援することで何を目指したいかを理解できているか？
→自治体（職員）の価値観を時代に合わせて変えられるか
→最後はその地域に暮らす住民に価値が生まれるべき

○ 地域に“無いもの”をどうにかしようとしていないか？
→既に地域にあるものでも、モノの見方を変えたり、新たな支援や繋がりを促すことにより、活動がよりイキるものはないか

5

地域生活課題の把握と支え合い活動



★この取組で目指したいこと

- １人ひとりの暮らしぶりを把握すること
- 町全体（or圏域）が目指す地域像を地域の隅々まで共有すること
- 生活支援コーディネーターがいま地域にある資源を把握すること
- 今まで繋がっていなかった人と人、人と資源を繋ぐこと

6

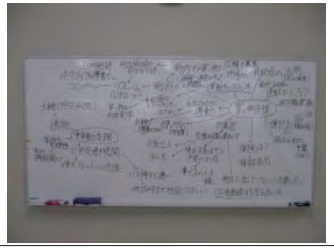
生活支援コーディネーターの活動

－第２層協議体におけるネットワーク会議－

－第２層協議体における見守り・資源マップの作成－

－人と人、人と資源をつなぐ－

－支援ニーズと地域資源のマッチングの検討－



7

地域にはたくさんの資源がある

	地域（身の回り）	町内（全域）	町外
場所	自治会館 地区公民館 廃店 公園 パークゴルフ場 バス停 産地直売所　など	公民館 福祉保健総合センター ローソン・ファミマ 飲食店・居酒屋 スーパー（マックスバリュ） 診療所 スナック　　など	ショッピングセンター（モール） 公園 総合病院 自動車学校
人財	介護予防推進員 民生委員 地区老人会 自治会員 地区ボランティア　など	リハ派遣事業 出前講座 ボランティア団体 小坂高校生 老人クラブ　など	シルバー人材センター 出前講座 総合病院からの派遣 ゴミ収集車 宅配業者・出前業者　など
広報	自治会報 見守りマップ ポスター・パンフレット 口コミ　　など	広報こさか 社協等の広報 町防災メール・ラジオ ハザードマップ 見守り支援ステッカー　など	きりたんぽFM 折込チラシ タウンページ　など
モノ・カネ	自治会費 寄付・遺贈 おすそ分け　など	居場所づくり補助金 訪問型サービス補助 赤い羽根共同募金 寄付　　など	民間企業等の寄付助成 県の居場所づくり補助 リサイクルショップ　など
その他	地区内での乗り合い 地区でのイベント 井戸端会議	バス（公共・町営） デマンドタクシー 社福法人の移動支援 タクシー会社　　など	フィットネスクラブ MSP＋TDAS機器リース会社

8

雪国特有の問題にも支え合いで対応

－大地地区における見守り支援と地区内除雪の一体的実施－

大地自治会に除雪委託　町民との協働モデルに　小坂町

2017-11-30

小坂町は１２月１日から、冬期間の町民の快適な暮らしを確保するため、新たな取り組みとして七滝地区の大地自治会に除雪業務を委託する。町民との協働による除排雪体制づくりの充実に向け、今冬から５年間のモデル事業として実施。除雪車１台を貸与し、住民に集落内の除排雪に取り組んでもらう。

町は、総合計画で「冬の暮らしに強いまち」（雪対策）を掲げ、各種施策に取り組んでいる。官民一体で総合的な除雪施策を効率的、効果的に実施しようと、町雪対策連絡協議会を設置し、この中の除雪研究部会では、地域が抱える問題や課題などについて具体的に話し合っている。

除雪作業は集落入り口の大地橋から行われる

大地への除雪業務委託は、同部会からの提案によるもの。大地は町の西側、小坂川に沿った山沿いに位置する。これまで町による除雪作業は、ほぼ終盤に行われていたことから、「通学や通勤時間帯に不安を感じる住民が多かった」（小舘康弘会長）という。町に解決策を求める一方、自治会としての要望を伝えるなどして、協働で取り組む方向性を探っていた。

除雪業務の委託は、８月に開催された同協議会での承認を得て、９月定例議会の補正予算案に関連経費を計上、今冬から５年間の試験実施が決まった。

町は小型ローダー１台を貸与し、地域の除雪を全て自治会の責任で行ってもらう。除雪車の操作は経験のある住民が担当する。委託期間は１２月１日から来年３月３１日まで。１シーズンごとに事業について検証し、効果や課題をまとめる方針。

町建設課の伏見俊一課長は「今回のモデル事業を通して、町民との協働による除雪体制づくりを図っていきたい」と話した。

町内の中でも高齢化率が高い大地。自治会内の町道のほか、高齢者宅なども除雪したい考え。小舘会長は「地域をどうやって守れるか、守っていくかということを考えながら、取り組んでいきたい」と意気込んでいる。

平成29年11月30日付　北鹿新聞より引用

9

多機関連携で不安を解決する

－多機関協働による介護予防＋買い物＋移動支援の一体的実施－

１０

あるものを最大限に活用する

－町有施設を活用した配食サービスの実施－

１１

“誰かの役に立ちたい”気持ちを応援する

－住民主体の訪問型サービスに対する補助制度－

にない手さん

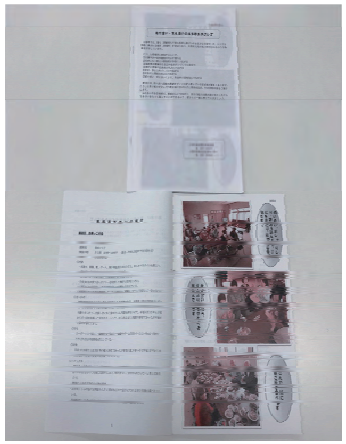
○　住民が主体となった、居宅への訪問による地域支え合い活動
○　事務局（庶務）は町社会福祉協議会が主体

サービス内容	住民が主体となって行う生活援助
目的・効果	○活動者にとっては、「誰かの役に立ちたい」気持ちが生きがいづくりに繋がる ○現役時代の特技や能力を地域で発揮できる場づくり ○住民同士が協力し、支え合える地域づくりメニューの一つ ○介護給付費の抑制 ○介護職人材の不足を補う
事業の内容	利用料：３０分　２５０円 買い物・調理・掃除・話し相手 外出支援(医療機関等への付き添い)等 日常生活の支援
実施方法	町からの活動費補助によって実施 （間接経費の全額補助）
活動者	地域の住民 （活動に対する講習会受講・登録者）

１２

活動の見える化と地域との共有

地域の取組情報誌の発行



広報で地域の取組を紹介

～広報ささか７月号より～

助け合い・支え合いのまちづくりをめざして

【その2】－本杉「お茶っこ会」の紹介

一本杉は24世帯と小さな自治会ですが、「お茶っこ会」は毎月１回行っています。この他にも月１回程外出行事（農業自粛前や暑い夏は2ヶ月に1回程度休止）、あかしや在の中興山と参加者同士で事を取り合わせながら出かけています。

きっかけは、「地域支え合い体制づくり事業」で、テーブルやイス、冷蔵庫等を購入し、カーペット敷きにしてスリッパを履かなくても良くなったこと、そして、2年前に老朽化した空間を改修したことがあげられます。

以前は、「お茶飲くらべ」のあとにもお昼会をしたり、折り紙や手芸的なことをしていましたが、男性陣には不評だったこともあり、昨年９月に新たに「お茶っこ会」と名付けた集まりを企画しました。お昼をみんなで作って食べようということになりましたが、台風に

お問い合わせ先　小坂町地域包括支援センター（☎29-2950）

１３

少しずつ増えている地域での支え合い

住民が自主的に実施している通いの場の一覧

※月１回以上、①身体を動かす　②食事を共にする　③仲間と交流する　こと を住民が主体で一時間以上行っている取組を集計

地区名	活動内容	活動場所	開始時期	通の名称	費用	内容	開催時間	主体
さくらんぼ	月１回（2.5時間）	自治会館	平成19年4月	お楽しみ会	無料（自治会負担）	体操会、グラウンドゴルフ	１０時～１２時	自治会（くらの会）
高町	月２回（1.5時間）	自治会館	平成24年12月	おげんきかい	無料（自治会負担）	体操、おしゃべり、カラオケ、囲碁、ボランティア等	１０時～１５時	自治会・福祉部
新町	月１回	自治会館	平成17年4月頃	お茶っこの会	２００円	体操、囲碁、おしゃべり、将棋	１０時～１４時半	老人会
松崎	月１回（2～3.5時）	自治会館	平成20年4月	ふれあいクラブ	無料（一部参加者５００円）	カラオケ、スポーツ、ゲーム	１０時～１２時	自治会（くらの会）
新町	月１回（1.5時）	自治会館	平成19年	お茶飲み・ＩＴ	１００円	スクエアスポーツ、ゲーム	不定期	民生委員
鹿島団地	月１回	自治会館	平成20年10月	食事の会	１００円	食材買物、調理、食事等	１０時～１５時	自治会（くらの会）
南台	隔週（2.5時間）	市営はるかグランドゴルフ場	平成19年秋	南台グランドゴルフ交流会	市内交流会（参加者負担）	グランドゴルフ、囲碁等	１０時～１５時	南台社協・福祉部
南台	第４月曜（3時）	南台公民館グランド	昭和63年3月	がらの会	年４回の行事（参加費５００円）	グランドゴルフ、行燈づくり、おしゃべり、踊り	１０時～１５時	南台
一本杉	第２水曜日	自治会館	平成21年9月	お茶っこの会	３００円	体操、おしゃべり、手工芸作業、朝日、温泉	１０時～１４時	老人クラブ
白通り	月１回	自治会館	—	老人クラブ	—	体操、囲碁&ゲーム、おしゃべり、歌唱指導	１０時～１５時	白通り老人クラブ
田沢	月１回	自治会館	平成20年4月	—	—	おしゃべり	１０時～１５時	自治会（くらの会）
	第２日曜日	自治会館	平成29年10月	お沢まつり（ハマヤマ）会	無料	おしゃべり、踊り（持参）	１０時～１５時	民生委員
町	月１回	自治会館	—	老人会	—	体操、囲碁、将棋	不定期	老人クラブ
新潟町	第２土曜日	自治会館	平成18年4月	—	—	おしゃべり	１０時～１６時	福祉部
	—	自治会館	—	老人会	—	歌唱リ、おしゃべり	１０時～１４時	老人クラブ
大川谷	月１回	自治会館	平成22年4月	—	—	歌唱（持参）、おしゃべり	１０時～１４時	自治会（くらの会）
鶴巻	月１回	自治会館	平成21年4月	—	１６０円	おしゃべり	１０時～１６時	老人クラブ
北あけぼの	月１回	自治会館	平成21年4月	—	—	おしゃべり	１０時～１６時	社協部
東あけぼの	月１回	自治会館	—	—	—	体操（ＤＶＤ）、おしゃべり	１０時～	老人クラブ
浦	月１回	自治会館	—	—	—	体操指導、おしゃべり	不定期	老人クラブ
外浦	月１回	自治会館	平成20年10月	—	—	歌唱（持参）、おしゃべり	１０時～１７時	自治会（くらの会）
金ノ沢	毎週（2.5時間）	自治会館	平成20年12月	鶴ハ物語	無料	編み物	１０時～１２時	自治会・有志
鶴巻	月２回（3時）	自治会館	平成20年4月	市内中日シニアオープンカップ	１００円（自治会負担）	グラウンドゴルフ、おしゃべり、ゲーム	１０時～１５時	自治会
可部	毎週（1.5時間）	自治会館	平成20年5月	介護応援パートＩＩ	無料（自治会負担）	体操、ゲーム・おしゃべり	１０時～１２時	自治会
可部竹	毎週（1.5時間）	自治会館	平成20年5月	老竹会	無料	スクエアスポーツ、ゲーム	１０時～１２時	自治会・有志
鶴巻団	月１回（1.5時間）	個人宅	平成20年9月	—	１００円	おしゃべり	１０時～１６時	自治会・婦人部

従来からの地域の居場所

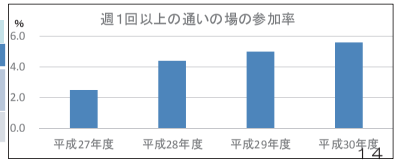
生活支援コーディネーターの活動によって把握された地域の居場所された
（＝介護予防ケアマネジメントに反映）

生活支援コーディネーターが立ち上げに関わった地域の居場所

少しずつ広がっている“活躍できる地域”

地域に参加しているまたは参加したい場所はあるか？（複数回答）

1位	2位	3位	（参考）
地域づくりのための活動	健康づくりの活動	高齢者への支援	何の活動にも参加したくない
53. 7%	44. 4%	42. 6%	7. 4%



14

住民ニーズを充足する機能の低下

自治体戦略2040構想研究会
総務省自治行政局提出資料

○ 「公（官）」は、経営資源の制約により、従来の方法や水準で公共サービスを維持することは困難になる。
○ 「共」は、都市部では共助の受け皿が乏しい。また、地方部を中心に、生活支援機能を担ってきた地縁組織は高齢化と人口流出により機能が低下。
○ 「私」は、人口減少による市場の縮小により、民間事業者の撤退やサービスの縮小が生じる。また、一人暮らし高齢者世帯や共働きの核家族の増加により、家族の扶助機能が低下。
○ 自治体は、公共私の機能低下に対応し、新しい公共私（特に公・共と公・私）の協力関係の構築によりニーズを充足できるように対策を講じる必要がある。

「公」「共」「私」によるニーズ充足機能の低下

公（官）

経営資源の制約によるサービス提供機能の低下
- 厳しい財政需要や職員の削減により、サービス提供方法の見直しを行わなければ、従来の水準で公共サービスを維持することが困難になる。

共

住民同士の関係性の希薄化
- 住民の流動性が高い地域（特に都市部）では、地域における住民同士の関係性が希薄であり、住民同士の相互扶助が機能しない。

地縁組織の扶助機能の低下
- 地縁組織が存在する地域においても、住民の流出や高齢化により、従来、地縁組織が担ってきた見守りや雪かきなどの生活支援機能が低下している。

私

市場サービスの喪失
- 人口減少に伴う経済規模の縮小により、商店や公共交通といった民間事業者の撤退やサービスの縮小が生じる。

家族の扶助機能の低下
- 一人暮らし高齢者世帯の増加、共働きの核家族の増加などにより、高齢者・児童の見守りや生活支援など家族の扶助機能が低下している。

ニーズ充足機能の必要性

人口減少に伴い、従来の「公」「共」「私」によるサービス提供機能が低下するが、住民生活を維持するのに不可欠なニーズは充足されなければならない。

住民の生活ニーズのうち、家族や市場、地域社会によってサービスの提供が行われなくなったものを、「公」が直接サービスを提供することは現実的ではない。

自治体として、新しい公共私（特に公・共や公・私）の協力関係の構築により住民ニーズを充足できるように対策が必要。

15

多様な担い手によって住民ニーズを満たす仕組みの今後の課題

自治体戦略2040構想研究会
総務省自治行政局提出資料

○ 住民同士の関係性が希薄で共助による相互扶助の取組があまり行われていない地域（大都市部を想定）では、個々の住民がサービスを購入することでニーズを満たすことが想定されるが、地域の共通課題への対応は脆弱。今後、住民ニーズを満たす共助によるサービス提供体制をいかに構築するかが課題となる。
○ 地縁組織などの共助による支え合いが広く行われている地域（主に地方部を想定）では、人口減少と高齢化が進むことで、住民ニーズに対するサービスの供給が私の領域でビジネスとして成り立たない可能性が高まる。
　一方、共助による支え合いの基盤となる主体（地域運営組織等）が継続的に活動できるようにするために、人材、資金、ノウハウをいかに確保するかが課題となる。

住民同士の関係性が希薄な地域
＝共助の受け皿がない地域
（主に大都市部を想定）

私　個々の住民がサービスを購入することでニーズを満たすただし、サービス購入できない住民も存在

共　共助によるサービス提供があまり行われておらず、地域の共通課題への対応は脆弱

今後の課題

住民ニーズを満たす共助によるサービス提供体制をいかに構築するか

共助による支え合いが広く行われている地域
＝共助の受け皿がある地域
（主に地方部を想定）

私　人口減少と高齢化が進むことで、住民ニーズに対するサービスの供給がビジネスとして成り立たない可能性

共　地縁組織などの共助による支え合いが広く存在ただし、人口減少と高齢化が進むと、活動継続が困難に

今後の課題

共助による支え合いの基盤となる主体（地域運営組織等）が継続的に活動できるようにするために、人材、資金、ノウハウをいかに確保するか

16

“黒子（行政）”として住民のやる気を引き出すために心得ておくべきポイント

①“つなげる（つながる）”または“気づきを生む”機会を大切にする

②自分（住民）たちの意志で物事に取り組める環境をつくる

③住民が“誰かの役に立っている”ことを感じられる環境をつくる

④グループで取り組む環境を仕掛けることにより孤独感を解消する

17

まちづくり協議会の立ち上げ支援について

（愛知県）日進市社会福祉協議会
富岡　亜希子（CSW・Ⅰ層SC）

日進市は・・・

西は　名古屋
東は　豊田市（トヨタ自動車）

人　　口　91,538人
世 帯 数　37,370世帯
高齢化率　20.0%
（2020.1.1現在）

行　政　区　19区
旧中学校区　3区
（↑包括支援センターが１つずつ
２層ＳＣが１名ずつ・
１層ＳＣが２名　計５名配置）
※社協ＣＳＷ３名（担当制ではない）

－1－

まちづくり協議会とは・・・

（市町によって存在の有無も、定義も違うとは思いますが）

助成金交付対象として以下のように定義しています。
①地域の福祉課題の解決や福祉のまちづくりのために、地域たすけあい相談員（ＣＳＷ）と協働し
②小地域福祉ネットワーク活動や地域内の福祉活動推進など
●地域福祉の推進を目的とした活動を行う任意団体。

一言でいえば

自分達のまちの福祉について話し合ったり、考えたりする会
※区単位２・自治会単位１

今日は、ここの立ち上げ支援のご報告をします！

－２－

お手伝いⅠ　何をしたいか整理

H29.6. 4　まち協設置に向けた準備会
８か月
（H29.11）
イメージを根気よく聞く
ここで原石を見逃してしまうかも？
２か所見学
職員が全て説明しない
なぜ？
H30.2.16　区に提言
「市民主体でできる」という安心感
H30.2. 7　関係者打合せ
説明した地区の「満足感」／「敬意」
H30.5.16　まち協発足
通信発行
価値の再評価
H31.4. 1　ワンコインサービス事業開始
両者のやる気を支えることができる
100円・500円で
【生活支援】
草刈り・電球交換
・建具修理
【移動支援】
つどいの場への送迎

－３－

メンバー作成
話し合って、１年間に３回改版

－４－

お手伝いⅡ　区との関わりを共有

区と連携したい→前年度区役員会で提言
→承認を得たが・・・

区役員の本音は？→逃げたい？困る？
→無責任？×ではない！

→誰が責任をとるのか？（不安なだけでは？）

住みやすいまちづくりを支援する必要がある。
誰が？⇒代表だって、地域住民だって
区長だって、民生だって、ボラだって！！

忘れられがちでは？

－５－

（つづき）　区との関わりを共有

①打合せ（関係者全員！）　俺は（欠席で）いいよ～　逃がさない

②区と連携（位置）を『見える化』
組織図案を３案提案

区
①中？　まち協
②連携？　まち協
③独立？　まち協

なぜ？

③区長や副区長だけが責任を負うものではないと共有する（安心の確保）

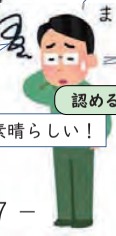
④でも、座る位置は「前だよね」
（責任×　立ち位置の共有○）

－ 6 －

お手伝いⅢ　意見がまとまらない時

今でも忙しいのに！
だれが、責任とる？
通信なんて読む？
有償はボラじゃない！
事故の時は？
保険は？

まち協作りたいんだけどぉ・・・
ワンコインサービス始めませんかぁ・・・



認める・共有

（黒くても）意見が出ることは素晴らしい！
やる気と不安の現れ

ルール提案
反対意見の時は、代替案も一緒にね
（後から個別に来ても）
会議で言ってね（相手による）

－ 7 －

お手伝いⅣ　助さんがいない時

ワンコインサービスで「移動支援」も入れてほしい
白タク問題にならない？

運輸局に一緒に聞きに行きましょう

事前に、概要を伝えておく
何回も

当日は、２人がメインで説明・質問

地域で説明できる
メンバーも運輸局も顔が立つ

様々な意見の協力者が増える
仲良しなら楽だけど「楽」をしない
誰にしよう？
・仲良しでないひと！？
・反対意見が言えるひとに同行依頼
見落としている点がわかる

－ 8 －

お手伝いⅤ　保険加入

挙げられた意見(不安)は、適宜(全て？)応える

早すぎても　遅すぎてもダメ？

・職員が短期的・個人的に評価されるだけ。
・主役（主体）が、市民→職員になってしまう。

信頼関係がつくりづらい。

事故の時は？
保険は？

福祉ふれあい活動総合補償に加入を勧める

なぜ？
(裏目的)
合意形成：「同じ」保険に入り「同じ」活動をする仲間という「アイテム」にしたい。

これがないと支え合いの仕組みを、**利用してもらえない＝長続きしない**

－ 9 －

お手伝いⅥ　移動に関する領収書

送迎だけでお金をいただいていると思われているみたい

こんな近くの送迎で、お金を取り過ぎと噂された

住みやすいまちづくりを支援する必要がある。
特に、金銭を巡る誤解は阻止してあげたい！

「早すぎ」ないとダメ

すぐ、領収書を作成してメール

使うか、使わないか、修正するかは、まち協のみなさんに考えてもらう

提案○
指示×

－10－

お手伝いⅦ　活動への意味づけ

半年後、代表の提案で、メンバーが活動の振り返り

特に何もしてない　　**次は、何するの？**

- この「振り返り」をすることがすごい　反省・確認・共有
- 今まで別々に活動していた団体が定期的に会えるようになった　連携
- ワンコインサービスも移動支援も始まった　好事例
- いつもイベントを考えていなくても「つぶやく」ことが大事　気付き

気が楽になった～♪

具体的な事例を共有する

つぶやき①「夏祭りの金魚すくいできない」(子ども会)→まち協有志で代わりに実施
→喜ばれる・２万円ゲット

つぶやき②「つどいの場に足の不自由な方を連れてきて」(つどいの場代表)　**→移動支援スタート**

－11－

お手伝いⅧ　時々提案

早すぎても　　遅すぎてもダメ？

お金の授受が心配

ひとりで活動？

ワンコイン　スタートして**4か月後**
【超ぷちヘルパー勉強会】
◆金銭授受・買物代行の注意点等を学ぶ

- 早すぎると、質問すらわからない
- 早すぎると、怖くなってしまう
- 遅すぎると、我流で進んでしまう
- 遅すぎると、不安でやめてしまう

ワンコイン　スタートして**半年後**
【lineグループの活用提案】
◆依頼情報を共有　◆平等化

- 早すぎると、市民主体が壊れる
- 早すぎると、話合いの機会が減る
- 遅すぎると、不平等が定着する？
- 遅すぎると、メンバーが減る？

－12－

住民のやる気を支える支援？

「生業」として考えたい事

- **誰もが住みやすいまちにするために、考えたい**
  →地域の役員や民生委員等に押し付けない。(地域住民≠生業)
  →住民がいいづらいことは、代弁する。（住民同士が喧嘩になる構図をさける）
- **「主体が市民」＝「主役が市民」といつも考えたい**
  →住民が良い発言をした時は「〇〇さんの提案のように」と共有する。
  →現場に行く。(パワーバランスの変化は？　見えない不満は？　代表息切れしてない？)
  →参加者のバックグラウンドを緩やかに探る。(＝得意分野が見えやすくなる)
  例：プレゼンする仕事 ⇒ パネリストとして講演会での発表依頼（応援のため参加するメンバー現る！）
  例：花植え運動を長年してる ⇒ 花壇を見に行って後日話題に（会議の盛り立て役に！）

リスクマネジメント

主役にする支援が楽に！

◆つぶやきを大事にしたい →ワンコインサービス（移動支援）・通信発行・金魚すくい代行

【価値の評価】
- 安心感、活気を生み出す
- 誰でも担い手、利用者になれる
- 孤立しそうなひとを減らせる
- 生きがい、健康増進、介護予防につながる
- 新しい活動、後発の取組み、制度にない活動は生まれる→託児？
- 資金を調達することができる→SCと一緒に補助金要綱作成していく

－13－

「協働的態度で話をきく」

信頼関係を形成して活動への動機づけを高める

内藤佳津雄 氏（日本大学文理学部教授 / 本事業研究委員会委員長）

協働的態度で話をきく

信頼関係を形成して
活動への動機づけを高める

日本大学　内藤佳津雄

協働的関係の形成に必要な基本的姿勢

①内発的動機づけを阻害する言動をしない

相手にいじわるをしない、けちをつけない
こちらの価値観や考え方、求めることを押しつけない
◎相手の強みやよさを積極的に評価すること

②話を聴く姿勢を示す

基本的態度として相手の話を聴こうとすることが大切
話を聴こうとする気持ちが根底に求められる

③熱意をもって対応する

相手を支援する行動を示す
・支援の方策を全力で考える
・時折訪問して活動を見る　など

話を聴くときの基本的な姿勢や行動
相手に「聴いている」態度を明確に示す姿勢が基本

- **視線、まなざし**
  基本的に視線を向ける（凝視しすぎない）
  メモや資料ばかり見ない
  視線を向けるときは数秒間は必ず向ける
  （「ちらっ」と見ない）
- **目　線**　：同じ高さ（同じ椅子に座る）
- **表　情**　：困った顔や不快そうな顔をしない
- **座る位置**：相手と90度の角度か、斜め向かいに座る
  （真正面に座ると強制感が高まるので、避ける）
- **座る姿勢**：相手側にやや前傾（背もたれに寄りかからない）
- **くせに注意**：腕組や脚組は威圧的になるのでやめる

話を聴いていることを積極的に示す応答
相手の話を引き出す質問力と励まし

- **積極的なうなずき・あいづち**
  バリエーションをつける
- **反復を活用する**
  相手の話のポイントを繰り返す
- **とくに感情や意思を示した発言は繰り返して共感**
  ボランティア
  「男性向けの活動を何かやりたいと思っているんです」
  コーディネーター
  「男性向けの活動をやりたいと考えていらっしゃるんですね」
- **基本は広がる(openな)質問を使う**
  閉じた（closedな）質問(はい・いいえで答えられるような質問)
  ばかり続けると事務的で押しつけられている感じになりやすい

- **相手のやりたいこと、目標などを認める**
  相手にとっての良いこと、価値を感じていることに対してポジティブな感情を示す。
  （価値を共有：やる気を高める）
  「**良いですね**」、「**面白そうですね**」、「**素晴らしい**」

- **課題が発見されたら解決に向けて協力するなど、励ます**
  課題はそのまま放置すると不安になるので、解決に向けていっしょに取り組むことを明言
  コーディネーター「**協力者はいますか?**」
  住民「**いえ、いません**」
  コーディネーター「**そうなんですね**」（ここで止めると「いない」結論で終わってしまい不安）
  コーディネーター「**では、見つける方法を一緒に考えていきましょう**」

- **解決策として提案があるときには、最後に同意を求める**
  コーディネーター
  「**…という方法もありますが、どう思いますか?**」
  （「提案をすぐにやりましょう」と伝えるのではなく、相手に必ず感想や同意を求めながら進める）

[お問合せ先]

一般社団法人 全国食支援活動協力会
〒 158-0098 東京都世田谷区上用賀 6-19-21
☎ ０３－５４２６－２５４７
Fax ０３－５４２６－２５４８
Ｅﾒｰﾙ infomow@mow.jp

令和元年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業
基礎自治体や中間支援組織等による住民主体の活動を促進するための手法に関する調査研究事業　報告書

令和２年３月発行

内容照会先　一般社団法人全国食支援活動協力会
〒158-0098　東京都世田谷区上用賀 6-19-21
TEL　03-5426-2547　FAX　03-5426-2548
E-mail　infomow@mow.jp
URL　http://www.mow.jp